



(公財)日本学校体育研究連合会

第53回 全国学校体育研究大会

岐阜大会 研究紀要

【研究主題】

『生涯にわたって運動に親しみ、

明るく豊かな生活を営む資質や能力を育てる体育授業』



岐阜城（岐阜市）

岐阜県マスコット
キャラクター「ミナモ」

平成26年11月 6日（木）・7日（金）



(公財)日本学校体育研究連合会

第53回全国学校体育研究大会岐阜大会

研究紀要

研究主題

「生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む資質や能力を育てる体育授業」



ごあいさつ

(公財) 日本学校体育研究連合会

会長 本村 清人

第53回全国学校体育研究大会岐阜大会を、ここ、長良川国際会議場で全体会を、そして、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校合わせて12の学校で分科会を盛大に開催できますことを主催者のひとりとして、ご参会の皆様方と共に喜びたいと存じます。

日本学校体育研究連合会(学体連)は、歴史的に見ますと、発足は昭和22年結成の日本体育指導者連盟です。その後、昭和37年、改組・名称変更して「財団法人」日本学校体育研究連合会として発展して参りました。そして昨年の4月から、「公益財団法人」日本学校体育研究連合会として新たな歩みを始めたところです。したがって、従前にもまして、公益目的事業、中でも学校体育の充実・発展に資する事業をさらに円滑かつ効果的に進めていく所存です。

さて、岐阜大会は、大会主題を、「生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む資質や能力を育てる体育授業」とし、さらには各学校種に依りて分科会研究主題を掲げて、現在の体育が求められている姿を岐阜の具体的な研究としてご発表いただけることとなっております。全体会のシンポジウムはもとより、大会二日目の分科会が多くの方のご参加を得て公開授業と熱心な研究協議が成功裏に行われることをご期待申し上げます。

このような全国大会を、地域の研究大会を、さらには各都道府県レベルで研究大会を開催するに当たっては、中核となる教員が必要不可欠です。これまでの先輩諸氏のよい授業づくりを受け継ぎ、新たな発展を期して自らが教材研究と開発にいそむるとともに、若い人材を実践的な研究を通して育てていただかなければなりません。中堅教員の少ない今、そのような気運を全国的に盛り上げていく必要があります。そのための支援の在り方等について学体連としても知恵を絞りたいと思います。

また、次期の学習指導要領改訂に向けて「21世紀型能力」が国立教育政策研究所から提案されています。現段階では、「21世紀型能力」を「基礎力」、「思考力」、「実践力」から構成されるとしてはいますが、基礎力に情報リテラシーを加えていること、思考力はもとより実践力を「21世紀型能力」の一つとして位置付けていること、その実践力として人は何を指し何を大切に行動するかという「価値の内面化」をあげていることなどから、これまでの「生きる力」をさらに発展させるうえで示唆に富む内容だと考えます。体育の授業づくりではこれらの考え方を十分実現させる教科だと自負しております。

終わりになりますが、文部科学省はもとより、共催である岐阜県教育委員会、岐阜市教育委員会、羽島市教育委員会、各務原市教育委員会、岐阜県学校体育研究連合会、主管をさせていただきます第53回全国学校体育研究大会岐阜大会実行委員会の皆様方に衷心よりお礼を申し上げます。



ごあいさつ

第53回全国学校体育研究大会
岐阜大会実行委員会会長

杉山 英一

第53回全国学校体育研究大会を、全国から大変多くの学校体育に携わる皆様にご参会いただき、ここ「清流の国ぎふ」において開催できますことに厚く御礼申し上げます。本県において全国大会が開催されるのは、昭和41年以来48年ぶり二度目となります。

大会初日の全体会会場から長良川を挟んだ対岸に位置する金華山の山頂には、岐阜市のシンボルである岐阜城が高らかにそびえ立っています。この城は、天下統一を目指した織田信長公が安土城に移る前に居城としていたところで、本大会の多くの分科会場から眺めることができます。また、その山裾を清流長良川が豊かな水を湛えながら流れています。

こうした恵まれた自然環境の中で育った岐阜の子供たちが、伸び伸びと活動する姿を全国の先生方に見ていただきたいという思いで、平成21年度に本大会の岐阜県開催が決定されて以来、着々と準備を進めてまいりました。大会主題『生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む資質や能力を育てる体育授業』を具現すべく、岐阜市、羽島市、各務原市の3市から幼稚園1園、小学校4校、中学校4校、高等学校2校、特別支援学校1校の合わせて12校の発表校が、子供たちが運動に親しむことができるよう、それぞれに創意工夫した取組を展開してまいりました。

折しもこの期間は、学習指導要領の改訂の過渡期と重なることになりましたが、研究を進めるなかで、「運動の系統性・発展性を踏まえた指導内容の体系化」、「運動に親しむ資質や能力を身につける指導」「指導の改善に生かす評価」などを中心に研究実践を重ね、その一端を公表する運びとなりました。

また、平成23年に制定されたスポーツ基本法では、第17条「学校における体育の充実」において、「学校における体育が青少年の心身の健全な発達に資するものであり、かつ、スポーツに関する技能及び生涯にわたってスポーツに親しむ態度を養う上で重要な役割を果たすものであることを鑑み、体育に関する指導の充実あるいは体育に関する教員の資質の向上が必要である。」と記されました。私たちは、この条文を重く受け止めるとともに、本大会の開催の機会を得たことで、本県の幼、小、中、高、特別支援学校の5校種それぞれの教科研究組織がさらに充実したこと、大学等との連携を通して学校体育の研究体制が整備されたことが、私たちにとってかけがえのない財産となりました。

2日間の大会を通して、ご参会の皆様にご覧いただき、ご意見やご指導をいただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本大会の開催にあたりご指導・ご支援を賜りました文部科学省、公益財団法人日本学校体育研究連合会はじめ、関係大学の指導助言者、岐阜県教育委員会、関係市教育委員会の皆様方に厚く御礼申し上げます。またこの度、表彰を受けられます学校や指導者の皆様にも心よりお祝いと敬意を表し、あいさつといたします。

目 次

1	ごあいさつ …… (公財) 日本学校体育研究連合会会長 本 村 清 人	
2	ごあいさつ …… 岐阜大会実行委員会会長 杉 山 英 一	
3	開催要項 ……	1
4	開会式次第 ……	5
5	主催・共催団体関係 ……	6
6	実行委員会委員等 ……	7
7	分科会一覧 ……	10
8	基調報告 ……	15
9	アトラクション ……	25
10	解説 ……	27
11	シンポジウム ……	29
12	特別講演 ……	35
13	分科会研究発表資料	
	＜幼稚園部会＞	
	第1分科会 岐阜市立加納幼稚園 ……	37
	＜小学校部会＞	
	第2分科会 岐阜大学教育学部附属小学校 ……	47
	第3分科会 岐阜市立長良西小学校 ……	57
	第4分科会 羽島市立竹鼻小学校 ……	67
	第5分科会 各務原市立那加第三小学校 ……	77
	＜中学校部会＞	
	第6分科会 岐阜市立岐阜中央中学校 ……	87
	第7分科会 岐阜市立陽南中学校 ……	97
	第8分科会 羽島市立羽島中学校 ……	107
	第9分科会 各務原市立那加中学校 ……	117
	＜高等学校部会＞	
	第10分科会 岐阜県立岐阜高等学校 ……	127
	第11分科会 岐阜県立岐阜工業高等学校 ……	137
	＜特別支援学校部会＞	
	第12分科会 岐阜県立岐阜本巣特別支援学校 ……	147
14	分科会助言者紹介 ……	157
15	広告協賛	

第53回全国学校体育研究大会岐阜大会 開催要項

1 趣 旨

21世紀を生きる子どもたちが、明るく豊かで活力ある生活を営むためには、生涯にわたり豊かなスポーツライフを実現することが重要である。そのためには、高校卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続できるよう、幼稚園や小学校の段階から運動の楽しさや喜びを味わい、運動への関心や意欲を高め、自ら考えたり工夫したりする力を身に付けていくことが必要である。

こうした構想の実現に向け、現行の学習指導要領では、児童生徒の発達の段階のまとまりを考慮し、小学校、中学校及び高等学校を見通した指導内容の体系化が図られるとともに、指導内容の確実な定着を図り、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育成する観点から、各領域の指導内容が明確に示された。また、幼児については、運動遊びの在り方をまとめた幼児期運動指針が策定された。

そこで本大会では、学習指導要領並びに幼児期運動指針の趣旨とこれまでの岐阜県における学校体育研究の成果を踏まえ、研究主題を『生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む資質や能力を育てる体育授業』と設定した。

この主題のもと、岐阜県では、幼児や児童生徒が意欲的に運動やスポーツに取り組み、運動やスポーツが「できるようになる」楽しさを味わうことが豊かなスポーツライフにつながると考えた。そして、体育における「技能」「態度」「知識、思考・判断」の指導内容を確実に身に付けられるようにするため、発達の段階を踏まえた指導と評価の計画、自ら学習できる学習過程や学習形態の工夫、指導と一体化した評価を柱に授業研究を進めてきた。

本大会は、これまでの研究実践の成果を踏まえ、公開授業・保育をもとに各分科会において、主題に掲げる体育授業の在り方について提案し、研究協議を行うものである。

2 大会主題 「生涯にわたって運動に親しみ、 明るく豊かな生活を営む資質や能力を育てる体育授業」

幼稚園研究主題

「しなやかな心と体を育むための教師の援助や環境の在り方」

小学校研究主題

「仲間と共に運動の楽しさや喜びを味わう体育授業の創造」

中学校研究主題

「できた喜びや仲間と共に運動する楽しさを味わう体育授業の創造」

高等学校研究主題

「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる体育授業の創造」

特別支援学校研究主題

「児童生徒の豊かな心と体を育む授業づくり」

3 主 催 文部科学省 公益財団法人日本学校体育研究連合会

4 共 催 岐阜県教育委員会 岐阜市教育委員会
羽島市教育委員会 各務原市教育委員会

5 主 管 第53回全国学校体育研究大会岐阜大会実行委員会

6 期 日 平成26年11月6日(木)～11月7日(金)

7 会 場

(1) 全体会会場 (第1日) 長良川国際会議場 (岐阜市長良福光 2695-2)

(2) 分科会会場 (第2日) 岐阜県内12会場

<u>幼 稚 園</u>	第1分科会	岐阜市立加納幼稚園
<u>小 学 校</u>	第2分科会	岐阜大学教育学部附属小学校
	第3分科会	岐阜市立長良西小学校
	第4分科会	羽島市立竹鼻小学校
	第5分科会	各務原市立那加第三小学校
<u>中 学 校</u>	第6分科会	岐阜市立岐阜中央中学校
	第7分科会	岐阜市立陽南中学校
	第8分科会	羽島市立羽島中学校
	第9分科会	各務原市立那加中学校
<u>高 等 学 校</u>	第10分科会	岐阜県立岐阜高等学校
	第11分科会	岐阜県立岐阜工業高等学校
<u>特別支援学校</u>	第12分科会	岐阜県立岐阜本巣特別支援学校

8 参加対象

(1) 全国の幼稚園，小学校，中学校，高等学校，中等教育学校，特別支援学校の教職員及び教育行政関係者

(2) 社会体育等の指導者及び大学等の研究者

(3) 一般参加者

9 内 容

(1) 全体会 (第1日)

① 開 会 式

② 表 彰 式

③ 基調報告

④ 解 説

「学習指導要領と豊かなスポーツライフ」

高田 彬成 (文部科学省教科調査官)

⑤ シンポジウム

「豊かなスポーツライフの実現に向けて」

コーディネーター

友添 秀則 (早稲田大学 教授)

シンポジスト

服部 始代 (和歌山市立湊幼稚園 教頭)

御宿 浩輝 (岐阜大学教育学部附属小学校 主幹教諭)

木原 慎介 (墨田区立堅川中学校 主任教諭)

佐藤 若 (山形県立山形中央高等学校 教諭)

小澤 治夫 (東海大学 教授)

⑥ 特別講演

「世界の人々をつなぐスポーツの魅力」

講 師

高橋 尚子 (シドニーオリンピック金メダリスト)

(2) 分科会

① 公開授業・公開保育

② 研究発表・研究協議

③ 指導講評

④ 閉 会 式

10 日 程

11月6日 全体会

9:30	10:00	10:40	11:40	12:10	13:10	14:00	15:50	17:00
受付	開会式	表彰式	基調報告	昼食	解説	シンポジウム	特別講演	

11月7日 分科会

9:00	9:30	12:00	13:00	15:00	
受付	公開授業・公開保育	昼食	研究発表 研究協議	指導 講評	閉会式

※第2日（分科会）の日程は、会場により多少の違いがあります。

11 参加費 5,000円

12 参加申込

参加申込書・宿泊等については、「(公財)日本学校体育研究連合会のホームページ」または「第53回全国学校体育研究大会岐阜大会実行委員会ホームページ」にある「参加申込みおよび宿泊・昼食弁当のご案内」の内容に基づき申し込みをしてください。

※岐阜大会実行委員会ホームページ <http://www.gifu-net.ed.jp/kyoka/hotai/gakutaiken>

13 問合せ先 岐阜大会実行委員会事務局（岐阜県教育委員会体育健康課）
〒500-8570 岐阜県岐阜市藪田南2-1-1
TEL058-272-8768 FAX058-278-2825

14 その他

- (1) 全体会場及び各分科会場へは、できる限り公共交通機関をご利用ください。
- (2) (公財)日本学校体育研究連合会評議員会は11月5日（水）14時から長良川国際会議場で実施されます。
- (3) 第53回全国学校体育大会岐阜大会レセプションは11月5日（水）18時から岐阜都ホテルで実施されます。
- (4) 各分科会会場に関する情報も、岐阜大会実行委員会ホームページでご覧いただけます。

第53回全国学校体育研究大会岐阜大会 会場一覧

第1	岐阜市立加納幼稚園	第7	岐阜市立陽南中学校
第2	岐阜大学教育学部附属小学校	第8	羽島市立羽島中学校
第3	岐阜市立長良西小学校	第9	各務原市立那加中学校
第4	羽島市立竹鼻小学校	第10	岐阜県立岐阜高等学校
第5	各務原市立那加第三小学校	第11	岐阜県立岐阜工業高等学校
第6	岐阜市立岐阜中央中学校	第12	岐阜県立岐阜本巣特別支援学校



開会式次第

1 開会の言葉

・岐阜大会実行委員会 副会長

宇野 芳弘

2 国歌斉唱

3 開会あいさつ

・岐阜大会実行委員会 会長

杉山 英一

4 主催者あいさつ

・文部科学省 スポーツ・青少年局 局長

久保 公人

・公益財団法人 日本学校体育研究連合会 会長

本村 清人

・岐阜県教育委員会 教育長

松川 禮子

5 来賓祝辞

・岐阜県知事

古田 肇

6 歓迎の言葉

・岐阜市長

細江 茂光

7 次期開催県あいさつ

・広島大会実行委員会 会長

河野 一則

8 閉式の言葉

・岐阜大会実行委員会 副会長

青木 廣志

主催・共催・後援会等 団体関係

□ 文部科学省

- ・スポーツ・青少年局長 久保 公人
- ・大臣官房審議官（スポーツ・青少年局担当） 芦立 訓
- ・スポーツ・青少年局参事官（体育・青少年スポーツ担当） 日向 信和
- ・スポーツ・青少年局参事官（体育・青少年スポーツ担当）付
教科調査官 高田 彬成
- ・スポーツ・青少年局参事官（体育・青少年スポーツ担当）付
教科調査官 高橋 修一

□ 公益財団法人日本学校体育研究連合会

- | | | | |
|------|--------|------|--------|
| ・会長 | 本村 清人 | ・理事長 | 友添 秀則 |
| ・副会長 | 後藤 一彦 | ・理事 | 菅原 健次 |
| ・理事 | 岡出 美則 | ・理事 | 村上 みな子 |
| ・理事 | 池田 延行 | ・理事 | 近藤 智靖 |
| ・理事 | 細越 淳二 | ・監事 | 関 毅彦 |
| ・監事 | 奈尾 力 | ・参与 | 加藤 正克 |
| ・参与 | 櫻井 康治 | ・参与 | 手打 和明 |
| ・参与 | 田中 美智子 | ・参与 | 吉永 武史 |
| ・参与 | 古川 浩洋 | ・参与 | 吉野 聡 |
| ・参与 | 深見 英一郎 | | |
| ・参与 | 白旗 和也 | | |
| ・事務局 | 藤井 かね子 | ・事務局 | 山崎 寿美子 |

□ 岐阜県教育委員会

- ・教育長 松川 禮子

□ 開催市教育委員会

- | | |
|---------------|--------|
| ・岐阜市教育委員会教育長 | 早川 三根夫 |
| ・羽島市教育委員会教育長 | 伏屋 敬介 |
| ・各務原市教育委員会教育長 | 加藤 壽志 |

□ 校・園長会、研究会等

- | | |
|--------------------------------|--------------|
| ・岐阜県公立幼稚園長会 | ・岐阜県小中学校長会 |
| ・岐阜県小学校長会 | ・岐阜県中学校長会 |
| ・岐阜県高等学校長協会 | ・岐阜県特別支援学校長会 |
| ・岐阜県公立幼稚園教育研究会 | |
| ・岐阜県小中学校教育研究会小学校体育部会、中学校保健体育部会 | |
| ・岐阜県高等学校教育研究会保健体育部会 | |
| ・公益財団法人日本教育公務員弘済会岐阜支部 | |
| ・一般財団法人岐阜県教職員互助会 | |

第53回全国学校体育研究大会 岐阜大会実行委員会委員等

□ 平成26年度 実行委員会

・ 会 長	杉 山 英 一	岐阜県立大垣商業高等学校 校長
・ 副会長	藤 村 美保子	岐阜市立加納幼稚園 園長
・ 副会長	宇 野 芳 弘	岐阜市立本荘小学校 校長
・ 副会長	青 木 廣 志	岐阜市立陽南中学校 校長
・ 副会長	板 倉 寿 明	岐阜県立岐阜本巣特別支援学校 校長
【総務部】		
・ 部 長	原 尚	岐阜市立長良中学校 校長
・ 副部長	松 野 康 司	各務原市立緑苑小学校 校長
・ 主 任	岩 佐 優	岐阜市立加納中学校 教頭
・ 委 員	広 瀬 みゆき	岐阜市立岐阜東幼稚園 教頭
・ 委 員	原 川 拓 雄	岐阜市立陽南中学校 教頭
・ 委 員	御 宿 浩 輝	岐阜大学教育学部附属小学校 主幹教諭
・ 委 員	松 尾 祐 治	岐阜県立岐阜城北高等学校 教諭
・ 委 員	杉 山 吉 博	岐阜県立大垣特別支援学校 教諭
【研究部】		
・ 部 長	増 田 義 彦	各務原市立中央中学校 校長
・ 副部長	山 田 真 吾	関市立桜ヶ丘小学校 校長
・ 副部長	藤 田 忠 久	岐阜大学教育学部附属小学校 教頭
・ 主 任	辻 伸 之 久	岐阜市立長良中学校 教頭
・ 委 員	田 中 克 久	岐阜県立岐阜商業高等学校 教頭
・ 委 員	辻 道 代	岐阜市立加納幼稚園 教頭
・ 委 員	岩 見 光 洋	岐阜市立長良東小学校 教諭
・ 委 員	中 村 晋 介	岐阜市立東長良中学校 教諭
・ 委 員	吉 田 徹	岐阜県立岐阜本巣特別支援学校 教諭
【編集部】		
・ 部 長	廣 瀬 治 良	岐阜市立鷺小学校 校長
・ 副部長	政 井 裕 司	岐阜市立本荘中学校 校長
・ 副部長	白 井 一 彦	各務原市立蘇原第一小学校 教頭
・ 主 任	高 橋 秀 和	岐阜市立長森東小学校 教諭
・ 委 員	野 村 慎 一	岐阜市立長森北小学校 教諭
・ 委 員	大 井 修 太	岐阜市立岩野田北小学校 教諭
・ 委 員	谷 口 信 也	岐阜市立加納小学校 教諭
・ 委 員	清 水 立 貴	岐阜市立長良小学校 教諭
・ 委 員	田 原 幹 也	岐阜市立長良東小学校 教諭
【事業部】		
・ 部 長	江 崎 勝 則	岐阜市立岐阜西中学校 校長
・ 副部長	岩 田 真	岐阜市立長森中学校 教頭
・ 主 任	安 藤 精	岐阜市立藍川東中学校 教諭
・ 委 員	小 川 竜 英	本巣市立本巣中学校 教諭
・ 委 員	宮 川 二 郎	岐阜市立加納中学校 教諭
・ 委 員	小 川 佳 広	岐阜市立青山中学校 教諭
・ 委 員	河 瀬 真 奈 美	笠松町立笠松中学校 教諭

【式典部】

・部長	臼井俊裕	岐阜県立岐阜各務野高等学校	校長
・副部長	米山英津子	岐阜県立武義高等学校	教頭
・主任	杉山広之	岐阜県立長良高等学校	教諭
・委員	高木司	岐阜県立羽島高等学校	教諭
・委員	近藤田都哉	岐阜県立不破高等学校	教諭
・委員	末次好己	岐阜県立関高等学校	教諭
・委員	高森賢輔	岐阜県立多治見高等学校	教諭
・委員	今井洋	岐阜県立飛騨高山高等学校	教諭

【分科会】

・委員	宮内峰子	岐阜市立加納幼稚園	教諭
・委員	藤田忠久	岐阜大学教育学部附属小学校	教頭
・委員	山田茂樹	岐阜市立長良西小学校	教頭
・委員	田島樹学	岐阜市立長良西小学校	教諭
・委員	中村俊彦	羽島市立竹鼻小学校	教頭
・委員	豊永充子	各務原市立那加第三小学校	教頭
・委員	河田尚史	各務原市立那加第三小学校	教諭
・委員	高橋誠	岐阜市立岐阜中央中学校	教頭
・委員	後藤隆正	岐阜市立本荘中学校	教頭
・委員	原川拓雄	岐阜市立陽南中学校	教頭
・委員	立花真	羽島市立羽島中学校	教頭
・委員	今尾謙二	各務原市立那加中学校	教頭
・委員	上田和伸	岐阜県立岐阜高等学校	教諭
・委員	澤藤忍	岐阜県立岐阜工業高等学校	教諭
・委員	服部純	岐阜県立岐阜本巣特別支援学校	教諭

【監事】

・監事	鈴木清人	羽島市立正木小学校	校長
・監事	平山義浩	岐阜市立厚見中学校	教頭

【助言者等】

・有識者	原田憲一	岐阜大学教育学部	教授
・有識者	杉森弘幸	岐阜大学教育学部	教授
・有識者	熊谷佳代	岐阜大学教育学部	准教授
・有識者	春日晃章	岐阜大学教育学部	准教授
・有識者	佐藤善人	岐阜聖徳学園大学教育学部	准教授
・開催市	川治秀輝	岐阜市教育委員会学校指導課	課長
・開催市	長島清司	羽島市教育委員会学校教育課	課長
・開催市	苅谷孝弘	各務原市教育委員会学校教育課	課長

【事務局】

・局長	高橋幸平	岐阜県教育委員会体育健康課	課長
・次長	服部和也	岐阜県教育委員会体育健康課	教育主管
・主任	森川賢二	岐阜県教育委員会体育健康課	係長
・局員	小牧憲充	岐阜県教育委員会体育健康課	指導主事
・局員	中村康男	岐阜県教育委員会体育健康課	指導主事
・局員	坂倉有紀	岐阜県教育委員会体育健康課	主事
・局員	島田定尚	岐阜教育事務所教育支援課	指導主事
・局員	広瀬満	西濃教育事務所教育支援課	指導主事
・局員	寺田武義	可茂教育事務所教育支援課	指導主事
・局員	由井健一郎	東濃教育事務所教育支援課	指導主事
・局員	見山政克	飛騨教育事務所教育支援課	係長

□ 平成24・25年度 推進委員会

(平成26年度 実行委員会委員等以外の委員等)

【平成25年度】 ※当時の所属及び役職

・顧問	増田和伯	岐阜県教育委員会スポーツ健康課 課長
・副会長	豊吉久実	岐阜市立加納幼稚園 園長
・副会長	出口和宏	岐阜県立岐阜本巣特別支援学校 校長
・総務部委員	杉山正高	羽島市立羽島中学校 教諭
・研究部副部長	鈴木智也	岐阜市立鏡島小学校 教頭
・研究部委員	杉山育代	岐阜市立加納幼稚園 教頭
・編集部委員	塚原和宏	岐阜市立長良小学校 教諭
・編集部委員	森哲也	岐阜市立長良東小学校 教諭
・式典部委員	和田真二	岐阜県立岐阜各務野高等学校 教諭
・式典部委員	宮崎弥生	岐阜県立関高等学校 教諭
・式典部委員	日比野真	岐阜県立吉城高等学校 教諭
・分科会委員	磯村満	岐阜市立大洞幼稚園 教諭
・分科会委員	服部晃幸	岐阜市立長良西小学校 教頭
・分科会委員	仲村均	岐阜市立梅林中学校 教頭
・分科会委員	谷田史朗	各務原市立蘇原中学校 教頭
・監事	新木尚	岐阜市立島中学校 教頭
・事務局主任	細井恒樹	岐阜県教育委員会スポーツ健康課 係長
・事務局員	中川浩美	岐阜県教育委員会スポーツ健康課 指導主事

【平成24年度】 ※当時の所属及び役職

・顧問	鈴木賢治	岐阜県教育委員会スポーツ健康課 課長
・会長	羽田野正史	岐阜県立大垣東高等学校 校長
・副会長	岩本修治	岐阜市立岐阜中央中学校 校長
・副会長	都竹輝昌	岐阜県立岐阜本巣特別支援学校 校長
・総務部副部長	清水康孝	本巣市立本巣中学校 教頭
・総務部委員	浦田敏臣	岐阜県立岐阜本巣特別支援学校 教諭
・研究部部长	谷口邦彦	岐阜市立島中学校 教頭
・編集部担当校長	杉原和	各務原市立那加第三小学校 校長
・編集部部長	池田勉	岐阜市立加納小学校 教諭
・編集部委員	古川浩行	岐阜市立長良東小学校 教諭
・編集部委員	中村勝	岐阜市立長良小学校 教諭
・式典部長	津田行代	岐阜県立岐山高等学校 教諭
・式典部委員	山本裕史	岐阜県立揖斐高等学校 教諭
・式典部委員	鈴木清司	岐阜県立可児高等学校 教諭
・式典部委員	原恵一	岐阜県立中津高等学校 教諭
・分科会委員	棚橋幸治	羽島市立足近小学校 教諭
・分科会委員	鈴木英巳	各務原市立那加第三小学校 教頭
・分科会委員	笠井佐利	岐阜市立岐阜中央中学校 教頭
・分科会委員	尾関孝昭	岐阜県立岐阜高等学校 教諭
・事務局員	岩井雄祐	岐阜県教育委員会スポーツ健康課 主事

分科会一覧

校種	分科会	会場校	研究主題
幼稚園	1	岐阜市立 加納幼稚園	しなやかな心と体を育むための教師の援助や環境の在り方 ～友達と一緒に、主体的、活動的に遊び、物事に柔軟な対応 ができる心や体を目指して～
小学校	2	岐阜大学教育学部 附属小学校	確かな動きと自分なりのコツをつかむ児童の育成 ～発達段階に応じた「体づくり」と「ネット型」の系統的 な指導～
	3	岐阜市立 長良西小学校	よりよい動きを求め続ける子 ～身に付けたい動きを明確にしたゲーム・器械運動の学習～
	4	羽島市立 竹鼻小学校	よりよい動きを追求し合い、動きの高まりが実感できる子 ～仲間との見合い、教え合う活動を通して～
	5	各務原市立 那加第三小学校	できる喜びを味わい、力いっぱい運動する子
中学校	6	岐阜市立 岐阜中央中学校	主体的に運動に取り組む生徒を育てる体育授業の創造
	7	岐阜市立 陽南中学校	運動技能の高まりを実感し、仲間とともに運動に親しむ生徒 の育成
	8	羽島市立 羽島中学校	「できた」喜びを味わい、自ら運動に親しむ力を育む体育授 業
	9	各務原市立 那加中学校	運動ができる喜びを味わう体育授業 ～バレーボールにおける指導過程の研究を通して～
高等学校	10	岐阜県立 岐阜高等学校	課題を解決する方法を考え実践をすることにより、体力の向 上と豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる体 育授業
	11	岐阜県立 岐阜工業高等学校	運動やスポーツの楽しさを味わい、教え合い、助け合い、一 人一人が豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を身に 付ける体育授業
援特 学別 校支	12	岐阜県立 岐阜本巣特別支援学校	児童生徒の豊かな心と体を育む授業作り

分科会	公開①			公開②			指導助言者
	内容(種目)	学年	授業者	内容(種目)	学年	授業者	
1	からだを使った遊び	3歳児	宮内 峰子 上田 育代	仲間と楽しむ遊び	3歳児	宮内 峰子 上田 育代	岐阜大学 准教授 春日 晃章
		4歳児	高橋佐知子 小島 崇徳		4歳児	高橋佐知子 小島 崇徳	
		5歳児	磯村 満 丸目 尚子		5歳児	磯村 満 丸目 尚子	
2	体づくり運動 (多様な動きをつくる運動)	3年生	乾 貴之	ボール運動 (ネット型)	6年生	大澤 秀行	岐阜大学 教授 原田 憲一
	保健 (病気の予防)	6年生	江川 秀文 荒川千登世				
3	ゲーム (ベースボール型 ゲーム)	4年生	田島 学	器械運動	5年生	井上 誠	中京大学 教授 三上 肇
	器械・器具を使っ ての運動遊び(跳 び箱を使った運動 遊び)	1年生	高橋 佑佳				
4	ゲーム (ゴール型 ゲーム)	4年生	高橋 浩之	表現運動 (表現)	3年生	戸田 有紀	横浜国立大学 教授 高橋 和子
5	陸上運動 (走り高跳び)	5年生	鵜飼 朋子	ゲーム (ゴール型 ゲーム)	4年生	五藤 祐子	岐阜聖徳学園大学 准教授 佐藤 善人
6	器械運動	1年生 女子	森 哲也	球技 (ゴール型)	3年生 男子	林 貴樹	鳴門教育大学 准教授 藤田 雅文
7	体育理論	2年生 女子	茨 勇作	ダンス (創作ダンス)	3年生 男子	鈴木 健仁	岐阜大学 准教授 熊谷 佳代
	ダンス (現代的なリズム ダンス)	3年生 女子	竹中 聖文				
8	体づくり運動 (体力を高める 運動)	1年生 男子	吉田 潤司	武道 (柔道)	2年生 男子	杉山 正高	名古屋市教育センター 所長 伊藤 久仁
9	球技 (バレーボール)	1年生 男子	中奥 憲吾	球技 (バレーボール)	3年生 男子	後藤 拓	岐阜大学 教授 杉森 弘幸
10	体育理論	2年生 男女	川岸 淳	陸上競技 (長距離走)	2年生 男子	馬淵 昭宏	筑波大学 教授 尾縣 貢
11	球技 (サッカー)	3年生 男子	清本 勝政	武道 (柔道)	2年生 男子	柴田 祐一	埼玉大学 教授 野瀬 清喜
12	球技 (サッカー)	中学部 2年生	小林 久範	球技 (サッカー)	高等部 2・3年 生	足立 圭太	東海大学 准教授 内田 匡輔

分科会の運営担当

分科会	第1	第2	第3	第4	第5	第6
会場校	岐阜市立 加納幼稚園	岐阜大学教育学部 附属小学校	岐阜市立 長良西小学校	羽島市立 竹鼻小学校	各務原市立 那加第三小学校	岐阜市立 岐阜中央中学校
会長 副会長	藤村美保子	廣瀬 治良	宇野 芳弘 中川 敏彦	鈴木 清人	山田 真吾	原 尚
会場校校長	藤村美保子	松井 徹	和田 満	花村 重男	佐藤 元信	森 社
会場責任者	辻 道代 宮内 峰子	藤田 忠久	山田 茂樹	中村 俊彦 小林 美雪	豊永 充子 河田 尚史	高橋 誠 後藤 隆正
担当指導主事	山内 茂樹	見山 政克	由井健一郎 中村 康男	寺田 武義 中村 康男	村田 明治	宮部 寿
授業者	宮内 峰子 上田 育代 高橋 佐知子 小島 崇徳 磯村 満 丸目 尚子 永井 朝美	江川 秀文 荒川千登世 乾 貴之 大澤 秀行	田島 学 高橋 佑佳 井上 誠	高橋 浩之 戸田 有紀	鶴飼 朋子 五藤 祐子	森 哲也 林 貴樹
発表者	磯村 満	江川 秀文	田島 学	岩見 光洋	臼井 一彦	高橋千津子
進行	辻 道代	藤田 忠久 御宿 浩輝	串田 茂	塚原 紀子	河田 尚史	後藤 隆正
記録	丹羽 純子 肥後 晶子	亀山 智樹 野村 慎一 池田 勉	若泉 貴弘 高木 寛 中村 勝	熊野 和雄 伊藤 恵子 山本 洋平 阪井 正史	谷口 信也 岸野 幹根 川上 祐輔 太田 康朗	小栗 剛 駒形 直人 浅野 正 田中 敏弘
受付	川嶋 郁子 大西 博美 奥松 千栄子 山田 さとみ 渡辺 伊津子 安田 まち子 川地 悦子 佐藤 菜穂 豊吉 久実	清水 立貴 川口 信司 稲垣 愛敦 加藤 敦子 武士 純子 塚 美紀	高橋 秀和 森 武寿 後藤 祐至 奥村 厚子 矢島 敦子	田中 友子 白木 未央 石塚 文香 山中 好美 馬場 里恵	桐山 真由美 川尻 沙緒里 島崎 弥里 中村 香 藤井 直美 佐々木 麻美	永瀬 直哉 木村 健太郎 近藤 真弘 安藤 精 小川 佳広 中村 晋介 伊藤 良貴
接待	五島 昭美 長棟 京子 楠崎 美津子 所 幸恵 奥村 由美子 広瀬 みゆき 渡邊 由理歌	有賀 有子 館林 美和	安藤 弥生	犬飼 聡美 石水 絵梨香	永井 美紀 河合 浩子 亀山 理恵子 土屋 直美	大野 美紀 廣瀬 敬代
救護	丹羽 純子 末松 裕之 肥後 晶子 山田 正美 馬場 信吉	大井 修太 藤原 巧 森田 光 高田 駿 下田 浩 小島 恵	山添 亮 仁張 真介 大槻 雄一郎 清水 直樹 杉山 智則 王田 信次 鈴木 温之 河村 亮太 鈴木 宏幸 服部 政行 田中 隆一	矢野 純一 浅野 爱美 田原 幹也 窪田 泰三 石川 賀崇 入野 真由美	加藤 隆広 安藤 栄二 林 道程 牧田 久 野口 和人 畑中 大志 宇野 敬士 幡野 哲 澤井 亜美	古澤 勝己 市橋 貴久 中島 豊 戸川 健司 近藤 慶一 野村 裕之 澤田 英雄 嶋田 佑樹 浅野 誠 滝沢 祐輔
誘導・ 駐車場	丹羽 純子 末松 裕之 肥後 晶子 山田 正美 馬場 信吉	大井 修太 藤原 巧 森田 光 高田 駿 下田 浩 小島 恵	山添 亮 仁張 真介 大槻 雄一郎 清水 直樹 杉山 智則 王田 信次 鈴木 温之 河村 亮太 鈴木 宏幸 服部 政行 田中 隆一	矢野 純一 浅野 爱美 田原 幹也 窪田 泰三 石川 賀崇 入野 真由美	加藤 隆広 安藤 栄二 林 道程 牧田 久 野口 和人 畑中 大志 宇野 敬士 幡野 哲 澤井 亜美	古澤 勝己 市橋 貴久 中島 豊 戸川 健司 近藤 慶一 野村 裕之 澤田 英雄 嶋田 佑樹 浅野 誠 滝沢 祐輔
荷物預かり	古澤まき子		酒井 昌代 白木 知嘉子	神出 圭子 田中 朱美	萩本 恒久 五島 吉郎	服部 佳信 大西 満

分科会	第7	第8	第9	第10	第11	第12
会場校	岐阜市立 陽南中学校	羽島市立 羽島中学校	各務原市立 那加中学校	岐阜県立 岐阜高等学校	岐阜県立 岐阜工業高等学校	岐阜県立 岐阜本巣特別支援学校
会長	青木 廣志	江崎 勝則	増田 義彦	杉山 英一	白井 俊裕	板倉 寿明
副会長						
会場校校長	青木 廣志	今井田康雄	加藤 勝祥	丹羽 章	長屋 千秋	板倉 寿明
会場責任者	原川 拓雄	立花 眞	今尾 謙二 原 廣吉	上田 和伸	澤藤 忍	服部 純
担当指導主事	中川 浩美	古田 浩章	島田 定尚	森川 賢二	小牧 憲充	広瀬 満
授業者	竹中 聖文 茨 勇作 鈴木 健仁	杉山 正高 吉田 潤司	後藤 拓 中奥 憲吾	川岸 淳 馬淵 昭宏	清本 勝政 柴田 祐一	小林 久範 足立 圭太
発表者	茨 勇作	安藤 宏	下屋幸比古	上田 和伸	澤藤 忍	山内 康弘
進行	原川 拓雄	吉田 英治	御宿 智幸	尾関 孝昭	宮浦 英夫	渡辺 正
記録	大井 崇 小野 俊哉 山本 謙治 宮川 二郎 酒向 泰祐	棚橋 幸治 田中 薫 熊崎 敦子 早田 周平	松原 弘昭 後藤 尚輝	小澤 友教 今井 洋輔 山脇 佳奈	徳重 正敦 山口 賢 高森 賢 丹羽 みなみ	中村美香子 水野 慈子 吉田 徹
受付	三宅 俊輔 猪野 美昭 正木 翔一 久川 直之 田中 一旭 清水 信隆 小川 竜英 伊藤 潤 赤尾 聡 尾林 隆	神戸 梓 日比野 亜子 松浦 由和	川島 哲生 水谷 良雄 道家 輝男 上松 正信 小倉 国義	吉田 麻由 芝山 玲子 末次 好己 西尾 登尚 内海 達也 福山 美苗 加藤 雅景	高木 司 西川 勤 町田 尚紀 川本 勇 梶本 健一	栗本 幸江 福井三和子 小野 島弥生
接待	中川 怜香 横谷 淳	宮脇 由美	水谷 洋子 伊藤 栄里子	足立 愉有子 杉山 広之 鈴木 優子 多和田 麻由	宮崎 弥生 助川 かり 吉岡 由衣	不破 明美 田代 真希
救護	坂田 祐子	大橋 由美 竹中 美加	足立 幸子	日置 雅子	宮崎 郁代	佐野 友香
誘導・駐車場	西村 雅章 田中 義光 加藤 隆史 飯島 昌志 岩田 涉 佐野 竜 小森 孝二 杉山 香美 加藤 幸雄 長沼 武志 原 清隆 安池 重和	古川 知紀 伊藤 篤志 猪俣 竜二 山田 純士朗	日高 和広 佐々木 聖恭 水谷 秀彦 山下 等 鳥居 未生 柳原 昂平 高田 和宏 辻角 政治 川原 隆嗣 渡邊 拓真	木下 文太 近藤 都哉 山下 昌哉 井川 茂雄 浅野 宗生 三浦 昇太郎 和田 真二 平田 政好 早矢 仕賢 木村 雄 野々村 浩二	松尾 祐治 水谷 賢司 堀 浩章 坂東 龍一郎 矢崎 誠也 川合 雄也 加藤 大 玉木 信悟 服部 幹和 藤井 健司	亀山 孝司 樋口 健司 竹中 英典 高山 美香 鹿嶋 成美 中村 真章
荷物預かり	田口 一輝 市橋 達朗 竹澤 勇祐	松田 敦 渡邊 竜也 山田 祐香 梨	馬場 隆行 山本 誠 藤本 誠司	古川 竜秋 浅野 隆	小野木 隆 桑原 誠治	駒田 武彦

基調報告

1 主題

21世紀を生きる子供たちが、明るく豊かで活力ある生活を営むためには、生涯にわたり豊かなスポーツライフを実現することが重要である。そのためには、高校卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続できるよう、幼稚園や小学校の段階から運動の楽しさや喜びを味わい、運動への関心や意欲を高め、自ら考えたり工夫したりする力を身に付けていくことが必要である。

こうした構想の実現に向け、学習指導要領では、児童生徒の発達の段階のまとまりを考慮し、小学校、中学校及び高等学校を見通した指導内容の体系化が図られるとともに、指導内容の確実な定着を図り、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育成する観点から、各領域の指導内容が明確に示された。また、幼児については、幼稚園教育要領に加えて運動遊びの在り方をまとめた幼児期運動指針が策定された。

そこで、本大会では幼稚園教育要領、幼児期運動指針、学習指導要領の趣旨とこれまでの岐阜県における学校体育研究の成果を踏まえ、研究主題を「生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む資質や能力を育てる体育授業」と設定した。

この主題のもと、岐阜県では、幼児児童生徒が意欲的に運動やスポーツに取り組み、運動が「できるようになる」楽しさを味わうことが豊かなスポーツライフにつながると考えた。そして、体育、保健体育における「技能」「態度」「知識、思考・判断」の指導内容を確実に身に付けさせるため、発達の段階を踏まえた指導計画、自ら学習できる学習過程や学習形態の工夫、指導と一体化した評価を柱に授業研究を進めてきた。

本大会は、これまでの研究実践の成果を踏まえ、公開授業・公開保育をもとに各分科会において、主題に掲げる体育の在り方について提案し、研究協議を行うものである。

(1) 大会主題

生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む
資質や能力を育てる体育授業

(2) 各校種の主題

《幼稚園》しなやかな心と体を育むための教師の援助や環境の在り方
《小学校》仲間と共に運動の楽しさや喜びを味わう体育授業の創造
《中学校》できた喜びや仲間と共に運動する楽しさを味わう体育授業の創造
《高等学校》生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる
体育授業の創造
《特別支援学校》児童生徒の豊かな心と体を育む授業づくり

(3) 各分科会の主題

幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校（これ以降「学校」と記す）の12分科会において、次の研究主題を設定した。

分科会主題

- 【第 1 分科会】 しなやかな心と体を育むための教師の援助や環境の在り方
- 【第 2 分科会】 確かな動きと自分なりのコツをつかむ児童の育成
- 【第 3 分科会】 自らよりよい動きを求め続ける子
- 【第 4 分科会】 よりよい動きを追求し合い、動きの高まりが実感できる子
- 【第 5 分科会】 できる喜びを味わい、力いっぱい運動する子
- 【第 6 分科会】 主体的に運動に取り組む生徒を育てる体育授業の創造
- 【第 7 分科会】 運動技能の高まりを実感し、仲間と共に運動に親しむ生徒の育成
- 【第 8 分科会】 できた喜びを味わい、自ら運動に親しむ力を育む体育学習
- 【第 9 分科会】 運動ができる喜びを味わう体育授業
- 【第 10 分科会】 課題を解決する方法を考え実践することにより、体力の向上と豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる体育授業
- 【第 11 分科会】 運動・スポーツの楽しさを味わい、教え合い、助け合い、一人一人が豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を身に付ける体育授業
- 【第 12 分科会】 児童生徒の豊かな心と体を育む授業づくり

2 主題設定の理由

(1) 大会に至る研究実践

岐阜県が、保育や体育・保健体育の授業（これ以降「体育の授業等」と記す）で大切にしていることは、教育要領における健康及び人間関係、学習指導要領の体育・保健体育の領域に示されている内容の具現化である。

岐阜県内では、従来、それぞれの学校における運動遊びや運動種目の具体的な指導について、研究実践が進められてきた。とりわけ、小・中学校においては、運動はどのような過程を経て上達するのか、その運動を児童生徒がどのように身に付けていくのか、運動を行う学習集団を高める指導が一人一人の運動を上達させることに結び付くのかなど、市郡の教科研究会ごとにテーマを掲げて実践し、成果を上げてきた。幼稚園、高等学校、特別支援学校においては、市郡や地区、県のまとまりで保育や授業の研究會を実施し、発達の段階や障がいの種類や程度に応じた指導の在り方を明らかにすることができた。

(2) 大会主題の設定

全国的に、運動する子供とそうでない子供の二極化や体力の低下が社会的な問題として取り上げられている。岐阜県では、文部科学省が実施する「体力・運動能力調査」「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」及び岐阜県が実施する「岐阜県公立小・中・高等学校児童生徒の体力・運動能力調査」において、年齢が上がるほど全国平均を上回る数値を示す傾向が続いている。このことは、体育の授業等のみならず、学校を挙げて体力向上の取組を推進してきた成果と言える。

上記の全国調査において、設問「もっと運動をしてみようと思うための条件」では、1週間の運動時間が60分未満の児童生徒のうち、小学校男子：57%、女子：70%、中学校男子65%、女子：77%に当たる児童生徒が「好きな種目やできそうな種目がある」こと

と回答している。体育の授業等を通して、好きな種目（運動遊び）やできそうな種目を増やしていくことが、運動離れしている幼児児童生徒の運動意欲を向上させることになり、結果として生涯にわたって運動に親しむ幼児児童生徒を増やすことに結び付くと考えられる。

これらのことを踏まえ、研究実践の3つの視点「運動の系統性・発展性を踏まえた指導内容の体系化」「運動に親しむ資質や能力を身に付ける指導」「指導の改善に生かす評価」に取り組むなかで、「生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む資質や能力を育てる」ことができると考え、大会主題を設定した。

（3）各校種の主題について

大会主題を受け、それぞれの学校で取り組む内容を明確にするため、各校種の主題を以下のように設定した。

① 幼稚園

しなやかな心と体を育むための教師の援助や環境の在り方

幼稚園では、様々な運動遊びを通して、体を十分に動かす心地よさを体験し、友達と関わって活動する幼児の育成を目指している。運動機能が急速に発達する幼児期に伸び伸びと運動的な遊びに親しむことで、体を動かすことが好きになったり、多様な動きを身に付けたりすることができる。また、友達と関わりながら活動することによって、規範意識や協同性が育ち、社会性の基盤を身に付けることができる。心と体が密接に関連し合っている幼児が、自ら楽しみながら体を動かす遊びを通して、しなやかな心と体を育むための教師の援助や環境の在り方について研究実践を行った。

② 小学校

仲間と共に運動の楽しさや喜びを味わう体育授業の創造

小学校では、仲間と共に各種の運動を楽しみながら、その運動の基礎を培うことで運動好きな児童を育成することを目指している。それぞれの運動領域に取り組むなかで、各運動の基礎となる動きや技能を身に付けることをねらいとする。そのために、運動への関心を高め、自ら運動しようとする意欲や仲間と協力して活動する態度を育てると共に、運動のもつ楽しさや喜びを味わうことができるよう、発達の段階に応じた指導について研究実践を行った。

③ 中学校

できた喜びや仲間と共に運動する楽しさを味わう体育授業の創造

中学校では、運動に関する知識や技能を習得するとともに、仲間と共に自主的に運動に取り組む態度を育成することを目指している。小学校までの学習を基盤とし、運動がどのようなみちすじで発展するのかを明らかにするとともに、一人一人の生徒に技能が身に付くための手立てを明らかにする。また、リーダーなどの役割活動を明確したグループでの学習を仕組むことで、仲間と共に運動する楽しさを味わわせる効果的な指導の在り方にも焦点を当てて研究実践を行った。

④ 高等学校

生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる体育授業の創造

高等学校では、運動の合理的かつ計画的な実践を通して、技能や体力の向上を図り、運動のもつ特性や魅力に深く触れることで、生涯にわたって豊かなスポーツライフの実現を図ることを目指している。このことは、国のスポーツ基本計画に示されている「ライフステージに応じたスポーツ活動の推進」を生み出すことに結び付くと考えている。中学校第3学年から領域を選択して取扱うことを踏まえ、中学校第2学年までの学習を基盤として領域の選択のさせ方や学習内容の設定を見直し、生徒の実態に応じた指導方法の工夫改善となるよう研究実践を行った。

⑤ 特別支援学校

児童生徒の豊かな心と体を育む授業づくり

特別支援学校では、小学部から高等部までの一貫した指導を確立するとともに、発達の段階や障がいの種類や程度に応じた指導の具体を明らかにすることが求められている。本研究では、児童生徒の主体的な活動となること、他者との関わりをもちながら活動できることに重点を置く。年齢や障がいに関わらず運動を楽しみ、児童生徒自身が運動を適切に理解することができる具体的な支援や手立てを明らかにするとともに、チームティーチングのメインとサブの教師の連携を図り、指導の改善に生かす評価の在り方について研究実践を行った。

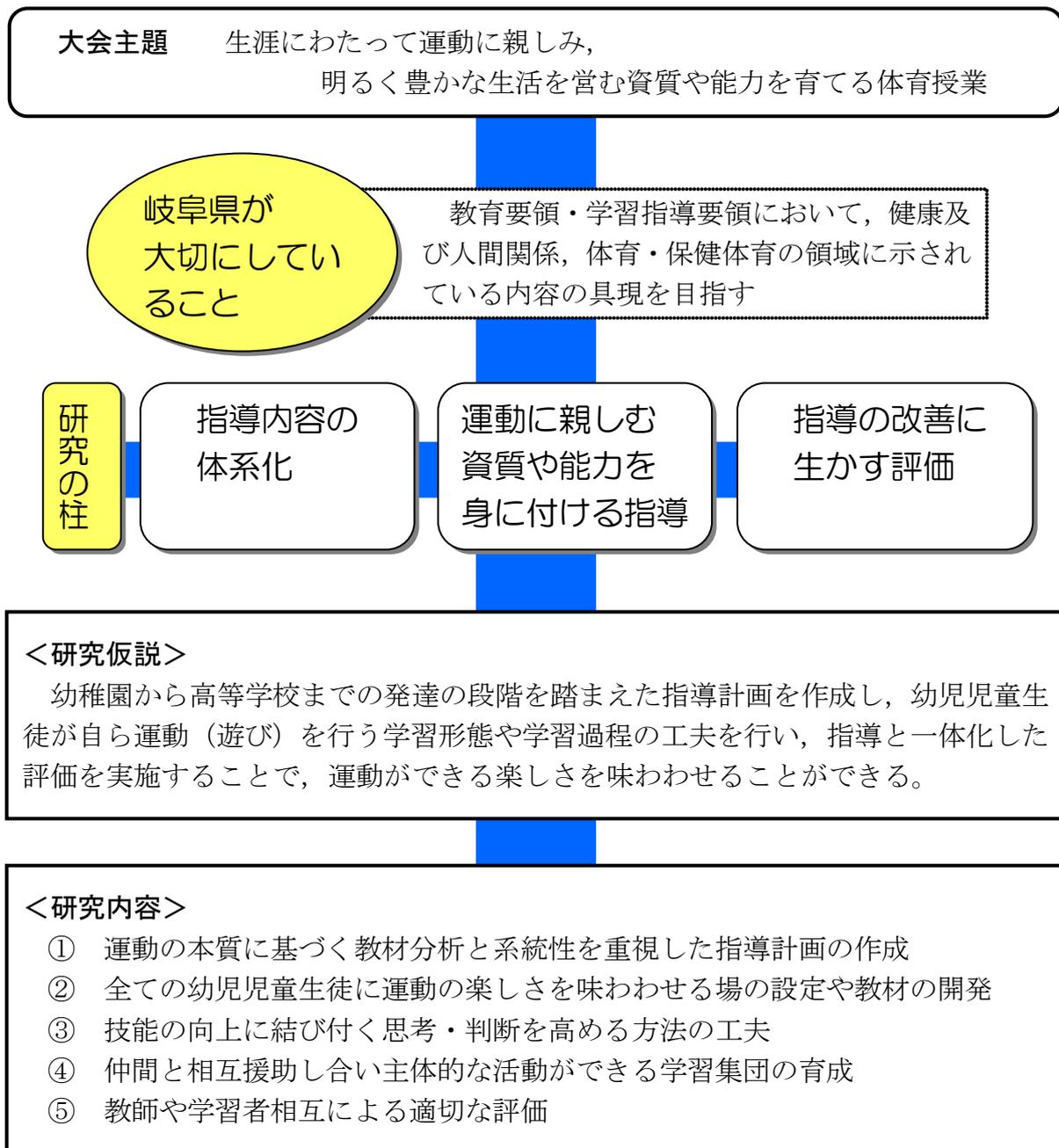
3 研究の基本的な考え方

幼稚園教育を基盤に、小学校から高等学校までの一貫した指導によって運動の習熟を図るためには、学習指導要領の内容を踏まえた上で、運動がどのような過程を経て上達するのかを明らかにして指導内容の体系化を図ることが必要となる。発達の段階や障がいの種類や程度に応じた指導計画を作成するとともに、単位時間の指導において一人一人に運動を習熟させる手立てを明らかにすることで、学習指導要領に示された各領域の「技能（運動）」「態度」「（知識、）思考・判断」の内容を身に付けることができると考えている。

岐阜県では、ペアやグループで学習活動を展開するという体育・保健体育の特性を踏まえ、協力し合い、教えたり、励ましたりする主体的な活動（岐阜県では「相互援助活動」と呼ぶ）を意図的に仕組むことで、運動の習熟を助長するとともに、習得した知識や技能を運動実践に活用するなどの思考力、判断力を身に付けることができると考えている。このことにより、「技能」「態度」「（知識、）思考・判断」を身に付けることが期待でき、大会主題に掲げた「生涯にわたって運動に親しむ」資質や能力を育てることへとつながっていくと考えている。

そこで、先に述べた3つの視点を研究の柱として据え、さらに5つの研究内容に具体化することで教育要領及び学習指導要領の具現を目指すことを考えた。その概要について、次の構想図に示す。

<研究構想図>



4 研究内容

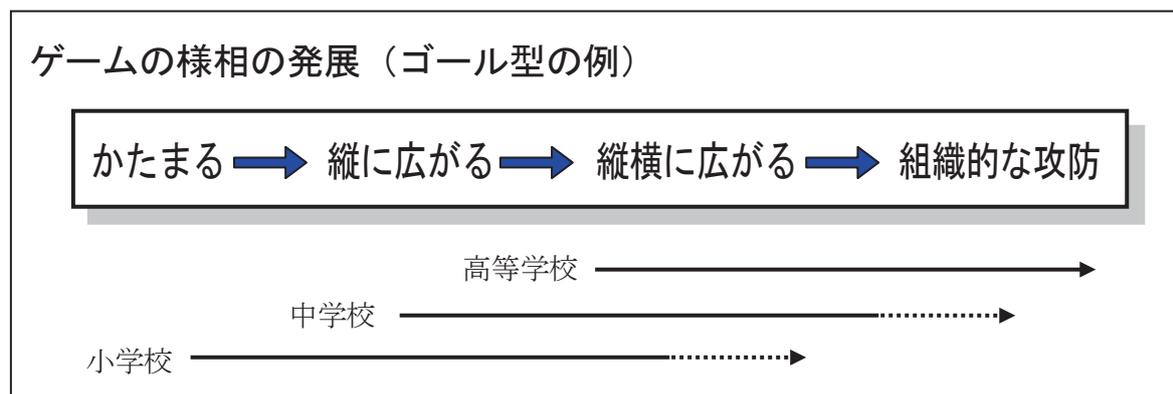
(1) 指導内容の体系化

<研究内容①> 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

学習指導要領では、小学校から高等学校までの12年間を発達の段階のまとまりで捉え、各年代で指導する内容の明確化と種目の系統性を重視した指導内容の体系化を図ることが示されている。

岐阜県では、運動の習熟を図る指導として、従来から各領域の系統性や発展性を明らかに

して指導計画を作成することに取り組んできた。幼稚園においては、小学校以降の学習の基盤づくりとして、運動や運動以外の活動も含めて十分に体を動かすことで心と体の調和的な発達を促すことを重視する指導計画の作成を進めてきた。小・中・高等学校においては、下記に例示した図のように、ゲームの様相の発展に基づいて各校種ごとに指導計画の作成を進めてきた。さらに、校種を越えて交流を進めることで、発達の段階に応じて指導する内容を明確にした指導計画の改善に努めてきた。特別支援学校においては、小・中・高等学校で指導する内容に準じながら、障がいの種類や程度に応じ、どの時期にどのような内容を指導するとよいかを示した指導計画の作成を進めてきた。



（２）運動に親しむ資質や能力を身に付ける指導

＜研究内容②＞ 全ての幼児児童生徒に運動の楽しさを味わわせる場の設定や教材の開発

体育の授業等においては、全ての幼児児童生徒に運動の楽しさを味わわせ、愛好的な態度を身に付けることが重要である。そのことが、大会主題に掲げた生涯にわたって運動に親しむことの基盤となり、明るく豊かな生活を営むことへと結びついていくからである。

楽しさを味わわせるためには、幼児児童生徒の実態を適切に把握し、それに応じた指導の手立てを工夫することが求められる。岐阜県では、運動を、「（それらしく）できない段階」「（それらしく）できる段階」「うまくできる段階」「力強くできる段階」など段階的に捉え、幼児児童生徒の実態把握の指標としている。こうした実態把握をもとに、C（努力を要する状況）の段階の児童生徒をB（おおむね満足できる状況）に、Bの段階の児童生徒をA（十分満足できる状況）に、それぞれ引き上げていくための場の設定や教材の工夫を進めている。

このように、各学校では指導計画と実態把握をもとに指導の手立てを講じて体育の授業等を進めているが、同じように指導をしても幼児児童生徒の運動の習熟は様ではない。課題を理解し運動へ取り組む過程において、個々のつまずきが生じるからである。従って、個々のつまずきを適切に把握することと同時に、つまずきを解消する有効な手立てを工夫することで、どの子にもできた喜びを味わわせる指導を実践している。

＜研究内容③＞ 技能の向上に結び付く思考・判断を高める方法の工夫

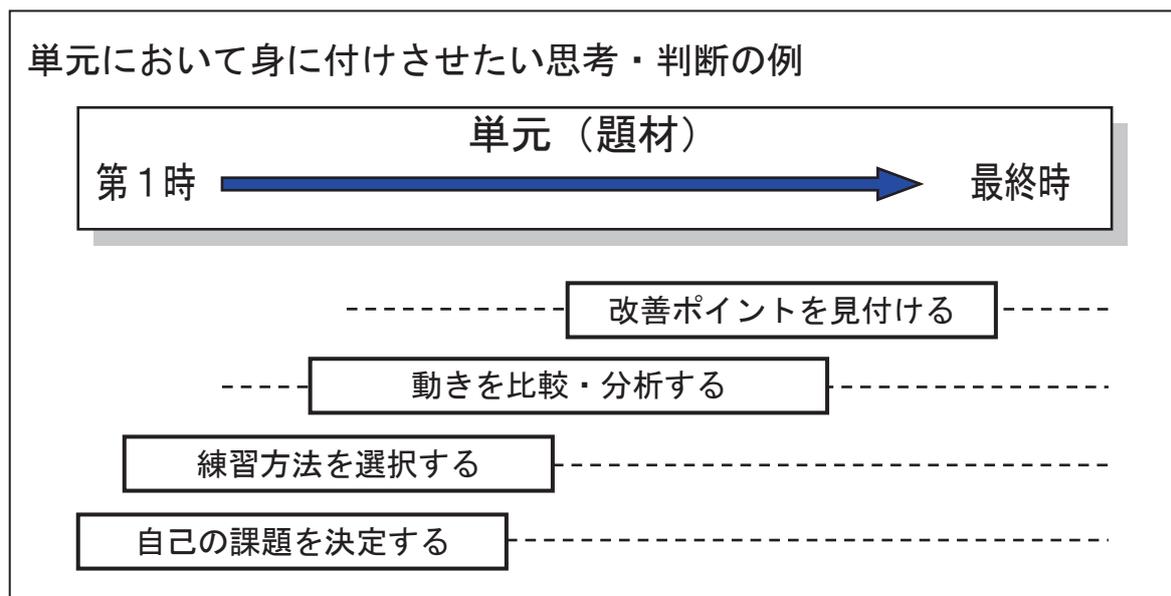
体育の授業等において、思考・判断を高める活動として、次の活動を設定することが必要であると考えている。

幼児や小学校低学年の児童においては、考えたことや感じたことを伝える活動を行うこと、中学年以降の児童生徒においては、発達の段階に応じて自己のつまずきやチームの課題を見付けること、課題に応じた練習を選択したり工夫したりすること、ゲームの作戦を考えたり

演技を構成したりすることなどへ、発展的に活動を設定することが必要である。

思考・判断を高めるためには、本時の課題が明確であること、児童生徒がそのことを十分に理解していることが必要である。課題をめぐる学習活動となるよう、思考・判断を文字や言葉、イラスト、体の動きなどで表現する場が適切に位置付けられていることが有効な手立てであると考え、授業の始めや中間、終末などの適切な場面において交流活動や学習カード等の効果的な活用を実践してきた。

このような言語活動が運動の習熟につながる有効な手段となるよう仕組むことが重要である。下記に例示した図は、単元の進捗に応じて身に付けさせたい思考・判断の一例である。



<研究内容④> 仲間と相互援助し合い主体的な活動ができる学習集団の育成

体育の授業等では、学習がペアやグループなどによって進められることが多く、教育要領や学習指導要領に示されている態度の内容は、望ましい集団活動の中で育まれると捉えている。そのため、学習集団を高める指導を行うことで、幼児児童生徒が学習指導要領等に示された社会的態度や愛好的態度を身に付けることができると考える。そこで、目指す学習集団の姿を明確にする、発達の段階に応じてリーダーなどの役割活動を位置付ける、活動のきまりを協定するなどの指導を通して身に付ける社会的態度を以下のように捉えた。

- 幼稚園・・・先生や友達と運動に親しむ態度
- 小学校・・・仲間と協力して活動する態度
- 中学校・・・仲間との連帯意識をもって活動する態度
- 高等学校・・・互いの違いやよさを認め合い、主体的に取り組む態度

学校体育と生涯スポーツとをつないで考えた時、特定の集団で身に付けた態度を社会生活の中で発揮できることが大切になる。幼稚園での身近な仲間と運動に親しむ活動に始まり、協力する、仲間との連帯意識をもつという経験を積み重ねていく。高等学校では、領域を各自が選択する授業が多くなるため、選択した仲間と協同して活動する社会的態度の育成を目指し、幼稚園から高等学校までの一貫した指導を実践してきた。

(3) 指導の改善に生かす評価

<研究内容⑤> 教師や学習者相互による適切な評価

評価については、国立教育政策研究所から示されている「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」等を参考に進めている。ここで大切なのが、評価を運動の改善や次時の課題に結び付けていくために、本時の課題に対する評価を実施することである。

評価方法として、教師による評価を実施するだけでなく、自己評価や学習者相互による適切な評価を実施することで、運動の向上に結びついたり意欲の向上を図ったりすることができると考える。学習者相互の観察・交流を効果的に進めるとともに、評価の手掛かりとなる技能の進捗表やゲーム記録などを工夫し実践してきた。

なお、評価については発達の段階を考慮することが必要であり、「跳び箱が○回跳べた」などの量的な評価から、「着手のときに腰の位置が肩の高さまで上がっていないから、もっと踏みきりを・・・」などの質的な評価へと段階的に進めるよう配慮してきた。

5 まとめ

生涯にわたって運動に親しむ岐阜県の幼児児童生徒を育てるために、明らかとなった成果と課題は以下のとおりである。成果については、各分科会の実践における成果の一部も紹介する。

(1) 指導内容の体系化

幼稚園教育要領や学習指導要領が全面実施となり、その周知を図るために教育委員会が主催する教育課程講習会や各学校種の研究会等において、改訂の趣旨が説明されてきた。岐阜県では、小・中学校間の教職員の人事異動が実施され、中学校と高等学校との人事交流も計画的に実施されているため、それぞれの校種での学習内容や指導方法が校種を越えて広まりつつある。

- 幼稚園では、3年間を9期に分けて捉え、同系統の活動（遊び）を線で結ぶ系統図を作成したことで、運動遊びにかかわる教師の意図が明確になった。(第1分科会)
- 中学校では、小学校の学習内容を踏まえた上で3年間の指導過程を考え、種目の系統性を明らかにすることができた。(第7分科会・第8分科会・第9分科会)

学習指導要領で示された、12年間を4年間ごとのまとまりで捉え、体系化を図ることの意味や方途については理解されているが、校種を越えての実践が十分に進まないことが現実であり、今後の課題である。

(2) 運動に親しむ資質や能力を身に付ける指導

幼稚園教育要領や学習指導要領に示された内容を、どのような手立てで幼児児童生徒に身に付けさせていくのか、全ての校種で具体的な指導方法を明らかにすることができた。指導内容の体系化を踏まえた上で、保育や単位時間の指導におけるねらいを明確にすると共に、保育や単位時間のどの場面でどのような手立てを講じるかといった場面ごとの指導方法を具体化することが重要である。

- 思考・判断を高める手立てとして、単位時間で「動き見つけ」「動き追求」「動き活用」とする学習過程を位置付け、「観察—助言」のサイクルを確立させたことで、運動を見る視点を高めることができた。(第2分科会)
- 運動のイメージ化を図るため、「動き言葉」「動きの短冊」などを用いて児童に提示する

ことで、運動に対する理解を深めることができた。(第3分科会・第4分科会)

- 学習課題をイメージさせるモデリングの場面を設定することで、児童は動きの手がかりがつかめ、手ごたえをもってゲームに臨むことができた。(第5分科会)
- 集団の高まりを大きく4つの段階で捉え、それぞれの段階で意図的な指導を行うことで小集団の仲間意識が強まり、所属する一人一人に目指す態度を身に付けさせることができた。(第6分科会)
- 体育理論と実技との関連を明確にして、身に付けた知識を合理的に働かせることができる単元を工夫したことで、体力や技能の向上を図ることができた。(第10分科会)

効果的な指導の手立ての開発や周知は各校種ごとに図られ充実している。研究会や講習会等において、手立ての交流や有効性の確認を進めることが、今後の課題である。

(3) 指導の改善に生かす評価

次の指導に生かす評価を工夫することは、幼児児童生徒に学習内容の定着を図る上で重要な手立てとなる。全ての校種で、発達の段階に応じて指導者からの評価、自己評価、相互評価を使い分け、運動や意欲の向上に結び付けることができた。

- 評価の観点を明らかにした指導計画に基づき、生徒相互の評価や学習カードでの自己評価を活用することで、適切な評価を実践できた。(第11分科会)
- GOOD マークを活用して動きの達成を視覚的に理解させることで、障がいのある児童生徒の目標を明確にし、意欲を高めることができた。(第12分科会)

視覚的に観察できたり数値に表れたりする技能については評価が適切に実施されていることが多い一方、練習を工夫したり選択したりする思考・判断の評価が一人一人の適切な評価に表れていないことが多い。一人一人の思考・判断の適切な評価方法を確立することが、今後の課題である。

<引用・参考文献>

- 幼稚園教育要領解説(平成20年10月 文部科学省)
- 小学校学習指導要領解説 体育編(平成20年8月 文部科学省)
- 中学校学習指導要領解説 保健体育編(平成20年9月 文部科学省)
- 高等学校学習指導要領解説 保健体育編(平成21年12月 文部科学省)
- 特別支援学校学習指導要領解説(平成21年3月 文部科学省)
- 幼児期運動指針ガイドブック(平成24年3月 文部科学省)
- 評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 体育】
(平成23年11月 国立教育政策研究所)
- 評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 保健体育】
(平成23年11月 国立教育政策研究所)
- 評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 保健体育】
(平成24年7月 国立教育政策研究所)
- 平成25年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査報告書
(平成25年12月 文部科学省)

- 平成24年度体力・運動能力調査報告書（平成25年10月 文部科学省）
- 平成25年度岐阜県体力・運動能力調査（平成26年3月 岐阜県教育委員会）
- 岐阜県小学校体育指導の手引 改訂版（平成3年3月 岐阜県教育委員会）
- 岐阜県中学校保健体育指導の手引 改訂版（平成4年3月 岐阜県教育委員会）
- 岐阜県高等学校保健体育指導の手引 改訂版（平成5年3月 岐阜県教育委員会）

アトラクション

全国学校体育研究大会岐阜大会 アトラクション

「清流の国ぎふ」
マスコットキャラ
クターミナモが全
体会のお昼休みに
「ミナモ体操」を披
露します。

座ったままで、そ
の場でできる体操
もあるので、みなさ
んも一緒に運動し
ませんか？



清流の国ぎふ



「清流の国ぎふ」マスコットキャラクター

ミナモ

キラキラした川の水面（みなも）に住む妖
精で、水色は岐阜の清流を、黄色は太陽と
みんなの笑顔をイメージしています。

解 説

シンポジウム

【テーマ】

「豊かなスポーツライフの実現に向けて」

コーディネーター

友添 秀則(早稲田大学)

シンポジスト

服部 始代(和歌山市立湊幼稚園)

御宿 浩輝(岐阜大学教育学部附属小学校)

木原 慎介(墨田区立豎川中学校)

佐藤 若(山形県立山形中央高等学校)

小澤 浩夫(東海大学)

テーマ



「豊かなスポーツライフの 実現に向けて」

コーディネーター 早稲田大学

教授 友 添 秀 則

■ 略 歴

- 昭和55年3月 筑波大学体育専門学群卒業
- 昭和57年3月 筑波大学大学院修士課程修了
- 昭和62年3月 香川大学教育学部 助教授
- 平成元年 米国ニューヨーク州立大学 客員教授
- 平成8年4月 香川大学教育学部 教授
- 平成12年4月 早稲田大学人間科学部 教授
- 平成15年4月 早稲田大学スポーツ科学学術院 教授
- 平成24年9月 早稲田大学スポーツ科学学術院院長（兼 スポーツ科学部学部長）

■ 主な著書

- 平成17年 教養としての体育原理（大修館書店）
- 平成20年 新中学校教育課程講座 保健体育(ぎょうせい)
中学校新学習指導要領の展開 保健体育科編（明治図書）
いま学校体育を考える（創文企画）
- 平成21年 体育の人間形成論（大修館書店）
- 平成22年 新版 体育科教育学入門（大修館書店）
- 平成23年 楽しい体育理論の授業をつくろう（大修館書店）
体育科教育学の現在（創文企画）
- 平成25年 学校運動部の現在とこれから（創文企画）

■ 研究業績

- 平成21年 良い子を育てる教育の試み - 体育における人間形成研究をめぐって
- 平成22年 JTPE 掲載論文にみる体育における道徳学習と責任学習の研究動向
- 平成23年 「体育における人間形成」研究の現在 - 体育は人間を創るか
- 平成24年 戦前期日本の女子体育振興に関する史的研究
- 平成25年 教員の運動部活動での指導力をどう育み、高めるか
スポーツ基本法に見る豊かなスポーツライフ
運動部活動ではどのような指導が求められるか



提言テーマ

生きる力の基になる豊かな心とからだづくり

～自ら楽しく体を動かして遊ぶ子どもの育成を目指して～

シンポジスト

和歌山県和歌山市立湊幼稚園 教頭 服部 始代

■ 略 歴

〈学歴〉

園田学園女子大学短期大学部幼児教育学科
卒業

〈主な職歴〉

昭和 63 年 学校法人阿倍野学園幼稚園 教諭
平成 7 年 株式会社ピープル・スポーツクラブ
新金岡(現コナミスポーツクラブ)
平成 15 年 藤井寺市立道明寺幼稚園 教諭
平成 16 年 和歌山市立宮前幼稚園 教諭
平成 22 年 和歌山市立湊幼稚園 教頭

■ 主な著書・研究実績・委員等

- ・文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」(平成 19 年～21 年度)
- ・「小学校への接続を考えた幼児教育」(和歌山県・和歌山市教育委員会)(平成 23 年度)
- ・文部科学省委託事業「幼児期の運動促進に関する普及啓発事業」(平成 25 年度)
- ・文部科学省学校体育振興事業「地域を活用した学校丸ごと子どもの体力向上推進事業」(平成 26 年度)

■ 発表要旨

幼児期において体を動かす遊びを中心とした身体活動は、生涯にわたって豊かなスポーツライフを送るための基盤とも言われています。しかし近年、少子化や幼児を取り巻く社会や生活様式の変化から、家庭や地域で幼児が体を動かして遊ぶ機会が減少し、体力や気力の低下、さらに心身の発達にも大きな影響を及ぼすことが懸念されています。このような状況を踏まえ、平成 24 年「幼児期運動指針」(文部科学省)が策定され、幼児期における運動の意義を、子供に関わる全ての大人が認識することの必要性和具体的な実施方策が提案されました。そこで本園は、幼児期に必要な体力や運動能力とは、単に走るのが速い、鉄棒や跳び箱ができるといった目に見えるものだけではなく、自ら楽しく体を動かし、体を動かすことが好きになる気持ちを一層強く持たせることが大切であると捉え、生きる力の基になる豊かな心とからだづくりについて考えていきたいと思ひます。また教員だけでなく、保護者も幼児期に体を動かすこと、遊びや日常生活の経験が、生涯にわたって健康的に生きるための基礎を培うといった意識を共有し合うことも重要だと考えています。

○研究のキーワードは「気持ちづくり」

体を動かすための気持ちに焦点をあて、遊びを通して幼児期に育みたい体力や、運動に対する興味・関心・意欲の向上を目指し自ら楽しく体を動かし、体を動かすことが好きになる子供の育成を図った実践例を基に、シンポジウムのテーマに迫りたいと思ひています。



提言テーマ

『運動の楽しさや喜びを味わう体育授業』

シンポジスト

岐阜大学教育学部附属小学校 主幹教諭 御宿 浩輝

■ 略 歴

<学歴>

岐阜大学教育学部体育学科 卒業

岐阜大学大学院

教科教育専攻保健体育専修 修了

<主な職歴>

平成 13 年 恵那郡蛭川村立蛭川中学校 教諭

平成 16 年 岐阜大学教育学部附属小学校 教諭

平成 23 年 各務原市立尾崎小学校 教諭

平成 26 年 岐阜大学教育学部附属小学校
主幹教諭

■ 主な著書・研究実績・委員等

- ・小4教育技術「【教科指導】ヒントとアイデア ゴール型ゲーム」(2014. 5 明治図書)
- ・動きの高まりを実感し、自ら動きを創り出す子の育成(2008 岐阜大学教育学部附属小学校研究発表)
- ・状況に応じた動きに焦点をあてたゲームの実践(2008 ハンドボール研究)
- ・ゲームの特性を味わいながら、一人一人が基礎的基本的な動きを身に付ける授業をめざして(第94回岐阜大学教育学部附属小学校教科研究協議会)
- ・仲間とともに自らの動きを創り出す子の育成(2005 岐阜大学教育学部附属小学校研究発表)
- ・岐阜県小学校体育科研究部会 新教育課程指導計画プロジェクト担当(2008~2010)
- ・岐阜県小学校体育科研究部会 主務(2011~2014)

■ 発表要旨

小学校の体育の授業においては、運動することや仲間と活動することの楽しさと、できるようになったことやうまくなったことの喜びを味わうことが大切です。ここに「豊かなスポーツライフを実現する」ということを考えたときに、うまくなるにはどうすればよいのか、ゲームに勝つにはどうすればよいのかなど、運動について「自ら考える楽しさ」を味わうことも大切です。自ら考え、上達していく経験こそ、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の素地をつくることにつながります。

そのために、小学校段階においても、「関心・意欲・態度」や「運動の技能」はもちろん、「思考・判断」についても指導を行い、評価をしていくことが求められます。しかし、子供たちにただ「考えるように」と言っても、よりよい動きにはつながりません。どのように考えさせることが、動きの高まりにつながっていくのか、考え方をどのように指導をしていくとよいのか、内容と方法の両面から考える必要があります。

今回は、体育授業の中で「思考・判断」をどのように指導をしていくとよいのかを、授業場面をもとに考えていきたいと思えます。具体的には、運動全体をイメージすること、中核となる部分の動きをとらえることが挙げられます。それらを授業の中でどのように育てていくかが大切です。子供たちが技能はもちろん、このような「思考・判断」も含めて学習することで、「〇〇したらうまくなった」という実感をもつことができると考えます。この実感の積み重ねこそが「豊かなスポーツライフ」につながっていくと考えています。



提言テーマ

『運動実践につなげる力 ～思考力～』

シンポジスト

東京都墨田区立竪川中学校 主任教諭 木原 慎介

■ 略 歴

<学歴>

筑波大学体育専門学群 卒業
筑波大学大学院体育研究科 修了

<主な職歴>

平成14年4月 島根県立緑が丘養護学校 講師
平成15年4月 財団法人島根県体育協会 体育指導員
平成17年4月 東京都神津島村立神津中学校 (特別支援学級) 教諭
平成19年4月 東京都中野区立第九中学校 教諭
平成24年4月 東京都墨田区立鐘淵中学校 教諭
平成25年4月 東京都墨田区立桜堤中学校 主任教諭
平成26年4月 東京都墨田区立竪川中学校 主任教諭

■ 主な著書・研究実績・委員等

<著書>

- ・学校体育の指導と評価 (共著, 2014, 廣済堂あかつき)
- ・初めてのダンス指導を通して見えてきた成果と限界 (体育科教育7月号, 2013, 大修館書店)

<研究実績>

- ・運動・スポーツの楽しさや必要性を科学的に理解し、実生活において活用しようとする態度を養う体育学習, 「体育理論」授業者 (全国学校体育研究大会東京大会第13分科会, 2013)
- ・中学校1年生における初めてのダンス授業に関する実践事例研究～質的・量的評価法を用いた指導成果の検証～ (日本体育学会, 2012)
- ・体づくり運動の必要性とねらいを明確にした実践～授業実践と学校全体としての実践からねらいにせまる～ (共同研究, 関東中学校保健体育研究協議会, 2011)

<委員>

- ・東京都研究開発委員会 (中学校保健体育), 平成26年度
- ・東京都公立中学校保健体育研究会
- ・東京都中学校体育連盟研究委員会

■ 発表要旨

中学生期は、思春期に伴う心身の大きな変化、社会性の発達などによる興味・関心の多様化、小学校教育からの環境変化など、取り巻く状況が大きく変わる。さらに、4・4・4の最終段階への移行期にもあたる。そのような時期における体育授業の在り方は、生徒一人一人の今後の運動・スポーツ参加を動機付けていく上で、重要な基盤になると考える。

特に、運動やスポーツのもつ多様な価値についての科学的な理解と実践を通し、学んだことを日常生活において積極的に活用していこうとする態度を養うことを重要視している。その態度こそが実生活における運動・スポーツ実践の源となると期待している。実践力につなげるためのキーワードは基礎・基本を「つなげる力」、言わば「思考力」と捉えている。

本シンポジウムでは、これまでに自身が行ってきた実践研究を踏まえながら、その辺りに迫ってみたい。



提言テーマ

「する・みる・支える」スポーツの関わり方を 実現する体育授業を目指して

シンポジスト

山形県立山形中央高等学校 教諭 佐藤 若

■ 略 歴

〈学歴〉

筑波大学体育専門学群 卒業

筑波大学大学院修士課程体育研究科 修了

〈主な職歴〉

平成 元年 山形県東南村山教育事務所 体育主事

平成 5年 山形県立米沢東高等学校 教諭

平成 7年 山形県立山形中央高等学校 教諭

平成 17年 山形県教育庁スポーツ保健課 指導主事

平成 21年 山形県立山形西高等学校 教諭

平成 24年 山形県立山形中央高等学校 教諭

■ 主な著書・研究実績・委員等

・学校体育実技指導資料第4集「水泳」(二訂版); 文部科学省(共著)

・平成20年度子どもの体力向上指導者養成研修会(学校体育指導者中央講習会)中部地区中学・高等学校 講師

・平成22年度 学力の把握に関する研究指定校事業 評価に関する企画委員

・学校体育実技指導資料第4集「水泳」(三訂版); 文部科学省(共著)

■ 発表要旨

近年成人の週1回以上の運動実施率は少しずつ増える傾向にありますが、長い人生の中でスポーツが友人となるような、さらなる豊かなスポーツライフの実現が望まれます。そのためには高校3年間を通じ、小中学校で培った体育に関する知識や技能を深化させ、スポーツとの多様な関わり方を伝えると共に、スポーツが内包する様々な魅力を心と体で実感させることが極めて重要であると考えます。

スポーツを「する」魅力とは、そのスポーツが楽しめる程度の技能を身に付け、仲間と共に楽しく参加できることだと思います。社会に出てからは指導者がいなくても技能が向上するよう、運動のこつを理解させることも大切にしています。また、スポーツは出来なければ楽しめないものではありません。「見る」「支える」といった魅力に触れるには、自分の動きの分析をしたり、一流選手の動きや大会映像を見たりすることは、スポーツの新たな魅力に気付くきっかけになるでしょう。また、男女共習で技能や体力差がある中、うまくできない人にアドバイスしたり、補助したりするといった関わり方もあります。さらに、高校では多くの領域において競技会や発表会の企画運営を学習しますが、その知識を生かして生徒が自分たちで運営することで楽しみ方も違ってきます。ルールやプログラム作成、審判、成績発表など、それぞれの役割を経験することで、将来スポーツの見方や支え方が変化し、スポーツの関わり方に幅を持たせてくれることでしょう。

これらは3年間の体育理論と体づくり運動の学習とも深い関係があります。スポーツの価値や意義を深く理解して楽しく実践できる経験が、スポーツの日常化を促し、生涯にわたってスポーツに親しむ資質や能力の育成につながるものと信じ、日々チャレンジしています。



提言テーマ
『豊かなスポーツライフを実現するため
求められる学校体育実践とは』

シンポジスト

東海大学体育学部 教授 小澤 治夫

■ 略 歴

東京教育大学大学院体育学研究科
修了

■ 略 歴

昭和 53 年 筑波大学附属駒場中・
高等学校 教諭
平成 15 年 北海道教育大学教育学
部釧路校 教授
平成 19 年～東海大学体育学部
教授
平成 22 年～東海大学大学院体育学
研究科 科長

■ 主な著書・研究実績・委員等

・専門は、保健体育科教育学・トレーニング科学・発育発達学。医学博士。初等・中等教育における授業開発、子どもの体力、ジュニア期のトレーニングとスポーツライフ・マネジメントなどについて研究中

<研究実績>

- ・研究論文約 200 編
- ・著書に『レジスタンストレーニング』『トレーニングハンドブック』など 70 冊
- ・文部科学省「子どもの体力向上プロジェクト」「子どもの生活リズム向上プロジェクト」研究代表
- ・2001 年第 4 回秩父宮スポーツ医科学奨励賞, 2007 年度・2010 年度東海大学「学生が選ぶ優秀教員」ティーチングアワード, 2014 年日本体力医学会奨励賞の各賞を受賞

<理事・役員等>

- ・日本体育学会理事
- ・日本発育発達学会理事
- ・日本運動生理学会評議員
- ・埼玉県スポーツ推進審議会会長 など

■ 発表要旨

子どもの体力低下, 運動離れ, 二極化などが叫ばれて久しい。その要因には, 体育授業・体育的行事・運動部活動などの在り方の変化だけでなく, 子供を取り巻く環境の変化があり, 画面に向かい合う時間の延長, 外遊びの減少, 子供が遊んだり運動したりスポーツをしたりする時間・空間・仲間(三間)の減少が影響し歩数測定に見られるように身体活動量が大きく減少している。身体活動が筋肉・骨格・血液・内分泌あるいは脳に影響しているエビデンスは揃いつつあるが, 科学的な知見が有効に教育現場に活かされているとは言い難い。社会の変化に対応した学校体育活動が求められている。本シンポジウムではそうした子供の問題, 科学的根拠, 取り組み事例をご紹介しながら論議を進めたい。

特別講演

【演 題】

「世界の人々をつなぐスポーツの魅力」

講 師 高橋 尚子

講演題目

「世界の人々をつなぐスポーツの魅力」



講師：高橋尚子

公益財団法人日本陸上競技連盟 理事
公益財団法人日本オリンピック委員会 理事
その他「高橋尚子のスマイル アフリカ プロジェクト」
や環境活動、スポーツキャスター、JICA オフィシャル
サポーターなどで活躍中

(2014年10月現在)

〈 略 歴 〉

1972年5月6日生まれ／岐阜県岐阜市出身。

中学から本格的に陸上競技を始め、県立岐阜商業高校、大阪学院大学を経て実業団へ。

1998年名古屋国際女子マラソンで初優勝、以来マラソン6連勝。

2000年シドニー五輪金メダルを獲得し、同年国民栄誉賞受賞。

2001年ベルリンでは女性として初めて2時間20分を切る世界記録（当時）を樹立する。

2008年10月現役引退を発表。

聞き手：吉村 功 フリーアナウンサー

東京都出身。現在岐阜県在住。

元東海テレビ放送アナウンサー。東海テレビでは、中日ドラゴンズ戦や名古屋国際女子マラソン、プロボクシングの中継の実況、プロ野球ニュース、競馬中継などを担当。

現在は、ぎふチャン（ラジオ）で「吉村功のスポーツオブドリーム」のキャスターを務めるなど長年のスポーツ実況の経験を生かして活躍中。

岐阜新聞スポーツ賞選考委員。



幼稚園部会

【研究主題】

「しなやかな心と体を育むための教師
の援助や環境の在り方」

第1分科会

岐阜市立加納幼稚園



長良川鵜飼 (岐阜市)

<第1分科会>

岐阜市立加納幼稚園

【研究主題】

しなやかな心と体を育むための教師の援助や環境の在り方
～ 友達と一緒に、主体的、活動的に遊び、
物事に柔軟な対応ができる心や体を目指して ～

【日 程】

9:00	9:20	10:50	11:30	12:45	14:10	15:00
受付	公開保育①	公開保育②	昼食	研究協議 研究発表	指導講評	閉会式

【授業案内】

公開保育① 3・4・5歳児「体を使った遊び」 園庭・ホール

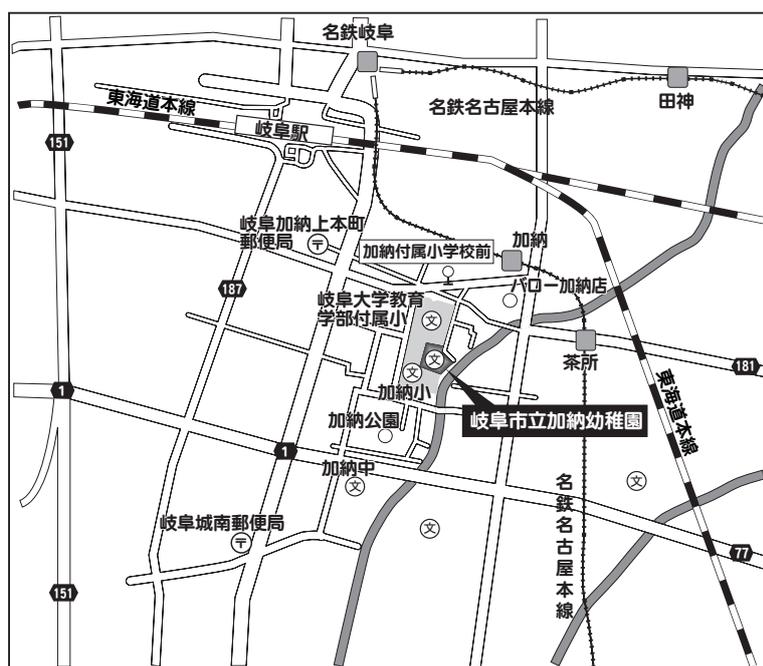
公開保育② 3・4・5歳児「仲間と楽しむ遊び」 3・4歳 各保育室
5歳 園庭・保育室

岐阜市立 加納幼稚園

〒500-8483
岐阜市加納東丸町 2-9-1

<アクセス>

- JR岐阜駅下車 徒歩17分
- 名鉄岐阜駅下車 徒歩17分
- 岐阜バス（下川手行き E18）
加納附属小学校前下車
徒歩3分



【学校の概要】

岐阜市立加納幼稚園



所在地 〒500-8483 岐阜市加納東丸町2-9-1
園長 藤村 美保子
児童数 99名（6学級）
連絡先 TEL 058-272-1077 FAX 058-272-1190
E-mail yo-kanou@city.gifu.gifu.jp
URL <http://www.city.gifu.gifu.jp/10075.htm>

【幼稚園の教育目標】

美しい心でいきいきと遊ぶ加納の子

【幼稚園紹介】

本園は、岐阜駅の南側、住宅街に位置し、同じ敷地内には加納小学校が、また隣接して岐阜大学教育学部附属小・中学校や県立豊学校が、さらに近郊に岐阜市立加納中学校等がある文教地区でもある。

昭和22年（1947年）に岐阜県師範学校女子部附属岐阜市立幼稚園として、岐阜市立加納小学校講堂を借用し開園した。当初は、岐阜市立加納小学校長が園長を兼務したが、昭和57年に併設園から独立園となる。今年度で、創立68年を迎える。

幼稚園では、一人一人の良さと可能性を伸ばす幼児教育を目指し、就学前の幼稚園教育と特別支援教育をモデル的に実践する研究実践の推進と情報発信、家庭・地域の教育力向上・子育てネットワークの構築を進める子育て支援の充実、一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導と情報を発信する発達支援の拡大と充実の3つの重点に取り組んでいる。

1 研究主題

しなやかな心と体を育むための教師の援助や環境の在り方

～ 友達と一緒に、主体的、活動的に遊び、

物事に柔軟な対応ができる心や体を目指して ～

岐阜市立加納幼稚園

2 研究主題設定の理由

近年、子供を取り巻く環境は著しく変化している。地域や家庭においては、戸外で遊ぶ場所が少なくなってきたこと、少子化により近所の子供が集って遊ぶ機会が減少したことにより、体を動かして遊ぶことや子供同士群がって遊ぶことが少なくなっている。その反面、幼児期からの習い事やゲームやビデオ視聴等で過ごす時間が増えている。

そして、このような状況により、全国的にも幼児の体力や運動能力は以前に比べ低下していると言われている。岐阜市立幼稚園においても、歩く機会や戸外遊びの経験の減少により、体を動かすことを好まず、取り組む前から「むずかしい」「やらない」と言う子供や、身のこなしがぎこちなく、すぐに「疲れる」「やめる」と言う子供など、遊びの中での困難さやつまずきを感じる場面で立ちつくしてしまう傾向が年々増加している。

このような子供の実態を踏まえると、幼稚園教育要領の領域「健康」に示されているねらいの中の、「いろいろな遊びの中で十分に体を動かす」という内容は、ますます重要となってきた。このことは、平成20年度、幼稚園教育要領の改訂の際に、領域「健康」の内容の取扱いに、「特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること」という一文が新たに加わったことからとも言えることである。

平成24年には、文部科学省から「幼児期運動指針」が示された。その中に、『社会の変化は幼児においても同様の影響を与えており、結果的に幼児期からの多様な動きの獲得や体力・運動能力に影響していると考えられる。幼児にとって体を動かして遊ぶ機会が減少することは、その後の児童期、青年期への運動やスポーツに親しむ資質や能力の育成の阻害にとどまらず、意欲や気力の減弱、対人関係などコミュニケーションをうまく構築できないなど、子供の心の発達にも重大な影響を及ぼすことも懸念されます。』と記されている。

このようなことから、私たちは、子供の動きを日々の遊びの姿からとらえることに改めて目を向け、これらの価値を見直す必要があるのではないかと考えた。そして、幼児期の運動の発達を理解して、一人一人の実情に応じた教育を行うことが大切であると考えた。

そこで、本園では岐阜市立幼稚園教育研究会とともに研究主題を『しなやかな心と体を育むための教師の援助や環境の在り方』とし、「しなやかな心と体 ― 何事にも意欲をもって困難な状況に向かって乗りきろうとする、状況に合わせて柔軟に対応できる心や体」を目指し、そのための教師の援助や環境の在り方について実践研究を推進していくこととした。

3 研究の仮説

教師は、子供の興味や関心に沿った運動遊びの環境を考えたり、友達と一緒に楽しめる遊びの中で自分の思いを伝え合えるような援助をしたりする。そういった支援をしていくと、子供は多彩な動きを経験したり、体を十分に動かす心地よさを味わったり、友達と仲良く活動を楽しんだりする中で、しなやかな心と体が育まれると考える。

4 研究内容

(1) 運動の楽しさを味わわせる場の設定や教材の開発

- ① 主体的に取り組める多彩な動きのある運動の工夫
- ② 友達と一緒にイメージをもちながら、園内の環境を生かした遊びの工夫

(2) 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

① 指導計画（運動遊び編）の作成

子供は遊びを通して総合的な発達を実現していくが、本研究では大会主題を受けて、運動的な遊びの観点から、環境の構成を考えた指導計画（運動遊び編）を作成する。

(3) 保護者、関係機関との連携による適切な評価

① 生活習慣の改善

幼稚園は、幼児期にふさわしい生活を実現することを通して、一人一人の発達を促す場である。そのためには、保護者との協力が重要となる。特に、基本的な生活習慣や生活リズムを身に付けていくためには、保護者の意識の持ち方が大きく影響する。そこで、いきいきチェック（家庭での生活習慣や生活リズムについての調査）を実施し、養護教諭がその結果について評価し、家庭に返すことで、望ましい生活の基盤をつくっていくことができるようにする。

② 体力測定の実施（岐阜大学の協力）

2月と9月に全園児対象に体力測定を実施することで、子供の体力や運動への取組みの姿などを、教師が把握・分析し、遊びや環境の改善や工夫につなげていく。

5 研究実践

(1) 運動の楽しさを味わわせる場の設定や教材の開発

実践事例ア 主体的に取り組む、多彩な動きのある遊びの実践

「せんせい、見てて！もっと跳べるよ」 3歳児 11月

1学期、砂場遊びを繰り返して遊ぶうちに、11月になると、気の合う子と山を作ったり、川を作って水を流したり、目的の場所に砂を積んだり、“高くしたい！”という思いをもって続けたりするようになってきた。

B児の父親が保育参加した日に、子供たちと砂場で大きな山を作って遊ぶことを依頼した。I児やM児やF児は裸足になり、砂を山の横やてっぺんにかけて手の平で叩くようにして固めていた。また、N児はバケツに何度も水を汲んできては「こうやって水をかけるとかたくなるよ」とやって見せた。山が高くなったところで教師は「こんな高い山からジャンプできるかなあ」と声をかけた。I児が山に登り両足を揃えて遠くへ跳んで下りた。「すごい、こんなところまで跳んだよ」と言うと、僕も私も…と次々と山から跳んだ。

<省察>

①環境について

砂場遊びは年間を通して継続的に行ってきた。繰り返し行うことで、砂に触れて遊ぶ、砂を器に入れる、スコップで山や穴を作る、そういった経験を踏まえ、次はもっと大きな山を作ろう、水を流そうと、イメージが膨らんでくる。それに合わせて手を動かす、スコップを持って大きく動かす、バケツに水を入れて持って運ぶなど、様々な動きがみられるようになった。それを何度か繰り返すと、動きがスムーズになった。

②援助について

毎月第三週に「お父さんと遊ぶ週」を位置付け、幼稚園で子供たちと遊びたいお父さんが来園する。この日もお父さんが来ていたので、力強く山を作る様子や、大きな山を作ることで、子供たちの刺激となった。大きくなった山を教師が跳び越えたり、水の中に飛びこんだりすることで、それが動きの模範になり、子供たちの興味をかきたて、跳ぶという動きにつながった。

実践事例イ イメージをもちながら、主体的に取り組む実践

「かっこよかった？」 4歳児 6月

クラス替えがあり、新しい仲間との生活が始まった。そこで、みんなで一緒に音楽に合わせて体を動かす楽しさを味わうことで仲間へ気持ちを向けたり、繋がりを感じたりしてほしいと願い、4月から、毎日体操を行うことにした。

そんな中、H児は、みんなが体操を始めるとままごとコーナーへ行ってしまふことが続いた。「Hちゃんがかっこよく踊るところを見たいなあ」と声をかけても、なかなか踊ろうとしなかった。教師が手を取って一緒に踊ったり、「Gちゃん、かっこよく踊っているね」と周りの子の様子をH児に伝えたりしてきた。

そんなH児だったが、音楽(歌)は好きで、歌詞を所々ロズさんだり、「へんしんロボットマックス!」と言ってポーズを決めたりする姿が見られるようになった。

先生役をしたい子供たちが前へ出て踊るようになった。先生役の子供たちの立ち位置を、H児から見られる位置にした。先生役が大勢前へ出て混雑してくると、「順番にしよう」という声が出てきた。子供たちが話し合い、二人ずつ先生になることにした。

H児の番が来た日に、「今日はH君が先生役だよ!」と伝えると「はい、はい」と、上機嫌な返事で、前へ出てきた。曲をかけると張り切って体を動かし、決めポーズをするところで思いつき飛び跳ねていた。「Hちゃん、かっこいいね〜」と声をかけるとニコッと笑顔でこちらを見た。体操を終えると教師の所へ来て、「かっこよかった?」と確認をするように声をかけてきたので、「うん!ものすごくかっこよかったよ」と伝えると、うれしそうに歌いながら友達の中に入っていった。

<省察>

①環境について

踊りの時間を位置付け、みんなで楽しむ場を作ってきた。その中でH児が興味をもつように好きなヒーローが登場し、単純な動きの繰り返しのある体操をとり入れた。また、友達の様子が見られるような立ち位置にも配慮した。そのことにより時間はかかったが、興味をもって、自分から前へ出て踊るようになった。

②援助について

H児の気持ちが高まるように、「かっこよかったよ」等の言葉をかけて、踊ることへの自信を持たせた。また、前へ出て先生役をするという少し抵抗感のある場を作ることで、更に自分を表現することの楽しさを感じることができた。

実践事例ウ 友達と一緒に主体的に取り組む実践

「ぼくら、黄色チーム」 5歳児 10月

運動会を控え、子供たちと一緒にリレーを始めた。また、「応援団大募集します!」と伝え、応援席をトラックの近くに準備し、CDデッキを置いて曲を流した。J児やG児、K児、M児らもポンポンを持って踊りながら、リレーを応援し始めた。音楽に誘われて、E児やH児、C児、Q児も集まってきた。

何度も走っていたU児、R児、H児、C児、E児らが、帽子を裏返して黄色にして「俺ら黄色チーム」と言い、順番にバトンを回すようになった。そのため、赤、水、緑のバトンを受け取る人が少なくなった。「こっち(赤)、少ない!」「バトン渡す人がいない!」「U児君、こっ

ち来てよ」などの声が上がり始めた。教師は、「どうするといいいかなあ？」と言葉をかけたり、連続して走って人数が少ないことの大変さをアピールしたりした。

その様子を見ながら踊っていたG児が、「入ってあげる」と赤チームになったり、見ていたQ児とN児がリレーに入ったりするようになった。

「じゃあ、今度はそっち（水）のチームにはいるわ」と人数を見ながらチームを変ったりする子もいた。

多くの子供たちがリレーに参加し、何周も何周も終わりのないリレーを楽しんだ。



<省察>

①環境について

いつも自分たちでできるように、バトンやデッキ、ポンポンを目につくところに置き、主体的に取り組めるようにした。その結果、エンドレスリレーを楽しむ子や応援をする子が増えてきた

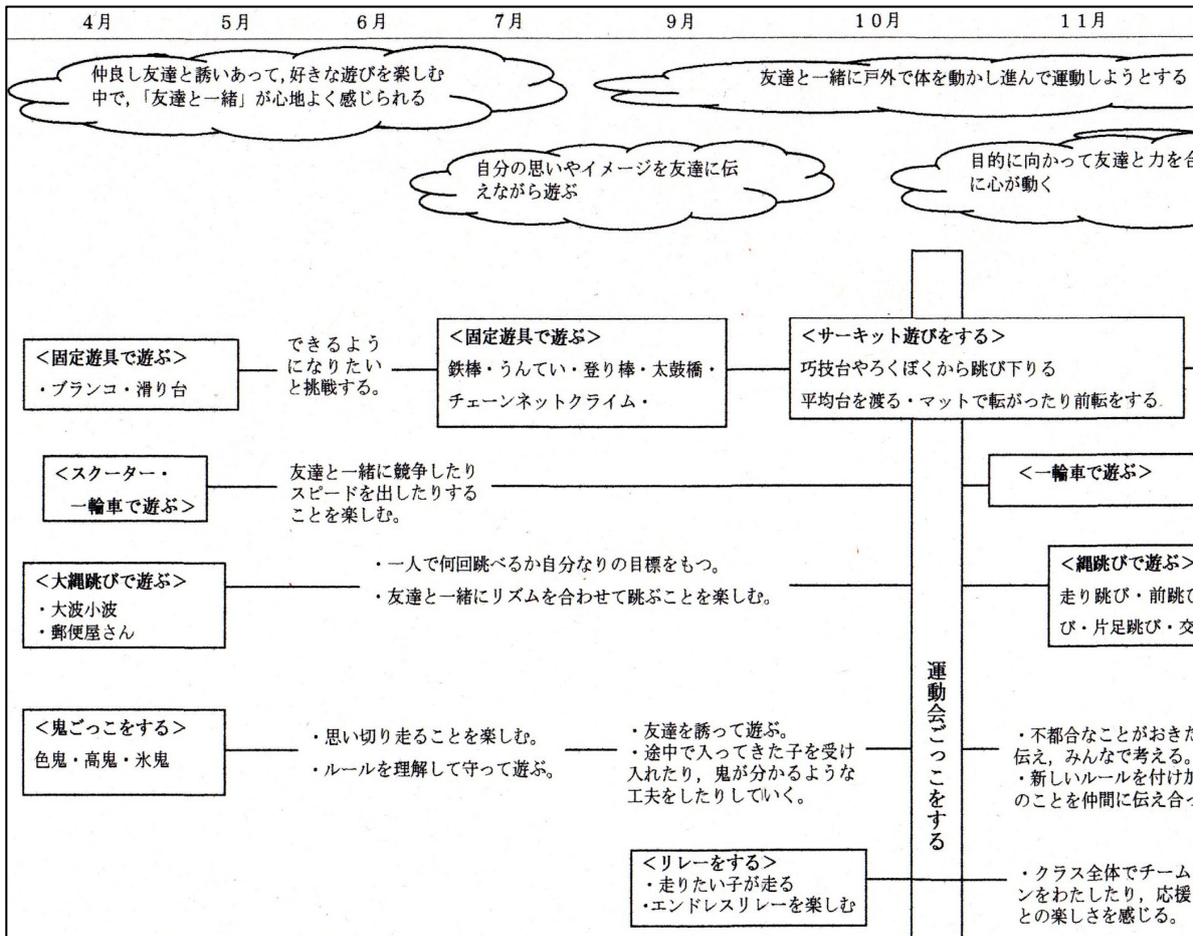
②援助について

チーム分けをどのようにしたらよいかということ、自分たちで考え、思いを出し合う場を作った。その結果、自分たちで解決したと実感し、更に遊びが続いていった。繰り返し遊ぶことで、カーブでバランスをとりながら体を傾けて走ったり、バトンをパスするときに相手の手に落とさず渡そうとしたりするなど、体を調整できるようになっていった。

(2) 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

① 指導計画（運動遊び編）を作成する

図1：年間の主な運動遊び（5歳児）



実践事例や幼稚園の指導計画を基に、子供の発達段階を踏まえ3・4・5歳児、小学校へのつながりを考え、指導計画（運動遊び編）を作成した。

3年間の学年毎に分け「活動(遊び)」「子供の姿」「教師の援助」「環境」等を記載した。子供の自発的な活動としての遊びを通して、心身の発達を総合的に促すことを念頭におき、次のことについて留意した。

〈作成にあたっての留意点〉

- ・学年毎に図1『年間の主な運動遊び』の図表を作成し、3年間の子供の心身の発達を踏まえた運動遊びを示すことで、教師が見通しをもって指導に当たることができるようにする。
- ・図1では、生活習慣（自立へ）、協同的体験（友達と一緒に活動したい思い）、規範意識（思いやりや約束を守ろうとする）、ことばや思考力（イメージや工夫）など、幼児期に育てたいことを意識して作成に当たる。
- ・活動（遊び）は、同系統のものを線で結び、年間、学年間のつながりがわかるようにする。
- ・活動（遊び）は「この時期に経験させたいこと、どの子供にも経験してほしいこと」を取り上げる。
- ・ は、期のねらいと関連させ、その時期の願いを記述する。横につながるようにする。
- ・線上の文言は、 にある願いとの結びつきを考慮して記述する。

図2：期ごとの指導計画（5歳児Ⅶ期）4月～7月

<p>【子どもの姿】・年長組になったことが嬉しくて、意欲的に行動する子がいる反面、担任が変わったことへの不安感を感じ、周囲の様子をじろくくして様子を見る。・ごっこ遊びでは役割を分担しながら気持ちを合わせて遊ぶ姿が見られる。・集団で遊ぶことを楽しむ子もいる反面、友達から離れたい様子が見られる。</p>		
<p>【ねがい】●年長組になった喜びを感じながら意欲的に遊ぶ。 ●仲良しの友達と誘い合って、好きな遊びをする。 ●いろいろな素材や道具を使って遊ぶ。 ●自分で考え、安全に気を付けて暮らそうとする。</p>		
5歳児 4月	5歳児 5月	5歳児 6月
<p>＜固定遊具・移動遊具で遊ぶ＞</p> <p>○登園すると、園庭に出て、ブランコや滑り台など、取り組みやすいものから遊び始める。ブランコでは立ち乗りができ、思い切りこぐ姿も見られる。</p> <p>○スクーターや箱車など、友達と一緒に競争したり、力を出して引っ張ったりする。</p> <p>・年長になり、新しい担任や保育室に慣れようとする気持ちを受け止め、親しんできた固定遊具で共に遊びながら教師との信頼関係を築けるようにする。</p> <p>＜いろいろな運動用具で遊ぶ＞</p> <p>○ボールを投げたり、受けたりしながらその感覚を楽しむ。</p> <p>○フラフープを並べて跳んだり、腰に当てて回したり、転がしたりして遊ぶ。</p> <p>○シュートするタイミングを考えながらバスケットゴールにボールを投げる。</p> <p>○一人ずつサッカーゴールにボールをけて遊ぶ</p> <p>○大縄跳びで大波小波やへび跳びをする。</p> <p>・いろいろな運動ができるように、用具を定位置に準備する。</p>	<p>＜固定遊具で遊ぶ（鉄棒・うんてい・太鼓橋・登り棒）＞</p> <p>○自分から繰り返し取り組んだり、友達のしている様子に刺激されて自分もいろいろな動きに挑戦しようとする。</p> <p>○友達と一緒に教え合って、できたときは喜んだり励まし合ったりしている</p> <p>・一人一人の頑張りを認めたり、必要なときはやり方を知らせていく。</p> <p>・ぶら下がる気持ちよさ、挑戦したらできたという喜びを共有する。</p> <p>＜いろいろな鬼ごっこを楽しむ＞</p> <p>○氷鬼は氷になった友達を助けることを楽しむ。</p> <p>○色鬼は鬼になって何色かを考えることや、その色を探すことを楽しむ。</p> <p>○高鬼は、鬼に捕まらないように、次の場所へ移動することを楽しむ。</p> <p>・始めは誰でも参加しやすい簡単なルールのもを提案し、新たな友達とも一緒に体を動かすことが楽しめる様ようにする。</p> <p>・教師も共に参加しながら、そのスリル感を味わう。</p>	<p>＜友だちと一緒に転がしドッジボールをする＞</p> <p>○ドッジボールではボールを転がしたボールをとりに行なう動きを楽しむ。</p> <p>○サッカーではボールを蹴つボールが入らないように守</p> <p>○ボールに当たらないようにたりすることを楽しむ。</p> <p>・ドッジボールでは当たったが、出たくない子もいてるので、話し合える場をつくることに終始するのではな考えルールに工夫ができるいく。</p> <p>・ボール運動で、逃げたり、いう動きを楽しむ中で、そられるようにする。</p> <p>＜室内で体を使って遊ぶ＞</p> <p>○遊戯室やホールで、平均台跳び下りたり、渡ったり、</p>

- ・図2 指導計画は、期（3 学年9 期）で捉え方向性を示すものとする。
- ・子供が楽しく体を動かして遊ぶ中で、様々な体験ができるための援助や環境の在り方を示す。
- ・月によって活動（遊び）の質が変わっていくことや個から集団（仲間）に変わっていくことなどを考慮する。
- ・同じ活動（遊び）でも、子供の発達に合わせ、期（期の中の月）によって、子供の姿や教師の援助や環境の違いがわかるようにする。

(3) 保護者、関係機関との連携による適切な評価

① 生活習慣の改善

ア 望ましい生活の基盤をつくることを目的とした保護者との連携

いきいきチェック表

今回の重点目標 まいあさ、うんこをしよう

排便と日々の生活はつながっています

「うんこだすまん」 作 村上八千代 ほるぷ出版より

「うんこ」は健康のバロメーターともいわれるとおり、食べること、寝ること、運動することなどのバランスの乱れが、形や色やにおいとなって表れたり、「排便がない」というメッセージになったりします。毎朝排便するために代表的な習慣を5つの術に見立てました。この術を使って朝排便の習慣をつけましょう。

<p>「朝ごはん、いただき術」</p> <p>特に朝ごはんはからっぽの胃の中に入れて、大腸が活発に動き出し便意を起こしやすくする。</p> 	<p>「お水ごっくんの術」</p> <p>水分が少ないと便が硬くなり便秘になります。また、朝起きてからすぐに飲む冷たい水は、胃や腸を刺激し便意を起こしやすくします。</p> 	<p>「野菜で繊維の術」</p> <p>繊維は体の中で消化されず大便の材料になります。材料が多いと便の量も多くなって大腸を刺激しやすくなるので、排便を促します。</p> 	<p>「からだのびのびの術」</p> <p>大便を出すには体力が必要です。特にいきむためには腹筋が大切ですし、運動してお腹の筋肉を動かすと、腸の運動も活発になります。</p> 	<p>「うんこタイムの術」</p> <p>早寝早起きで睡眠時間をたっぷり取れば目覚めもすっきりし、排便の時間もゆとり取ることができます。</p> 
--	---	---	---	---

		おきた じかん	あさ ごはん	あさ うんこ	よる ごはん	テレビの じかん	ねた じかん	合計点
9/28 (日)	点							
	シール							
9/29 (月)	点							
	シール							

保護者の感想

「体のびのびの術」で取り組みました。朝ご飯を食べた後、自分で歌いながらダンスをして体を動かしました。「うんちをしよう」という気持ちで朝の時間を過ごしていました。体を動かすことだけでなく、朝ご飯をしっかり食べたり、食後にトイレへ行ったりという習慣をつけることで朝うんちをすることができることがよくわかりました。うんちが出るとすっきり元気に幼稚園に行けたのでこれからも続けたいです。

- ・10年ほど取り組んできた『いきいきチェック』の6項目（起床時間、朝食、排便、夕食時間、TVビデオなどの視聴時間、就寝時間）の中から、重点項目を改善されていない「早寝早起き」「朝の排便」「ノーテレビデー」とした。
- ・『いきいきチェック』の期間だけでなく継続して取り組めるよう、提出された『いきいきチェック表』を保育室に掲示し、子供の気持ちをつなげるようにした。

イ 子供が体感できる保健指導の工夫

- ・『いきいきチェック』の事前指導として、養護教諭が絵本を使って話をしたり、教材を手作りしたりした。また、絵本や教材につながるように「朝ごはんは何を食べたの?」「今日は何時に起きたかな?」などの声かけを毎朝担任と共に行い、望ましい姿には「気持ちいいよね」「すっきりしたね」などと体の状態を言葉で表すようにした。

ウ 保護者が気付き、良い生活リズムに変えようと思える情報提供

- ・『いきいきチェック表』に重点目標に関する内容を掲載するスペースを設け、情報提供を行った。
- ・保健だよりで生活リズムの大切さについて繰り返し取り上げ、情報提供を行った。

エ 子供の変容、良い姿を保護者に知らせ、子供を認め自信につなげる働きかけ

- ・表の回収を保健室で行い、一週間の生活の様子や頑張ったことについて、一人一人と話をする機会を作り、子供を認めたり自信をもたせたりするような場とした。
- ・『いきいきチェック表』に、望ましい姿や頑張ったことを認めるコメントを一人一人に書いて返却した。

② 体力測定の実施

体力測定は、岐阜大学教育学部の協力のもと、2月と9月に実施した。「25m走」「立ち幅跳び」「ボール投げ」「体支持持続時間」「握力」「反復横跳び」「長座体前屈」の7項目の測定をした。

その時の姿から、子供の「投げる」経験が不足していたり、「投げる」基本的な動作パターンを幼児期にきちんと身に付けたりすることが大切であるとの指導を受け、子供が遊びを楽しみながら「投げる」経験ができるような環境や教材の工夫をした。

〈遊び方〉

園庭の築山の頂上から、的になる絵を貼ったビニールシートを吊り下げた。ボールは子供が掴み、投げやすいように新聞紙を丸め布ガムテープで巻いた物を用いた。的をめがけてボールを投げて遊ぶ。



〈遊びの様子〉

ビニールシートの的を見ると、年長児がすぐにボールを投げ始めた。投げ方、ボールの飛距離、コントロールなど個人差が大きく、日頃からサッカーやドッジボールなどが好きなA児は、最初から高く、遠くへ投げることができた。時には、シートを超えることもあった。

やりたい気持ちはあっても、なかなか思うようにボールを投げられないB児だったが、シートの横や裏側から応援する友達に励まされ繰り返し挑戦する姿があった。

6 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・教師が子供の運動発達の姿をとらえて、興味や関心に合わせた運動遊びの環境を構成することで、子供が戸外でいろいろな運動遊びに取り組むようになってきている。
- ・運動遊びの指導計画を作成することで、年齢や発達に合わせた運動遊びを、計画的に取り入れることができた。その結果、例えば、ボールを投げる力が育つと、遠くまで投げようとする、的をねらって投げるなど、様々な投げ方をしようとする。それが徐々にドッジボールなどの遊びにつながり、遊びながら更に受ける、避けるなどの動きの幅が広がってきた。
- ・2月、9月に行った体力測定の結果、4歳児では「25メートル走」5歳児では「ソフトボール投げ」に変化が見られた。4歳児は氷鬼や色鬼、高高鬼などいろいろな鬼ごっこを楽しむ中で、走ることが日常の遊びとなり、みんなが楽しんで参加してきたことが、要因だと思われる。また、5歳児は、ドッジボールでよく遊んでいた。最初の頃は少人数だったが、ボールを投げる楽しさ、ボールを避ける楽しさ、ボールを追い掛ける楽しさ、ボールを捕る楽しさなど、それぞれの楽しさを見出すと、多くの子供たちが参加するようになった。ルールも子供たちが話し合っ決めて決める場面もあり、ドッジボールがみんなの遊びとなったことが、数値の向上の要因だと思われる。好きな遊びを友達と一緒に存分に楽しむことが、体力向上につながったと考えられる
- ・『いきいきチェック表』や体力測定などの評価により、子供の健康的な生活リズム、運動能力の実態を客観的にとらえることができた。それにより、望ましい生活の基盤づくりの大切さを保護者に啓発したり、家庭で体を動かして遊ぶことの提案をしたりすることができた。また、幼稚園では楽しく遊びながら体を動かすことができる教材の工夫ができた。

(2) 課題

- ・今後も、子供が様々な運動遊びに意欲的、継続的に取り組むことで、しなやかな心と体を身に付けていくことを願う。そのために、教師は、目に見えてとらえやすい「動き」や「運動遊び」だけでなく、心の発達についてもきめ細やかにとらえ、援助していく。
- ・指導計画に基づいた実践を通して、子供が意欲的に体を十分に動かし、主体的に環境に働きかけられるような環境構成や教材の工夫、教師の援助等を見直し、加除修正する。
- ・各評価と保護者への啓発や提案が、どのように受け止められ、実践されているか把握するとともに、心も体も健康で戸外でいきいきと体を動かし、さらに、しなやかな心と体を育むことができるよう、継続的に取り組む必要がある。

小学校部会

【研究主題】

「仲間と共に運動の楽しさや喜びを味わう体育授業の創造」

第2分科会

岐阜大学教育学部附属小学校

第3分科会

岐阜市立長良西小学校

第4分科会

羽島市立竹鼻小学校

第5分科会

各務原市立那加第三小学校



冬ソナストリート（各務原市）



竹鼻まつり（羽島市）

<第2分科会>

岐阜大学教育学部附属小学校

【研究主題】

確かな動きと自分なりのコツをつかむ児童の育成

～ 発達の段階に応じた「体づくり」と「ネット型」の系統的な指導 ～

【日 程】

9:00 9:40 10:25 11:00 11:45 13:00 14:15 14:50 15:00

受付	公開授業①	移動等	公開授業②	昼食	研究発表	研究協議	指導講評	閉会式
----	-------	-----	-------	----	------	------	------	-----

【授業案内】

- 公開授業① 第3学年「体づくり運動」 附属中学校体育館
第6学年「保健領域」 附属中学校多目的ホール
- 公開授業② 第6学年「ネット型ボール運動」 附属中学校体育館

【会場案内】

岐阜大学教育学部 附属小学校

〒500-8482
岐阜市加納大手町 74 番地

<アクセス>

- JR 岐阜駅下車 徒歩 15 分
- 名鉄岐阜駅下車 徒歩 15 分
- 岐阜バス（下川手行き E18）
加納附属小学校前下車 徒歩 1 分
- 自動車利用
東海北陸自動車道各務原 IC より 20 分



【学校概要】

岐阜大学教育学部附属小学校



岐阜の象徴としての鵜船と篝火。陰陽は天地自然、篝火は学問・舟は人類の幸福、青と赤は意思と情熱、単純化された形は時代の速度と活動性を意味する。

所在地 〒500-8482 岐阜市加納大手町7-4番地
副校長 松井 徹
児童数 687名（21学級）
連絡先 TEL 058-271-3545 FAX 058-271-1816
E-mail fusho@gifu-u.ac.jp
URL <http://www.fuzoku.gifu-u.ac.jp/sho/>

【学校の教育目標】

なかまのしあわせのために
よく考え 助け合い つくりだす 心身ともに健康な児童の育成

【学校紹介】

本校は、昭和24年（1949年）に岐阜大学学芸学部が創立され、同29年（1954年）に岐阜大学学芸学部附属小学校として設置された。昭和41年（1966年）に学芸学部が教育学部に改称されたことに伴い、岐阜大学教育学部附属小学校と改称して現在に至っている。

また、岐阜大学教育学部の附属学校として、「実践フィールドとしての教員養成と現職教員研修」、「先導的な教育実践研究の推進と公表」、「附属中学校との連携・一貫教育の推進」、「保護者と一体となった教育の推進」、「国や県の教育改革の動向を踏まえた教育の推進」という特質と使命をもっている。

1 研究主題

確かな動きと自分なりのコツをつかむ児童の育成 ～ 発達の段階に応じた「体づくり」と「ネット型」の系統的な指導 ～

岐阜大学教育学部附属小学校

2 研究主題設定の理由

岐阜県では、幼稚園や小学校の段階から、子供が意欲的に運動やスポーツに取り組み、運動やスポーツが「できるようになる」楽しさを味わうことが、豊かなスポーツライフにつながるものと考えている。また、体育科における「技能」「態度」「思考・判断」の指導内容を確実に身に付けさせるため、発達の段階を踏まえた指導計画、自ら学習できる学習過程や学習形態の工夫、指導と一体化した評価を柱にして授業研究を進めてきた。「確かな学習」を求めて学習指導要領の周知がなされた3年間を経て、昨年度からは「豊かな学習」へと高めていくことを目指し、指導方法の在り方に焦点を当てた授業研究を進めている。

本校では、体育科の本質を「運動の見方・考え方」（*次ページの図表1，2参照）を深めながら、「確かな動き」を身に付けることと考えている。「確かな動き」とは、運動主体者が意図的に繰り返しできる動きであり、それを発展させることが可能な動きである。私たちは、児童の「体を動かしたい」「できるようになりたい」という欲求を充たし、児童自らが「確かな動き」を身に付けられるようにする。また、運動全体のイメージをとらえて、中核となるポイントをつかむという「運動の見方・考え方」を視点にもち、「見通し→試技→振り返り」のサイクルを繰り返しながら、よりよい動きを追求する児童の育成を目指す。見た動きや動きの感じを比べることを追求の手がかりにし、児童一人一人が自分の課題を解決するために、自分なりの追求の仕方を身に付ける。そして、この過程で得られる成就感や達成感、充実感によって、運動のもつ楽しさやできるようになる喜びを味わうことができ、運動に親しむ資質や能力を培うことになると考える。言い換えれば、よりよい動きを求めて「動きのコツをつかむ」（*次ページ参照）過程にこそ、体育科学習の面白さがあると考えているのである。また、児童自らが「自分なりのコツ」をつかみ「確かな動き」を身に付けることができるようにするためには、発達の段階を踏まえ各段階に応じた指導を工夫し、系統的に指導していくことが不可欠となる。

そこで、小学校研究主題「仲間と共に運動の楽しさや喜びを味わう体育授業の創造」を受けた本校を会場とする第2分科会の研究主題を、「確かな動きと自分なりのコツをつかむ児童の育成」と設定し、小学校の「体づくり運動」と「ネット型ゲーム～ボール運動」の領域において、「発達の段階に応じた系統的な指導の在り方」を明らかにする。

3 研究の仮説

小学校の「体づくり運動」と「ネット型ゲーム～ボール運動」の領域において、「運動の見方・考え方」に照らしながら、発達の段階を踏まえた系統的な教材を開発するとともに、各学年の綿密な単元指導計画を作成して、児童自らが自分なりの動きのコツをつかむことができるように学習活動を工夫し、児童一人一人に応じた指導に対応した評価を実施することで、児童は運動自体のもつ楽しさやできるようになる喜びを味わうことができる。

<図表1> 体づくり運動（巧みな動きづくり）における「運動の見方・考え方」

発達の段階 見方・考え方	低学年 / 中学年 / 高学年
運動の全体	全体のリズム … 一人一人がつくる自分なりのリズム ・運動の全体（動きや姿）を感覚的な擬態語（リズム言葉）でとらえたもの
部分の動き	中核となる部分の動きに関するポイント タイミング、スピード、バランス、コントロール等の身体操作
動きを支える要素	部分の動きを支える要素 (各部位の様子や動かし方)

<図表2> ネット型ゲーム～ボール運動における「運動の見方・考え方」

発達の段階 見方・考え方	中学年 / 高学年
運動の全体	ゲームにおける得点までのイメージ(攻撃のリズム・バランスよい広がり) ・1本目「受ける(→上げる→レシーブ)」～2本目「つなぐ(→整える→トス)」～3本目「返す(→攻める→スパイク)」という三本返球→三段攻撃のリズム ・ポジショニング等のコート上のバランス
部分の動き	ボールの動き(ボール運び)に伴う状況判断(約束事)の観点 「何を」 → 「どこへ」 → 「いつ」 (プレーの選択) (スペースへの意識) (タイミングへの意識)
動きを支える要素	位置関係
	ネットと自分の位置/コート内の味方との位置/相手に対するコート内の位置
	ボール操作や身体操作
	自分の技能の把握/直接的な相手の技能の把握/コート内の他者の技能の把握

*「動きのコツをつかむ」… 目指す動きの要領を、体の感じを通して了承すること。
動きを身に付けた際の手応えとなる。

4 研究内容

(1) 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

① 巧みな動きのコツを身に付ける「体づくり運動」の系統的な指導の在り方

小学校学習指導要領解説には、高学年の内容の取扱いとして「体力を高める運動については体の柔らかさ及び巧みな動きを高めることに重点を置いて指導するものとする。」とされている。

そこで、本校は「巧みな動きを高めるための運動」を特に重視し、人や物の動きに対応してタイミングよく動くことを中心とした運動を取り上げ、対戦型の教材を開発する試みを行うこととした。また、中学年の「多様な動きをつくる運動」においても、「用具を操作する運動」「基本的な動きを組み合わせる運動」を中心に、高学年への発展を考慮した教材化を図る。

② 発達の段階と実態を踏まえた「ネット型ゲーム～ボール運動」の開発と系統的な指導の在り方

本校では、小学校学習指導要領に示されたボール運動領域の内容の呼称が「バレーボール型」から「ネット型」へと変更されたことに伴って、指導すべき内容や方法を改めて見つめ直し、「ネットを挟んで返し合うこと」（ラリーの応酬）や「ネットを隔てた攻防によって勝敗を競うこと」を、全ての子が楽しめるようにすることこそが大切であると考えた。

中学校の「バレーボール」（球技）への発展を考慮しながら、「ネット型」における中学年のゲーム～高学年のボール運動の系統性や身に付けさせたい力を明らかにし、小学校での教材化や指導の在り方を工夫していこうと考えたのである。

そこで、4年生～5年生～6年生と成長する児童に対する3年間の継続的な実践研究として、3本返球（～3段攻撃）のリズムを大切に「ゲームづくり」を行い、1本目「受ける（→上げる→レシーブ）」～2本目「つなぐ（→整える→トス）」～3本目「返す（→攻める→スパイク）」のそれぞれの動きとそのコツ（含：状況判断）を身に付けることを目指すこととした。

（2）全ての児童に運動ができる楽しさを味わわせる教材・教具の開発

① 体づくり運動における「ふぞくぼう」の活用

スポンジ状の筒に塩ビ管を挿して柄を付けた棒状の教具「ふぞくぼう」を作り、竹刀・バット・ラケット等の棒状の用具操作や、タイミングのよい素早い身体操作等を高めるための「体づくり運動」を考えてきたのである。こうして身に付けた巧みな動きのコツは、中学校での「武道」や「球技」における技能や局面における攻防にも生かされていくものとする。当然、「学び方」としての「体力の高め方」は、中学校の「体づくり運動」領域へと発展させていく。

中学年は、体の基本的な動きを総合的に身に付けるとともに、それらを組み合わせた動きを身に付けることをねらいとする。4年生では、「用具を操作する運動」を中心にしながら、二つの用具を組み合わせたり、「体を移動する運動」と組み合わせたりする運動として、「ふぞくぼう」と様々なボールを用い、タイミングよく打ったり、叩いて弾ませたり、ドリブルで運んだりするような「多様な動き」を身に付けられるようにする。

5年生は、棒を引いたり、押ししたりする力強い動きと組み合わせ、人や物の動きに対応するタイミングやバランスのよい動き等の「巧みな動き」を高めることができるようにする。その発展として、6年生は、より自由度を高めるような教材化を図る。互いに両手首と両膝に的を付けた2人が対峙し、「ふぞくぼう」を使って相手の的を落とし合うようにして、人の動きに対応する素早さやタイミングのよさ等の「巧みな動き」をより一層高めることができるようにする。

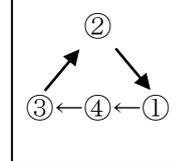


② 3本返球～3段攻撃のための動きのコツを身に付ける「ふぞくっ子バレー」の開発

4年生では、児童一人一人が、基礎的・基本的な技能等を楽しく身に付けられるようなネット型ゲームを開発し、その実践の記録をまとめることとした。1本目や2本目に「キャッチ・スロー」を取り入れ、相手コートに返す場面のサーブと3本目のみを弾いて返す「ネット型ゲーム」を創り出す。

5年生では、1本目に「キャッチ・スロー」を取り入れ、2本目を両手で弾いてつなぎ、3本目は両手や片手で返す「ネット型ボール運動」を確立する。その発展としての6年生では、1本目に「キャッチ・

運動量の確保（プレー機会の保障）可能なローテーション



パス（自分で投げ上げて両手で弾く）」を取り入れ、2本目を両手で弾いて整え、3本目を片手で強く返す（⇨ブロックも含めた守備）形の「ネット型ボール運動」を創り出す。5、6年のいずれの場合も、相手コートへの返球場面となるサーブと3本目を同様に指導し、動きのコツをつかむことができるようにする。



（3）動きのコツを身に付けさせる指導と評価

① 巧みな動きのコツを身に付けさせる「体づくり運動」の指導と評価

児童には、よりよい動きを目指して運動（試技）し、そのときの「感じ」を振り返りながら、自分なりのコツをつかむように指導をする。具体的には、「何を意識していたか」「どんな感じだったか」と声をかけるようにして、「見通し→試技→振り返り」というサイクルで動きやコツを身に付けるように指導する。観察者に対しては「どこを見るのか」をはっきりさせ、自分の動きと比べながら見るようにも指導し、「観察→助言」のサイクルを繰り返しながら、試技者となったときの自分の動きを高めるための見通しももたせる。

② 状況判断と作戦（約束事）を身に付けさせる「ネット型ボール運動」の指導と評価

導入時の課題提示では、3本目の動きが2本目の動きと密接に関連していることを、VTRで確認するようにし、攻撃するためのつなぎの動きを大切にしよう指導する。ゲーム中には「何を」や「どこへ」を視点にして、コート内のポジショニングや2本目の球筋をもとに、返し方や返す場所が適切であったかを考えるようにする。「返せ！（ミスをしないように慎重に返す）」or「ねらえ！（相手コートの空いているところへねらう）」or「打て！（強く返すために打つ）」の判断を、声をかけ合ってできるようにする。さらに、2本目役の個人技能に照らしたトスの高さや、ブロックをつけるかどうかの判断など、チームとしての約束事（作戦）を決めたり、声をかけ合ったりすることができるようにする。

また、目指す動きや的確な判断ができていた時には認め価値付け、そういった判断や動きが相手チームから得点を取ることや勝利につながっていることを感じられるようにする。

5 研究実践

（1）巧みな動きのコツを身に付ける「体づくり運動」

① 4年生「ふぞくぼうを使って」（ボール打ち&ボール運び）

中学年では、体の基本的な動きを総合的に身に付けるために、動きのレパトリーを増やしたり、価値ある動きを取り上げて動きの質を高めたりすることを考え、確かな動きやコツをつかむための「動き見つけ→動きの追求→動きの活用」という学習過程を仕組むようにした。追求の場面において、運動を行っている試技者にはできるだけ短い言葉で動きの感じをとらえることができるような声かけを適宜行うようにし、試技が終わった後には自分の動きを振り返って、次への見通しをもてるような言葉がけを行っていく。観察者には、試技者の動きをしっかりと観察して助言ができるように声をかけるとともに、試技者の動きから自分の動きへの見通しをもつようにも声をかけ、手掛かりをもつことができるようにした。



単位時間（第2時）の導入では、ソフトバレーボールを「ふぞくぼう」を使っているいろいろな方法で運ぶようにした。ホッケーのように打つ、2本のぼうで挟む、ぼうで押す、ボールを弾ませてドリブルするなど、様々な「運ぶ動き」を引き出すことができた。

授業の中盤では、その中から置いてあるボールを「ふぞくぼう」を使って弾ませる動きを、価値ある動きとして取り上げ、ボールを上手く弾ませるために「スナップを使う」「バンって1回強く打つと弾む～そこからトントンって感じでやる」「ト・ト・ト・トン・トン・トーンって感じで力を入れずにやる」「ボールの中心を打つ」「バンって打ったらサッと引く」など、たくさんのコツを導き出した。

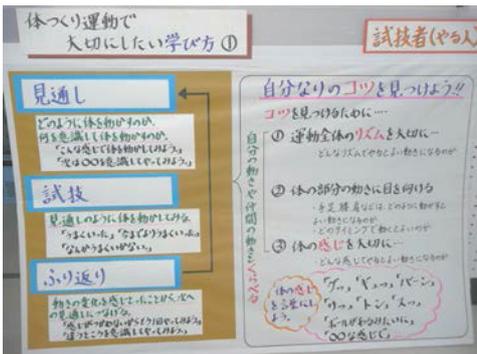
後半は、いろいろなボールをフロアに置き、それらを段ボールに入れるゲームを行った。児童は、どんなボールでも「追求」で獲得したコツを生かすとよいことを感じながら活動するとともに、ボールによって弾み方が違うことに気付いてボールに合ったバウンドのさせ方のコツを探り出そうとしていった。

このように、中学年「多様な動きを創る運動」では「動き見つけ→動きの追求→動きの活用」と学習過程を工夫したことで、巧みさにつながる動きのコツを身に付けさせることができた。

② 5年生「引いて叩いて」（対戦型 棒引き&的落とし）

この単元においては、まず、棒を押ししたり引いたりしてバランスを崩し合う運動を行い、相手のバランスを崩したり、自分のバランスを保ったりしながら、力強い動きやタイミングのよい動き身に付けるようにした。次に、棒を引いたり押ししたりしながら、棒を持たない方の手で相手の棒に付いている的を落とし合う運動を行い、相手の動きに応じて棒を引いてかわし、素早く踏み込んで的を素早く叩き落とす動きを身に付けていった。最後に、それらの動きを生かして「ふぞくぼう」での的落とし合う運動を行い、相手の攻撃を「ふぞくぼう」で防いだり、スナップを利かせて打ち込んだり、棒を引きながら打ったりする動きを身に付けるようにした。

3 本時の目標（2/3）	
○運動：「ふぞくぼう」で床にあるソフトバレーボールを弾ませ、ドリブルして運ぶ動きを身に付けることができる。 ●態度：仲間と教え合い、励まし合いながら、楽しく取り組むことができる。 ◎思考・判断：ソフトバレーボールを弾ませ、ドリブルをする動きを追求する中で、仲間の動きを真似したり、自分なりに動き	
4 本時の展開	
学習活動	研究内容に関わって
【準備・準備運動】 ○グループごとで協力して準備、準備運動をする。 【運動Ⅰ】（多様1） ○「ふぞくぼう」でソフトバレーボールをいろいろな方法で運ぶ運動を行う。 ・「ふぞくぼう」でボールを転がして運ぶ。 ・「ふぞくぼう」でボールを打って運ぶ。 ・2つの「ふぞくぼう」でボールを挟んで運ぶ。 【全体研習会】 ○本時の課題を確認する。 ソフトバレーボールをふぞく棒でドリブルして運ぶコツを見つこう。	研究内容2—（1）に関わって <多様1> 運動Ⅰ・・・ボールを運び、段ボールの箱に入れる様々な動きができるようになる。 <典型> 運動Ⅰ・・・ において、典型として取り出された、あるソフトバレーボールを弾ませ、して運ぶ動きを、追求しているよ <多様2> 運動Ⅱ・・・ が出てきたコツや、自分なりのコツながら、大きさや重さの違うボールの組むことができるようにする。 の違うボールを弾ませ、ドリブルして遊ぶゲームに取り組むことができるようにする。
【運動Ⅱ】（典型） ○取り上げた動きを追求しながら運動に取り組む。 【中間研究会】 ○見つけたコツやリズムを交流する。 【運動Ⅲ】（多様2） ○見つけたコツやリズムを生かしながら運動に取り組む。（違う種類のボールにも挑戦） 【運動Ⅳ（ゲーム化）】（多様2） ○身に付けた動きを確認しながら、ゲームに取り組む。 <ゲーム内容> ・フロアにいろいろなボールを転がしておき、中央において各グループの箱にドリブルして入れる。時間内にボールを入れた数を競い合う。	研究内容3—（2）に関わって <中間研究会> ①目指す動き ②取り上げた動き ③取り上げた動き ④見つけた動き ⑤見つけた動き ⑥見つけた動き ⑦見つけた動き ⑧見つけた動き ⑨見つけた動き ⑩見つけた動き ⑪見つけた動き ⑫見つけた動き ⑬見つけた動き ⑭見つけた動き ⑮見つけた動き ⑯見つけた動き ⑰見つけた動き ⑱見つけた動き ⑲見つけた動き ⑳見つけた動き
【全体反省会】 ○できるよくなった運動や動きのコツを交流する。 ○本時の動きを成果と練習の過程とを合わせて、本時の学習について振り返りをする。	研究内容3—（3）に関わって <中間研究会> ①目指す動き ②取り上げた動き ③取り上げた動き ④見つけた動き ⑤見つけた動き ⑥見つけた動き ⑦見つけた動き ⑧見つけた動き ⑨見つけた動き ⑩見つけた動き ⑪見つけた動き ⑫見つけた動き ⑬見つけた動き ⑭見つけた動き ⑮見つけた動き ⑯見つけた動き ⑰見つけた動き ⑱見つけた動き ⑲見つけた動き ⑳見つけた動き



ここでは、「見通し→試技→振り返り」のサイクルを大切にし、課題提示においては、全員に見通しをもたせるために示範をし、そこからどんなことに気を付けたらよいかを考えさせた。全員に見通しをもたせてから活動させたため、意欲的に取り組むことができた。また、試技をした結果どうだったのかを問いかけるようにしたことで、児童は自分の活動を振り返り、つかんだコツや運動した感じを明確にして、「次はこうやってみよう」と、次の試技への見通しをもつことができるようになっていった。見通しをもたせることができたことで、児童は自ら動きの追求を進めることができた。

③ 6年生「叩いて落として」(対戦型 相手の体に付けた的落とし)

本単元では、まず、この攻防(運動)で必要な力を考えさせ、巧みな動きを高めるための必然性をもたせるようにした。次に、素早く反応して打ち込む動きを身に付けさせ、最後に相手の動きに応じて、素早く正確に打ったり防いだりする動きを身に付けさせるために、どうしたらよいかを考えさせた。試技者に対し「何を意識していたのか」「どんな感じでやったのか」など、運動した時の「感じ」を言語化するように言葉がけを行った。そのことによって、児童は試技した結果を、自分の体と対話しながら深く振り返るようになり、次の試技にも感覚を大切にしながら運動をすることができるようになった。中間研究会でも「感じ」を大切にした発表をさせ、その「感じ」をみんなで共有できるように、全員で同じ動きを行った。今までの自分の動きとの違いを感じ、「このコツを使ってやるとよくなった」と言う子も何人もいた。



(2) 発達の段階と実態を踏まえた「ネット型ゲーム～ボール運動」

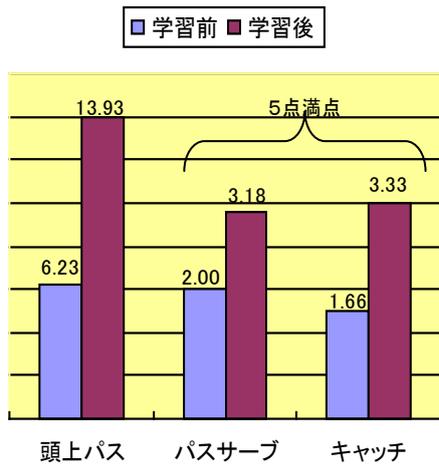
① 4年生「ふぞくっ子バレーⅠ」

みんなでラリーの応酬を楽しむゲームにするために単位時間のねらいを焦点化するとともに、「課題提示～練習の設定～ゲーム中の声かけ～評価」というように一貫性のあるように指導を工夫した。相手から飛んできたボールの方向や位置に応じて、後ろの3人は「自分が捕るのか」「仲間に任せて3本目の準備をするのか」の判断をし、その動き出しを素早くするための「はい!」「オーライ!」「頼む!」などの声を出すことを徹底させた。2本目役のポジションでは、1本目のスローで上がってきたボールの方向や位置に応じて、3本目が打ちやすいネット際への山ボールを上げられるように、上げる方向を即座に判断して、そちらに体を向けて額の前でキャッチすることを、2本目役の要点として意識させた。また、ボールデッド時を利用し「体の向きを変えてから捕っていたか」「どちらに上げた方がよかったか」等を、チーム全体で振り返るようにした。そして、3本目を相手コートへ確実に返すために、2本目の投げ上げたボールに合わせて、タイミングよく走り込むことができるようにし、チーム内で「今!」「行け!」等の声をかけ合うことができるように言葉がけを行った。

次ページのグラフは、単元の導入時と終了時に、児童一人一人に行った技能検査の結果である。「頭上パス」の連続回数、「パスサーブ」の距離を得点化した数(5点満点)、コート内に投げ入れた5球中に落とさず「キャッチ」できた回数について、そ



技能検査の平均値



それぞれの平均値を出したものである。ゲーム中心の学習であったが、3種類ともにほぼ倍増したと言える。学習前に技能検査が0点で、唯一「バレーが嫌い」と答えていた女児A子が、「ふぞくっ子バレーVer. 1」には笑顔で取り組み、学習後には「頭上パス」3回、「パスサーブ」2点、「キャッチ」1回と技能検査の結果を向上させ、「バレーは楽しい」と答えるようになったことも特筆すべきことである。

基礎技能を高める仕組として、1本目は相手からのボールの落下点に入る動き、2本目は味方の投げたボールを次に上げる方向に体を向けて額の前で両手でつかむ動き、3本目はボールを両手ではじくという動きを繰り返すようにしたことで、ゲームを通して児童一人一人の技能が高まった。

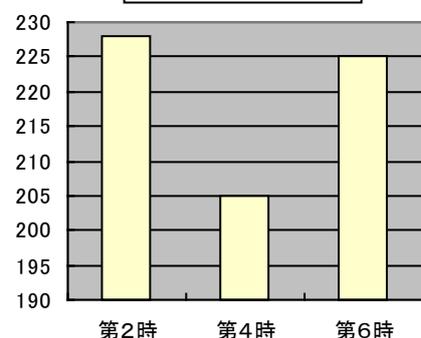
② 5年生「ふぞくっ子バレーⅡ」

5年生の「ふぞくっ子バレーⅡ」では、ミスによる失点のゲームではなく、意図的な攻撃による得点で勝利するゲームの楽しさを味わうことができるように指導を工夫した。チーム内の連係プレーによって三段攻撃が成り立つように、ボールを両手で弾いたり片手で打ったりする操作や、素早く適切な場所に移動する動きを身に付け、相手の捕りにくいようなボールを返し合うゲームを目指したのである。運動全体のリズムを「キャッチ・フワッ→ポーン→バーン」とし、得点までのイメージを全体で共有したうえで、「キャッチ・フワッ」でボールを落とさないようにボールの正面や落下点に素早く移動してセッターに整えやすいボールを上げること、2本目の「ポーン」では3本目の打ちやすいボールをオーバーハンドパスで送ること、3本目「バーン」は相手の捕りにくいボールを打ち返すことを「技能」面の目標とした。



単元序盤の第2時には、サービスミスや返球ミス等の失点により点数が積み上げられ総得点の多いゲームになっていたが、1～3本目のそれぞれの動きが高まるとラリーが続くようになって総得点の少ないゲームとなった。その後、ネット際やコート奥へとねらって返す攻撃的なゲームになって、再び総得点の多いゲームへと変容し、勝利に向かってゲームを進める中で、「相手コートに落とすぞ！」⇔「落とすものか！」のやり取りを楽しむようになっていった。

総得点の推移



「思考・判断」の面では、仲間とボールをつないだりネットを挟んだラリーの応酬をしたりするためのルールを工夫し、自分のチームのコートポジションごとの攻め方や守り方をチームの特徴に応じた作戦として考えることを目標とした。2本目（トス）を「高めに上げる」（ポーン）か「小さく上げる」（ポン）かについて、チー



ムの特徴（各フォーメーションの個人の運動能力や体格等）から考え、「片手ではアウトになりやすいから3本目は両手で返そう」「ポンの時は近くで準備をしないと間に合わないから気をつけよう」など、自分たちの姿と作戦を結び付ける姿も見られるようになった。

また、ネット型のゲームは、プレー中にかげ合う瞬時の声に加えて得失点後のボールデッド時にも仲間と声をかけ合うことができ、その場を利用してつながりを深めたりプレーを振り返ったりすることができるゲームでもあり、仲間との相互援助活動は「勝ちたい、うまくなりしたい」と思う児童にとっての必然となった。

6 研究の成果と課題

（1）成果

- ・発達の段階を踏まえた系統的な教材を開発するとともに、各学年の綿密な単元指導計画を作成したことで、児童一人一人に運動の楽しさを味わわせることができた。
- ・運動全体のイメージをとらえて、中核となるポイントをつかむという「運動の見方・考え方」を視点としてもたせ、「見通し」→「試技」→「振り返り」のサイクルを児童に伝え、活動の仕方を明確にしていくことで、コツを探して意欲的に活動するようになった。
- ・動きの「感じ」を大切に言葉かけを行うことで、児童は自分自身の体と対話しながら運動に取り組み、自分なりのコツをつかみながら活動することができた。
- ・ネット型ゲーム～ボール運動に「キャッチ・スロー」を取り入れることの有効性を実感することができた。
- ・児童一人一人の運動量を確保しながら、対戦型の活動やゲームの中で基礎的・基本的な技能を楽しく身に付ける仕組みを作ることができた。

（2）課題

- ・「体づくり運動」において、教師から教えることと、活動の中で児童自身につかませるべきことを、より一層整理する必要がある。
- ・「体づくり運動」領域においては、柔軟性や筋力・持久力などの高め方についても、指導の在り方を考えていきたい。
- ・高学年「ソフトバレーボール」の実践を積み重ね、中学校「バレーボール」へとつながるような場の設定や「キャッチ・スロー」の扱い等を明らかにし、検証していく必要がある。
- ・系統性を重視した指導計画を作成したのだが、この計画で実践した児童が中学～高校と進んで、生涯にわたってどのように運動に関わっていくのか、今後の経過を観察してみたい。
- ・よりよい学習集団の育て方や適切な評価の在り方についても、考えていきたい。

<第3分科会>

岐阜市立長良西小学校

【研究主題】

よりよい動きを求め続ける子

【日 程】

9:00 9:35 10:20 11:00 11:45 13:00 14:15 14:50 15:00

受付	公開授業①	移動等	取組 体力向上を図る	移動等	公開授業②	昼食	研究発表	研究協議	指導講評	閉会式
----	-------	-----	---------------	-----	-------	----	------	------	------	-----

【授業案内】

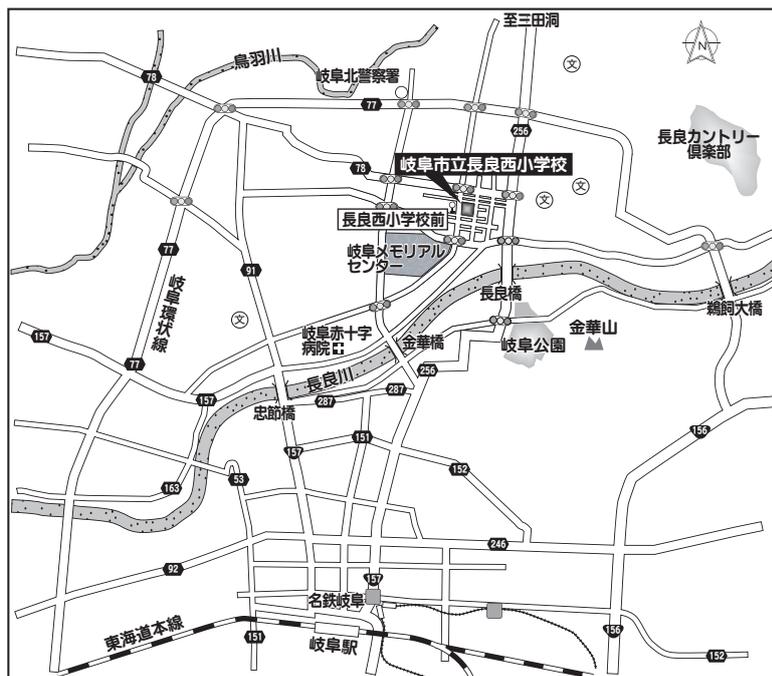
- 公開授業① 第1学年「跳び箱ランド」跳び箱を使った運動遊び 体育館
 ※長良中学校体育館
 第4学年「西っ子ベースボール」ベースボール型 運動場(雨天時：体育館)
- 公開授業② 第5学年「かかえ込み跳び」跳び箱運動 体育館

【会場案内】

岐阜市立
長良西小学校

〒502-0832
岐阜市千代田町
2丁目1番地
<アクセス>

- JR岐阜駅下車 バス20分
- 名鉄岐阜駅下車 バス20分
- 岐阜バス(松籟団地行 三田洞団地行 等)
長良ヶ丘下車
徒歩5分



【学校の概要】

岐阜市立長良西小学校



所在地 〒502-0832 岐阜市千代田町2丁目1番地

校長 和田 満

児童数 753名（25学級）

連絡先 TEL 058-232-5222 FAX 058-232-5227

E-mail gisyo34@nagara-w-e.gifu-gif.ed.jp

URL <http://cms.gifu-gif.ed.jp/nagaranishi-e/>

【学校の教育目標】

未来にはばたく西っ子

たくましく ゆたかに たしかに

【学校紹介】

本校は、昭和30年度に創設され、同35年度、第1回研究発表会を行った。その後、4カ年を通して、『創造の教育』をテーマに研究を行った。同41年度に岐阜大学教育学部教育実習協力校に指定された。同42年度から45年度には、『学習の力動化をめざして』、同46年度から50年度には、『生きてはたらく力をつけるために』、同52年度から56年度には、『生きてはたらく力を身につけさせるために』、同58年度には、教育公開『一人ひとりを見すえはぐくむ授業の確立』を研究主題とし、授業研究を行った。昭和61年度から本年度（平成26年度）まで一貫して、『自ら学ぶ力を身につけた子をめざして』を研究主題とし授業研究を行い、本年度の教育公開で27回を数えるまでになった。

1 研究主題

よりよい動きを求め続ける子

岐阜市立長良西小学校

2 研究主題設定の理由

本校の新体力テストにおけるアンケートでは、以下のような結果が得られた。

右記のことから、「運動に親しんでいる児童」と、「ほとんど運動しない児童」がいることが分かり、運動の二極化傾向がみられる結果となった。私たちは全ての子に「運動は楽しい」という経験を十分味わわせることで、「運動好きな子」を一人でも多く増やし、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てていきたいと考える。

運動・スポーツの実施状況	
(対象:H25年度3年生～6年生504名)	
・週3日以上	: 28% (143名)
・週1～2日	: 51% (259名)
・月1～3日	: 9% (47名)
・しない	: 11% (55名)

体育科教育では、「動く楽しさ、伸びる楽しさ、集う楽しさ、発見する楽しさ」を味わうことができる「楽しい体育」を授業づくりの基盤として、実践を充実させていきたい。楽しい体育の授業を進めるにあたっては、「子供たちが、自分の力に合っためあてをもち、練習方法や仲間との活動を工夫し、動きを高めていく過程」を大切に実践してきた。その中で、子供たちは、どうすれば動きを高めることができるかを考えて取り組み、そこで得られた自信は、その子なりの運動のコツや学び方として身に付き、次の学習に生かされたり、体を動かす機会の増加につながったりしていくことが分かった。

そこで、これまでの授業実践と子供の実態を踏まえ、テーマを「よりよい動きを求め続ける子」と設定した。

3 研究の仮説

小学校の「器械運動」と「ゲーム ベースボール型」において、基礎的な身体感覚や技能を磨きながら、各運動の身に付けたい動きを明確にした系統性のある単元指導計画を作成し、学習環境や動き言葉を活用しながら、動きをつかむ力を高めて学習に取り組んでいくことで、子供たちはよりよい動きを求め続け、運動の楽しさや喜びを味わうことができる。

4 研究内容

(1) 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

① 身に付けたい動きを明確にした指導計画の作成

学習指導要領の各学年における各領域の内容から、身に付けたい動きを吟味し、系統的・発展的に動きを身に付けていくことができるように指導計画を作成する。

ア 器械運動における指導計画の作成

学習指導要領で各学年に例示されている技は、系統性や発展性を踏まえて示されている。そのため、一つ一つの技を、各学年において確実に身に付けていくことが大切である。

本校では、器械運動の中から、跳び箱運動に重点を置いて研究を進める。そして、回転系・

繰り返し系の中から、学習指導要領の例示にある技を中心に学習を進める。単元を構成する際には、例示にある基本的な技、及び発展技の一つ一つを分析し、中核となる技能を基にして、系統的・発展的に学習を進めることができるようにする。

イ ベースボール型における指導計画の作成

ベースボール型は、チェンジを挟んで攻守が入れ替わり、相手チームよりも早くベースを取ることで点を取ったり、点を防いだりする運動である。本校では、基礎的な技能（捕・投・打・走）を高めるとともに、攻撃における戦術（打った後に少しでも先の塁に進むことができるようにするための作戦を立てること）や、守備における戦術（相手の進塁を防ぐために、ポジショニングや、どこに投げるかを工夫して作戦を立てること）から研究を進める。

② 単元指導計画に位置付ける準備運動の在り方

主運動につながる準備運動を単元を通して取り入れ、基礎的な身体感覚や技能を磨くことができるようにする。また、準備運動の中でも、複数の運動を扱ったり、ゲーム化したりすることで、子供たちが自ら進んで意欲的に取り組めるようにし、うまくなる喜びを味わえるようにする。そして、その動きの高まりや回数の伸びを認め価値付けていくことで、より追求意欲を高めて取り組むことができるようにする。

ア 器械運動における準備運動の在り方

器械運動においては、目指す技を身に付けていくために必要な、基礎的な身体感覚を磨いていくことが大切である。そこで、器械・器具を使った運動遊びの動きなどを各単元において準備運動として取り入れ、繰り返し取り組んでいくことで、高めていく。

イ ベースボール型における準備運動の在り方

ベースボール型は、ゲームを行う上で個人の技能も必要となる。また、中学校でソフトボールの学習をすることを見据えると、基礎的な技能（捕・投・打・走）を各学年において段階的に高めていくことが大切である。そこで、ベースボール型における準備運動に、個人の技能を高めるための練習を取り入れていく。

（２）技能の向上に結び付く、思考・判断を高める方法の工夫

① 動きをつかむ力を高める学習環境

動きを高めていくためには、動きを客観的につかみ、動きの高まりや、課題を明らかにし、どうしたら目指す動きまで高めることができるかをよく考えて、練習に取り組んでいくことが大切であると考え。そこで、動きを客観的につかむことができる以下のような学習環境を設定する。

【動きをつかむ力を高める学習環境】

学習活動	学習環境
学習内容や方法を 確認する場面	・VTR ・連続写真 ・ゲーム記録 ・運動の絵図 ・コート図 ・示範（子供）
活動場面	・追っかけ再生（VTR） ・ゲーム記録 ・鏡 ・運動の絵図 ・作戦ボード ・段階表 ・お手玉やゴムひも、シール、ラインなど
まとめの場面	・結果表 ・前時までのVTR ・段階表 ・運動の絵図

ア 器械運動における学習環境

器械運動においては、目指す技や、それができるようになるための技術ポイントを客観的につかみ、確かな見通しをもって歩み出すことができるようにする。また、練習中には、実際の動きと、動いたときの感覚のズレを修正しながら動きを高めていくことができるようにするために、客観的に自分の動きをつかむことができる学習環境を設定する。

イ ベースボール型における学習環境

ベースボール型においては、攻撃や守備の仕方を中心に学習を進める。その際、ボールとベースの位置関係をとらえやすくするための学習環境を活用しながら動き方をつかみ、作戦を立てることができるようにする。また、個人の技能においても、ゲームや練習の中で動き方をつかみ、意識できるように学習環境を設定する。

② 動きをつかむ力を高める動き言葉の活用

子供たちが、動きを高めていくために、自分の動きや仲間の動きをつかんで分析的に仲間に伝えようとする時、時間がかかるだけでなく、相手に伝わりにくいことがある。

一方、子供たちの普段の生活の中で体を動かすときの様子を見てみると、擬音語や擬態語を無意識で使っている姿を多く見かける。つまり、小学校の発達段階では、動き全体のイメージや、動いたときの感覚をできるだけ端的で分かりやすい言葉（以下「動き言葉」と示す）にして活用しながら学習することで、子供たちにとって身近で分かりやすく、動きの高まりに有効に働くのではないかと考える。そこで、右のように動き言葉を分類整理し、子供たちが意識的に「動き言葉」を活用しながら、単元を歩んでいくことができるようにする。

【動き言葉の分類】

		「動き言葉」の分類	
		◆表す内容（上）	使用例（下）
イメージ	比喩	◆動き全体の特徴、体の形状	「ダンゴムシのように」（前転がり） 「プロペラのように」（腕立て横跳び越し）
	全体の動き	◆動きのリズム	「イチ・ニー・サン」（打つ動き） 「パス アンド ゴー」（バスケットボール）
感覚	部分の動き	力 タイミング	◆力の強さ、最適な瞬間 「手でグッと押して」（着手） 「タ タ タンッ」（走り高跳び）
		空間	◆空間の広さ 「フーワット」（跳び前転）
	スピード 時間	◆速さの程度、時間の長さ 「サッ」（体を移動する） 「パーン」（足を振り上げる）	

ア 器械運動における動き言葉の活用

器械運動では、技の全体や部分の動き、身体の部位の動きを「動き言葉」で表し、意識的に活用しながら学習を進めていくことができるようにする。まず、学習内容や方法を確認する場面においては、目指す技や技を身に付けるためのポイントなどを「動き言葉」によって客観的につかめるようにする。そして、練習の場においては、実際の動きと、動いたときの感覚を仲間と「動き言葉」を活用しながら伝え合い、動きを高めていくことができるようにする。

イ ベースボール型における動き言葉の活用

ベースボール型では、個人の技能を高めながら、戦術を中心に学習していく。そこで、的を見て、ボールを頭の後ろに引きつけ、反対の足を前に出しながら手を思い切り振り下ろす動作（投動作）を「パッ ギュー プン」という言葉でつかむ等、準備運動やゲームの中で意識的に「動き言葉」を活用し、個人の技能を高めていくことができるようにする。

5 研究実践

(1)運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

① 身に付けたい動きを明確にした、指導計画の作成

ア 器械運動における指導計画の作成

第3学年の跳び箱運動では、繰り返し系の技に絞って学習を展開し、第4学年で回転系の技を中心に学習することにした。

第3学年では、基本的な繰り返し系の技として、「開脚跳び」が学習指導要領で例示されている。「開脚跳び」は、助走から両足で踏み切って着手し、足を左右に開いて跳び箱を跳び越す技である。子供たちは、「開脚跳び」ができるようになると、さらに高い段を跳び越したいという意欲が生まれる。しかし、跳び箱運動においては、「跳び越せるようになった一定の高さで突き手を行い、安定した第2空中局面から着地を止める動き」を身に付けていくことが大切であると考えられる。この動きは、学習指導要領で発展技として例示されている、「大きな開脚跳び」の動きにつながるととらえ、単元指導計画の中に「大きな開脚跳び」を取り入れることにした。そして、「開脚跳び」から「大きな開脚跳び」に発展していくように単元を構成し、4年生で「回転系」、5・6年生で「繰り返し系」や「回転系」の発展技を学習していくように指導計画を作成した。

<p>2</p> <p>◎助走から踏み切り、足を左右に開いて上から覆いかぶさるように着手し、腕で支持したまま、跳び箱を跳び越すことができる。</p> <p>◎仲間との動きの結果を伝え合い、安全に気をつけながら練習することができる。</p>	 <p>◎リズム言葉 「タツ トン パン ビタッ」 ◎動きを観察する位置・視点 跳び箱の横で、着手の位置を観察（リズム言葉をかけ合いながら）</p> <p>◎技術ポイント 部分「パン」 上から覆いかぶさるように跳び箱の奥で着手する</p> <p>上から手を振り下ろして、「パン」と手を着いて、跳び箱を跳びこそう。</p>	<p>こす</p> <p>◇カエルの飛び打ち</p> 
<p>高める</p> <p>◎助走から踏み切り、足を左右に開いて上から覆いかぶさるように着手したと同時に顔を上げ、両足で着地することができる。</p> <p>◎仲間との動きの結果を伝え合い、安全に気をつけながら練習することができる。</p>	 <p>◎リズム言葉 「タツ トン パン ビタッ」 ◎動きを観察する位置・視点 跳び箱の横や奥で、顔の向きを観察（リズム言葉をかけ合いながら）</p> <p>◎技術ポイント 部分「ビタッ」 着手したら、顔を上げる</p> <p>手を着いたら顔を上げて跳び越し、ビタッと着地しよう。</p>	<p>【確かな見通しから活動】</p> <p>示範から大切なポイントをつかませ、「何に気をつけるとよいのか」そのために、どのように体を動かしたり、どんな感じで動いたらよいか、よいのかに気付くことができるようにする。また、課題をこなすときには、絵図を用いる。</p> <p>【動きを正確にこなすために、VTRの追っかけ再生、速戻写真、運動の絵図、録音表を活用し、活用する】</p>
<p>4</p> <p>◎予備踏み切りの大きな強い両足踏み切りから、足を左右に開いて着手し、跳び箱を跳びこえることができる。</p> <p>◎仲間との動きの結果を伝え合い、安全に気をつけながら練習することができる。</p> <p>◎予備踏み切りのある両</p>	 <p>◎リズム言葉 「スットーン パン ビタッ」 ◎動きを観察する位置・視点 踏み切り箱の横で、予備踏み切りの位置や腰の高さを観察（リズム言葉をかけ合いながら）</p> <p>◎技術ポイント 部分「スットーン」 踏み切りの一歩前を大きくとる</p> <p>「スットーン」の強い踏切で、とびこを大きくとびこそう。</p>	<p>【仲間との見合い戦え合い活動の在り方】</p> <p>「か！お！よ！よ！か！た！よ！」でできていたよ！「線までとべたよ」と仲間の動きを賞賛したり、結果を伝えたりする。さらに、「○○になっていけよ！のめりれど、めり、○○になっていたよ。」と、目指す動き</p>

イ ベ이스ボール型における指導計画の作成

ベースボール型に必要な「捕・投・打・走」の動きの中で、小さなボールを手で捕ったり、用具を操作してボールを打ったりすることは、子供たちにとって難しい動きである。しかし、「打つ」技能を身に付けることは、子供たちにとって大きな喜びにもつながる。また、ベースボール型は、守備の仕方が複雑であるために、打球が飛んだときやボールを保持したときに、どうすればよいか分かるようになることが大切であると考えられる。そこで、ベースボール型の出合いとなる中学年においては、「打つ」技能や「捕る」技能を高めながら、簡単なルールのもとで、「次の塁をとるか、とられまいかの作戦」を学習していくことができるような指導計画を作成した。

中学年で、個人の技能を高めたり、簡単な戦術を学習したりしたことで、子供たちは「打つ」喜びを味わうと共に、仲間と連携して失点を減らすための守備における戦術学習を展開することができた。

たボールを打ったり、捕ったりするゲームができる。	ねらい。 試しゲームを行い、西の子ベースボールのルールを知り、自分のめあてをもつことができる。	ねらい。 ティーの上にあるボールをよく見て打ち、得点をとるバッティングゲームができる。	ねらい。 ボールの正面に移動して捕球し、相手の進塁を防ぐバッティングゲームができる。	ねらい。 相手の進塁を防ぐために、ポジションを工夫するゲームをすることができる。 【守備に注目したゲーム】	ねらい。 進塁の仕方を工夫したり、打つ方向を変えて打ったりして、点を取り合うゲームをすることができる。 【攻撃に注目したゲーム】	ねらい。 これまでの学習を生かして、チームで戦術を立ててゲームをすることができる。
① バッティングゲーム I	【基礎技能】 ○リズム 言葉： 「イチ ニー パーン」 ○リズム 言葉の 内容と ポイント ◇「イチ」でバットのミートしたい部分を合わせる。 ◇「ニー」で、バックスイングをとる。 ◇「パーン」で、最後まで振りきる。	「打 つ」 ○リズム 言葉： 「グッ パシッ」「ピタッ パシッ」 ○リズム 言葉の 内容と ポイント ◇「グッ」で、腰を落とし指先を下に向けろ。 ◇「パシッ」は、ボールを包み込むよう両手で捕る。 ◇「ピタッ」は、膝下点に体をとめて捕る。	「捕 る」 ○リズム 言葉： 「グーッ」「ピュン」 ○リズム 言葉の 内容と ポイント ◇「グーッ」でボールを腕の後ろまで引き上げる。 ◇「ピュン」で投げたい方向に体を向けて投げる。	「投 げる」 ○リズム 言葉： 「アウト！」 ○リズム 言葉の 内容と ポイント ◇「アウト！」で、ボールを腕の後ろまで引き上げる。 ◇「ピュン」で投げたい方向に体を向けて投げる。	「走 る」 ○リズム 言葉： 「アウト！」 ○リズム 言葉の 内容と ポイント ◇「アウト！」で、ボールを腕の後ろまで引き上げる。 ◇「ピュン」で投げたい方向に体を向けて投げる。	② バッティングゲーム II
【バッティングゲーム】 ○リズム 言葉の 内容と ポイント ◇「打つ」ことに技能の中心を置いたゲーム。 ◇「パーン」でバットを最後まで振り切ると、速くまで飛ばすこと、がでそうた。』		【バッティングゲーム】 ○リズム 言葉の 内容と ポイント ◇「捕る」「止める」ことに、技能の中心を置いたゲーム。 ◇打者は、ベースを駆け抜けることを大切にす。『ボールを体の正面で捕る』と上手くできたよ。』 『打ったら思いっきりベースを駆け抜けよう。』				

② 単元指導計画に位置付ける準備運動の在り方

ア 器械運動における準備運動の在り方

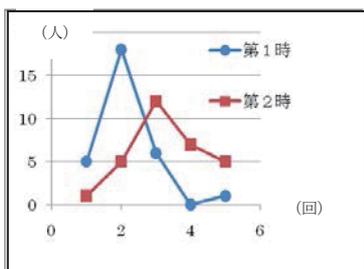
第3学年の跳び箱運動では、「開脚跳び・大きな開脚跳び」を学習した。これら全ての技は、腕支持が基礎的な身体感覚や技能として必要であると考え。そこで、準備運動において、「10秒間連続馬跳び」、「うさぎ跳び」、「カエルの足打ち」を毎時間取り入れ、切り返し系の動きにつながるようにした。どの準備運動でも、大きく手を振り上げてから着手することにこだわることで、上から抱え込むようにして着手し、頭より腰が高く上がった状態で腕支持する感覚や動きを身に付けることもできるようにした。

そして3種類の準備運動を、毎時間回数を競わせたり、授業の中で出来栄の高まりや回数の伸びを認めたりして、価値付けていったことで、子供たちは、準備運動に楽しく取り組み、以下のように感覚や技能が身に付いた。

【カエルの足打ち】



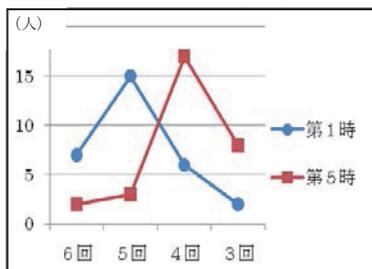
足をたたくことができた回数



【うさぎ跳び】



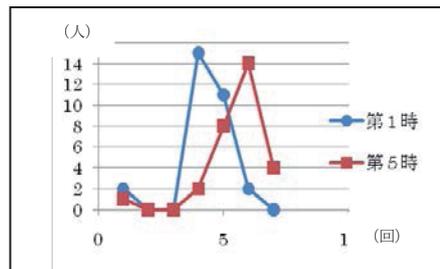
4.5mを何回の跳躍で移動できたか



【10秒間馬跳び】



10秒間で、何回できたか



イ ベースボール型における準備運動の在り方

第4学年の「西っ子ベースボール」の学習では、戦術を取り入れて学習を進めた。しかし、ゲームの様相で学習を進めていくためには、個人の技能が身に付いていることが大切である。そこで、準備運動に、止まったボールを狙った場所に打つ技能を高めるための「バッティングによるストラックアウト」、捕った後、素早く投動作に入る技能を高めるための「ボール回し」、スピードを落とさずにベースを駆け抜ける走り方を高めるための

「ベースランニング」を毎時間取り入れた。また、どの準備運動においても、点数やタイムを競い合いゲーム化したことで、子供たちが自ら進んで意欲的に取り組めるようにし、うまくなる喜びを味わわせることができた。



(2) 技能の向上に結び付く、思考・判断を高める方法の工夫

① 動きをつかむ力を高める学習環境

ア 器械運動における学習環境

目指す姿になるために身に付けさせたい動きは、一瞬の動きが多く、つかみにくい。しかし、目指す姿になるためには、これができるかどうか重要となるため、以下の学習環境を設定し、一瞬の動きを客観的につかむことができるようにした。

【運動の絵図】

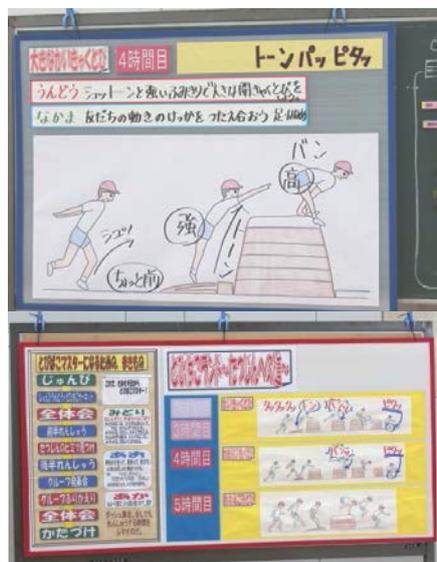
運動の絵図を用いることで、子供たちが初めて出会う技の全体のイメージを、より確かにもったり、できるようになるためのポイントをつかみやすくしたりすることができるのではないかと考えた。そこで、学習内容や方法を確認する場面において、右のような運動の絵図を用い、子供たちが見つけた「ポイント」や「動いたときの感覚」を記入していった。また、単元の見通しをもたせるボードにも目指す姿の絵図を載せ、掲示して、常に子供たちの目にふれることができるようにした。

子供たちは、絵図の前に行って、動き方を話したり、仲間の姿と絵図の姿を比較しながら課題を見つけたりし、動きを高めていく姿が見られた。

【支持棒】

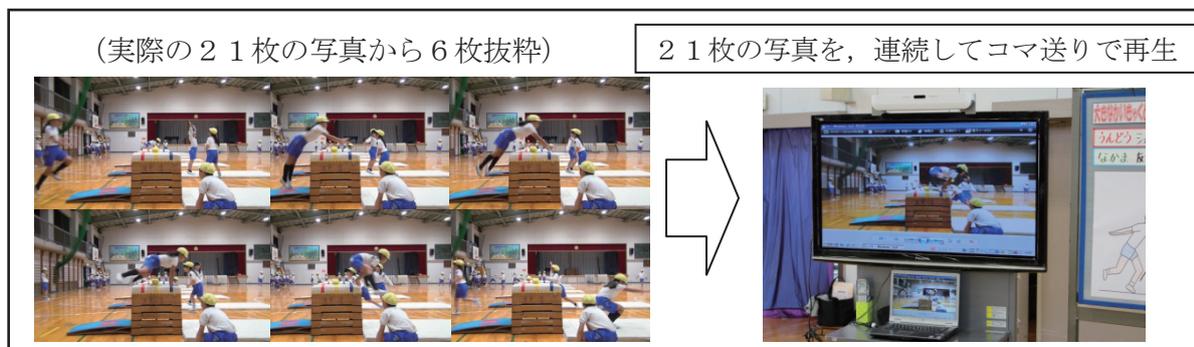
跳び箱の横に立って支持棒を持ち、運動者と重ね合わせれば、跳び箱を跳び越す一瞬の動きをとらえやすくなると考えた。

子供たちは、仲間が跳んだときの肩と腰の角度を支持棒で示して伝え合い、学習を進めた。また、仲間から支持棒を使って肩と腰の角度を伝えてもらうことで、運動者自身が自分の動きがどうなっていたかを客観的につかむことができた。



【連続写真】

予備踏み切りから強い踏み切りをすることで、腰高姿勢を生み出すことにつながる事が分かるようにするために、21枚の連続写真をテレビの画面でコマ送りにして見せた。子供たちは、静止画を使うことで、予備踏み切りの位置や、強い踏み切りをした後のつま先まで伸びた姿、肩よりも腰が高く上がった姿など、連続した動きを一枚一枚ゆっくりと確認することができ、イメージを確かなものにする事ができた。



イ ベースボール型における学習環境

【コート図】

3年生における「コロコロソフトボール」の学習では、少しでも多く点を取るためにはどうすればよいかを学習した。その際、コートの全体像をとらえることができるように、コート図を活用しながら本時の課題を確認した。また、「打つ」技能においても、連続写真や絵図を毎時間提示し、常に子供たちの目にふれることができるようにした。



【作戦ボード】

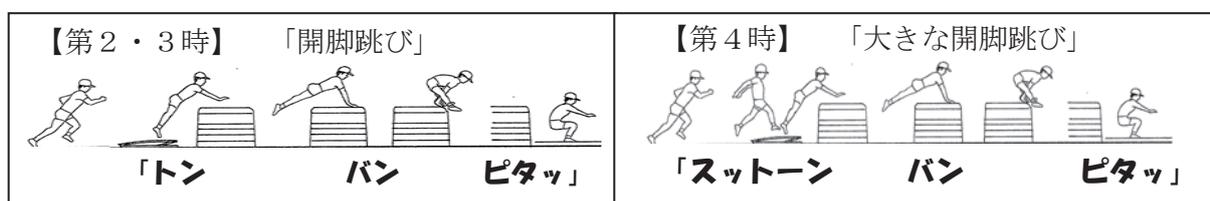
4年生のベースボール型ゲーム「西っ子ベースボール」の学習では、塁を進めるための打ち方などの課題を確認した後、グループで役割分担を行い、個人の目当てをもつ場を設けた。また、ゲームとゲームの間で自分たちの動きを振り返り、よりよい作戦を考える時間も設定した。その際、自分たちの動きを客観的につかみ、修正しながら練習したり、ゲームをしたりすることができるように、作戦ボードを活用した。



② 動きをつかむ力を高める動き言葉の活用

ア 器械運動における動き言葉の活用

第3学年の「跳び箱ランド」の学習では、子供たちが、以下の「動き言葉」を使って実際の動きと、動いたときの感覚のズレを交流しながら学習を進めた。



〈課題化で「動き言葉」を使い、目指す姿やできるようになる秘密をつかむ第3時の子供の姿〉

T：「どうすると、腰が高くあがるのかな？」

A：「踏み切り板のちょっと前から、踏み切り板に入って、トーンって強く踏み踏めばいいと思う。」

B：「踏み切り板に入る前は、ピョンというより、スッと斜め上に引っ張られる感じ。」

T：「スッ トーン って踏み切った後はどうするの？」

C：「開脚跳びのときと同じように、バンってやればいい。」

T：「なるほど。今日は、スッ トーン と踏み切って、バンって着手して、ピタッと止まるのだね。そうすると、大きな開脚跳びになるのだね。」



〈「動き言葉」を使って練習する第3時の子供の姿〉

試技の後

D：「どうだった？」

E：「腰が低かったよ。もっと、トーンって強く踏み切ってみて。」

実際にロイター板で踏み切ってみせ、自分が動いたときの感覚との違いをD児に伝えた。

E：「もう一回やってみたら？」

E：「トーン！」

E児は、D児の動きに合わせて動き言葉で声をかけ、D児の意識を強化させた。



イ ベースボール型における動き言葉の活用

ゲームを支える個人の技能については、以下のような動き言葉を子供たちとつくり、声をかけ合い意識しながら練習をしたり、ゲームをしたりすることで、動きが高まると共に、ゲームの様相の高まりにもつながった。

「捕る」…「タッ タッ タッ グッ パシッ」

(移動する動きや腰を落とす動きを動き言葉で表した)

「投げる」…「パッ ギュー ブン」

(投げる位置の確認やボールを頭の後ろまで引きつける動き、勢いよく腕を斜め下に振り下ろす動きを動き言葉で表した)

「打つ」…「イチ ニー バシッ」

(ボールにバットをあわせる動きやバットを引く動き、勢いよくバットを振ることで、強くボールを打つ動きを動き言葉で表した)



6 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・単位時間の役割を明確にした単元の構造化をしたり、準備・予備運動の工夫を行ったりしたことで、子供たちが運動の喜びや楽しさを味わうことができた。
- ・目指す動きを「動き言葉」で捉えたり、技術ポイントを見つけたりしたことで、見通しをもって練習に取り組み、活発な見合い・教え合い活動の中で、動きを高めていくことができた。

(2) 課題

- ・動きの系統を見直し、子供たちがさらによりよい動きを身に付けることができるような指導計画を、工夫・改善していく必要がある。

<第4分科会>

羽島市立竹鼻小学校

【研究主題】

よりよい動きを追求し合い、動きの高まりが実感できる子
～ 仲間との見合い、教え合う活動を通して ～

【日 程】

9:00 9:35 10:20 11:00 11:45 13:00 14:30 14:55 15:00

受付	公開授業①	移動等	公開授業②	昼食	研究発表	研究協議	指導講評	閉会式
----	-------	-----	-------	----	------	------	------	-----

【授業案内】

公開授業① 第4学年「ゲーム（ゴール型ゲーム） ラインサッカー」 運動場

公開授業② 第3学年「表現運動（表現） みんなでおまつり」 体育館

【会場案内】

羽島市立竹鼻小学校

〒501-6241

羽島市竹鼻町 1295

<アクセス>

○新幹線利用

岐阜羽島駅より名鉄竹鼻線

羽島線に乗換

名鉄竹鼻駅下車 徒歩10分

○高速道路利用

岐阜羽島ICより10分



【学校の概要】

羽島市立竹鼻小学校



所在地 〒501-6241 羽島市竹鼻町1295
校長 花村 重男
児童数 753名(26学級)
連絡先 TEL 058-392-3000 FAX 058-391-8978
E-mail takehanae@hashima-gifu.ed.jp
URL <http://www.hashima-gifu.ed.jp/~takehanae/>

【学校の教育目標】

四つの花を咲かせよう 竹鼻の子

- ◎ すすんで学ぶ子 (学習の花)
- ◎ 思いやりのある子 (心の花)
- ◎ さいごまでやりぬく子 (仕事の花)
- ◎ 体をきたえる子 (健康の花)

【学校紹介】

本校は、明治6年に「好問義校」及び「出藍義校」として発足し、明治7年には、両校を合併して「竹ヶ鼻学校」が創設された。その後、昭和33年に「羽島市立竹鼻小学校」と改称し現在に至っている。今年、創立140周年目を迎える。

1 研究主題

よりよい動きを追求し合い、動きの高まりが実感できる子

～ 仲間との見合い、教え合う活動を通して ～

羽島市立竹鼻小学校

2 研究主題設定の理由

岐阜県では、幼稚園から小学校の段階において、児童が意欲的に運動やスポーツに取り組み、運動やスポーツが「できるようになる」楽しさを味わうことが、豊かなスポーツライフにつながるものと考えている。そして、体育における「技能」「態度」「知識、思考・判断」の指導内容を確実に身に付けることができるよう、発達の段階を踏まえた指導計画、自ら追求できる学習過程や学習形態の工夫、指導と一体化した評価を柱にして授業研究を進めてきた。



本校では、平成22年度より「仲間とともに学び深める子どもの育成」を研究主題に掲げ、全教科において主題追求をしている。

体育科部では、体育の授業における「仲間とともに学び深める子どもの姿」を「目指す動きに向かって、自分の動きを正しくとらえ、技術ポイントを意識し工夫して練習する中で、互いの動きを見合い、教え合い、動きを修正・強化しながら、目指す動きを身に付け、動きの高まりを実感する姿」ととらえている。

そこで、研究主題を「よりよい動きを追求し合い、動きの高まりが実感できる子」と設定した。

3 研究の仮説

上記で設定した研究主題に迫るために、研究仮説を「目指す動きを明らかにし、その動きに迫るための課題化の在り方や学習活動、仲間との見合い、教え合う活動を工夫すれば、子どもたちはよりよい動きを追求し合い、動きの高まりを実感できる。」と設定し、研究を進めてきた。

4 研究内容

(1) 技能向上に結び付く思考・判断を高める工夫

① 目指す動きを明らかにし、見通しがもてる課題化の工夫

児童は、新しい運動に出会った時に、目指す動きと技術ポイントをとらえることができれば「～すればできそうだ。」と課題解決の見通しが明らかになる。そして、目的意識をもって練習していくことで、動きを高めていくことができると考えた。

そこで、1単位時間の授業の導入では、**動きを全体（まるごと）でとらえる場と、部分でとらえる場**を設け、動きを分析的に見ることができるようにした。また、視点を絞って示すことで動きを高めるための技術ポイントが明らかになり、確かな見通しをもてるようになると考えた。

② とらえた動きを自らの動きにつなげる学習活動の工夫

目指す動きと自分の動きをとらえ、「これでいいのか。」と仲間と共に振り返り、練習の場やゲームの場で繰り返し意識して行うことで、よりよい動きを身に付けていくことができると考えた。

そこで、子供たちがとらえた価値ある動きや、動きのイメージを実際の動きにする活動を1単位時間の中に位置付けた。



(2) 仲間と相互援助し合い主体的な活動ができる学習集団の育成

よりよい動きを追求し合うためには、仲間との見合い、教え合う活動が必要であると考えた。そこで、「どの学年で」「どのような内容を」行っていくことが効果的であるか、以下のように考えた。

	低学年	中学年	高学年
めざす姿	◇仲間の運動を見つめ、認め励ますことができる子	◇仲間の運動を見つめ、進んで動きを教えることができる子	◇仲間の運動を的確にとらえ、助言することができる子
活性化したい声かけの内容(指導のめど)	① 結果を教える声かけ ② 状態を教える声かけ	① 結果を教える声かけ ② 状態を教える声かけ ③ 技術ポイントを教える声かけ	① 結果を教える声かけ ② 状態を教える声かけ ③ 技術ポイントを教える声かけ ④ 動きを修正・強化する声かけ
賞賛や激励など、情意面への声かけが基盤			

5 研究実践

(1) ゲーム・ボール運動「ゴール型」の実践

研究内容 1 技能向上に結び付く思考・判断を高める工夫

① 目指す動きを明らかにし、見通しがもてる課題化の工夫

【5年生「サッカー」(ボール運動・ゴール型)の実践より】

ビデオ撮影した前時のゲームの様子から、本時の課題につながる場面を選び、以下のように2回に分けて課題を提示した。

前時 ボールに固まっいて、パスをすることができなかった

ボールを持っている仲間に、味方も相手も固まっていた。ボールをフリーで持っても、味方にパスが出せない。ボールを持っている子の前に味方がいれば、パスはつながった。

本時

1 回目

発問 1 「これから見せるVTRの攻撃の良さはどんな所か見てね。」

○全体の動きの良さを見せる

パスがつながって、シュートを打つことができている場面を見せる。



2回目：発問2「次は、ボールを取った時、ボールを持っていない子の動きを見てね。」

その動きをつくり出すために、何をどうすれば良いか見付けられるようにする)

ボールを持たない味方の動きに注目し、

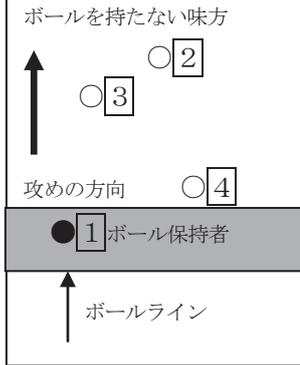
「いつ」「どこへ」「どうする」の3つの視点で動きを明らかにする。

◇「いつ」・・・味方がボールを**持ったとき**

◇「どこへ」・・・味方から離れた、**前の空いているところへ**

◎技術ポイント：《**ボールより前**》《**相手より前**》に動く

◇「どうする」・・・素早く動いて**パスをもらう**



【ビデオ提示の図】

本時の課題：ボールを持っている味方より前でパスをもらうゲームをしよう。

上記のように全体の動きを見せた後、この時間で着目させたい技術ポイントを意識しながら、目指す動きを具体的にとらえることができるように2回に分けて課題を提示した。

このようなVTRの提示後、コート図を用いて、ボール保持者の位置にテープを貼り、ボール保持者を中心にボールを持たない味方の動きに注目させた。

ボールを持たない味方にも番号を書いたテープを貼り、動きを明らかにした。そして、VTRによりスローで再生したり、一時停止したりして、ボールを持たない味方が、「ボールより前」「相手より前」に動いていることを確認した。

より動きを分かりやすくするために、ボール保持者の位置にテープを貼り、ボールを持たない味方がボールラインより前に出ていることを確認した。この課題提示によって目指す動きを前時の具体的な場面から理解することができた。

また、「いつ」「どこへ」「どうする」の3つの視点で目指す動きを明らかにすることで、目指す動きを意識して練習に取り組むことができた。

研究内容2 仲間と相互援助しあい主体的な活動ができる学習集団の育成

【3年生「ラインサッカー」(ゲーム・ゴール型ゲーム)の実践より】

技術ポイントを核とした見合い、教え合う活動を仕組むことで、主体的な活動ができる学習集団を育成することができるのではないかと考えた。

〔第5時の学習活動において〕

○全体計画会：学習課題を設定する。

- ・味方がボールを持ったら、持った人から離れている。

ボールに固まらず広がって、パスをつないで攻めるゲームをしよう。

○グループ会：各グループのめあてを明確にする。

僕たちのグループは、ボールに固まってしまうので、広がって攻めたい。そのために、味方がボールを持ったらその人から離れて空いている場所に動こう。じゃあ、コートで確認してみよう。



L：じゃあ実際にコートでボールを動かして、ゆっくり動きを確認していくよ。

①：ぼくがボールをとった時、②さんと③さんは前に走って、パスをもらってよ。

②：この辺まで行けばいい？

③：私はこの辺でいい？

① ②さんはその辺でいいよ。③さんはもう少しサイドラインの近く。もっと。もっと。そこ。その辺。

技術ポイントを核とした教え合い活動

前時の自分の動きの様子を明らかにする。

本時、目指す動きを全員で確認する。

実際のコートで役割を分担しながら、目指す動きを確認していく。

「誰が」「いつ」「どこで」「何を」をキーワードに**実際の動きとともに確認**していく。

○前半ゲーム：味方がボールを持ったときに、ボールから離れてパスをもらって攻めるゲームをする。

味方がボールを持ったときに、ボールから離れてパスをもらおう。



空いている場所を見つけるために相手のいる場所をよく見る。

味方がボールを持ったとき、ボールから離れて待っていたら、パスがもらえた。相手の位置をよく見ると、空いている場所を見つけることができたよ。

○中間研究会：前半ゲームでつかんだこと、うまくいかないことを共有し、動きを強化したり、修正したりする。

- ・味方がボールを持ったら、ボールを持った味方よりも前の空いている場所に動いている。
- ・ボールを持った味方よりも前の空いている場所に動いてパスをもらおうと攻めやすいな。

○後半ゲーム：ボールを持った味方より前のゴールの近くの空いている場所へ動いてパスをもらって攻めるゲームをする。

ボールを持った味方より前のゴールの近くの空いている場所へ動いてパスをもらおう。



空いている場所を見つけるためにゴールを見る。

味方がボールを持ったら、ただ離れるだけでなく、ボールを持った味方より前のゴールの近くに動いたら、パスがつながり、シュートすることができた。

○グループ会・全体反省会：今日の学習を振り返る。

前の時間は、ボールに固まってパスがつながらなかったけど、ボールを持った味方よりもゴールに近い空いた場所に動くと、パスがつながり、シュートすることができた。

サイドから見ている仲間が、ボールを持っていない子に空いている場所を示したり、ボールを持っている人のプレーのアドバイスをしたりする。

サイドから見ている仲間から動きの良さを教えてもらおう。

他のグループの良さから、自分たちの動きに生かしていく。

前時の自分たちの動きと比較して、自分たちの動きの良さを確認する。

本時の動きの良さを実感し、新たな課題を確認し、より効果的な動きを追求していくようにする。

本実践では、ボールを持っている子に固まってしまい、パスを出すことのできない状況が生まれることに対して、ボールを持っている子より前に離れてパスをもらえば、うまくつながっていくことをとらえさせること、また、いかに動きに変えることができるかが大きな課題であった。

そこで、動きをとらえるために、実際のコート上で動きを仲間と確認することや仲間の動きの良さを広める活動、さらにコートサイドの仲間からの状況を伝える声かけを大切に授業を行った。こうした活動を単元を通して大切にしていたことで、自分たちで技術ポイントを生かしながら主体的に学び合う姿が生まれてきた。また、ゲームにおいても、単元の前半に比べ、たくさん得点できるようになり、動きの高まりが実感できるようになってきた。

(2) 表現遊び・表現運動の実践より

研究内容1 技能向上に結び付く思考・判断を高める工夫

① 目指す動きを明らかにし、見通しがもてる課題化の工夫

【2年生「生き物ワールド」(表現遊び)の実践より】

本時では、「目指す動き」を「鳥が〇〇するところ」のお話をつくって組み合わせたり、繰り返したりする動きと、鳥の動きの特徴である「空を飛ぶ」という動きを通して、高低を表現できることをねらった。



そこで、課題提示では、まず、「どんな鳥を知っているかな。鳥さんは、空を飛ぶよね。その他にどんなことをするのかなあ。」と、投げ掛けた。その後、児童の答えを聞きながら、次のような動きをしている鳥の写真やイラストを提示し、鳥がいろいろな動きをしていることを確認した。そして、これらの鳥の動きを声に出して擬音語にした。

▼鳥のいろいろな動きの例(カッコ内が擬音語)

キツツキが木に穴を開けている。(コンコンコンコン…)	ワシが獲物を襲う。(シュー、ガシツ、バサッバサッ)	親鳥から餌をもらうひな。(ピヨピヨパクパク、パタパタ)	カラスが餌を食べている。(ツンツン、パクッ)
----------------------------	---------------------------	-----------------------------	------------------------

次に、どう動けば良いのか見通しをもつことができるようにするために、以下のようなことを押さえた。特に、ii)とiii)については、本時共通に押さえたい動きとした。

- i) 擬音語と動きをつなげるために、提示した鳥のいろいろな動きを擬音語で言いながら、子どもと一緒に動いて確かめた。
- ii) 本時メインになる「飛ぶ」動きについては、鳩のように「パタパタパタ」と両腕を速く軽やかに動かす「飛ぶ」と、ワシのように「バツバツバツスー」と両腕をゆっくり力強く動かす「飛ぶ」があることを一緒に動いて確かめた。
- iii) 鳥が飛び立つ時は低い姿勢→高い姿勢、飛んでいる鳥が地上に降りる時や獲物をねらう時は高い姿勢→低い姿勢を一緒に動いて確かめた。

以上のようにすることで、この後の学習活動においては、自分のなりたい鳥の動きのイメージを明確にもち、伸び伸びと動くことができた。また、本時共通に押さえたい動き(上記のii・iii)についても、意識して動くことにつながった。

② とらえた動きを自らの動きにつなげる学習活動の工夫

【3年生・5年生 表現運動の実践より】

表現運動では一人一人の動きが違って良いことから、「動きを高める」とは、「一つのイメージから多様な動きができる。」ことや、「自分たちの表したいことがより鮮明に伝わるように、対比する動きや群の動きを生かした動きができる。」ことととらえた。そして、そのために必要な学習活動を次のように考えた。

- (ア) 単元の導入において、だるまさんが**やイメージカルタでいろいろなイメージや動きに出会い、自分の動きのバリエーションを増やす。
- (イ) イメージすることが苦手な子が少ないので、実物を見て観察し、擬音語に置き換えることで、動きのイメージにつながるようにする。
- (ウ) 見つけた擬音語を基に実際に動いて、どう体を動かすことなのかをとらえることができるようにする。その際、同じ擬音語でも、速さや空間、体の使い方などを変えると違った感じの動きになることも、教師と一緒に動いて確かめる。
- (エ) 自分たちの動きを自分たちで見ることはできないので、見合う活動を位置付け、表したことが鮮明に伝わる動きになったかどうかを確かめる。見合う活動には、①グループ内で見合う活動、②ペア班で見合う活動 ③VTRで撮影した自分たちの動きを見て確かめる活動がある。

▼学習活動の実際

<p>実物観察をして 擬音語を見つける (イ)</p>	<p>3年生「ふわふわワールド」から 第4時「しゃぼん玉」</p> <p>教師がしゃぼん玉を吹いて見せ、ストローの口から出て、ふわふわと飛んでいき、やがてパチッと割れて消えるなどのしゃぼん玉の様子を観察し、擬音語にする。 (擬音語の例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポポポポ フワーン ・ポワーン ポワーン クルクル ・フワ フワ ヒュー パチッ 	<p>5年生「はげしく〇〇する」から 第2時 「はげしくふっとうするドライアイス」</p> <p>60℃くらいのぬるま湯が入った水槽にドライアイスを入れて、激しく泡の出る様子や泡がはじけた後、煙になって消えていく様子を観察し、擬音語にする。 (擬音語の例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボコボコボコボコ ・ボコッ ボコッ ボコッ ・シュー シュー モアー 		
<p>擬音語を動きにする (ウ)</p>	<p>見つけた擬音語を動きにする際、教師が状況をより具体的にイメージできる問いかけをしながら動きを引き出し、その題材のメインとなる動きをとらえることができるようにする。</p> <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width:50%; padding: 5px;"> <p>ポポポポ フワーン</p> <p>「ポポポのところのしゃぼん玉は、どんな大きさかなあ？その後のフワーンの時はどうかかな？」</p> <p>ポワーン ポワーン クルクル</p> <p>「どんな形のしゃぼん玉？丸い形ってどうしたら表せそう？」</p> <p>「ゆっくり飛んでいるね。風が吹いてきたらどうなるかな？」</p> <p>フワ フワ ヒュー パチッ</p> <p>「ドタドタ足音が聞こえていたけれど、しゃぼん玉が飛んでいる時や割れた時って音聞こえた？」</p> <p>「動く速さはどう？さっきみたいに速く動く？」</p> </td> <td style="width:50%; padding: 5px;"> <p>ボコボコボコボコ</p> <p>「泡の出る速さは？」</p> <p>「手だけ使って動けば、激しさは伝わるのかなあ？」</p> <p>「泡っていつも同じ方向に動いているのかなあ？」</p> <p>ボコッ ボコッ ボコッ</p> <p>「さっきのボコボコと、どう違う？」</p> <p>「ボコッってはじけるような感じは、どう動くといいかなあ？」</p> <p>シュー シュー モアー</p> <p>「泡が煙になったところから、どんな動き方がいいのかな？」</p> <p>「動く速さはどう？さっきみたいに速く動く？」</p> </td> </tr> </table>		<p>ポポポポ フワーン</p> <p>「ポポポのところのしゃぼん玉は、どんな大きさかなあ？その後のフワーンの時はどうかかな？」</p> <p>ポワーン ポワーン クルクル</p> <p>「どんな形のしゃぼん玉？丸い形ってどうしたら表せそう？」</p> <p>「ゆっくり飛んでいるね。風が吹いてきたらどうなるかな？」</p> <p>フワ フワ ヒュー パチッ</p> <p>「ドタドタ足音が聞こえていたけれど、しゃぼん玉が飛んでいる時や割れた時って音聞こえた？」</p> <p>「動く速さはどう？さっきみたいに速く動く？」</p>	<p>ボコボコボコボコ</p> <p>「泡の出る速さは？」</p> <p>「手だけ使って動けば、激しさは伝わるのかなあ？」</p> <p>「泡っていつも同じ方向に動いているのかなあ？」</p> <p>ボコッ ボコッ ボコッ</p> <p>「さっきのボコボコと、どう違う？」</p> <p>「ボコッってはじけるような感じは、どう動くといいかなあ？」</p> <p>シュー シュー モアー</p> <p>「泡が煙になったところから、どんな動き方がいいのかな？」</p> <p>「動く速さはどう？さっきみたいに速く動く？」</p>
<p>ポポポポ フワーン</p> <p>「ポポポのところのしゃぼん玉は、どんな大きさかなあ？その後のフワーンの時はどうかかな？」</p> <p>ポワーン ポワーン クルクル</p> <p>「どんな形のしゃぼん玉？丸い形ってどうしたら表せそう？」</p> <p>「ゆっくり飛んでいるね。風が吹いてきたらどうなるかな？」</p> <p>フワ フワ ヒュー パチッ</p> <p>「ドタドタ足音が聞こえていたけれど、しゃぼん玉が飛んでいる時や割れた時って音聞こえた？」</p> <p>「動く速さはどう？さっきみたいに速く動く？」</p>	<p>ボコボコボコボコ</p> <p>「泡の出る速さは？」</p> <p>「手だけ使って動けば、激しさは伝わるのかなあ？」</p> <p>「泡っていつも同じ方向に動いているのかなあ？」</p> <p>ボコッ ボコッ ボコッ</p> <p>「さっきのボコボコと、どう違う？」</p> <p>「ボコッってはじけるような感じは、どう動くといいかなあ？」</p> <p>シュー シュー モアー</p> <p>「泡が煙になったところから、どんな動き方がいいのかな？」</p> <p>「動く速さはどう？さっきみたいに速く動く？」</p>			
<p>見合う活動 (エ)</p>	<p>単位時間の後半または、次時に、グループで表したいこと（テーマ）を決め、「はじめ—なか—おわり」の動きをつくり、本題材の最後に位置付いているミニ発表会（学習の成果を確かめる）に向けて、自分たちの動きを確かめながら学習活動を行った。</p> <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width:50%; padding: 5px;"> <p>単位時間の後半に、班内で一人ずつ順番に抜けて仲間の動きを見合う活動を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストローから出てくるところは、小さなしゃぼん玉が勢いよく出てくるので、もう少し小さくなってシュシュシュッって速く動けるといいかな。 ・**さんは、風が吹いて高く上がった方を見て動いているので、高い所へ飛んだ様子がよく分かるから他の人もまねをするといいと思うよ。 など <p>気付いたことや受けたアドバイスなどをグループボードに記入し、学習の足跡を残すことで、自分たちの動きの高まりが分かるようにした。</p> </td> <td style="width:50%; padding: 5px;"> <p>単位時間の後半に、班内で一人ずつ順番に抜けて仲間の動きを見合う活動をしたり、ペア班で見合う（ペア班でできない班はVTR）活動をしたりした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボコボコボコボコと激しく泡が出るところを、*班の人たち一人一人は伸びたり縮んだりを繰り返して激しさを表しているのでもいいと思うけれど、離れて動いているのもっと近寄って動いた方が激しさが伝わると思う。 ・自分では激しく動いているつもりだったけど、そうでもなかったの、**さんのように胸や背中を使ったり、動きをもう少し速くしたりして激しさがもっと伝わるようにしたい。 など </td> </tr> </table>		<p>単位時間の後半に、班内で一人ずつ順番に抜けて仲間の動きを見合う活動を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストローから出てくるところは、小さなしゃぼん玉が勢いよく出てくるので、もう少し小さくなってシュシュシュッって速く動けるといいかな。 ・**さんは、風が吹いて高く上がった方を見て動いているので、高い所へ飛んだ様子がよく分かるから他の人もまねをするといいと思うよ。 など <p>気付いたことや受けたアドバイスなどをグループボードに記入し、学習の足跡を残すことで、自分たちの動きの高まりが分かるようにした。</p>	<p>単位時間の後半に、班内で一人ずつ順番に抜けて仲間の動きを見合う活動をしたり、ペア班で見合う（ペア班でできない班はVTR）活動をしたりした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボコボコボコボコと激しく泡が出るところを、*班の人たち一人一人は伸びたり縮んだりを繰り返して激しさを表しているのでもいいと思うけれど、離れて動いているのもっと近寄って動いた方が激しさが伝わると思う。 ・自分では激しく動いているつもりだったけど、そうでもなかったの、**さんのように胸や背中を使ったり、動きをもう少し速くしたりして激しさがもっと伝わるようにしたい。 など
<p>単位時間の後半に、班内で一人ずつ順番に抜けて仲間の動きを見合う活動を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストローから出てくるところは、小さなしゃぼん玉が勢いよく出てくるので、もう少し小さくなってシュシュシュッって速く動けるといいかな。 ・**さんは、風が吹いて高く上がった方を見て動いているので、高い所へ飛んだ様子がよく分かるから他の人もまねをするといいと思うよ。 など <p>気付いたことや受けたアドバイスなどをグループボードに記入し、学習の足跡を残すことで、自分たちの動きの高まりが分かるようにした。</p>	<p>単位時間の後半に、班内で一人ずつ順番に抜けて仲間の動きを見合う活動をしたり、ペア班で見合う（ペア班でできない班はVTR）活動をしたりした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボコボコボコボコと激しく泡が出るところを、*班の人たち一人一人は伸びたり縮んだりを繰り返して激しさを表しているのでもいいと思うけれど、離れて動いているのもっと近寄って動いた方が激しさが伝わると思う。 ・自分では激しく動いているつもりだったけど、そうでもなかったの、**さんのように胸や背中を使ったり、動きをもう少し速くしたりして激しさがもっと伝わるようにしたい。 など 			

擬音語を基に実際に動いて体をどう動かすかをとらえ、見合う活動を位置付けたことで、3年生「ふわふわワールド」では、しゃぼん玉の軽やかな動きをとらえ、全身を柔らかく使ったり、足音を立てないで動いたりすることができた。また、5年生「はげしく〇〇する」では、泡が激しく出るところは、全身を使って力強くスピードのある動きを、煙になったところからは、スローモーションのようなゆっくりとした柔らかい動きをとらえ、一人一人の踊りの中で表現することができた。



研究内容2 仲間と相互援助し合い、主体的な活動ができる学習集団の育成

【5年生「はげしく〇〇する」(表現運動・表現)の実践より】

〔「はげしくふっとうするドライアイス」の学習活動において〕

○全体計画会：VTRから目指す姿をつかむ。

〇〇さんは、首や肩まで使って、泡が出てくる様子を表しているよ。私の班も一人一人がこんな動き方をしたら、ドライアイスがボコボコと激しく泡を出している様子をもっとよく分かるようになるかな。

テーマが伝わるように、身体の使い方を工夫して踊ろう。

・身体の使い方を工夫するとはどういうことか、教師と一緒に動いて確かめる。

○前半活動：身体の隅から隅までをどう使うとテーマが伝わるのかを踊りながら見つける。

背中まで動かすと煙がモコッと出る破裂した様子が伝わってくるよ。

○中間の見合い：仲間の踊りから良さを中心に見つける。

A：〇〇さんは、泡が破裂するところで背中から動いていて、フワッって煙になっていく様子がよく見えたよ。煙になってからをもっとゆっくり動くと激しさがもっと伝わると思う。

B：*班は、一人一人が肩や腰などの身体のいろいろな所を使っているのよ、泡が次々に出てくる様子がよく分かったよ。離れた場所で動いていたけどもう少し固まって動く方が勢いが強まると思う。

○後半活動：見合いで交流したことを生かして踊る。

前半活動で高まってきた個々の身体の使い方、速さの変化や群を生かす工夫をし、踊ってみる。

動きを修正、強化する教え合い活動

前時の仲間の動きから良さを明らかにし、自分たちが取り入れると良いことを明確にする。

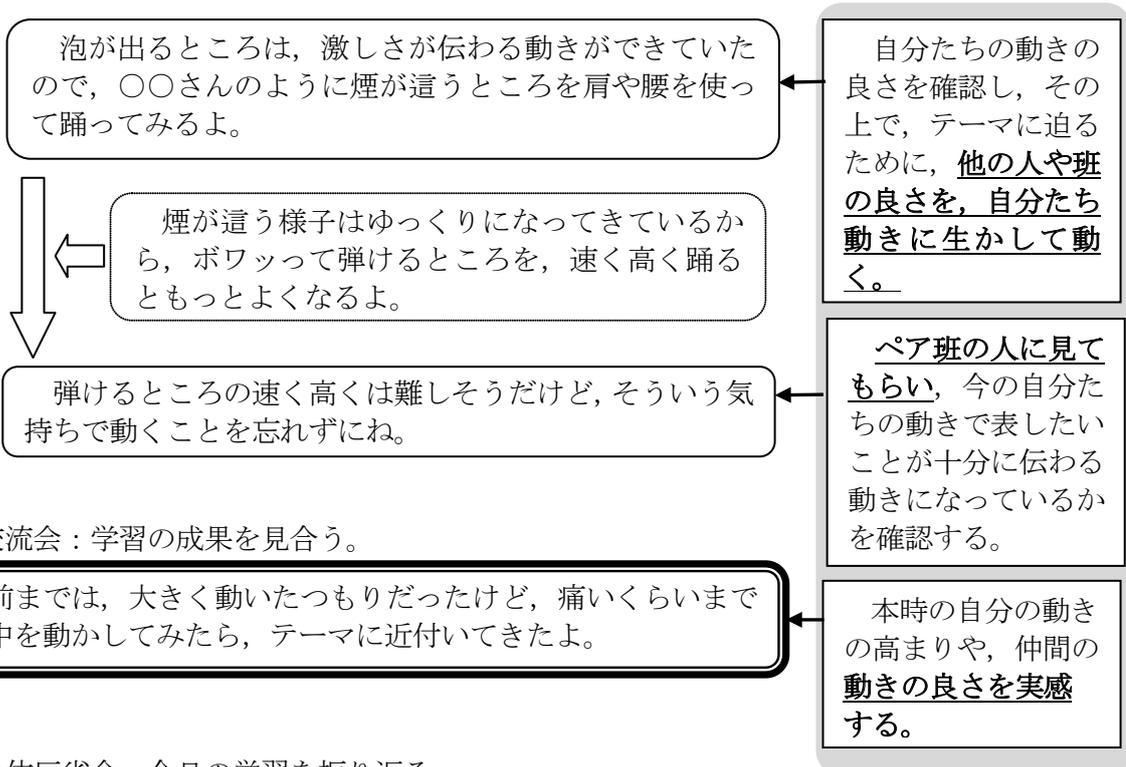
本時、目指す動きを全員で確認する。

班の仲間の動きを見る役を順番に回しながら、目指す動きを確認していく。

ペア班の仲間から、動きの良さを伝えてもらったり、テーマに迫るための修正点についてアドバイスをもらったりする。



(例)



○ 交流会：学習の成果を見合う。

前までは、大きく動いたつもりだったけど、痛いくらいまで背中を動かしてみたら、テーマに近付いてきたよ。

○ 全体反省会：今日の学習を振り返る。

- ・はじめは、ただ踊っているだけだったけど、肩の使い方を意識して踊ったら動きが大きくなって、泡がポッコポッコと出てくる感じが表せた。
- ・〇〇さんが「もっと肘を動かして、やわらかく動かすといいよ。」とアドバイスをしてくれたのでやってみたら、今までより泡が激しく出てくる感じを出して踊ることができた。

仲間と動きを修正、強化していく教え合い活動を仕組むことで、目指す動きに向かって主体的に学習に向かうことができるようになってきた。そして、擬音語をつかって目指す表現に向かい交流活動をしていくことで、表現が豊かになってきた。

こうした児童の主体的な見合い、教え合う活動を位置付けていくことは、動きの高まりと学び合う集団の質の向上につながった。

6 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・1単位時間授業の導入において、目指す動きを全体（まるごと）でとらえる場と、部分でとらえる場を設け、動きをとらえたことで、高めるための技術ポイントが明らかになり、確かな見通しをもって練習に取り組む姿が増えてきた。
- ・視点をもって動きを見る活動や発達の段階を踏まえた仲間との見合い、教え合う活動に、繰り返し取り組んでいくことで、動きの高まりとともに、仲間との見合い、教え合いの質の高まりも見られた。

(2) 課題

- ・動きを高めるための学習活動の工夫改善とともに、仲間との関わりを促す効果的な指導について、今後も追求していく必要がある。

【MEMO】

A series of horizontal dashed lines for writing.

<第5分科会>

各務原市立那加第三小学校

【研究主題】

できる喜びを味わい、力いっぱい運動する子

【日 程】

9:00 9:40 10:25 10:50 11:35 13:00 14:15 14:50 15:00

受付	公開授業①	移動等	公開授業②	昼食	研究発表	研究協議	指導講評	閉会式
----	-------	-----	-------	----	------	------	------	-----

【授業案内】

公開授業①（高学年）第5学年「陸上運動 走り高跳び」 体育館

公開授業②（中学年）第4学年「ゴール型ゲーム タグラグビー」 運動場

※雨天の場合 公開①は小学校体育館、公開②は各務原市総合体育館

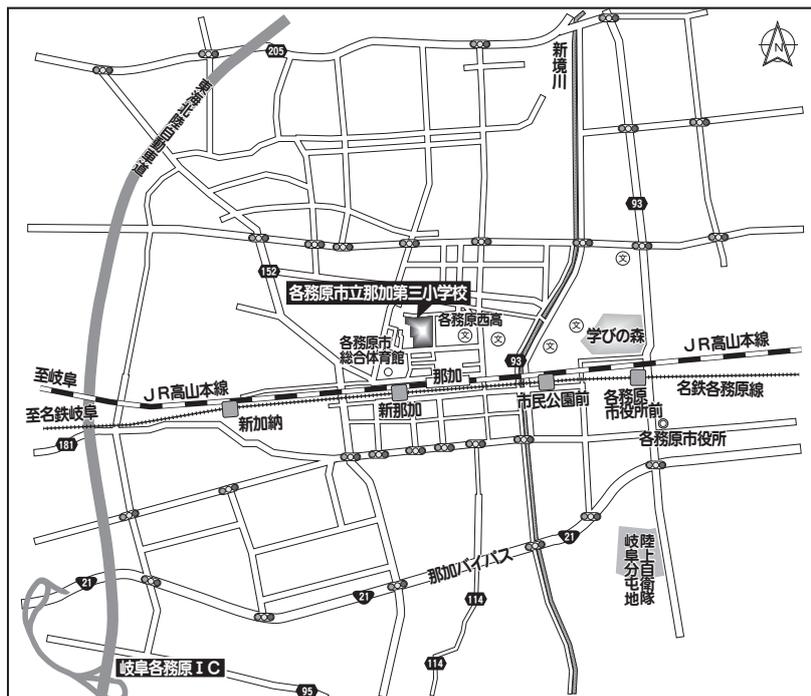
【会場案内】

各務原市立
那加第三小学校

〒504-0022
各務原市那加東亜町1番地1

<アクセス>

- JR那加駅下車 徒歩7分
- 名鉄新那加駅下車 徒歩5分



【学校の概要】

各務原市立那加第三小学校



所在地 〒504-0022 各務原市那加東亜町1-1
校長 佐藤元信
児童数 465名(19学級)
連絡先 TEL 058-383-0434 FAX 058-371-8103
E-mail naka3sho@he.mirai.ne.jp
URL <http://www.mirai.ne.jp/~naka3sho/>

【学校の教育目標】

力いっぱいやりぬく子

考える子 助け合う子 じょうぶな子

【学校紹介】

本校は、昭和26年に那加第二小学校から分離し、今年度で64年目を迎える。その間、社会科全国大会や教育キャッチアップ事業における国語科の実践研究等において成果をあげてきた。また、昭和56年に情緒障がい児学級が開設されて以来、各務原市における障がい児教育の拠点校の一つとしての役割を果たしてきている。

平成20年度からは道徳教育の研究を始め、平成22年には中部道徳教育研究大会、平成25年には各務原市教育創造事業クリエイト21公表会で全学級が道徳の授業を公開し、児童の道徳的実践力を高めるための指導方法等を究明してきた。

1 研究主題

できる喜びを味わい、力いっぱい運動する子

各務原市立那加第三小学校

2 研究主題設定の理由

体育科における今日的な課題として、子供たちの体力低下や、運動する子とそうでない子の二極化傾向が挙げられる。このような課題に対して、学習指導要領では、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を培う観点から、指導内容の明確化及び運動の系統性が図られた。児童の発達の段階を踏まえ指導内容の明確化を図り、系統性を図って指導方法を改善していくことで、基本的な身体能力を身に付け、運動を豊かに実践していくための基礎を身に付けていくことができる。

本校では、体育科教育の本質を「確かな動きを身に付けること＝できること」としてとらえ、実践研究に励んできた。

児童の発達の段階に合わせ、系統的な指導を行うことや、児童が運動の見方を確かなものにし、仲間と互いに援助し合いながら力いっぱい練習に取り組むことで確かな動きを身に付け、さらに意欲的に学ぶ児童が育成されていく。

「できるようになりたい」という子供たちの願いをかなえるとともに、仲間と共に力いっぱい運動する子供の育成を目指し、本研究主題を設定した。

3 研究の仮説

系統的な指導を充実させ、子供たち一人一人が、自分の目指す動きがわかり、仲間と共に見通しをもった課題追求をすれば、できる喜びを味わい、力いっぱい運動に取り組むことができる。

4 研究内容

(1) 全ての児童に運動の楽しさを味わわせる場の設定や教材の開発

運動の楽しさを味わいながら、確実に動きを身に付けていくためには、低学年から高学年までの教材分析と子供たちの実態から、学習内容の順序を吟味し、指導計画を工夫していくことが大切である。

本校では、高学年の陸上運動（走り高跳び）及び中学年のゴール型ゲーム（タグラグビー）を中心に研究を進めている。

走り高跳びにつながる運動の教材として、学習指導要領解説体育編に例示されているものは表1のとおりである。それらの運動では、片足や両足で踏み切って跳ぶことから徐々にリズムカルに跳ぶ動きへと、身に付けさせたい動きを発展させていく。

低学年では、輪を並べてケンパー遊びをする中で、等間隔または様々な間隔で置かれた輪を跳ぶことにより、片足や両足で跳んでいく感覚を身に付けていく。また、ゴム跳び遊びのように安全な場を設けることによって、片足や両足で踏み切ったり、助走を付けて片足で踏み切ったりする動作に親しむことができると考える。

中学年では、方向を限定して、助走をつけて片足で踏み切ることを繰り返し学習することにより、高学年の7歩程度のリズムカルな助走からの踏み切りにつながっていく。また、ゴム跳び遊びなどから走り高跳びまで、安全面に配慮した用具の設置やスモールステップの場の設定

などを工夫して系統的に学習することで、より意欲的に学習することができるようになっていくと考える。

高学年では、助走のリズムを整える練習とともに、空中姿勢にも着目させ、振り上げ足の練習をする特設の場を設け、子供たちが練習を選択できるようにすることにより、楽しみながら運動技能の確実な定着を図ることができるととらえている。

【表1 陸上運動（走り高跳び）につながる教材】

	低学年	中学年	高学年
教材	○走・跳の運動遊び ・ゴム跳び遊び ・ケンパー跳び遊び	○走・跳の運動 ・高跳び 3～5歩程度の短い助走での高跳び	○陸上運動 ・走り高跳び 助走が5～7歩程度の走り高跳び
身に付ける動き	・助走を付けて片足で踏み切り、前方や上方に跳んだり、片足や両足で連続して跳んだりする。	・短い助走から調子よく踏み切って高く跳ぶ。	・リズムカルな助走から踏み切って跳ぶ。
場の設定	・20～40cmの高さのゴムを跳ぶ。 ・正面から跳んだり、横向きに跳んだりする。 ・連続して設置したゴムをリズムよく跳ぶ。 ・いろいろな場所に置かれた輪を跳ぶ。	・コーンを連結したバーを右から左、左から右へと連続して跳ぶ。 ・バーの代わりにゴムを張って跳び越す。 ・踏み切る位置に目印の輪を置く。 ・方向を限定して跳ぶ。	・バーに対して45～65度の方向から助走する。 ・バーの高さは90～100cm ・振り上げ足の練習をする場の設定

ゲーム（ゴール型ゲーム）及びボール運動（ゴール型）については、その系統を下記表2のように考えている。これは、子供たちの発達の段階から、ゲームに関する意識及びゲームの様相を高めていくための追求の視点をまとめたものである。

【表2 ボール運動につながる教材】

	低学年	中学年	高学年
教材	○宝取り鬼、ボール運びゲーム（タグラグビーにつながる教材）	○ゴール型 ・手を使ったゴール型ゲーム ・足を使ったゴール型ゲーム ・陣地を取り合うゴール型ゲーム（タグラグビーを基にしたゲーム）	○ゴール型 ・バスケットボール ・サッカー ・ハンドボール ・タグラグビー、フラッグフットボール
意識	・宝を取ったり、ボールを持って走ったりすること	・ボールを持って走ること ・相手のいないところへ走ること	・ゴール ・味方や相手チームの子の動き
追求の視点	【運動の全体】（ゴールまで走り抜けるイメージをもつ） ◇空いているスペース ・1対1で走り抜けていく	【運動の全体】（ゴールまでのイメージをもつ） ◇空いているスペース ・ボールを持ったとき ・ボールを持っていないとき	◇空いているスペース ◇味方と相手の位置
	【部分の動き】（状況に応じた動きを判断する） キーワード 「いつ、どこへ走るか」	【部分の動き】（状況に応じた動きを判断する） ◇ボールを持ったとき ◇タグを取られたとき ◇味方がボールを持ったとき ◇相手がボールを持ったとき キーワード 「いつ、どこへ、何を」	◇プレイの選択 ・シュート、ドリブル、パスの選択 ・人数に応じたプレイの選択
	【動きを支える要素】 ◇相手をかかわす身体操作	【動きを支える要素】 ◇相手をかかわす身体操作 ◇ボール操作	◇目線や体の方向

低学年の宝取り鬼やボール運びゲームの学習では、主に1対1の場面で相手を意識しながら体をかかわして相手の横を走り抜けゴールにたどり着く楽しさを味わう。

中学年のタグラグビーを簡易化したゲームでは、子供たちの意識は、ボールや近くの子にある。自分たちでルールを工夫して面白いゲームにしなが、近くにいる相手チームの子をかかわして走り抜けることを楽しむ。特に、攻防入り交じってゲームをするため、人の動きに注目させることによって、高学年で学ぶバスケットボールやサッカーなどにおいて、空いているスペースを見つけて走り込んだり、ボールを持っていないときの動きの基本を身に付けたりしていくことができる。

（2）技能向上に結び付く思考・判断を高める工夫

単元または単位時間の課題提示の方法として、目指す動きと自分の動きを比較することが、より具体的かつ自分にとって必要な課題設定につながると考えた。

そのためには、一人一人が運動を見る力（運動の見方）を身に付けていくことが重要である。

「運動の見方」とは、「運動の全体」～「部分の動き」～「動きを支える要素」を技能向上に関する追求の視点として、運動全体のイメージをとらえ、中核となるポイントをつかむという教科の本質に迫る認識の仕方のことである。

子供たちは、この運動全体のイメージや中核となるポイントに照らして自分の動きをとらえ、動きの修正を図り、動きを身に付けていくと考えている。

さらに、仲間相互の課題が明らかになることにより、教え合うポイントが明確になるため、仲間との相互援助活動がより質の高いものになることも期待できる。

例えば、高学年の陸上運動や器械運動などの個人種目では、子供たちは、姿図や技の段階表などから運動の全体をイメージするとともに、運動を分析的にとらえて技術ポイントを理解する。そして、全体と部分の動き、動きを支える要素を構造的・総合的にとらえ、個々の課題に合った練習方法を選んだり、工夫したりしながら練習に取り組んでいく。また、グループの仲間に補助してもらったり、助言してもらったりして、自分の姿を客観的にとらえることができるようになる。

また、ゲームやボール運動では、図や言葉だけの課題提示では、実際の動きにはなかなかつながらないことも少なくない。そこで、目指す動きのイメージを明確につかむことができるように、実際の動きをシミュレーションし、課題となる動きを身に付けていくことを考えた。子供たちは、このシミュレーションによって「こんな動きなんだな。」「できるかもしれない。」「これならできそうだ。」という思いをもって、課題解決に向かうことができると考える。

自分の課題を明らかにするためには、目指す動きと自分の動きの違いをとらえる必要がある。どこが違うか、何が違うか、どうしてその違いが生まれるのか等、動きを見る目を育てることが必要である。そうすることにより、子供たちは、自分自身の課題として、粘り強く追求することにつながると考えたからである。

例として、ゲームからボール運動に至るまでの工夫を次のように考えている。

低学年のゲームでは、主に1対1の場面でどのように相手をかかわして走り抜けていくかという課題をもたせるため、簡易なゲームでどの子にもゴールまで走り抜ける楽しさを味わわせることができるようにしていく。また、仲間の動きからよい動きをイメージさせる時間を設けていく。

中・高学年は、簡易なゲームから、自分たちでルールを工夫しながらゲームを楽しめるようにしていく。また、運動ができる楽しさを味わいながら技能を高めていくために、運動の見方を働かせ、自らの動きを追求する練習方法やグループの作戦を工夫することが大切である。

(3) 教師や学習者相互による適切な評価

仲間の動きについて、視点を明らかにして見合うことによって、より具体的に、活発に教え合うことができると考えている。すなわち、グループ学習を進めていく中で、学習者相互による評価を繰り返していくことにより、運動の見方がより洗練されていく。教師は、教材の開発や指導計画の工夫によって、育みたい資質や能力を明確にし、子供たちへの価値付けや方向付けを具体的にしていく。

単元によっては、ペアやグループで練習を見合う場を設定したり、グループ得点を利用したりするなど、子供たちが相互に評価し合う場を設定している。

発達の段階によって評価し合う内容は、以下のようなものである。

低学年…運動全体を見て、「できた・できない」を伝える。
中学年…動きに合わせてリズム言葉を言ったり、部分の姿について伝えたりすることができる。(リズムに合っているか評価する)
高学年…部分的な動きを伝えるだけでなく、仲間の動きが上達するよう、目指す姿に照らし合わせてアドバイスすることができる。

このように、運動している仲間の姿を評価し、伝え合うことによって、伝えられる側は、自分で感じていた動きのイメージを確かなものにしたたり、修正したりすることができる。伝える側にとっては、運動を再認識することとなり、それを、自分自身の運動技能の向上に役立てることができると考ええる。

5 研究実践

(1) すべての児童に運動の楽しさを味わわせる場の設定や教材の開発

① 4年 タグラグビー

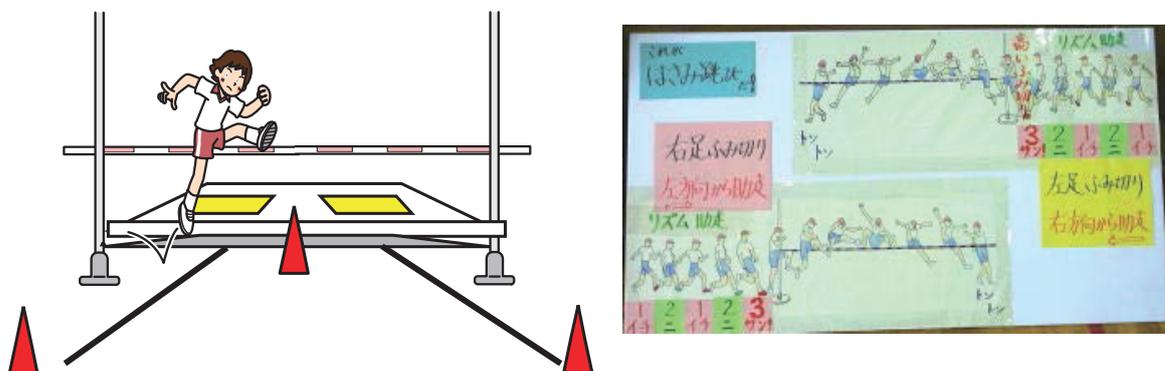
子供たちは、4年生で初めてタグラグビーを学習するため、低学年までの学習を生かして、単元の最初にタグ取り鬼ごっこや宝運びゲームを取り入れ、タグの扱いに慣れたり、相手にタッチされないように考えて走り込んだりすることができるようにした。

タグ取り鬼ごっこでは、鬼の動きをよく見てタグを取られない場所へ走ったり、鬼のいないところへ逃げたりすることで、「どこへ」動くよいかを考えることができた。また、宝運びゲームでも、宝（玉入れ用のボール）を向こう側のゴールまで運ぶために、相手の動きをよく見て走り込んだり、フェイントをかけて相手を交わしたりする動きが自然と見られた。また、走り込んで得点を決める喜びも味わうことができ、タグラグビーへの意欲にもつながった。

② 6年 走り高跳び

1グループあたりの場の設定は、下図(図1)のとおりであり、助走する方向を、床にビニールテープを貼って示し、入射角は45度とした。

【図1 グループの練習の場の設定】

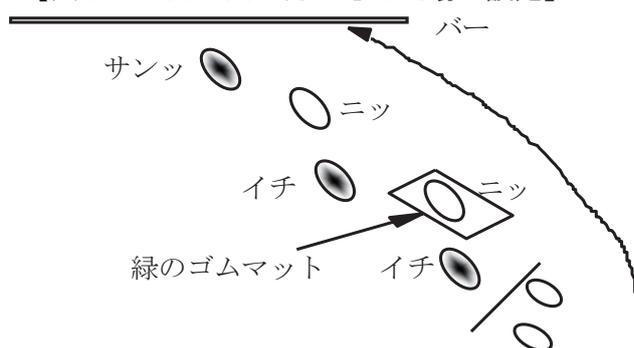


第3時において、課題を「強い踏み切り」にして練習を行った。5歩助走にて、リズムとして「イチ．ニッ．イチ．ニッ．サンッ！」を言いながら練習をした。

子供たちに、5歩のリズムの前半「イチ．ニッ」と後半「イチ．ニッ．サンッ！」のリズムは同じリズムかどうかを、示範を見せながら考えさせたところ、子供たちは、後半の「イチ．ニッ．サンッ！」すなわち踏み切り寸前の方がリズムが速くなる、というように結論づけた。

そこで、リズムが速くなる後半の3歩を意識させるために、緑の滑り止めマットを敷くことにした(図2)。緑のマットを前半の2歩目に置き、それを踏んでから、リズムを速くして跳べるようにという意図で練習をさせた。その結果、前時まで75cmしか跳べなかった児童が、この時間に95cmをクリアすることができた。

【図2 一人一人の力に応じた場の設定】



振り上げ足の動作がうまくいかない児童には、ボールをネットに入れて適度な高さにつるし、ジャンプして踏み切ってから、「振り上げ足」「ぬき足(踏み切り足)」の順に、下方から上方に2度蹴る動作を行わせた。

その結果、振り上げ足の動作を習得し、はさみ跳びで跳べる児童が増えた。

(2) 技能向上に結び付く思考・判断を高める工夫

① 4年 タグラグビー

自分の課題を明らかにするためには、目指す動きと自分の動きの違いをとらえる必要がある。どこが違うのか、何が違うのかを考えたり、よりうまく動くためにはどうするとよいのかを考えたりすることで、自分や自分のチームの課題として、よりよい動きを粘り強く追求することにつながると考えている。

そこで、タグラグビーの授業では、前時までのゲームの様子からうまく攻めることができなかった場面を提示し、うまく攻めることができた時と何が違うのか、また、うまく攻めるにはどうするとよいのかを考えさせてから課題提示を行った。

第4時の授業では、前時のゲームの様子から、ボールを持ったがゴールに向かって走り込んでもすぐにタグを取られてしまい、うまく攻めることができない場面が多く見られた。また、子供たちのふり返りでもタグを取られ、トライまで行くことがで



①タグを取られた場面



②トライが決まった場面

きなかったという思いを発言する児童も多くいた。タグを取られてしまった場面とうまくトライが決まった場面を提示し、その2つの場面の比較から何が違うのか、「どこへ」動くときよいのかを考えさせて課題提示を行った。

前頁写真①の場面では、ボールを持ったときに相手がいるところへ走り込んでしまったために、タグを取られてしまったが、写真②の場面では、相手がないスペースに走り込んでいるのでタグを取られずにトライすることができた。この比較によって、子供たちは相手がないスペースに走り込とよいことに気付き、第4時はこの動きを課題として設定した。

また、課題となる場面をイメージすることが難しい子供たちもいるため、写真で提示した場面をモデリングし、ボールを持っている子の後ろに全員が立ち、自分がボールを持ったらどう動くときよいかを考えさせるようにした。こうすることで、ボールを持ったときどこへどう動くときよいかを考えやすく、相手のいないスペースに走り込むとよいことを理解することができた。

目指す姿が明らかになり、「手がかり」がつかめていても、動きにはなかなかつながらないことが多い。そこで、目指す動きのイメージをよりつかむことができるように、実際の動きをシミュレーションさせ、この場面では「こんな感じで動くといいんだな。」ということを感じさせることが大切であると考えた。

タグラグビーの第4時では、目指す動きを明らかにした後、空いているスペースを見つけるためには、ボールを持ったときにどうするとよいかを考えさせた。子供たちからは、

- ・ 周りをみるといいなあ。
- ・ 体をゴールの方に向けるといいな。
- ・ ゴールの方を見ると、相手の位置が分かるよ。

という意見が出され、その動きをシミュレーションした。シミュレーションすることによって、「こうすれば空いているスペースを見つけられるのだな。」という「手ごたえ」をもってゲームに臨むことができるようにした。このように、目指す動きのイメージをとらえてからゲームに臨むことによって、ボールを持ったときの動きが分かり、課題である空いているスペースを見つけて走り込む姿が増えてきた。



モデリングを通して
目指す動きを考える場面

(3) 教師や学習者相互による適切な評価

① 6年 走り高跳び

走り高跳びは個人競技であり、個人の目標記録をクリアできるように練習をするのだが、そこにグループでの学び合い、すなわち学習者相互による評価を仕組むため、「グループ得点(平

均得点) 」を毎時間出すこととした。

それにより、子供たちは、グループ間で競い合う意識が高まり、みんなで記録を伸ばしてグループ得点(平均得点)を上げようと、練習の場からペア活動はもちろんのこと、グループ内での教え合いを熱心に行う姿が見られた。

前出の「ボールをネットに入れて、『振り上げ足』『ぬき足(踏み切り足)』の順に、下方から上方に2度蹴る動作の練習」では、この練習によって、子供たちは、足の動きに合わせて「はいっ、右、左」と声をかけ合うとともに、運動後に「右、左とできていたよ」と評価したり、「今、足の高さはこれぐらいだったよ」と、支柱を使って高さを示したりした。

この相互評価が活発になるにつれて、仲間の運動に合わせてリズム言葉をかけたり助言したりする相互援助活動も活発に行われるようになってきた。



仲間の跳び方を観察するリーダー



マット上の長方形は、着地の目安

② 4年 タグラグビー

動きを高めていくためには、仲間同士の教え合いがとても重要である。そこで、グループの課題となる動きの追求の視点を誰もがもち、その視点でチームの子の動きや他のチームの子の動きを見るように指導し、より効果的な相互援助活動を目指してきた。

ゲーム中、目指す動きができるようにするためにはどんな声をかけるとよいかを考えさせた。課題提示の時に、モデルチームの子の動きに合わせて自分だったらボールを持っている子にどんな声をかけるかを言わせた。その時、子供たちは、「右。」「左。」「あっちが空いているよ。」「前に走れ。」など、相手がいない走り込むことができる場所を教える声を出していた。こうした声を価値付け、ゲームに生かせるようにした。

その結果、子供たち同士がゲームの様相や仲間の動きぶりを客観的に見ることができ、学習中に声をかけ合うことにより、ゲームに消極的であった子も、相手がいないところへ思い切り走り込む姿が見られるようになってきた。

タグラグビーノート⑥

名前 []

<タグラグビー>

★ボールを持ったとき、何をしますか。

何を どのへ 相手がいなスペースへ走りこえ!

★いできないとき、どうしますか。

何を どのへ(声)に

ゴールの近くにいる味方にパスをする。

★今日のじゆんの感想を書こう!(リーグ戦に向けてのいきごも書こう!)

今日は 1回勝ったのでよかったです。

多くとく点の入ったAチームを見ていると、パスが多くあり、パスをもらったらすぐ空いているスペースに走りこんでいます。次回からリーグ戦なので、そのこつをまねして多く勝ちたいです。

【タグラグビーノート】

今日は、1回勝ったのでよかったです。多くとく点の入ったAチームを見ていると、パスが多くあり、パスをもらったらすぐ空いているスペースに走りこんでいます。次回からリーグ戦なので、そのこつをまねして多く勝ちたいです。

教師は、子供たちが、「ゲームで勝つための目指す動きができていくかどうか」という共通の視点で動きを見ることができるよう、意図的に子供の声を価値付け、方向付けをしていく。審判担当の時には、他のチームの動きを見ることも大切にし、トライをたくさん決めている子やチームの動きを見て、どんな動きがトライにつながるのかを考えさせることができた。ある児童のタグラグビーノート(学習カード)からは、ボールを持った子がすぐに空いているスペースに走り込んだり、パスをつないでトライにつなげたりしている動きを自分たちのチームにも生かしていこうとしていたことが分かった。このチームは、誰がボールを持っても空いているスペースに向かってどんどん走り込み、タグされたらパスをつないでいた。そして、全員がトライをすることができた。仲間の動きを見て学ぶことで自分たちの動きを高めていくことができたこととらえている。

6 研究の成果と課題

4年タグラグビーの学習を終えた子供たちの感想には、楽しかった内容として「トライができたこと」「最初はうまくできななかったチームの子がトライを決めたこと」「勝つためにチームで作戦を考えたこと」「みんなで声をかけ合えたこと」が書かれていた。

この例にあるように、本校が「できる喜びを味わい、力いっぱい運動する子」の育成を目指して取り組んできた成果と課題が、次のように明らかになってきた。

(1) 成果

- ・教材を系統的に指導するため、各学年で身に付けさせたい力をよく吟味して低学年から高学年まで見通した教材を開発し、指導計画を工夫するとともに、毎時間の課題提示を分かりやすく工夫したことにより、子供たちに目指す姿を明確にもたせることができた。
- ・一人一人の課題に応じた練習の場を設定したり(陸上運動)、運動の全体や目指す動きをイメージさせるために動きをシミュレーションして提示したり(ゲーム、ボール運動)することによって、技能向上につながる思考・判断を高めていくことができた。
- ・仲間の動きを見合ったときに伝え合う内容を明確にしたことにより、相互援助活動が具体的かつ活発になり、子供たちが相互評価を繰り返していくようになった。



(2) 課題

- ・ゲーム領域では、基底となる個人の技能の向上について、今後さらに具体的な目標をもたせたり、ゲームの様相が高まったことを評価できるような方法を考えたりしていきたい。
- ・課題設定に当たって、個人種目では、個人が追求していく課題とグループの課題との関わりが曖昧なことがあった。集団種目では、ゲームの様相を高めるためのグループの作戦と個人の動きの目当てとの関わりが不十分なこともあった。今後も、できる喜びや運動の楽しさを味わわせることができるように、適切な課題設定となるよう、指導計画を吟味していく必要がある。
- ・運動の見方を働かせた追求をさせていくためには、運動を見る目を今後も養っていく必要がある。

中学校部会

【研究主題】

「できた喜びや，仲間と共に運動する
楽しさを味わう体育授業の創造」

第6分科会

岐阜市立岐阜中央中学校

第7分科会

岐阜市立陽南中学校

第8分科会

羽島市立羽島中学校

第9分科会

各務原市立那加中学校



ふじまつり（羽島市）



河川環境楽園（各務原市）

<第6分科会>

岐阜市立岐阜中央中学校

【研究主題】

主体的に運動に取り組む生徒を育てる体育授業の創造

【日 程】

9:00 9:35 10:25 10:45 11:35 13:00 14:20 14:50 15:00

受付	公開授業①	移動等	公開授業②	昼食	研究発表	研究協議	指導講評	閉会式
----	-------	-----	-------	----	------	------	------	-----

【授業案内】

公開授業① 第1学年「器械運動・跳び箱運動」 体育館

公開授業② 第3学年「球技・バスケットボール」 体育館

【会場案内】

岐阜市立
岐阜中央中学校

〒500-8804
岐阜市京町3丁目19

<アクセス>

- JR岐阜駅下車 徒歩15分
- 名鉄岐阜駅下車 徒歩15分
- 岐阜バス（加納島線，黒野線他）
北税務署前下車
徒歩3分



【学校の概要】

岐阜市立岐阜中央中学校



所在地 〒500-8804 岐阜市京町3丁目19番地
学校長 森 社
生徒数 398名(14学級)
連絡先 TEL 058-265-1621 FAX 058-265-1622
E-mail gichu02@chuou-j.gifu-gif.ed.jp
URL <http://cms.gifu-gif.ed.jp/chuo-j/>

【学校の教育目標】

手を結び 学び合い・鍛え合う

【学校紹介】

本校は、学校再編により平成24年に伊奈波中学校と明郷中学校の生徒が通う学校として新設された学校である。岐阜市の中心部に位置し、校区には、岐阜市役所・岐阜地方裁判所・岐阜中警察署等の官公庁、テレビ局や新聞社等の報道機関、岐阜城・岐阜公園等の名所があり、歴史と伝統・文化のかおりただよふ地域である。地域の中学校への関心は大変高く、また、さまざまな教育活動にも理解があり、協力的である。今年度からコミュニティ・スクールへの移行を開始しており、家庭や地域との連携のもと、学校の教育力の向上を目指している。

生徒会が「挨拶・合唱・掃除」という三本柱を掲げ、様々な自治的な活動を展開している。校地内にあるストリートを通行される一般の方に対して気持ちのよい挨拶をしたり、毎朝どの教室からも聞こえてくる合唱が地域の方の心を和ませたりするなど、積極的に地域へ発信し、地域から親しまれている。また、地区生徒会も充実しており、地域への関心をもって地域行事に積極的に参加できる生徒が多く、地域にも貢献している。

1 研究主題

主体的に運動に取り組む生徒を育てる体育授業の創造

岐阜市立岐阜中央中学校
岐阜市中学校保健体育研究会

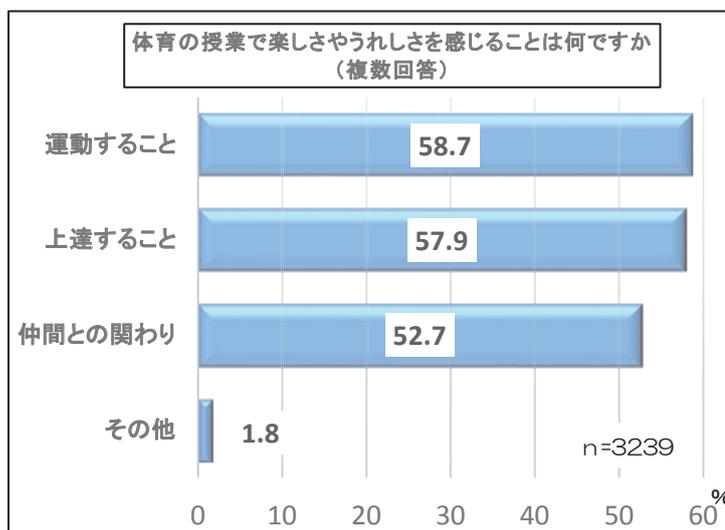
2 研究主題設定の理由

学習指導要領には、保健体育科の目標として「心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。」と示されている。この目標を受け、本大会のテーマにも「生涯にわたり豊かなスポーツライフを実現させる」ことが掲げられていることから、第6分科会では、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力」として身に付けさせたい「態度」「思考・判断」「技能」「知識」の4つの力から、特に、「主体的に運動に取り組む態度」を育てることに焦点をおいて実践に取り組んだ。

岐阜県では、これまで、体育の授業を「運動の学習／運動による集団の学習」と考えて指導してきた。授業構造の中核を「運動の学習」、基盤を「集団の学習」とし、この二つの過程は相互に影響し合いながら発展していくものであると考え、実践が重ねられてきた。集団には、「所属」「同調」「協力」「連帯」の段階があり、「課題」「役割」「きまり」「仲間」の集団の成立条件を整えることが、集団の学習への動機付けになり、集団的活動を通じて運動に親しむ資質や能力を育てることにつながると考えて実践に取り組んできた。

岐阜市内の中学3年生3,297名のうち、「体育の授業で楽しさやうれしさを感じたことがある」と答えた3,239名にその理由を聞いたところ、運動することや上達することとともに、仲間と関わり合う中で、運動の楽しさや達成感を共有できた喜びを感じている生徒が多くいることがわかった(図1)。このような生徒の実態やこれまでの実践を踏まえ、第6分科会では、社会性が高まる中学生期において、仲間と積極的に関わりながら主体的に運動に取り組む態度を身に付けさせることは、

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育て、豊かなスポーツライフの実現につながるものと考えて実践に取り組んだ。本研究では、集団の様子をとらえ、集団の段階に応じた指導を行うことで学習集団を育て、課題にあった学習形態を工夫したり、運動の特性を踏まえて、指導過程の中に仲間の学習を援助する活動を意図的に位置付けたりすることによって、生徒の学習



意欲が高まり、仲間とともに主体的に運動に取り組む態度を育てることができると考え、有効な指導内容や方法を明らかにすることを旨として研究主題を設定した。

3 研究の仮説

集団発達のみちすじ（「所属」→「同調」→「協力」→「連帯」）に即して、集団の成立条件を整えることによって学習集団の発達を促すことができる。また、運動の特性や学習課題に合わせて、仲間の活動を援助する活動（これ以降、相互援助活動と記す）や言語活動を指導過程の中に位置付けて指導をすることにより、仲間に積極的に関わる態度が身に付き、運動の楽しさやできた喜びを味わいながら、仲間と共に主体的に運動に取り組む生徒を育てることができる。

4 研究内容

仲間と相互に援助し合い主体的な活動ができる学習集団の育成

- (1) 集団の発達のみちすじに即した指導
- (2) 主体的な学びを生み出す相互援助活動

5 研究実践

仲間と相互に援助し合い主体的な活動ができる学習集団の育成
 体育の授業では、集団種目だけでなく、個人種目においても運動の特性を踏まえて小グループを編成し学習させた。グループは、グループ内異質、グループ間等質を基本として構成した。また、グループ内には、リーダー（L）、技能観察係（PO）、態度観察係（MO）の他、学習に必要な役割を分担させた。

表1 集団の発達のみちすじと学習集団の成立条件

段階		所属	同調	協力	連帯
視点					
条件	グループの様子	一人ひとりがバラバラで、グループのまとまりがない。	リーダーの指示や仲間の呼びかけに従ってそろって行動できる。	進んで教え合い、励まし合いができ、グループに活気が見られる。	一人一人に課題を要求し合い、団結や連帯の雰囲気が見られる。
	課題	課題への意識がない。 勝とうという気持ちがない。	課題への意識が弱い。 勝とうという気持ちがない。	課題を意識し、互いの技能を問題とする。 勝とうという気持ちがある。	課題を意識し、互いに力量を発揮しているかを問題とする。 勝とうという気持ちがある。
	役割	活動の指示や点検ができない。	活動の指示や学習結果の点検ができる。	活動の様子から指示や援助ができる。	温かく援助したり厳しく要求したりできる。
	きまり	きまりがない。 きまりが守れない。	そろって活動するためのきまりが守れる。	教え合い、励まし合いのきまりを定めて、守ることができる。	勝つために必要なきまりを守れる。
	仲間意識	一緒に活動しようという気持ちがない。	一緒に活動しようとする気持ちがある。	仲間のよさを認め合う気持ちがある。	共に高めようとする気持ちがある。
言語活動	意見が出ない。 話し合いにならない。	思いつきの発言でまともでない。 話し合いの進め方が整っていないが、発言がつかぬ。	話題をしばらく、活発に話し合いができる。	資料をもとにして、課題を解決するための話し合いができる。	

リーダーには、主に学習活動の推進や活動中における見合い・教え合いの促進を図る役割を意識させ、POとMOには、グループの成果や課題を仲間に伝える役割を意識するように指導した。さらに、学習集団の成立条件を「課題」「役割」「きまり」「仲間」の4条件とし、集団での学習活動への動機付けを図った。

(1) 集団の発達のみちすじに即した指導

① 課題のもち方に関する指導

【実践例：中学校第3学年女子 リズムダンス】

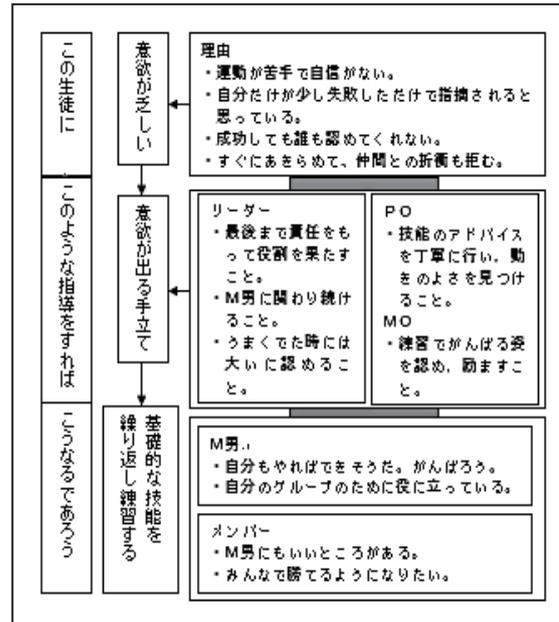
本実践における学習集団の段階は、第1時においては「同調」の段階にあり、第2時では、どのペアも意見を出し合いながら即興でリズムに合わせて踊ることができた。第3時に、グループでの作品づくりに入るにあたり、グループ課題への意識を強化するために、発表会において「アンコール作品」に選ばれることを学習課題として提示した。

本実践で取り上げたグループのM男は、技能があまり身に付いておらず、うまくできないため、学習の始めは活動に消極的であった。そのためグループになじめず、練習場所にはいるが仲間と一緒に活動することには抵抗を感じていた。リーダーは、「M男をなんとかしたいが、どうしていいかわからない」と戸惑いを見せていた。そこで、表4のような仮説を立て、M男の良さを認めながら関わっていくことなどをリーダーやPO、MOなどに指導した。

また、M男には、彼の動きの良さであるリバウンド能力に着目し、ゴール下でのリバウンドシュートを重点的に練習するように指導した。徐々に技能が身に付いてきたM男は、「自分にもできそうだ」「がんばろう」という前向きな気持ちをもつことができ、ひたむきにリバウンドシュートの練習に取り組むようになった。そんなM男のがんばる様子を見て、リーダーやPOも真剣に声をかけ続けた。

すると、M男がゲームで何度か得点に絡むようになり、積極的にシュートをねらう動きが多くなった。リーグ戦では、「M男がいなければ勝てない」とリーダーやメンバーが言うほどまでにゲームで活躍することができるようになり、グループに位置付いた。リーダーを中心とした役割の遂行が、技能の向上やグループの集団としての凝集度を高めることにつながった。

表4 M男に対するリーダー等の仲間の関わり



③ きまりのもち方に関する指導

体育の学習において、集団の様子をとらえて、「きまり」を位置付けた。全員できまりを守り、安全に効率よく運動に取り組む集団や、心と心が通い合い、意欲的に学習に向かう集団に育てることを目指して指導した。

グループのきまりは、各グループでMOを中心に話し合っ て決め、MOカード(表5)を活用して、きまりを守る態度の向上と行動の強化を図った。

きまりの内容は、練習方法や行動の規律に関することから、集団の発達に即して、仲間への関わりや心情的な結びつきを目指すきまりの内容へと発展させた。「維持」→「融和」→「団結」へと発展

表5 MOカード(例)

MOカード		年()組()グループ		MO氏名()		MOの役割			
バレーボールの学習		段階1				段階2			
きまり①	①集合、移動はかけ足で早くできる。								
きまり②	②仲間にアドバイスや模範が盛んでできる。								
きまり③	③グループ全体で意見が書える。								
きまり	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時	第9時
役割	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日
氏名	① ② ③	① ② ③	① ② ③	① ② ③	① ② ③	① ② ③	① ② ③	① ② ③	① ② ③
L									
PO									
MO									
氏名	◎の数	◎の数	◎の数	◎の数	◎の数	◎の数	◎の数	◎の数	◎の数
達成率	%	%	%	%	%	%	%	%	%

MOの役割
 (1) 練習は、◎を履きしてしっか守れた! ○守れた! ×守れなかったの記録で行う。
 (2) MOの人は、1時間の練習の様子を観察し、グループ反響を自由をもって記入する。しっか観察し、必正に記録することが大切です。
 (3) MOの人は、反省の結果を次の時間にグループ討論会に報告し、グループ異議決めに賛成することが大切です。
 (4) リーダー、MOは、きまりを常に観察し、グループ全体に呼びかけていくことが大切です。

【実践例：中学校第2学年女子 マット運動】
維持の段階 ～そろって活動するためのきまり～
【維持の段階におけるきまりの例】

- ・ 10秒以内に素早く集合し、美しく列を揃えて整列することができる。
- ・ ふざけたり、他事をしたりしない。
- ・ Lの指示でそろって行動することができる。

仲間の意識がばらばらな段階では、リーダーを中心にそろって活動するためのきまりを設定した。このきまりを守ることで、効率よく安全に学習することができ、失敗した相手を笑うこともなくなり、安心して活動できるようになった。

融和の段階～教え合い、励まし合いができるためのきまり～
【融和の段階におけるきまりの例】

- ・ 失敗した時に、〇〇という励ましの声をかける。
- ・ 〇回以上アドバイスする。

写真1 グループ会の様子



リーダーの指示でそろって活動ができる段階では、教え合いや励まし合いができる仲間になるためのきまりを考え、具体的に振り返りができるきまりを設定した。このきまりを守ることで、練習の中で、仲間の試技を真剣に観て、仲間の技能向上をめざして、活発にアドバイスをし合う姿になった。

団結の段階 ～仲間が団結し、より高め合えるためのきまり～
【団結の段階におけるきまりの例】

- ・ 誰に対しても、常に励ましや教え合いをする。
- ・ チーム優勝めざして、技能の向上を求め、厳しい指摘をし合う。
- ・ 仲間の成功を心から喜び、仲間の失敗をグループ全員で真剣に考える。

教え合いや励まし合いができる段階では、仲間が勝利に向かって心と心が結びつきを強くできるようなきまりを設定した。このきまりを守ることで、うまくなるために仲間に真剣に関わったり、仲間の技能の伸びや集団の高まりを心から認め合ったりする仲間になった。

④ 仲間の心情的な結びつきを高める指導

【実践例：中学校3年生男子 バレーボール】

集団が高まるためには、心情的な結びつきを高めることが重要である。そこで、表6のように、役割に応じた仲間への関わりを指導した。特にリーダーには、援助を要するメンバーに対してどのように関わるのか、グループで何を大切にするのか、POには、技能面の弱さがある子に丁寧にアドバイスすること、MOには、集団を高めるためにどのような関わりが必要かを考えさせた。

表6 仲間への関わり

<p>リーダー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仲間に積極的に関わることができる ・ 練習の時には、POやMOと協力して積極的に関わり続けること。 ・ 毎時間、何ができるようになったのか、変化を確認すること。 	<p>PO</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ベア練習の時は、技能面の弱さがある子と必ずペアを組み、丁寧にアドバイスをすること。 <p>MO</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 一生懸命にがんばる仲間を認め、励ましていくこと。
<p>ナイスプレイ、得点時に全員でハイタッチ</p>	

K男は、技能が低く、自信がないことから消極的な学習姿勢が目立ち、仲間と共に学習することに課題が見られた。バレーボールの導入時も、うまくボールが上がらないと、投げやりに

なって仲間と関わらずに一人で練習する様子があった。グループの雰囲気も、お互いを認め合うことに弱さが見られた。そこで、役割に応じて仲間への関わり方を指導した。さらに、全体指導として、得点が入った時やナイスプレーとリーダーが判断したときには、必ず全員でハイタッチし、みんなで喜び合うように指導した。

LやPOが粘り強く関わることで、K男のパスの技能が徐々にうまくなって失敗が減り、グループの雰囲気もよくなってきた。また、K男がボールのミート感覚に優れていることにPOが気づき、積極的に関わりながら一緒にサーブ練習をすることで、サーブ成功率が向上した。K男がサービスエースをとるたびに、リーダーやMOが声をかけてメンバー全員でハイタッチをするなどの関わり方の積み重ねにより、K男のチームは、お互いに励ましたり、教え合ったりできるようになった(表7)。このような仲間同士の関わりは、他のグループでも見られ、認め励まし合いながら共に学習しようとする意識の高まりにつながった。

表7 MO(左)とK男(右)の学習カードの記述

<p>今日はみんながナイスプレーを認める雰囲気 があった。自分自身も K男 がいい サーブがスパイクを打ったときにたくさん 人認めることができた。これからもいい 雰囲気 でハイタッチや声かけを大切に していきたい。</p>	<p>僕は、女台めはバレーボールがうまい うまくできなかったけど、 L さんや、 PO さんに教えてもらい 牛丼に「心をしっかりと伸ばして月杓を つかってうつつこと」を言われ、それをわら たらうまくできることかいてきました。いろんがんに サーブがうまいと言われ、とても嬉しかったです。</p>
---	--

(2) 主体的な学びを生み出す相互援助活動

① 主体的に課題解決に向かうための小集団学習のあり方

【実践例：中学校第1学年男子 跳び箱運動 ～頭はね跳び～】

生徒が基礎的・基本的な知識・技能を習得するためには、「できるようになりたい」という意欲をもって主体的に練習に取り組めるようにしていくことが重要である。そこで、小集団学習の形態(表8)を工夫し、学び方を重点に指導した。

表8 小集団学習の形態

A 「ペア・トリオ練習」	効率よく繰り返し練習することで、自分の課題を見付け、課題解決に向かう。
B 「課題別練習」	課題に応じて、よりの確なアドバイスを個別にしなが、繰り返し練習することで課題解決に向かう。

Aについては、練習回数を増やしたり、課題を表出したりすることで意欲的に練習することをねらった。ペア練習の際は、同じ動きを続けて繰り返し行い、一定の成果が出てきたところで交代して練習するように助言した。トリオ練習の際は、一人または二人が視点を明確にして練習を観察し、よさや課題を伝える時間を設けた。

Bについては、様々な課題に対して適した練習方法を選択できるように練習方法を例示し、互いにアドバイスしながら繰り返し練習を行った。その際、試技者は観て欲しい視点を伝え、自分なりの運動のとらえを伝えるようにした。観察者は、結果を伝え、課題に対してアドバイスするようにした。

試技をする際に、自分なりの運動のとらえを伝えることにより、自分の運動経過について深

く思考・判断するようになり、そのことが、「できるようになりたい」という意欲にもつながってきた。観察者は、視点が明確になることで、試技を集中して観察し、積極的にアドバイスする姿が表れてきた。このように、互いに援助しながら練習する学び方を指導することで、主体的に学び合う生徒の姿が増えてきた。

【相互援助活動による学び方（B：課題別練習）】

《試技者》

- ① 三つの視点の中から観てもらおうポイントを伝える。

A：「いつ（動きのタイミング）」 B：「どこが・どこへ（身体の部位・動きの方向）」 C：「どのように（動きの感覚）」

～例～「着手のとき腰が肩より高くなっているか観ていてね。（B：身体の部位）」

- ② 試技の後に、観てもらおうポイントに関わった内容についてどうであったか、自分なりの感覚を伝えてから、試技の結果を聞く。

～例～「踏み切りを強くして、さっきより腰の位置は高くなっていたと思うけれど、どうだったかな。」

《観察者》

- ① 観るポイントを意識し、最も観察しやすい場所で集中して試技を観察する。

※踏切板から跳び箱の前方付近で、腰を低くして着手の位置と腰の高さの違いを観る。

- ② 運動を観察した後に、視点に関わって自分の身体などを使って結果を伝える。また、結果に加えて、よさや課題を伝えたり的確なアドバイスをしたりする。

～例～「着手したとき、腰は肩より高くなっていたよ。この位（手で高さを示す）まで腰が上がっていたよ。でも、もう少し高くしないと腰から折れてしまい、第2局面で跳ねられないから、踏切をもっと強くしたらどうかなあ。」

② 言語活動を位置付けた学習過程の工夫

【実践例：中学校第3学年男子 跳び箱運動 ～前方倒立回転跳び～】

言語活動を、単元を通して一単位時間の学習過程に位置付けて実践していくことで、思考力・判断力・表現力を育み、技能の習得につながると考えた。そこで、生徒の実態から、単元のどの段階で、どのような言語活動を行うのかを検討して位置付けた。そして、単元を通して言語活動を意図的に用いた学習過程を行うことにした。

「保健体育科における言語活動」を4つに大別し、教具を用いた言語活動として、学習過程に位置付けて実践することにした。

保健体育科における言語活動	用いる教具
A：自分なりの運動のとらえを表現する。	身振り・モデル人形など
B：動きの観察結果を正確に伝える。	模範図・ビデオカメラなど
C：運動の結果を分析・評価する。	ゲーム記録や得点表など
D：練習方法を選択したり、作戦を立てたりする。	作戦ボード・段階表など

器械運動では、自分の動きを自分で観ることは難しく、それを補うために言語活動を用いた練習を行うことにした。単元前半は、技能の習得や器械運動という運動への不慣れさがあることから、容易に用いることのできるモデル人形や自分の身体を使って、自分なりの運動のとらえ（感覚）を伝える言語活動を行うことにした。第6時の中間競技会では、撮影したテスト会の様子をVTRで流し、自分の運動経過を正確に把握して得点表をもとに評価した。第7・8時では、練習方法を選択できるように段階表（表9）を示し、課題別練習を行って課題に応じた練習ができるようにした（表10）。

表9 前方倒立回転跳びの模範図と段階表

前方倒立回転跳びの技術

☆必要と技術を、黒で書きこもう (基礎・増強)
☆見付けた技術ポイントを、
技術の枠の外に赤で書き込んでいこう (思考・理解)
名前【 】

前方倒立回転跳び【段階表】

段階	要	技術・技術ポイント	練習方法	注意理由(状態)
5	体が一直線で倒立姿勢を軽跳し、ダイナミックに回転して着地	G: 手の伸張なし マットを「フック」と共に上へ A: スピードに達した時に腕を伸ばす F: 膝の屈曲を減らす D: 膝を伸ばす D: 膝を伸ばす D: 膝を伸ばす	□飛び毎の高さを上げる (前脚の軸足の軸で行う) □踏み切り前を下げる □着地の衝撃を減らす □セーフティマット練習	□膝の伸張が足りないか □膝の屈曲が足りないか □膝の伸ばし方が足りないか □膝の伸ばし方が足りないか
4	大きな勢いから、膝と腕が伸びて大きく回転し着地	D: 膝の上へ 天井を覗くように E: 天井を覗くように F: 腕を伸ばす F: 腕を伸ばす F: 腕を伸ばす	□膝の上へ □天井を覗くように □天井を覗くように □天井を覗くように □天井を覗くように	□膝の上へ □天井を覗くように □天井を覗くように □天井を覗くように □天井を覗くように
3	膝と腕を伸ばして回転して着地	C: 腕で体支持 腕の上から振り下ろすように D: 膝の上へ E: 天井を覗くように F: 腕を伸ばす	□腕で体支持 □腕の上から振り下ろすように □膝の上へ □天井を覗くように □天井を覗くように	□腕で体支持 □腕の上から振り下ろすように □膝の上へ □天井を覗くように □天井を覗くように
2	膝を高く上げ回転し、腕は伸ばして倒立姿勢を軽跳し着地(2・5回)	A: 膝を一歩空けて トットトーン「ドーン」 C: 腕で体支持 腕を伸ばすようにを入れて	□膝を一歩空けて □トットトーン「ドーン」 □腕で体支持 □腕を伸ばすようにを入れて	□膝を一歩空けて □トットトーン「ドーン」 □腕で体支持 □腕を伸ばすようにを入れて
1	お上で回転する → 膝は伸ばして(1・5回)	<膝を伸ばすことができる> ☆補助倒立・ブリッジ(お上) ☆踏み切り練習	□膝を伸ばすことができる □補助倒立・ブリッジ(お上) □踏み切り練習	□膝を伸ばすことができる □補助倒立・ブリッジ(お上) □踏み切り練習

表10 言語活動を位置付けた単元の流れ

第2～5時：言語活動A・B
 <<前半練習時>>
モデル人形や**自分の身体**を使ったり**模範図**を指し示したりしながら、どこがどのような状態になっているのか説明する。

第6時：言語活動B・C
 <<中間競技会>>
VTRを用いて自分やグループの競技結果を伝え合い、**得点表**を用いて自分の運動を評価する。

第7・8時：言語活動C・D
 <<前半・後半練習時>>
段階表を用いて、練習方法を選択して運動する。また、**得点表**に照らし合わせて運動の様子を分析・評価し、改善していく。

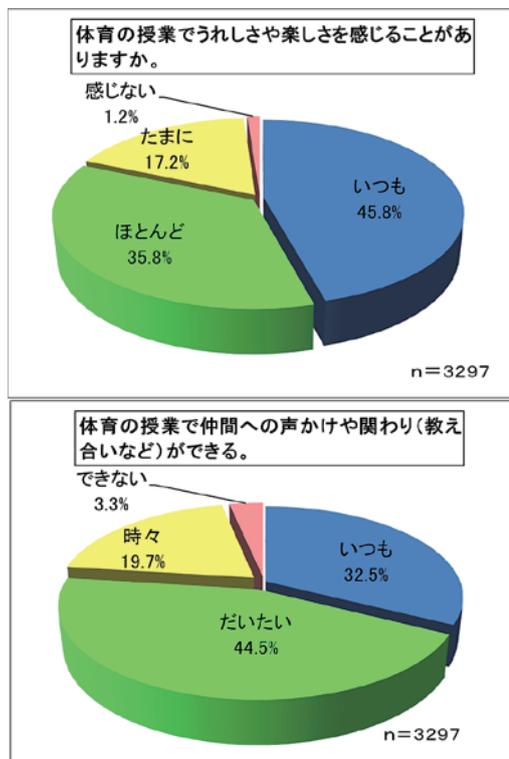
このように言語活動を精選し、単元を通して言語活動を用いて練習し合うことで、生徒が仲間と関わりながら主体的に練習し、運動に親しみ、技能を習得できようになってきた。

6 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・岐阜市内で行った体育の授業における意識調査(図3)では、81.6%の生徒が体育の授業で「いつも」または「ほとんど」うれしさや楽しさを感じると答えている。さらに、仲間と積極的に関わることに「できる」と肯定的に答えた生徒も多かった。このことは、集団の学習条件を整え、仲間学習することへの動機付けを図り、集団を高めながら運動面の指導を進めてきた成果であると考えられる。
- ・学習過程において研究会や反省会、相互援助活動を意図的に位置付けて指導したことにより、学習カードや記録などを活用しながら、活発に意見を交流できる生徒が育っている。さらに、リーダーを中心としグループ学習を指導したことにより、学習内容に応じてペアやトリオなどの学習形態の変化にも容易に対応することができ、仲間と関わり合いながら主体的に学習に取り組む姿が多く見られた。

図3 体育の授業における意識調査



(2) 課題

- ・仲間と関わり合いながら学習する中で、技能を向上させるために動きを見合っ助言や評価をする際に、「何を」「どのように」「どんな方法で」関わらせるのか、動きを観察する視点や助言などをよりの確に行わせるための手だてについて、さらに明らかにしていきたい。

【MEMO】

A series of horizontal dashed lines for writing.

<第7分科会>

岐阜市立陽南中学校

【研究主題】

運動技能の高まりを実感し、仲間と共に運動に親しむ生徒の育成

【日 程】

9:00 9:40 10:30 10:45 11:35 13:00 14:15 14:50 15:00

受 付	公 開 授 業 ①	移 動 等	公 開 授 業 ②	昼 食	研 究 発 表	研 究 協 議	指 導 講 評	閉 会 式
--------	-----------------------	-------------	-----------------------	--------	------------------	------------------	------------------	-------------

【授業案内】

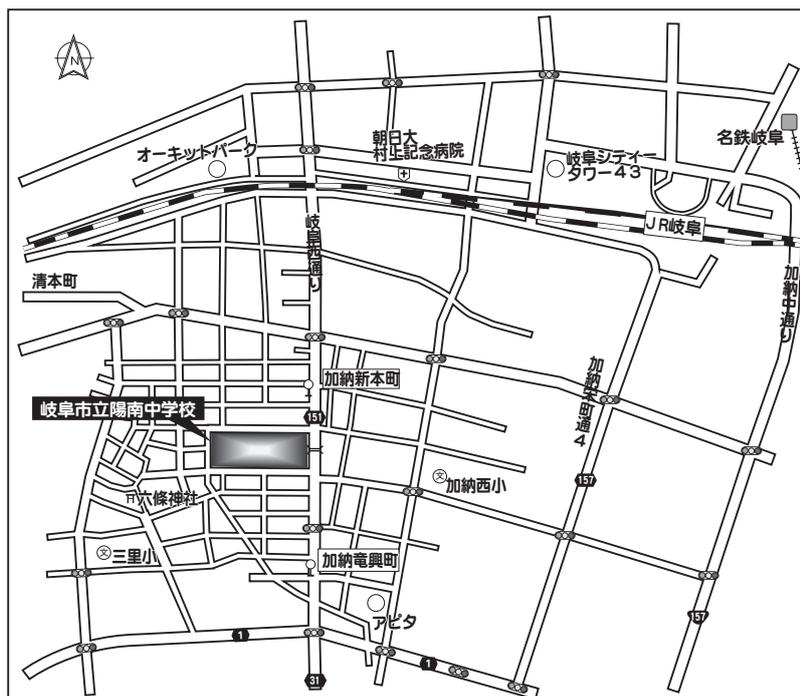
- 公開授業① 第3学年「現代的なリズムのダンス」 体育館
第2学年「体育理論」 第1ワークスペース（西棟3階）
- 公開授業② 第3学年「創作ダンス」 体育館

岐阜市立 陽南中学校

〒500-8353
岐阜市六条東一丁目
1番1号

<アクセス>

- JR岐阜駅下車 徒歩20分
- 名鉄岐阜駅下車 徒歩30分
- バス
加納新本町下車 徒歩5分
- タクシー JR岐阜駅より
約1.8km 7分



【学校の概要】

岐阜市立陽南中学校



所在地 〒500-8353 岐阜市六条東一丁目1番1号
校長 青木 廣志
生徒数 563名（19学級）
連絡先 TEL 058-274-0055 FAX 058-274-0083
E-mail gichu16@younan-j.gifu-gif.ed.jp
URL <http://cms.gifu-gif.ed.jp/younan-j/>

【学校の教育目標】

課題に向かって、主体的に学習に取り組む生徒
ねばり強く心身を鍛える生徒
思いやりをもって、仲間と協力できる生徒

【学校紹介】

本校は、加納中学校から分離して昭和56年4月に「岐阜市立陽南中学校」として開校した。この『陽南』の二文字には、岐阜市（岐阜の古い地名の一つである「岐陽」）の南部に位置する学校であるということ、そして太陽の光をたくさん浴びて自ら若木がすくすく育つように、生徒たちが明るく、力強く、生き生きと未来を目指して育てほしいという願いが込められている。職員はこの『陽南』に込められた願いを大切に、明るく、さわやかで、温かさのある陽南中学校を目指して、日々子供たちと向き合っており取り組んでいる。また、生徒たちも三権分立のシステムとなっている生徒会を中心に、「自分たちで自分たちの生活をよりよくしていくんだ」という想いを大切にして取り組んでいる。

1 研究主題

運動技能の高まりを実感し、仲間と共に運動に親しむ生徒の育成

岐阜市立陽南中学校

2 研究主題設定の理由

大会主題である「生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む資質や能力を育てる体育授業」を受け、中学校部会では、研究主題を「できた喜びや仲間と共に運動する楽しさを味わう体育授業の創造」とし、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てることを願い研究を進めている。

第7分科会では、研究主題を「運動技能の高まりを実感し、仲間と共に運動に親しむ生徒の育成」とし、県の研究実践に示された研究内容の① 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成と、③ 技能の向上に結び付く思考・判断を高める工夫に焦点を当て研究を進めることにした。もちろん、他の3つの研究内容についても、関連させて研究に盛り込んでいくことにした。

研究主題にあげている「運動技能の高まりを実感」させることで、満足感や充実感を得られ、次の運動への意欲につながると考えた。そこで、毎時間の学習課題や指導内容を明らかにするため、運動が上達する過程を「様相や姿」でとらえることや種目のもつ技術内容を構造的に分析することで、基本的な指導過程や単元の指導計画の作成に取り組んできた。

また、運動が上達していく過程の中で生じる技術的な「つまずき」を予想し、解決の手掛かりを提示し、生徒の状況に合ったものを選択させたり、改善ポイントを見付けさせたりするなどの活動を通して、思考・判断を高め、意欲的に取り組むことができると考えた。

第7分科会では、運動領域として「ダンス」を取り上げ、「創作ダンス」と「現代的なリズムのダンス」の内容について研究を進めることとした。現行の学習指導要領では、「ダンス」は全ての生徒に履修させることになっている。男子の履修については、他の領域に比べて運動技能の高まりを実感しにくく、苦手意識をもつ生徒も少なくないことから、その指導の在り方について課題を抱えている。今回の実践が、男子の「ダンス」領域の取り扱いに少しでも参考になることを願っている。

研究主題にあげている「仲間と共に運動に親しむ生徒の育成」は、中学校部会の研究主題で述べている「仲間と共に運動する楽しさ」と同様の趣旨で取り上げている。これは、岐阜県の中学校体育において、体育の授業過程を運動に関する学習過程と学習集団の相互作用の過程としてとらえているからである。つまり、体育とは、「集団による運動を高めるための学習であり、運動を通して集団を向上させるための学習である」ととらえ、グループでの学習は、単なる方法としてではなく、学習内容として位置付けている。岐阜県のこれまでの研究成果を生かし、運動面の指導と関係付けながら、個の態度を高め、学習集団としての質を高めていくこととした。

3 研究の仮説

運動が上達する過程を踏まえた基本的指導過程を作成し、運動技能の向上に結び付く段階的な指導をするとともに、運動技能や学習集団の質の高まりを実感することのできる評価をしていけば、主題に迫ることができる。

4 研究内容

(1) 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

① 「現代的なリズムのダンス」「創作ダンス」の基本的指導過程の作成

(2) 技能の向上に結び付く思考・判断を高める方法の工夫

① 運動技能の向上に結び付く段階的な指導

② 運動技能を高めるためのドリル練習

③ 運動技能や学習集団の質の高まりを実感させる評価の在り方

5 研究実践

○研究内容(1)について

① 基本的指導過程の作成

・運動発展を「様相」(上達する姿)でとらえる。

「(それらしく)できない」→「(それらしく)できる」→「うまくできる」→「力強くできる」

・各「様相」に近付けるための指導内容を明らかにする。

・技術内容を構造的に分析し、指導内容に位置付ける。

○研究内容(2)について

① 技能の向上に結び付く段階的な指導

・作成した基本的指導過程をもとにして、生徒の意識や運動技能の段階を踏まえ、指導時間や単位時間の指導内容や指導方法を明らかにする。

・運動技能を高めるための学び方の指導

運動技能を高めていくためには、運動の学び方を身に付けておくことが大切になる。運動の学び方を次のようにとらえている。

計画…「現在の運動技能の状況をとらえる」「課題を設定し、見通しをもつ」

実践…「設定した課題に向かって練習する」

反省…「運動技能の高まりを評価する」

この計画—実践—反省という学習過程を繰り返すことが、運動の学び方を身に付け、生徒自らが思考・判断を高めながら運動技能を高めていくことにつながると考える。

② 運動技能を高めるためのドリル練習

・現代的なリズムのダンスでは、リズムの特徴をとらえ、変化のある動きを組み合わせ、リズムに乗って体幹部を中心に全身で自由に弾んで踊る技能を磨くことになる。創作ダンスでは、テーマから表現したいイメージをとらえ、動きに変化をつけて即興的に表現することや、変化のあるひとまとまりの表現ができる技能を磨くことになる。こうした技能を磨くには、リズムの特徴をとらえて踊るよさやイメージに合わせて自由に表現するよさを繰り返し体験させることが必要であり、学習課題や学習内容に応じて、授業の中に「ドリル練習」として繰り返し体験させる場を位置付ける。

③ 運動技能や学習集団の質の高まりを実感させる評価の在り方

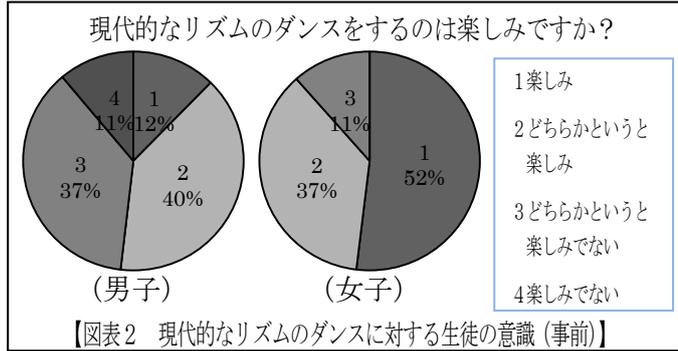
・視覚的にフィードバックする場を設ける。

・運動技能やグループの活動について、評価の視点を提示し、学習の振り返りが生徒相互にできるように工夫する。

＜実践事例(現代的なリズムのダンス) 2年生女子＞

(1) 基本的指導過程の考え方

近年、ダンスがメディアで取り上げられることが多くなったことで、生徒たちがダンスを見る機会は増えている。しかし、事前の調査(2年生男女対象)でダンスを習っている生徒は学級で0～2名であったことや、【図表2】の結果から現代的なリズムのダンスを行う



ことに対して消極的な意識をもつ男子生徒が多いこと、女子では9割の生徒が好意的な意識をもつことが分かった。回答を選択した理由(自由記述)では、楽しみであるという生徒からは、男女共通で「カッコいい」という理由が多く挙げられていた。また、「あまりやったことがない」ことが、楽しみでもあり、楽しみでないことでもあることが分かった。楽しみでない理由は、男女共通で「上手くいかないと恥ずかしい」が多かった。心情面での不安だけではなく、ダンスの特性上「勝負が分からない」という意見も少数見られた。

回答	男子の理由	女子の理由
1 楽しみ	できたらカッコいい 動くとき気持ちが乗ってきそう	仲間と踊るのが楽しそう カッコいいし憧れがある
2 どちらかという 楽しみ	TVで見たらカッコよかった	あまりやったことがない リズムを取るのが面白そう
3 どちらかという 楽しみでない	上手くできないと恥ずかしい 大勢の前でやるのが苦手	上手くできないと恥ずかしい あまりやったことがない
4 楽しみでない	リズムに乗れるか不安 あまりやったことがない	リズムが決まっているから

【図表3 現代的なリズムのダンスへの生徒の意識(事前)】

学年		1・2年		3年	
ねらい		リズムの特徴を捉え、変化のある動きを組み合わせ、リズムに乗って体幹部(重心部)を中心に全身で自由に弾んで踊る。感じを込めて踊ったりみんなで踊ったりする楽しさや喜びを味わい、イメージを捉えた表現やおどりを通して交流することに積極的に取り組めるようにする。		リズムの特徴を捉え、変化とまとまりを付けて、リズムに乗って体幹部を中心に全身で自由に弾んで踊る。感じを込めて踊ったり、みんなで自由に踊ったりする楽しさや喜びを味わい、イメージを深めた表現や踊りを通じた交流や発表することに自主的に取り組めるようにする。	
様相の発展		(できない) ⇔ それらしくできる ⇔ できる ⇔ うまくできる			
		周囲を気にせず身体を大きく動かして踊ることができる。	リズムに乗って自然に身体を弾ませながら、大きな振りで踊ることができる。	体幹部を中心に身体全体でリズムを取りながら弾むように大きな振りで踊ることができる。	
内容	リズム	リズム	・シンコペーション(裏拍にアクセントを置く)でリズムの変化をつかむ ・休止・倍速などのリズムをつかむ ・現代的なリズムの特徴を捉える(例) ロック…アフタービート(後打ち)	・崩したリズムを取り入れる	
		リズムの乗り方	・手拍子でリズムを取る(大きく腕を動かした拍手・叩く位置を前後左右に動かしながら拍手) ・体幹部を中心にリズムに乗る	・体幹部を中心にリズムに乗る(例) 体幹部や首・膝など複数の部位を同時に連動して使う	
	おどる	身体の使い方	・全身を使う ・腕を使った手踊り ・肘などの組み合わせ	・膝、肘、首、肩、胸、腰などの組み合わせ ・身体の中心部から動く(胸、へそ) ・指先、視線	
		動き方	・常に弾みながら ・スキップ、ジャンプ ・足の前後左右への開閉(腕も付け加えて)	・揺れる ・回る ・ステップを踏んで手をたたく ・ストップを入れる ・大きく動く	・体の各部位の動きをずらしたり連動させたりする ・ダイナミックなアクセントを付ける ・変化を付けて連続して踊る
	発表・交流	動き作り	・簡単な動きで繰り返し踊る	・一人一人の作品の能力を生かせる動きや相手との対応する動き等を取り入れながら、仲間との関わりをもって踊る ・身近な動きをデフォルメして踊る	
	仲間との関わり	・仲間とハイタッチ ・仲間の真似をする	・一人で自由に踊る ・複数で同じ動きや反対の動きをする ・手をつなぐ ・相手の動きに合わせてたりずらしたりする	・一人で自由に踊る ・個と群の動きを入れる ・対立させた動きを入れる	

【図表4 現代的なリズムのダンスの技能に関わる基本的指導過程】

このような生徒の実態から、ダンスに苦手意識をもつ生徒に楽しくダンスをする経験をさせたり、リズムに乗って踊ることができるようになった実感を味わわせたりすることを願い、【図表4】の現代的なリズムのダンスの基本的指導過程を作成した。

ダンスにおける様相の発展を「(できない) → それらしくできる → できる → うまくできる」ととらえた。(できない) 段階を設定したのは、技能的な面よりも「恥ずかしさ」などの心情面の不安が大きいことから、単元の始めでは、簡単なリズムや動きで踊ることで、踊ることへの抵抗感を和らげる必要があると考えたからである。

ダンスが発展する様相は、「(できない) →それらしくできる→できる→うまくできる」ととらえ、それぞれの段階における指導内容を「リズム」(リズムとリズムの乗り方)、「おどる」(身体を使い方と動き方)、「発表・交流」(動き作りと仲間との関わり)とし、発展的に位置付けた。

(2) 技能の向上に結び付く思考・判断を高める方法の工夫

① 運動技能の向上に結び付く段階的な指導

ア 授業開始5分間で行う指導

授業開始の5分間で行う踊りは、心身のウォーミングアップとして、毎時間行った。リズムに乗りやすい曲を使って8カウントの簡単な動きを繰り返し行い、同じリズムで踊り続けることができるようにした。

＜ウォーミングアップダンス＞

- ・ダウンの動き (スキーの動き) ・右ステップ
- ・膝打ち&手拍子 (ペア) ・左ステップ
- ・アルプス一万尺 ・スキップ

※ペアを変え、繰り返し行う。

【図表5 授業開始5分間学習の内容】

また、多くの生徒がダンス未経験者であるという実態から、まずアイスブレイクとして心と体を開放してから授業に入ること、生徒が自由な雰囲気ですることができるよう環境を整えることもねらった。同じ動きであっても、曲を変えるとテンポの違いによってリズムに乗ることが難しくなるため、生徒の実態に合わせて選曲を行った。生徒は、始めは戸惑うもののやがて動きを覚え、伸び伸びと踊るようになった。

イ 段階的な指導の工夫

少しでも「うまくなった」という実感がもてるように、段階を踏んで指導を行った。生徒に「少し頑張ればできるようになる」という意識をもたせて、徐々に動きの負荷をかけていくように指導した。

- ①手拍子でリズムを取る
- ②身体の色々な部位を使ってリズムを取る。
- ③身近な動きを取り入れて踊る
- ④自分たちで動きを考えて踊る
- ⑤変化のある動きを組み合わせ、様々な工夫を入れて踊る

【図表6 現代的なリズムのダンスの単元の流れ】

【図表6】のように単元の始め(①)には、動きの負荷を少なくしてリズムが取れるように、手拍子のみでリズムを取らせ、教師やペアが創ったリズムを真似させた。慣れてきたら(②)顔の前や横、回しながら手拍子を打つなど、徐々に動きの負荷を加えたり、リズムの変化を感じることができるよう、足拍子や体の部位(膝やももなど)をたたいて音を出したりしながらリズムを取らせた。さらに、体幹でリズムに乗って踊ることを

大切にしながら、腕や肩、首、膝などの動きを意図的に加えてリズムを取らせた。

単元の中盤(③)には、動きをより広めていくことをねらって、簡単な動き(日常動作・スポーツの動き・簡単なステップなど)に着目させ、リズムに乗って全身で大きく動くことをアドバイスしながら、生徒の自由な発想で色々な動きを試しながら踊りに取り組ませていった。

単元の終盤(④)には、既習の動きをもとに各個人で自由に動きを考えさせ、それぞれが考えた動きを自由に組み合わせた踊りに取り組ませた。最後(⑤)には、組み合わせた踊りをもとに、変化のある動きを取り入れて踊ったり、隊形の工夫や、相手と対応する動きを取り入れたりするなど、グループで工夫しながらまとまりのある踊りを創ることに取り組ませた。

② 運動技能を高めるためのドリル練習

課題をより確かにつかみ、本時身に付けさせたい動きを体感できるように、計画会の後にドリル練習を位置付けた。変化のある動きを組み合わせることで休止や倍速のリズムを取り入れながら踊ることをねらいとした授業では、8カウントのうち、どこかに休止や倍速を取り入れて踊ることで、より変化の大きい動きになることをドリル練習で体感させた。まず、遅めのテンポで、休止や倍速を取り入れた簡単な動き（ケン・ケン・パッ）を全員で行った。このとき、生徒から自由な発想が出てくるように、できるだけ簡単な動きを取り扱うことにした。同じ動きで速度を変化させながら、繰り返しドリル練習を行った。次に、動きに慣れてきたら左右の動きや前後の動きを取り入れたり、上半身の動きを加えたりするなど、動きにアクセントを加えて自由に踊った。そうすることで、休止や倍速を生かした動きが多く見られ、変化の大きい踊りにすることができた。

③ 運動技能や学習集団の質の高まりを実感させる評価の在り方

ダンスの授業を行っていく際に、誰もが心を開放して取り組んでいくことは、技能を身に付けることや、よい動きに仕上げることに繋がると考えた。そのため、心を解放させて活動するために互いの意見を尊重し、アイデアを肯定的にとらえることや、「いいね」「この動き面白いね」「うまい」などの言葉を互いにかけて、安心感を生み出したり達成感を感じさせたりしながら学習に取り組ませてきた。ペアで創った踊りを別のペアに見てもらい、どんな動きがよかったのかを、動きを交えながら交流する場を位置付けた。また、タブレット端末に記録した以前の動きを見せて、表情や動きの大きさ、体幹でリズムを取る動きなどを視点に比較させることで、運動技能の高まりを実感させてきた。個人の振り返りを書かせる際には、心情面や技能面の自己評価ができるようにいくつかの振り返りの項目を設定し、評価の場を位置付けた。

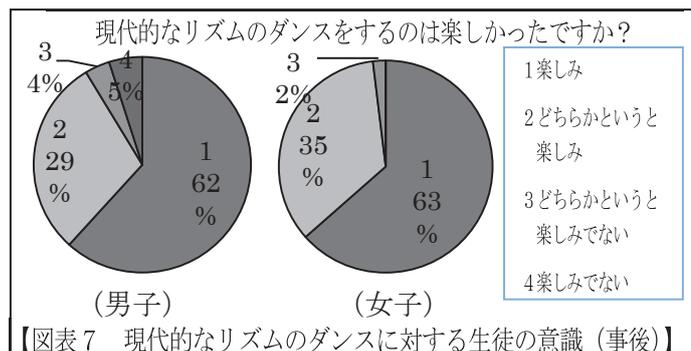
互いの踊りを模倣したり、踊り返したりする活動を繰り返していくと、最初は恥ずかしがっていた生徒も次第に心を開放し、生き生きとした表情や動きで踊ることができるようになった。また、規範意識を高くもち、互いにアドバイスし合える仲間になれていることを認め合うことで、互いに気持ちよく学び合える仲間になれた。

<授業後の生徒の振り返り>

- ・単調な8拍子じゃなくて、少し速いリズムにしたり、ゆっくりにしったりすることで動きに幅ができました。特に1拍休んで次に早いリズムにした時は、1拍休まない時よりも勢いがあった面白かったです。
- ・グループの仲間が安心して踊りを提案できるように、「それ面白いね。」と言って一緒に踊ったり、実際のダンスに取り入れて踊ったりすることができました。最初は恥ずかしさがあった、自分で振りを考えるのも苦手でした。でも、互いの発表を見ていて、ノリノリになって踊る方がカッコよく見えることが分かって、思いっきり踊れるようになりました。

・実践を通して

事後調査【図表7】による意識の変化や、互いに話し合う活動やドリル練習の積み重ねの結果、多くの生徒が現代的なリズムのダンスの楽しさを味わうことができたと思われる。それは、事前調査で楽しみでない理



由に、「上手くできないと恥ずかしい」という記述が多くあったのだが、事後調査では9割以上の生徒が「楽しかった」、「どちらかという楽しかった」を選択していることから分かる。つまり、生徒が運動技能の高まりを実感したからこそ、このような結果になったのではないかと考える。また、この事後調査の結果【図表7】から、現代的なリズムのダンスに対する意識を肯定的にとらえる生徒が増えたことも分かる。

<実践事例（創作ダンス）2年生男子>

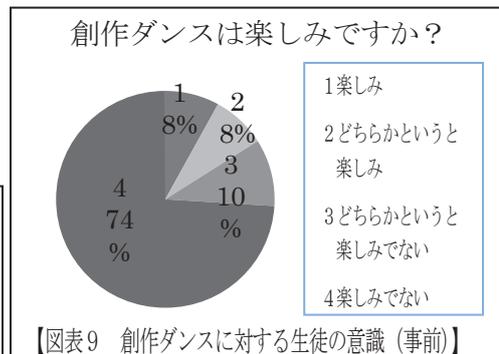
(1) 基本的指導過程の考え方

段階	周囲を気にせずに体を大きく動かすことができる	ひと流れの動きで即興的に表現することができる	変化のあるひとまとまりの表現で踊ることができる
様相の発展	(できない) → それらしくできる	→ できる	→ うまくできる
重点	心の解放	テーマと動きの結び付き、動きの多様性	テーマをより表現できる工夫
授業形態	様々な活動を多くの仲間と体験する	一単位時間に多くのテーマに触れ、即興的に表現する 一人おどりを多く取り入れ、それを合わせて集団踊りをつくる	簡単な小作品を一単位時間に集団で作成し、集団踊りに様々な要素の工夫を盛り込むことによりテーマをより表現した踊りをつくる
運動の側面	課題となる意識	【恥ずかしい】 仲間に笑われないか 自分の意見はおかしくないか 自分の動きは人と違ってないか	【工夫の仕方がわからない】 どんな効果を集団踊りに入れればよいかわからない 誰の意見を選択すればよいかわからない どの工夫にどのような効果があるのか
	もたせたい意識	どんな動きをしても受け入れられるんだ みんなも自分と同じなんだ 違っていてもいいんだ この仲間ならば恥ずかしくない	一番伝えたい部分に工夫を入れてみよう 差を際立たせるとイメージが伝わりやすい 群と個で動きをつくってみよう
体の使い方	腕、脚、腰	胸、肩、頭、肘、首	指先、目線、顔
動き	歩く、走る、跳ぶ、伏せる、転がる 伸びる、縮む	曲げる、揺れる、這う、反る	同じ動きに変化をつけ連続させる
活動	新聞紙を落とさずに走る 体じゃんけん 鏡ゲーム ダイヤモンドウォーク	寸劇誇張ゲーム ダイヤモンドウォーク(スロー) イメージカルタ 即興的な踊りの作成	差を際立たせようゲーム 小作品の作成
工夫	横や縦の空間を使って大きく踊ることができる	遅速の差を取り入れて踊ることができる	弛緩、緊張などの力の入れ方を考えて踊ることができる
集団	一緒に踊る	対比をつけて踊る	人数を生かした構成、合体して表現する
性別	男子	体を大きく使って踊ることができる	空間を大きく使って踊ることができる
	女子	体を大きく使って踊ることができる	部位を意識して気持ちを込めて表現できる 細部にまでこだわって美しく表現することができる

【図表8】 創作ダンスの基本的指導過程

第2学年男子生徒に対して事前にとったアンケートの結果からは、創作ダンスに対して苦手意識をもつ生徒が80%以上に上ることが分かった。生徒の選択の理由は以下のとおりである。

楽しみ…いろんな動きができそう。体を動かせる。
楽しみでない…
自分の動きを周りで見られると恥ずかしい。
どんな動きをすればよいか分からない。



周囲の目を気にしていることや、動き方が分からないことによってダンスに苦手意識をもっていることが分かる。このような生徒の意識と、学習指導要領に記載されている身に付けさせたい技能を踏まえて創作ダンスの基本的指導過程を作成した。男子の創作ダンスの場合、心の開放をし、動き方を知ることができれば、創作ダンスを踊ることができると考えた。

(2) 技能の向上に結び付く思考・判断を高める方法の工夫

① 運動技能の向上に結び付く段階的な指導

ア 生徒の意識の段階を明らかにした指導

生徒の意識は、「体を目一杯動かして楽しい→イメージに合わせた踊りができてうれしい→よりイメージを表わす工夫をすることができて満足」と変容すると考えた。それに伴って各段階で課題となる生徒の意識は、「周囲の仲間の目が気になる→動き方が分からない→イメージを表現するためにどう工夫してよいか分からない」ととらえている。そのため、単元開始直後

には踊りを踊る活動ではなく、ゲーム感覚で楽しく体を動かす活動を行った。具体的には、新聞紙が体から離れないように走り回って仲間と勝負する活動を行った。踊ることに抵抗をもっていた男子生徒も、大きく体を動かす動きには興味をもち、次第に仲間の目を気にせずに活動するようになった。緊張をほぐすための運動を多く取り入れ、その中で様々な動きを肯定的にとらえて指導したことによって、学習集団に安心感が生まれ、心の解放がされたと考える。また、教師が目指す姿に近い姿やつながる姿を誉め、認める指導を続けることで踊りに対する生徒の憧れをもたせることができた。恥ずかしいという意識から、いかにイメージを表現する動きを工夫して踊れるかという意識へと変化させていったことで、最後には自分たちのダンスをよりよいものにしていきたいという生徒の欲求をもとに授業を行うことができた。

イ 運動技能の高まる段階を明らかにした指導

創作ダンスの運動技能は、「体を大きく動かすことができる→テーマから即興的にひと流れの動きで踊ることができる→変化のあるひとまとまりの表現で差を際立たせて踊ることができる」と段階を経て高まっていく。最初の段階では、思い浮かぶ動きをいくつも出し、その動きを大きく踊ったり、同じ動きでも仲間と違いをつけて踊ったりした。体を大きく動かせるようになってきた後に、テーマを大切に即興的に踊る活動を仕組んだ。テーマにつながる形容詞や擬音語、擬態語をたくさん出させ、それを体で表現する活動を多く取り入れることで、テーマをもとに表現しようとする生徒の姿が多くなった。即興的に踊ることができるようにイメージカルタを使い、多様なテーマに生徒が触れることができるようにした。このような活動を行っていく中で、工夫したり強調したりする表現ができるように、集散や高低、遅速などの差を際立たせている姿を取り上げ、どのような動きがよい動きなのかつかませた。こうすることで、表わしたいイメージによって動きを変化させ、その動きをスムーズにつなげて連続させ、多様な動きの質感を盛り込んだひとまとまりの表現ができるようにした。

② 運動技能を高めるためのドリル練習

毎時間授業開始時に「ダイヤモンドウォーク」を仕組むことで、体を目一杯動かし、心拍数を上げ、運動量を確保して授業に臨むことができた。その際、意識する点を伝え自由に体を動かしながらイメージに合わせて活動ができるようにした。例えば、「重苦しい」というイメージであれば、重心を低くしたり、手のひらを下に向けたり、体を硬直させながら動いている生徒の姿を価値付けていくことで、テーマを表現する際に素材として使える動きを経験させた。

また、即興的にひと流れの動きを考えて踊れるように、「寸劇誇張ゲーム」を行った。劇のような動きを、横や縦の空間を大きく使って誇張させて動くことで、ひと流れの動きを抵抗なく表わせるようにした。考えてから動こうとする生徒の即興的な表現に対する意識を、自由に自分の感じたままに動いてよいという意識に変えることができ、ひと流れの動きを鍛えるのには有効な手だてとなった。

③ 運動技能や学習集団の質の高まりを実感させる評価の在り方

一貫した視点をもとに授業では「自己評価」「相互評価」「教師評価」の三つの評価を行った。タブレット端末を使用することで、自己の運動に対して自分の課題意識と照らし合わせて評価をすることができた。また、授業の終末に発表会と相手に対して意見を伝える機会を位置付けることにより、仲間からの意見をもとに自分の技能を見つめることができた。単元の序盤では、仲間からの声で自信をもって活動できるようになる生徒が多く見られた。教師評価では、専門

的な言葉や技能が高まった理由を、VTRなどを用いて具体的に話すことで、その誉められた生徒の真似をしようとして周囲の仲間の技能も高まった。

また、「頑張っていた仲間を見てどう思ったか」や「そんな頑張りをする仲間と一緒に活動できることをどう思うか」を周囲の仲間に広め、互いのよさを認め合えるようにした。そして、そんな仲間からの言葉を聞いてどう感じたかを問い返すことで、周囲の仲間との関わりや、自分自身の成長を見つめられるようにした。このように、自分自身について考えたことで、自分や学習集団のよさに気付く記述が見られた。

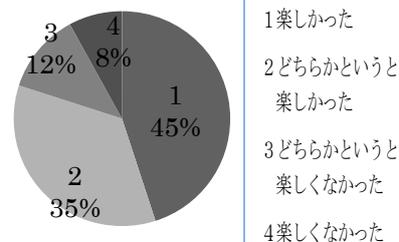
・実践を通して

単元が進むにつれて、生徒が体育館にやってくる時間がどんどん早くなり、授業前に踊りの打ち合わせや、新しい表現に挑戦する姿が見られた。単元終了後の生徒の記述や、80%以上の生徒がダンスに対して好意的な意見をもったアンケート結果からも、生徒の意識と技能のつまりぎに合わせた授業を仕組んだことで、前向きに学習に臨む生徒の姿を生み出すことができた。

<授業後の生徒の振り返り>

・始めは苦手だった即興的に踊ることが、ダイヤモンドウォークを繰り返していったら、様々な動きを組み合わせる程度できるようになった。僕は、集団の踊りで、仲間と一緒に立体的な隊形を創って高低の差を表わして表現するところが楽しかった。イメージを体で表わすのは難しかったけれど、楽しかった。

創作ダンスは楽しかったですか？



【図表10 創作ダンスに対する生徒の意識（事後）】

6 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・運動が上達する過程を「様相や姿」でとらえることや種目のもつ技術内容を構造的に分析し、基本的指導過程や単元の指導計画の作成し指導に当たったことで、運動技能を段階的に高めることができた。
- ・段階的な指導やドリル練習で、生徒の発想を生かしたり、動きを高めるために教師が適切なアドバイスをしたりすることで、生徒は自らの力で動きを高めることができた。
- ・ペアやグループで互いの動きを評価したりタブレットやVTRを使って動きを評価する場を設定したりしたことで、多くの生徒が動きの高まりを実感することができた。
- ・動きのよさやがんばりを認め合える場を設けたことで、学習集団としての高まりにつなげることができた。

(2) 課題

- ・動きを高めるためのより適切な教師のアドバイスができるよう、上達の過程に生じる「つまりぎ」をさらに明確にしていく必要がある。



【図表11 ペアで学習する様子】



【図表12 評価をする場面の様子】

【MEMO】

A series of horizontal dashed lines for writing.

<第8分科会>

羽島市立羽島中学校

【研究主題】

できた喜びを味わい、自ら運動に親しむ力を育む体育学習

【日 程】

9:00 9:30 10:20 10:45 11:35 13:00 14:15 14:50 15:00

受付	公開授業①	移動等	公開授業②	昼食	研究発表	研究協議	指導講評	閉会式
----	-------	-----	-------	----	------	------	------	-----

【授業案内】

公開授業① 第1学年「体づくり運動」 体育館

公開授業② 第2学年「柔道」 武道場

【会場案内】

羽島市立 羽島中学校

〒501-6207

羽島市足近町7丁目

455番地

<アクセス>

○名鉄須賀駅下車 徒歩10分

○タクシー

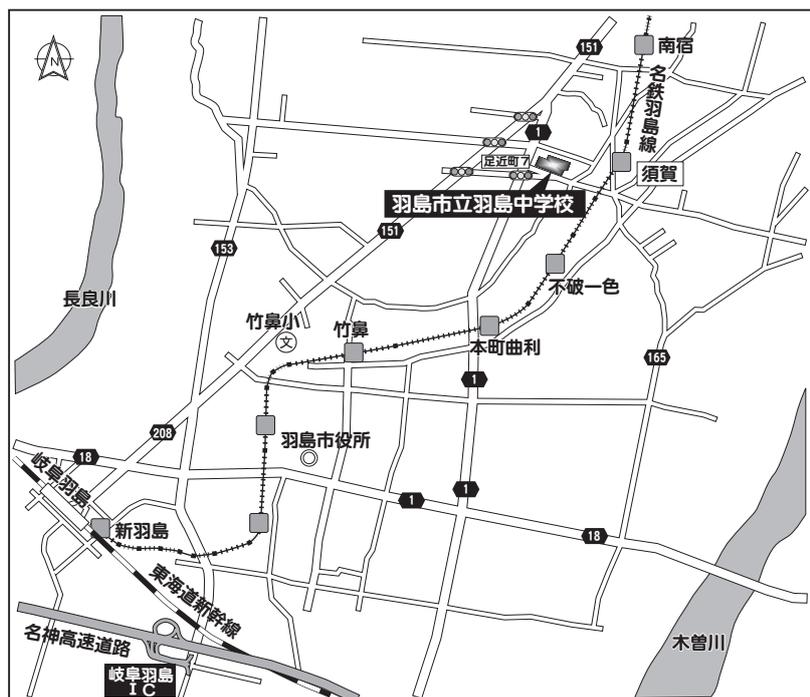
JR岐阜羽島駅より

約6Km 15分

○車

岐阜羽島インターより

約6Km 15分



【学校の概要】

羽島市立羽島中学校



所在地 〒501-6207 羽島市足近町7丁目455番地
校長 今井田 康雄
生徒数 827名（26学級）
連絡先 TEL 058-392-4433 FAX 058-391-8975
E-mail hashimaj@hashima-gifu.ed.jp
URL <http://www.hashima-gifu.ed.jp/~hashimaj>

【学校の教育目標】

志をもって困難に立ち向かえ

【学校紹介】

本校は、昭和22年（1949年）に美乃路中学校として、正木小学校を仮校舎として生徒数354名、教職員数9名で開校された。現在の羽島中学校として改称されてからは、68年目を迎えている。昭和61年には、文部省格技指導推進指定校発表会を開催した。また平成5年には体力優秀校として県表彰を受けた。現在は運動部活動が盛んであり、平成26年度には全国大会、東海大会へ出場した部活も4チームある。これも、はしまモア総合型スポーツクラブが学校の体育館内に事務局を置いており「いつでも・どこでも・誰もが」スポーツに親しむ土壌ができてきているからと言える。生徒は、「志をもって困難に立ち向かえ」を常に意識をしながら、学校生活の充実をめざして取り組んでいる。

1 研究主題

「できた」喜びを味わい、自ら運動に親しむ力を育む体育学習

羽島市立羽島中学校
羽島市中学校保健体育研究会

2 研究主題設定の理由

今日では科学技術の高度化、情報化等の進展により、人間関係が希薄となり、精神的なストレスが増大している。また、日常生活において体を動かす機会が減少し、体力が低下するなどの心身両面にわたる健康上の問題が顕在化してきている。その中で、文部科学省のスポーツ基本計画にもあるように、生涯スポーツ社会の実現のため、できるかぎり早期に、成人の週1回以上のスポーツ実施率が65%となるように目指している。現在、羽島市内における中学生期の生徒たちの週1回以上のスポーツ実施率は68%という現状である。(体力テストのアンケートより)これは、体育授業を含め、部活動やクラブ活動を行っている生徒が多くいるためであると考え。今後、この現状を維持しながら、生涯にわたって主体的に運動に取り組んでいくために、学校体育では、生徒たちの、運動技能を向上させるとともに、思考力、判断力を身に付けさせながら、「できた」喜びを多く味わわせることが非常に重要であると考え。

生徒が生涯にわたって自ら運動に取り組む資質や能力を身に付けるためには、「できた」喜びを味わわせながら、主体的に運動に取り組むことができる生徒を育てることが大切であると考え。主体的に運動に取り組む生徒とは、課題をもち、技術ポイントを意識して練習しながら運動技能の向上を実感し、次に目指す姿を明らかにして課題をつくるという学習過程を繰り返すことによって、その運動が有する特性や魅力を理解し、楽しさを味わいながら運動に取り組んでいくことができる生徒であると考え。したがって、授業において、どのように運動技能が高まっていくのかを明確に示す場面を設定し、効果的な練習方法や練習の回数などを全体指導や「学習の手引き」の活用を通して指導していく。併せて、生徒に単元の仕組みや技術ポイントを理解させ、その技術ポイントを意識しながら練習を繰り返すことを通して、効果的に運動技能を身に付けるとともに、思考力・判断力を身に付けることができるよう指導する必要があると考え。

こうした学習によって生徒は、今後どのような運動に出会った時でも、「何をどうすればできるようになるのか」を考えながら、合理的に運動実践できる資質が育まれ、生涯にわたって主体的に運動に取り組む力を身に付けることができると考える。

第8分科会では、中学校部会の研究主題「できた喜びや仲間と共に運動する楽しさを味わう体育授業の創造」を受け、「体づくり運動」と「柔道」について、羽島市内の全中学校(5校)が共通のアンケートで生徒の意識調査を行ったり、生徒の実態を捉えた共通の指導計画や導案で授業を行ったりしながら研究を進めている。

「体づくり運動」では「健康の保持増進のための実践力の育成」のために、体ほぐしや体力を高める運動を行い、日常生活の中に生かしていくための指導を行っていきたいと考える。

「柔道」では「安全面の配慮」の面で授業で扱う技を選択し、受け身や事故防止のための留意点の指導、「対人技能の習得」では、「手と足を同時に使って投げる」という段階か

ら「相手の動きや力を利用してかける」という段階を目指して指導を行っていきたいと考えている。

3 研究の仮説

単元の仕組みや技術ポイントを明らかにした指導を行うことを通して、生徒は、効果的に運動技能を身に付けながら思考力、判断力を身に付け、できた喜びを味わうことができ、自ら運動に親しむ資質や能力を身に付けることができる。

4 研究内容

第8分科会では、中学校部会の研究主題、並びに研究内容を受けて、下記のような研究内容で実践を進めていくこととした。

(1) 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

- ① 運動の様相と対人技能における構造的な指導過程〈柔道〉
- ② 生徒の発達の段階を踏まえた指導計画〈体づくり運動〉

(2) 技能の向上に結びつく思考力・判断力を高める工夫

- ① 生徒の運動技能向上のための「学習の手引き」の活用

5 研究実践

第8分科会では、研究実践をより確かなものにするために、羽島市の全中学校の保健体育科教員が指導計画や指導内容を、指導方法について交流・検討し、共通の指導計画で実践を行い、成果や改善点を交流した。

各校が持ち寄った資料には、導入時のアンケート、意識調査、体力テストの分析表などがあった。自分の心と体の状態に目を向けたり体力テストの結果を分析したりすることは、目標へとつながり、運動の効果や体力の高まり、自己の心や体の気付きが実感できるということが確認できた。

また「体づくり運動」では、運動を始める前に、運動の指標となる主観的運動強度や体の仕組み、体力づくりの基礎知識などがあると、効果的なトレーニングにつながり、今後の運動計画を立てるための土台ができるということがわかった。「体の柔らかさを高める運動」「巧みな動きを高める運動」「力強い動きを高める運動」ごとに、どのような運動をすればそれぞれの力が高まるのか、運動の仕方や種目を交流した。交流するうちに、生徒が運動の組み合わせ方を工夫して行うことで、主体的に運動に取り組めるのではないかと考えることができた。

「体づくり運動」「柔道」においては、実技講習会も行った。「体づくり運動」については各校の資料提案を参考にしながら、「体の柔らかさを高める運動」「巧みな動きを高める運動」「力強い動きを高める運動」のグループに分かれ、運動を実践した。

実際に体を動かしてみると、運動の仕方や組み合わせ方、道具の使い方などによって、負荷が変わったり、鍛える筋肉や伸びる筋肉が違ったりと身体の気付きが感じられた。こうしたことから、生徒に単に運動を実践させるだけでなく、その運動が



自分の筋肉のどこに効いているのか、さらに強度や回数をどう増やすとよいかなどを考えさせることで、自分に合わせて運動の工夫しようという意識をもたせることができるのではないかと考えた。

さまざまな種類の運動を、実際に体を使って提案することで、活用できるレパートリーが増え、運動の留意点が見えてきた。

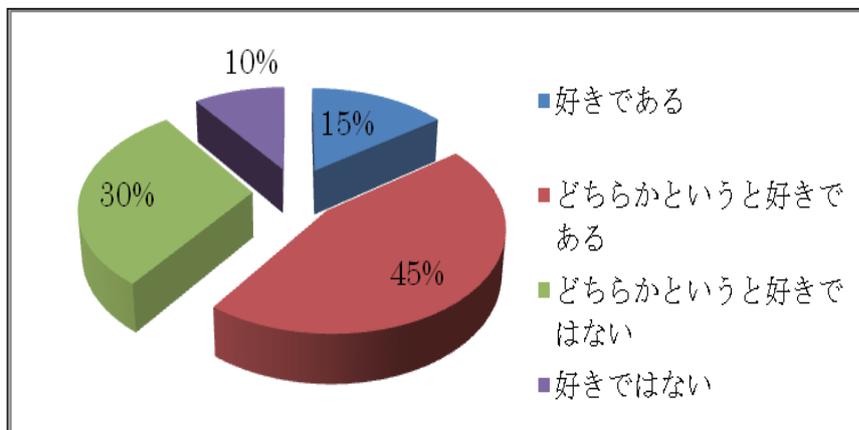
「柔道」については、羽島市内の保健体育科教員が集まり、柔道の経験をもつ教員が中心となって、授業の流れや本時の技術ポイント、技の確認を行った。「安全」に、そして効率的に技能を習得するために、「ひじ」の位置や「足の位置」「組み方」などに留意しながら、技術ポイントを明確にすることができた。

このような活動の中で、学校規模や生徒の実態こそ違いますが、一人一人の生徒の姿に目を向けて「このように指導したら、生徒の姿がこう変容した。」「この運動技能を身に付けさせるためにはこんな技術ポイントで指導したらどうか。」など、活発な意見が出された。

(1) 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

① 運動の様相と対人技能における構造的な指導過程〈柔道〉

柔道の指導を行う前に、質問紙によって生徒の柔道に対する意識調査を行った。全体の60%の生徒が柔道に対して、「好きである」ないし「どちらかというとき好き」と回答している。その理由として多かったのは① 技を覚えたい、② 相手を投げたい、③ 自分の身を守るのに役立つ、④ 礼儀が学べる、という結果であった。この結果を見ても、生徒は技を用いて相手を投げる行為にあこがれをもち、相手を投げることができるようになったら、柔道において「できた」と感じるのではないと思われる。



【図：柔道授業 事前の意識調査】

逆に、「どちらかというとき好きではない」ないし「好きではない」と答えた40%の生徒の理由は、① 怖い、② 難しい、③ 痛い、という理由が占めた。

この調査結果から、怖さや難しさ、痛さを感じさせぬよう、生徒に活動させていくことが必要であることが分かった。

したがって、安全面を考慮し、生徒に恐怖や痛みを感じさせぬよう段階的に指導し、生徒自らの力で相手を投げる（技を施す）ことができることで生徒は充実

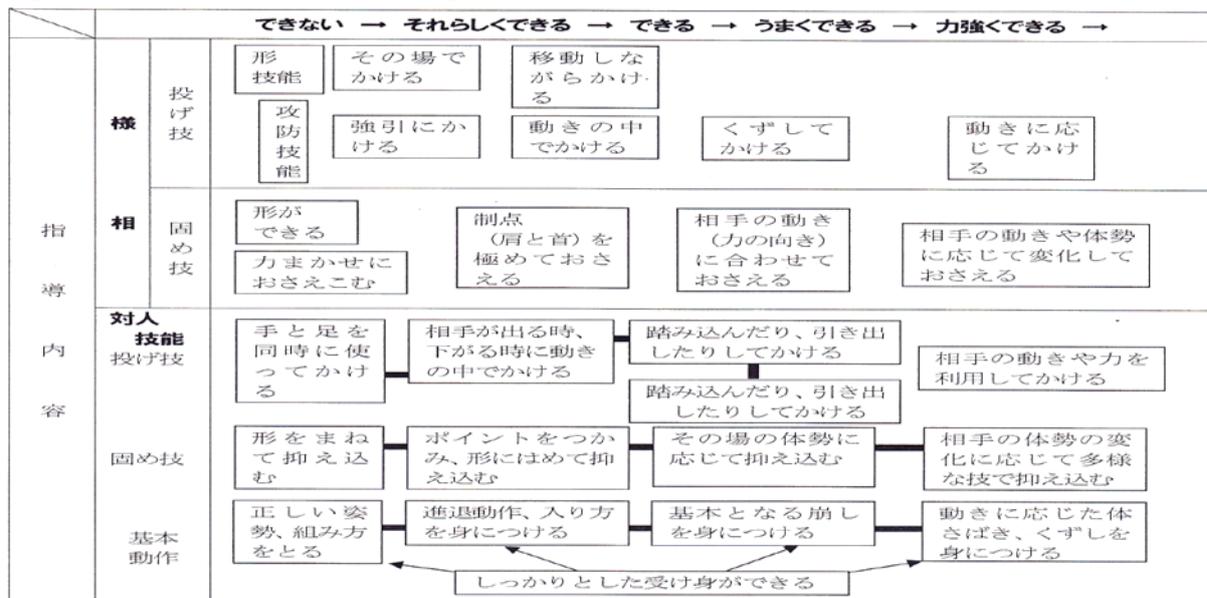
【柔道の授業を通して学びたいこと】

- ・日本の武道なので、礼儀や身を守る方法を学びたい。
- ・技を覚えて、相手と勝負できるようになりたい。
- ・改めて基本から学びたい。
- ・どのようにしたら相手を倒せるか、原理を学びたい。

感を味わえると推測できる。だからこそ、生徒に段階的に対人技能を身に付けさせることが必要であると考えます。

柔道において、安全面を第一に考え、羽島市全体（5中学校）で、受け身の指導法や授業で扱う技について検討し、共通理解を図っている。その技の中で、生徒が「できない」という状況から、「それらしくできる」→「できる」→「うまくできる」→「力強くできる」→というように様相が発展していくと同時に、対人技能がどのように発展していくのかを【図1】の基本的な指導過程で明らかにした。

【図1】 基本的な指導過程 柔道



技の指導に関しては、柔道に関する生徒の質問紙調査によって生徒は柔道に関して「難しい」という意識をもっている生徒も多いことから、受け身や技の指導に際して、ア「イメージしやすい言葉」、イ「具体物の活用」、ウ「段階指導」の3点を大切にして技能の習得を目指していく。

アの「イメージしやすい言葉」では、生徒にイメージしやすい言葉を使い、自分で唱えながら動作したり、仲間に声をかけてもらう中で運動したりすることで、運動技能を向上させたいと考えた。

イの「具体物の活用」では、足運びを習得するために、足の動きを書き込んだシートを利用した。足の間隔や軸足の使い方などが分かりやすいよう、具体物を使った手だてを講じていきたいと考えた。

ウの「段階指導」では、「低→高」低い位置から高い位置へ、「弱→強」弱く行うことから強く行うことへ、「易→難」易しい動きから難しい動きへと段階的に指導を行っていけば、生徒の技能が効果的に高まっていくと考えた。

〈2年生男子の実践（柔道）：T中学校〉

本時は「体落とし」の練習を行った。はじめに「体落とし」とはどのような技であるかを理解させたり、



【膝立ちで相手を投げる練習】

技をかけることに対する憧れをもたせたりするために、教師が示範した。まずはじめに、1年生の時の学習を想起させ、安全面に十分配慮した上で、横受け身や、前回り受け身の習熟を確認した。

また、指導の順序として、「低いところから、高いところへ」として、膝立ちの状態から、引き手を回し込んで投げる動作を取り入れた。こうすることで、安全面はもちろんのこと、相手を回し込む感覚や相手を崩して投げる原理を体感させることができた。技を受ける側も、受け身のとり方や体のさばき方を、既習の受け身の取り方と関連させて理解することができ、「対人技能」の必要性を体感することができた。



低い位置での練習を経て、一人で技をかける練習をする段階を設けた。これは、相手と組み合うことで、引き手や釣り手に力が入り、操作しにくくなってしまふからである。最初は易しく、一人で足さばきを覚えることとした。足の送り方に不安がある生徒に対しては、個別指導で、足の送り方を書いたマットの上で練習をさせた。このように段階的に指導することで、相手を崩して投

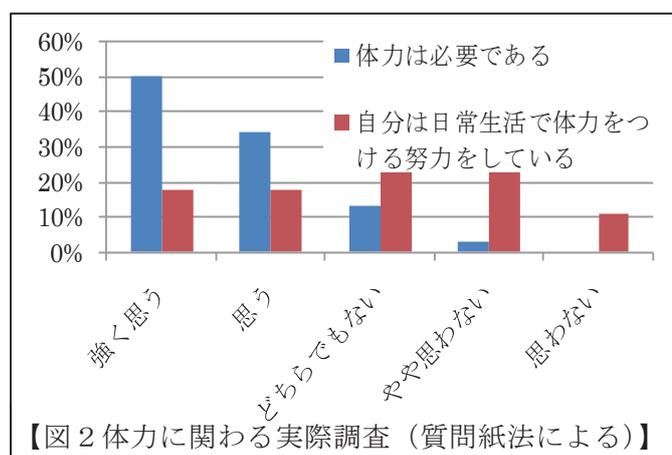
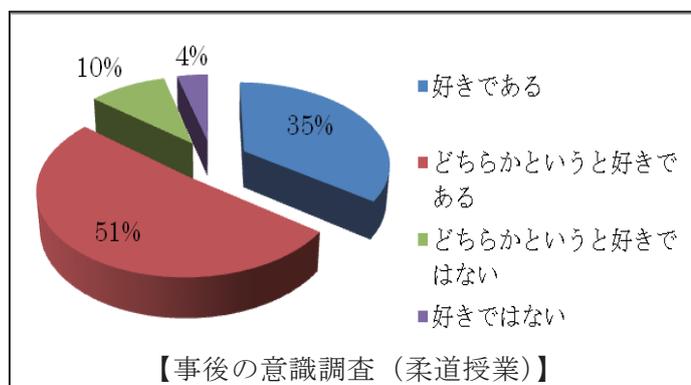
【一斉指導で足さばき練習】げる感覚を味わわせた。授業後、生徒は次のような感想をもった。

【授業終了後の生徒の感想】

今日は「体落とし」の学習をした。最初は先生が〇〇くんを投げたとき、すごく大きな音がして、「自分にもできるのかな」とか、「痛そうだな」と思った。膝立ちで練習してみると、意外と簡単に相手を投げることができた。投げられる時も引き手を引き込まれると、こらえられなくて、「こうやって相手を崩すと投げやすいんだ」と思った。(A男)

このように、相手を崩して投げることの原理を理解し、技をかけることができる、「自分で投げた」という感覚を味わうことができ、生徒の「自分で技をかけて相手を投げたい」という欲求を満たすとともに、対人技能の高まりと同時に柔道の楽しさを味わうことができた。

単元終了後のアンケートでは、「好きである」「どちらかという好きである」という生徒が60%から86%まで増えた。これは、「僕はあまり腕力がないけど、しっかりと技を覚えて、相手を崩して投げるときれいに投げることができて楽しかった」、「こらえている相手をうまく崩して投げると気持ちよかった」という感想に代表される結果であると考え



える。

② 生徒の発達の段階を踏まえた指導計画〈体づくり運動〉

運動に対する市内全中学校生徒の意識調査を行ったところ、生徒の約80%以上が「体力は必要である」と回答している中、「日常生活で体力をつける努力をしているか」という問いには36%の生徒しかいない。これは、体力を高める必要があると思っけていても、日常生活の中で実践できていないという実態がうかがえる。【図2】

体づくり運動では、初等中等教育の最終段階における「自己の状況に応じて体力の向上を図る能力を育てる」ことを目指し、「体力を高める」ことを目指す中学校1学年、2学年と「自己の状況に応じて体力の向上を図る能力を育てる」ことを目指す3年生とを段階的にとらえ、中学校3年間の指導計画の概略を作成した【図3】。

【図3 体づくり運動の指導計画の概略】

学年	ねらい	内容	解説のキーワード	指導の留意点
中学校 1年生	体力を 高める	体ほぐし の運動 ・	健康や体力の状況に 応じて体力を高める 必要性を認識させ、学 校の教育活動全体や 実生活で生かすこと ができるようにする こと	運動の種類や方法を 知り 、その効果を認識させ、体力の高まりを考え、いろいろな運動を 選択し組み合わせたり、工夫したり して行う。
中学校 2年生				自分に必要な体力を踏まえ 、日常生活や部活動の中で実践していけるような運動を考え、実践する。
中学校 3年生	自己の状況に応じて体力の向上を図る能力を育てる	体力を高める運動	目的に適した運動の計画を立て取り組むことができるようにすることや運動に関連して高まる体力やその高め方を理解しておくこと	日常的に運動を行っていく 大切さを知り、自分に必要な運動を取り上げ、実践していくための 計画を立てる 。

〈2年生男子の実践（体づくり運動）：N中学校〉

第1時にオリエンテーションを行い、個人シートで運動に関する意識調査を行った。また体育理論の学習で運動する意味を考えさせ、運動には「体力を高める」「仲間との交流」「健康を保つ」などの意味があることを気付かせた。体づくり運動の意義や単元の見通し、授業の流れを確認した。

第2～4時では、「運動を知る」時間として、体ほぐしの運動と体力を高める運動を行った。体ほぐしの運動では、風船バレーやしっぽとりなど毎時間異なる体ほぐしの運動を教師が提示した。体力を高める運動では、「体の柔らかさ」「巧みな動き」「力強い動きを高める運動」を1時間ずつ指導した。いずれも教師が運動を紹介し、グループの仲間と楽しみながら行うことや様々な運動を経験させて、運動の仕方を知ること重点をおいて活動を行った。

第5時では、単元前半の振り返りと単元後半のグループ計画会を行った。振り返りでは、導入で行った



【体ほぐしの運動（風船バレー）】

意識調査からの心身の変化を確認するために、「活動は楽しかったか」「仲間と関わられたか」「心と体の関係に気付けたか」などを記入させた。

また単元後半にはどんな体力を高めたいかという個人目標を考えさせた。そしてグループの実態に応じて必要な運動を選択し、回数や時間などを工夫させ、運動計画を立てグループを分けた。

第6～7時では、運動計画表にそってグループ毎で選択した運動を行った。各グループを巡回しながら、計画にそって運動が正しくできているか、また、生徒が高めたい体力は何か、その運動が目的に合っているかを確認していった。授業の中でねらいに応じて運動を選択したり、工夫したりしているグループを全体に広めていきたい。

第8時では、これまでの学習を振り返り、心と体の関係に付き、仲間と運動をすることの楽しさを確認した。また、体力を高める運動をする際には、運動の目的を明確にし、自分の体力に合わせて運動強度を考えたり運動を組み合わせたりすることが大切であることを確認した。

特に第6時では、目的に合わせて自分にふさわしい運動をさせ、今後の日常生活でも自主的に体力を高めるための態度と思考力、知識を養うことができた。単元前半で行った体ほぐしの運動、体力を高める運動を確認し、単元後半の運動計画をさせたことにより、個人で現在、どの体力を何のために高めたいのかを考えさせることができた。

その後、グループ内で交流し、グループでの運動メニューを考えさせた。その際、ただ運動を行うのではなく、その目的や高めたい運動を今後の日常生活でどう活かしていきたいのかを記入させた。また、運動強度、セット数、目標回数などを個人で考えさせ、自分の体力に合った運動を選択させた。

このような実践を行った後、次のような姿が見られた。

【授業終了後の生徒の感想】

僕は、サッカー部ですが、あまり足が速いほうではありません。特に急に方向を変えたり、止まったりが得意ではないので、「体づくり」の授業で学習した、「ストップとダッシュを繰り返す」という練習を、朝練に入れることにしました。同じように〇〇くんも一緒になってやっています。すぐには早くなれないかもしれないけど、続けてやっているとと思っています。(B男)

体づくり運動の授業を行うことで、学習内容を部活動の練習の中に組み込む姿が見られ、日常に活かす姿が見られた。自分の体と向き合い、運動内容を知り、自分に必要な運動を自分の判断で採用し、実践していくことにより、「やらされる・決まっている」練習ではなく、「自分に必要な・自分のための」練習になったのだと思われる。

(2) 技能の向上に結びつく思考力・判断力を高める工夫

① 生徒の運動技能向上のための「学習の手引き」の活用

生徒が運動技能を向上させるために、教師が「学習の手引き」を作成し、目指す運動の様相や運動技能向上のための技術ポイントを明記し、授業において活用していく。その「学習の手引き」につまずきに応じた練習方法や、安全に配慮した注意事項なども記し、授業の課題づくりはもちろん、生徒の手元にも配布することで、いつでも生徒が

<p>共通目標のための手引き</p> <p>全体課題</p> <p>けさ固めで「抑える」「逃げる」ことができる → めがず空</p> <p>相手の「射」と「首の後ろ」を制して抑える→逃げる</p> <p>技術ポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・けがをさせないために、抑えた時には、右手を畳につけておく ・首の後ろと相手の右ひじをとめる ・抑えた時の足は、両足とも少し曲げる(相手からまれないために！) 	
<p>練習方法</p> <p>1. けさ固めで抑える → 2. 抑えられてから逃げる</p> <p>逃げ方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・右手は、相手の首の後ろを通して、肩を持つ ・左手は、ひじを抱きしめるようにひく ・両足で、相手の足をからませる(とけた！) ・相手の帯を持って、ひっくり返す 	<p>練習のポイント</p> <p>抑え込む時！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・右手は、腰から上げないで付けておく ・むやみに、相手の首を上げるような行為はしない！首を握める！ <p>逃げる時！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鉄砲足では、相手と密着してから自分の足を振って、反動で返す ・足からみでは、片足からまずは相手の足をひっかける

活用できるようにした。そうすることにより、グループやペア、トリオで練習する際、声をかけるポイントや、適切な練習方法を導きやすくしようと考えた。

特に同じグループの仲間であまくできない仲間に対し、身振り手振りを使い、アドバイスをすることができたことを賞賛し、前時までに行ってきた練習に立ち戻って、共に練習する姿を認めていった。

また、互いに教え合う活動によって、運動技能が向上したことに気付かせるよう、「〇〇という姿を目指して、△△というアドバイスの声をかける（補助をする）ことができたから、うまくなったね。」というように、学習の手引きとの具体的なつながりを明確にして、声をかけた。



【学習の手引きを利用した学習活動】

また、単元終盤では、つまずきの多い仲間を個人的に練習させる姿や、自分から仲間により多くの投げさせてもらうことを要求したりする姿も見られた。また、仲間の練習中においても、投げる仲間の傍らに立ち、同じように足さばきをしたり、腕を動かしたりして練習する生徒も見られるようになった。

こうして、「学習の手引き」を活用することによって、生徒自身が仲間の動きをよく見て、さらに運動技能を高めるための練習や補助を工夫したり、声かけの内容を考えたりすることができた。このように、生徒同士の教え合いの活動は、生徒自身の思考力や判断力を高め、一人一人の運動技能をより向上させることにつながっている。

6 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・柔道では、運動の様相と対人技能における構造的な指導過程をもって指導にあたったことにより、生徒が技術ポイントを理解し意識して練習に取り組むことができた。また、自ら次の段階の運動技能を身に付けるために、新たな技術ポイントを考えたり意識したりして学習に取り組むことができた。
- ・体づくり運動では、3年間を見通した指導計画を立てることで、生徒に自分にはどんな運動が必要で、どのように運動に取り組んでいくとよいかを系統的に考えさせることができた。2年生での学習を生かして部活動の練習に取り入れる姿もあり、自ら運動に親しむ力の高まりを見ることができた。（力が高まっている一端を見ることができた。）
- ・学習の手引きの活用を通して、生徒自身が自分のつまずきを解消するために、選択したり考えたりした技術ポイントを意識して繰り返し練習し、できた喜びを味わうことができた。

(2) 課題

- ・動きや意欲の面では高まりを実感させることができたが、だれにも明白な得点や、技能の高まりの段階などで評価できるようにしていくと、さらに充実感を持って運動に取り組めると考える。
- ・思考力・判断力の高まりをとらえるために、生徒の意識や活動の変容を追跡調査し、よりよい指導を模索していく必要がある。

【MEMO】

A series of horizontal dashed lines for writing.

<第9分科会>

各務原市立那加中学校

【研究主題】

運動ができる喜びを味わう体育授業
～ バレーボールにおける指導過程の究明を通して ～

【日 程】

9:00 9:45 10:35 10:50 11:40 13:00 14:15 14:50 15:00

受 付	公開 授業 ①	移 動 等	公開 授業 ②	昼 食	研 究 発 表	研 究 協 議	指 導 講 評	閉 会 式
--------	---------------	-------------	---------------	--------	------------------	------------------	------------------	-------------

【授業案内】

- 公開授業① 第1学年 男子「バレーボール」 体育館
公開授業② 第3学年 男子「バレーボール」 体育館

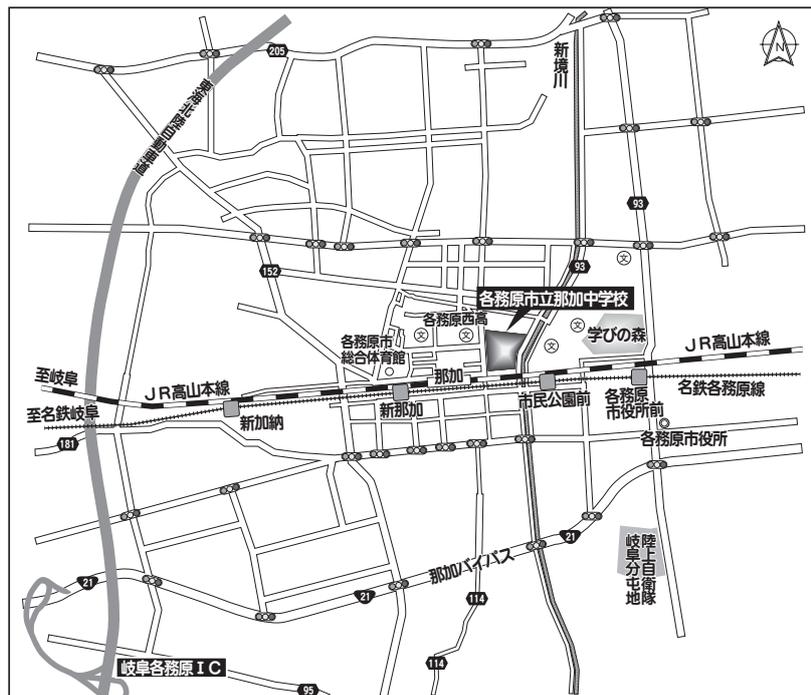
【会場案内】

各務原市立
那加中学校

〒504-0022
各務原市那加東亜町 48

<アクセス>

- JR那加駅下車 徒歩7分
- 名鉄那加駅下車 徒歩10分
- 名鉄市民公園前駅下車
徒歩5分



【学校の概要】

各務原市立那加中学校



所在地 〒504-0022 各務原市那加東垂町 48
校長 加藤 勝祥
生徒数 640 名 (21 学級)
連絡先 TEL 058-389-2281 FAX 058-389-2282
E-mail nakachu@he.mirai.ne.jp
HP-URL <http://www.mirai.ne/~nakachu/>

【学校の教育目標】

主体性 ～自ら求める・鍛えやり抜く・思いやる～

【学校紹介】

本校は、昭和22年(1947年)に創立され、生徒数499名(11学級)、職員14名で発足した。那加町各地の古墳跡から数多くの曲玉、金環などが発掘されたことから、明治32年頃那加尋常小学校の校章に曲玉を取り入れ図案化されたものが、上記校章である。

保育所、幼稚園、小学校、高等学校、大学などが隣接する緑豊かな文教地区の中心に位置し、広大な敷地を有するという恵まれた環境にある。保護者の教育的関心は高く、自治会活動やPTA活動をはじめとする学校行事への協力はもちろん、地域活動に中学生を巻き込むなど、地域ぐるみで子どもを育てていこうとする体制が整っている。

生徒は素直で明るく、落ちついて学校生活を送ることができる。学習に目標をもって取り組み、掃除や給食などの日常の諸活動では、リーダーを中心として一人一人が向上心をもって活動することができる。

学校の教育目標「主体性」を掲げ、自ら求める、鍛えやり抜く、思いやることを柱に、今年度は「目標・努力・発見」という合い言葉を新たに設定し、誇りある学校づくりを進めている。

1 研究主題

運動ができる喜びを味わう体育授業 ～ バレーボールにおける指導過程の究明を通して ～

各務原市立那加中学校

各務原市中学校保健体育研究会

2 研究主題設定の理由

中学校では、小学校で経験した「運動の楽しさや喜び」を味わう体育授業を基盤として、そこで培われた資質や能力をさらに高め、知識や技能を確実に身に付けさせ、運動を豊かに実践できるようにしたい。また、運動を豊かに実践するためには、仲間と共に運動を行うことそのものを楽しんだり喜んだりする資質を高めていくことも大切にする。

本県においては、運動の特性に基づき教材を分析し、運動を習熟する過程を「様相・姿」と「技術構造」でとらえ、指導計画・指導過程に反映させてきた。「様相・姿」とは、運動が上達していく過程の各段階のことであり、「技術構造」とは、技術を構成する要素を上位（中核）技術と下位（周辺）技術として分析したものである。それらを生徒の発達の段階や実態に合わせて系統的にとらえて指導にあたってきた。また、仲間と共に主体的に運動に取り組む態度の育成を小集団での学習の中で役割や規範、仲間づくりの点からとらえ、その在り方を明らかにしてきた。さらに、つまずきに応じた場を設定したり練習方法を工夫したりして、課題を把握・分析し、生徒が思考・判断しながら技能を習得し、「運動ができる喜び」を手にするよう指導してきた。

こうした歩みも踏まえ、第9分科会では、保健体育科における「技能」「態度」「知識、思考・判断」の指導内容を確実に身に付けさせるためには、運動習熟のための指導の在り方に研究の焦点をあてる必要があると考え、大会の柱となる5つの研究内容のうち次の2つに絞り、研究を進めることにした。

- (1) 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成
- (2) 技能の向上に結び付く思考・判断を高める方法の工夫

運動が習熟していく過程を運動が上達していく（うまくなっていく）“みちすじ”ととらえ、その“みちすじ”は大まかに「できない」－（それらしく）「できる」－「うまくできる」－「力強くできる」という段階をたどると考えた。運動が上達していくみちすじを確実にとらえ、それぞれの段階におけるつまずきを解消する手立てを明確にし、できる喜びを味わわせたいと考え、研究主題を「運動ができる喜びを味わう体育授業」と設定した。

本実践では、ネット型の運動種目であるバレーボールを研究対象とし、生徒がバレーボールの楽しさを味わうとともに主体的に学習に取り組む指導過程の究明を通して、達成感や成就感を手にするよう副主題を「～バレーボールにおける指導過程の究明を通して～」とした。

3 研究の仮説

バレーボールの学習におけるゲームの様相（段階）をとらえるとともに、上達のみちすじに

即した指導方法を明らかにして指導すれば、生徒は運動ができる喜びを味わうことができる。

4 研究内容

(1) 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

① 基本的指導過程の究明

(2) 技能の向上に結び付く思考・判断を高める方法の工夫

① 1時間の基本となる指導過程の明確化

② 1時間の学習、指導における工夫

5 研究実践

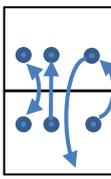
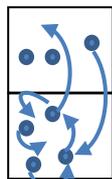
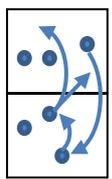
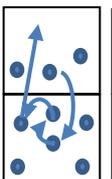
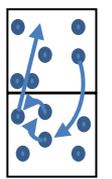
(1) 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

① 基本的指導過程の究明

ア 基本的指導過程

バレーボールは、ネットを挟んで相対し、空中にあるボールを「落とさせよう」「落とすまい」としてやり合う、ネット型の運動種目であり、その本質は「ボールラリー」である。また、同一プレーヤーが連続してボールに触れることができないというルールによって、協同攻防の必要性が生まれることもそのよさの一つである。

■表1 バレーボール学習の基本的指導過程

過程	[それらしく]できない		[それらしく]できる		うまくできる	
	ゲームをやっている調子をつかむ 「部分」は全体の中で方向付ける				「部分」を取り出して洗練し、それを「ゲーム」に戻す。	
様相	つき合い	返し合い	送り合い	打ち合い1	打ち合い2	
姿 (上達ぶり) (不安定) ↓ 意図的・安定的 (動きで示す)						
	<ul style="list-style-type: none"> ボールの落下点に動けない。 お見合いをしていてボールがぼとりと落ちる。 ボールに触れるが、ボールを返せない。 ボールを返すが変な方向に飛んでいってしまう。 <p>→ボールの落下点に動くことができる。 →来たボールを相手コート正面に返すことができる。 →前衛に固まり相手コートに返すことができる。 →相手コート奥に大きく返すことができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 意図されずボールを落とさずに返すことができる。 ボールを上あげることができる。(1本目) ボールに体を向け、カバーの動きができる。(2本目) ローテーションして返し合いができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 前衛中央へボールを送ることができる。(1本目) 味方からのボールを整えることができる。(2本目) (相手)狙って大きく返したり、すきをつけて返したりできる。 	<ul style="list-style-type: none"> 三段攻撃の基本的な形(レシーブ→トス→スパイク)をつくり、すきをつけて打ったり強く打ったりできる。 	<ul style="list-style-type: none"> 安定した三段攻撃とそれに応じて(ブロック)をつけて守ることができる。 	
指導内容	作戦	○落とさないようにつき返して勝つ。	○つないで返し勝つ。(助けて勝つ)	○整えて後方に大きく送り勝つ。	○上から強く打ち勝つ。	○横から打ったり(ブロック)をつけて守り勝つ。
	攻防	(パス返球) ・落とさないようにつき返す。	(カバー返球) ・落とさないようにし、カバーし合って返す。	(連絡送り) (3本返球) ・後ろへ大きく返したり相手の隙を見つけて返したりする。	(三段攻撃) (守り) ・1-5のレシーブ隊型を徹底する。	(二・三段攻撃) (ブロック防御) ・ブロックの体制、フェイントフォローの体制を徹底する。
	連けい		・助けて返すリズム(レシーブ～カバー)	・整えて送るリズム(セットし返す動き)	・レシーブ～トス ・トス～スパイク ・レシーブ隊型 ・1-5	・レシーブ～トス～スパイク ・(ブロッキング)と守り方
	ボール操作	・パス(オーバー、アンダー) ・(投げ入れ)	・トス ・サーブ		・スパイク	・(ブロック)
めど	1年			2年	3年	

こうしたバレーボールの本質やよさを踏まえ、ゲームを通して全体的な調子（様相）をつかみ、そこから課題を明らかにしてそれを部分的練習によって解決する。そして、再びゲームを通して解決できたかを確認する。そうした研究実践を通して、バレーボールの学習の基本的指導過程を表1のようにまとめた。

各学年段階における目指す様相を次のように設定した。

○第1学年（男子）：「相手からのボールを確実にレシーブし、カバーの動きを使ってボールをつなぎ、3本以内でねらって返すゲームができる。」

○第2学年（男子）：「セッターを中心として、1－5のレシーブ隊形から三段攻撃を多く使って攻めるゲームができる。」

○第3学年（男子）：「セッターを中心とした6人のコンビネーションを高め、三段攻撃で攻めたり、ブロックをつけて守ったりするゲームができる。」

目指す様相に近づくためには、アンダーハンドパスやオーバーハンドパスなどのボール操作やカバーの動き及び、スイッチプレーなどの連けい動作、三段攻撃などの攻防プレーを身に付けるための練習に工夫が求められる。

イ 指導内容表

各学年の指導内容（課題、ポイント、練習方法、つまずき、つまずきに対する手だて、達成の目安）を明らかにした。表2は、第1学年（男子）の指導内容表である。

ウ 単元指導計画

指導内容表をもとに、単元指導計画をP121のように作成した。単元指導計画を作成するにあたっては、単元の構成を13時間とし、単元の始めの2時間で基底技能（オーバーハンドパスやアンダーハンドパス、アンダーハンドサーブなど）を身に付けるとともに、ゲームを通してチームの課題を発見する。そして、単元前半の6時間でゲームの様相の発展に即した課題（目標）を位置付け、それを解決するためのポイントと練習方法、教師の指導などを明らかにし、“上げる～整える～返すという球すじを大切に3本以内で返す”攻防プレーを身に付け、単元後半の4時間で単元の評価のためのリーグ戦を位置付けた。

（2）技能の向上に結び付く思考・判断を高める方法の工夫

① 1時間の基本となる指導過程の明確化

ア 1時間の基本となる指導の流れ

1時間の学習の流れ（過程）全体を「計画」「展開」「評価」とし、実動時間を35分以上位置付け、運動量を確保するとともに、その学習を次のようにとらえた。

「計画」は、[全体計画会]で課題（目指すゲームの様相）とその達成のためのポイント（コツ）を具体的な場面を取り上げ提示する。[グループ計画会]では全体計画会を受け、グループが勝つために課題とすることやグループの課題を達成するために一人一人が意識すること（個人課題）を確認し合うなど思考・判断の場とする。

「展開」は、バレーボールの場合、[グループ練習]－[前半ゲーム]－[研究会]－[後半ゲーム]を基本とし、[研究会]では、グループ課題などの達成状況を全体やグループごとに確認し



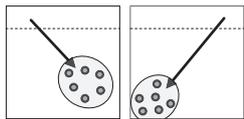
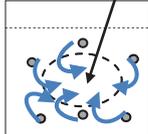
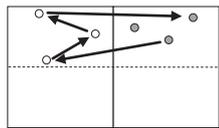
合い、意識すべきことをはっきりさせて、後半のゲームへとつないでいく。

「評価」は、グループ反省会による自己評価、相互評価と、全体会での相互評価と教師による評価を行う。(本時の課題の達成度や勝敗の要因などを振り返り、次時への課題意識をつくる。)

また、基底技能の習得のため、授業の最初に「準備運動」(補助運動)を位置付け実施する。

表3は、1時間の基本となる流れを、学習内容、学習活動、時間配分の目安についてまとめたものである。

■表2 第1学年(男子)バレーボール学習指導内容表

様相	必要なボール操作が身に付いてない状態	つき合い	返し合い	送り合い
課題	○オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、アンダーハンドサーブなどの基底技能を身に付けることができる。	○ボールが飛んでくる場所へ全体で動くことによって、落とさないで相手コートに返すゲームができる。	○相手からのボールを確実にレシーブし、カバーの動きを使ってボールをつなぐことができる。	○上げる～整える～返すという球筋を大切に、3本以内で整えて返すゲームができる。
ポイント	・構え方、ボールに対する動き方がわかる。 ・額の上でボールをとらえてオーバーハンドパスができる。 ・膝のクッションを使って送り出すようなアンダーハンドパスができる。	・ボールの落下点を予測して素早く移動することができる。	・ボールの方向へ移動し、ボールを拾う仲間に「へそ」を向けて囲むように動くことができる。	・コート中央に1本目を山なりのボールを上げる。 ・2本目は山なりのボールを整えることができる。 ・3本目を確実に相手コートに返すことができる。 ・3本目はコートの奥やライン際など相手がいらない所をねらって返すことができる。
練習方法	・対人パス ・扇形パス ・円陣パス ・ネット越しパス ・サーブとレシーブ ・3対3ラリー	投げ入れ練習Ⅰ 	投げ入れ練習Ⅱ 	3対3 
つまずき	ボールのつき方が分からない。 ・ボールの高さに合わせて、オーバーハンドパスやアンダーハンドパスを使い分けることができない。	ボールの落下点に動けない。 ・お見合いをしてボールがぼとぼと落ちる。	1本目を真上に上げられない。	1本目のレシーブの肘が曲がっていたり、腕を振り過ぎたりするため、前衛センターにねらって返すことができない。
手立て	・自在ボールを使って、ボールの位置によるアンダー、オーバーハンドパスの構えを知る。 ・パスの種類の声掛けをする。	・ボールの投げ入れで、前後左右の動きを身に付ける。	・前後左右の声をかけ、全体の動きをシュミレーションして確認する。	・コーンを置いて、ねらった的への返球練習をする。
達成の目安	■1本返しができる段階 ※ネット越しラリー数 10回	■つないで返すことができる段階 ※返球率30～40%	■2～3本で返球ができる段階 ※返球率40～50%	■3本で返球できる段階 ※返球率60～70% ※3本返球率30%

■表3 1時間の基本となる流れ ※実動時間35分以上の確保

条件 過程	学習内容	学習活動	時間配分の目安	
			抽出練習と確かめゲームの場合	リーグ戦の場合
計画	1. 準備運動 2. 計画会 ・課題提示 ・グループ計画会	・課題達成のための補助運動 ・本時の課題、練習方法、技術ポイントの確認 ・グループ・個人課題の確認など	☆授業前	☆授業前
			7分	5分 0分 3分
展開	3. グループ(全体)練習 4. 研究会 5. ゲーム	・課題に対するグループ練習 ・課題やポジショニングなどの再確認 ・つまずきに対する手立てなどの確認 ・課題を意識した試合	15分	36分
			3分	
			20分	
評価	6. 反省会 ・グループ反省会 ・全体会	・ゲーム記録をもとにしたグループ課題(作戦)などについての振り返り ・勝敗、課題の達成ぶりの振り返り	5分	6分

単元指導計画（指導と評価の計画）

第1学年（男子）

時間	学習内容・学習活動	学習活動に即した評価規準				評価方法
		運動への 関心・意 欲・態度	運動につ いての思 考・判断	運動の 技能	運動につ いての知 識・理解	
1	○ビデオや学習カードから、単元全体的見通しをもち、1時間の授業の流れや役割の果たし方を理解することができる。		①練習やゲームを通して、必要な方法を理解している		①技術のポイントや運動の特性を理解することができる	・グループや個人の課題を設定しようとしたり、学習ノートの活用方法を理解しようとしたりする。(観察)
2 ・ 3	○オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、アンダーハンドサーブなどの基底技能を身につけることができる。 ・対人パス ・扇形パス ・円陣パス・パスゲーム ・アンダーハンドサーブ	①練習やゲーム中に、お互いがたはよしできると認めている		①パスやサーブの動作ができる		・お互いに協力して練習しようとする。 ・ボールを片付けるなどして、安全に気を配ろうとする。(観察)
4 ・ 5	○ボールが飛んでくる場所へ全体で動くことによって、落とさないで相手コートに返すゲームができる。 ・ネット越しパス練習 ・投げ入れからの返球練習 ・ローテーション ・問題発見ゲーム	②審判と協力してゲームの進行を助けることができる			②攻守の技術やゲームのルールを理解することができる	・ゲームにおける技術のポイントを見つけようとする。 ・パスを組み合わせさせて継続できる。(観察・学習カード)
6 ・ 7	○相手からのボールを確実にレシーブして、カバーの動きを使ってボールをつなぐゲームができる。 ・投げ入れからのカバー練習 ・サーブからのカバー練習 ・確かめのためのゲーム		②必要な戦術や戦術を学習し活用して練習している	②練習やゲームで、ポジションに応じた動きができる	③ゲームの運営について、ルールや審判の役割を理解している	・ゲームにおける技術のポイントを見つけようとする。(観察・学習カード)
8 ・ 9	○「上げる～整える～返す」という球すじで、3本以内で整えて相手コートに返すゲームができる。 ・球すじ練習 ・3対3のラリー練習 ・サーブからの3本以内返球練習 ・確かめのためのゲーム		③個人やグループの技術に必要に応じて練習している	③練習やゲームで、相手の反応に合わせた動きができる		・ゲームにおける技術のポイントを見つけようとする。 ・ゲームでお互いのよいところを認め合い、仲間に働きかけている。(観察・学習カード)
10 ・ 11 ・ 12 ・ 13	○3本以内でねらって返すゲームができる。(リーグ戦)	③練習やゲーム中に、危険なプレーやルール違反がないかを検出している		③練習やゲームで、相手の反応に合わせた動きができる	③ゲームの運営について、ルールや審判の役割を理解している	・審判の判定や指示に従い、勝敗や結果を受け入れようとしている。 ・課題の達成状況をとらえ、新しいグループ課題を設定しようとしている。(観察・学習カード)

② 1時間の学習，指導における工夫

ア 準備運動

課題を達成するために最低限必要となるボール操作や連係動作の技能の定着を図る。

■表4 準備運動の内容と基本条件

様相	つき合い	返し合い	送り合い	打ち合い1	打ち合い2
準備運動の内容	・円陣パス，壁パスス テップ練習 ・手投げからのオー バーハンドパス・ア ンダーハンドパス	・対人パス，ネッ トを挟んだ対人 パス (オーバーハンド パス・アンダーハ ンドパス)	・ネットを挟んだ ランニングパ ス，ツータッチ パス	・トス練習，二 段トスの練 習	・手投げからの スパイク練 習 ・トスからのス パイク練習
ネット の 高 さ	210cm	210cm	210cm	215cm	
サーブ の 規 定	・下からの手投げ	・アタックライン 付近からアン ダーハンドサー ブ	・エンドラインま たはアタック ライン付近か らアンダーハ ンドサーブ	・アンダーハンドサーブ	

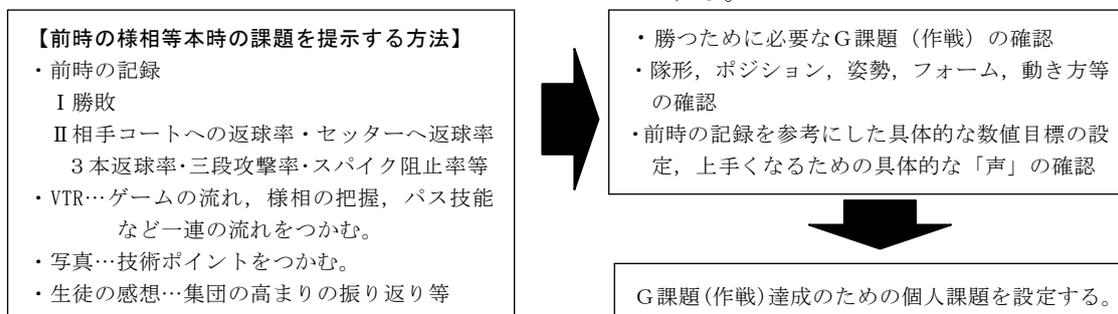
イ 計画会・課題提示

【全体計画会】… 知識，態度

- ・前時の様相と実態，勝敗結果等を振り返り，そこから必然性のある課題を設定する。

【グループ計画会】… 思考・判断

- ・全体の課題を受け，前時までのグループの実態を参考にしてグループごとに課題（勝つための作戦）を確認・決定する。



ウ グループ練習 … 技能，思考・判断，態度

グループ課題やポイントを意識して繰り返し練習する。そして，いつ，誰が，どのようにして動くのかを練習の中で確認し，“グループとしての動き”をつくる。

■表5 グループ練習

様相	つき合い	返し合い	送り合い	打ち合い1	打ち合い2
練習内容	・ネットを挟んでの3対3(何本でもよいので返す)	・相手コートから投げ入れられたボールを3本以内での返し	・ポジションを決めて3本返球(セッターの固定) ・ショートサーブのレシーブ	・ポジションを決めて三段攻撃(セッターのスイッチ) ・ロングサーブのレシーブ	・ブロック練習→ブロックをつけたスパイク・レシーブ ・ポジションの確認(セッター，MB，WSなど)
相互援助活動	・ペアを組んで，パス技能の教え合い	・グループで基底技能の教え合い構え・動く場所上げる方向	・レシーブ→トス→スパイクといったボールの球筋	・ポジショニング ・レシーブ時のポジショニング ・ブロックに対応したレシーブのポジショニング	

エ 研究会 … 知識, 思考・判断

グループ練習や前半ゲームを振り返り、課題やポジショニング等について、全体やグループで再確認を行う。

オ ゲーム … 技能, 思考・判断, 態度

勝つためのグループ課題（作戦〈攻防プレー、連けい動作等〉）を意識し試合を行う。

- ・課題をネットなどプレー中に見える場所に掲示しておく。
- ・L, PO, コート外の班員に常に声をかけさせる。指示の声「上げて」「カバー」や励ましの声「ナイス」「ドンマイ」等。
- ・課題に合わせてゲーム記録を取る。返球率, 3本返球率, 三段攻撃率, セット率等

※L…リーダーの略

※PO…パフォーマンス・オブザーバーの略（リーダーを補佐して技能面の観察を行う係）

カ 反省会 … 知識, 思考・判断, 態度

勝敗, ゲーム記録（返球率・3本返球率・三段攻撃率・スパイク阻止率等）を基に課題の達成度をグループや全体でLやPO, MOを中心に振り返る。

※MO…メンテナンス・オブザーバーの略（Lを補佐して態度面の観察を行う係）

(3) 実践事例 … 市内A中学校

- ① 単元名 : 球技（バレーボール）
- ② 学年 : 第1学年 男子
- ③ 本時の位置 : 7 / 13時
- ④ 本時の目標 : 相手からのボールを確実にレシーブし, カバーの動きを使ってボールをつなぐゲームができる。 … “返し合い”の様相のゲーム
- ⑤ 授業の概要と評価の観点 … 次ページ（P125ページ）
- ⑥ 指導上の工夫

**ア 明確な課題提示 … カバーのための動き（1本目のレシーブを真上へあげる
ボールの方に体を向ける ボールを囲むように前後左右に動く）**

**イ 課題に整合した練習 … 投げ入れからのカバーの動きの反復練習
ボールキャッチをさせてからの動きの確認**

**ウ グループの相互援助活動 … Lを中心とした教え合い（指示の声等）
MOや班員による励まし（激励や盛り上げの声等）**

⑦ 変容 … 6グループ中4グループ（A・B・D・E班）がカバーの動きを身に付け“返し合い”の様相のゲームを行うようになった。（ビデオによるゲーム分析, 複数の教師による観察から）

4グループの多くの子が資料1のような感想を, 授業を振り返って書いた。

4グループの返球率は, 次のように高まり, その多くが勝利につながった。

（返し合いの様相では, 2本返しや3本返しが増える等返球の率が高くなる）

表6 グループ返球率の変化

資料1:生徒の授業後の感想（B班 Y男）

班名	試合	前時の返球率	目安 40%上	本時の返球率	目安 40%上	本時の勝敗
A	1	25%	×	63%	○	○
	2	54%	○	67%	○	○
B	1	52%	○	49%	○	×
	2	36%	×	63%	○	○
D	1	33%	×	41%	○	×
	2	36%	×	45%	○	×
E	1	77%	○	78%	○	○
	2	77%	○	48%	○	○

1本目のレシーブをきちんと山なりに上げることができました。また, そのレシーブの方に体ごと向けて, カバーの動きをすることができました。それにより, 3本で返球する回数が徐々に増え, 試合に勝てるようになって, チームのみんなも自分も試合を楽しんでプレーができるようになりました。声もたくさん出るようになり, どんどんチームの仲間との雰囲気はよくなりました。

⑧ 授業の実践概要と評価の観点との関係

授業の概要	実動時間 3 5 分	各場面での評価の観点
<p>□課題提示（7分）</p> <p>【課題】『相手からのボールを確実にレシーブし、カバーの動きを使ってボールをつなぐゲームをしよう。』</p> <p>【課題達成のためのポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールの落下点へ動き、真上へ高く上げる（1本目） ・ボールにへそを向ける（2本目） ・2本目を触れるよう、ボールを囲むように動く（2本目） <p>●前時までの様子、勝敗表、写真などを用い全体会で課題やポイント等を確認し、グループ課題を明らかにする。</p> <p>□練習内容・練習方法（12分）</p> <p>【練習の内容】（10分）※抽出Gによる練習の仕方の示範</p> <ul style="list-style-type: none"> ●カバーの動きの練習…できないGはボールキャッチで確認  <p>【研究会】（2分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●全体で課題意識，できばえの確認，励ましの声の価値付け <p>【練習上の工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●投げ入れによる練習，ボールキャッチからの反復練習 ●Gでの教え合い … L，PO，MO等からの「あげて」「カバー」の瞬時の声，「ガンバ」などの励ましの声をかけさせる。 <p>□評価方法，評価内容（31分）</p> <p>【練習ゲーム】（25分）1ゲーム7分，3ゲーム1G…2ゲーム</p> <ul style="list-style-type: none"> ●授業後半に位置付け，ゲームの中で課題となる動きを確かめ，勝敗を競う。 <p>【反省会】（6分）L…司会，PO…記録の集計，MO…行動評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ●G会・全体会でゲームの勝敗，記録等から，本時の課題『真上へのあげ，カバーの動き』を身に付けることができたか振り返る。 	 <p>A：関心・意欲・態度 B：思考・判断 C：技能 D：知識・理解</p> <p>A：めざす動きを写真等で確認し興味・関心を高めたか。</p> <p>BD：写真や示範から，1本目の上げ方・カバーの動き方を理解し，どのタイミングでどのように動くかよいかを考えることができたか。</p> <p>C：反復練習やボールキャッチからの確認によって，動き方がわかり，できるようになったか。</p> <p>ABC：練習やゲームを通して，次第にグループとしてカバーの動きができ，Gの仲間からの指示や励ましによって，勝敗を意識し，関心や意欲を高め技能習熟が図られたか。</p> <p>ABD：ゲーム結果や記録から勝敗の要因や課題の達成ぶり，次時の課題を考えられたか。</p>	

6 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・研究実践を通して，学年の発達段階を踏まえたバレーボールにおける指導過程（上達のみちすじ，課題や練習方法，つまずきや手立て等）を明らかにすることができた。
- ・ゲームの様相をとらえ，それに応じた指導方法を明らかにし指導すれば，生徒は次の様相に進むとともに，達成感や成就感を味わうことが分かった。
- ・生徒の思考・判断力を高めるためには，その学習経験の状況を踏まえて，[教え→導き→引き出す]などその段階に応じて具体的ヒントを与えたり，アドバイスしたりすることが効果的であることが分かった。

(2) 課題

- ・今回の研究成果を生かし，他の運動種目においても学年の発達段階に応じた指導過程の在り方を究明し，「技能」「態度」「知識，思考・判断」の指導内容の位置付け方について，研究実践を通して深めていく必要がある。

高等学校部会

【研究主題】

「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる体育学習」

第 10 分科会

岐阜県立岐阜高等学校

第 11 分科会

岐阜県立岐阜工業高等学校



清流長良川と金華山（岐阜市）

<第10分科会>

岐阜県立岐阜高等学校

【研究主題】

課題を解決する方法を考え実践することにより、体力の向上と
豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる体育授業

【日 程】

9:15 10:00 11:05 11:15 12:20 13:00 14:15 14:50 15:00

受 付	公 開 授 業 ①	移 動 等	公 開 授 業 ②	昼 食	研 究 発 表	研 究 協 議	指 導 講 評	閉 会 式
--------	-----------------------	-------------	-----------------------	--------	------------------	------------------	------------------	-------------

【授業案内】

公開授業① 第2学年「陸上競技（長距離走）」 グラウンド

公開授業② 第2学年「体育理論」 多目的ホール（2階）

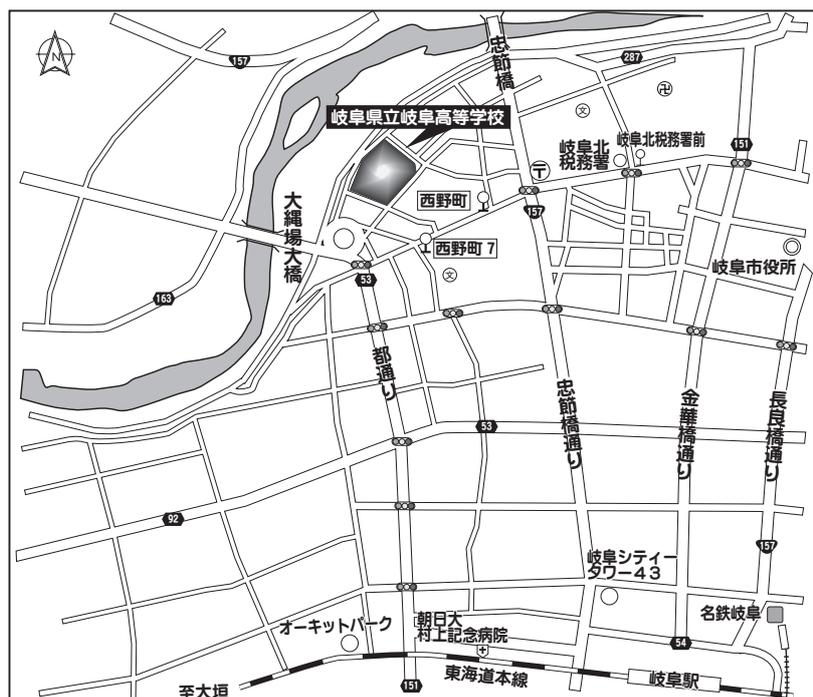
【会場案内】

岐阜県立
岐阜高等学校

〒500-8889
岐阜市大縄場 3-1

<アクセス>

○ JR岐阜駅-岐阜バス「西野
町」・「西野町7」 9-15分
学校まで徒歩5分



【学校の概要】

岐阜県立岐阜高等学校



所在地 〒500-8889 岐阜市大縄場3丁目1番地
校長 丹羽 章
児童数 1,204名(30学級)
連絡先 TEL 058-251-1234 FAX 058-251-8151
E-mail c27301@gifu-net.ed.jp
<http://school.gifu-net.ed.jp/gifu-hs/>

【学校の教育目標】

- ① 「百折不撓・自彊不息」の校訓のもと、不屈でたくましい精神力を持った人材を育成する。
- ② 「文武両道」をモットーとして、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな人材を育成する。
- ③ 勤労を尊び、思いやりと奉仕の心を持って社会に貢献する人材を育成する。

【学校紹介】

本校は、明治6年(1873年)11月4日に仮中学として岐阜米屋町旧尾張藩奉公所跡に開校された。その後、昭和20年の戦災、戦後の岐阜第一高等学校と岐阜女子高等学校の統合など、幾多の変遷を経て現在の岐阜県立岐阜高等学校となり、今日まで140年、卒業生の数も4万3千人を超え、多くの有為な人材を世に送り出している。

1 研究主題

課題を解決する方法を考え実践することにより、体力の向上と豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる 体育授業

岐阜県立岐阜高等学校

2 研究主題設定の理由

本校は明治6年に開校し、昨年創立140周年を迎えた県内屈指の伝統校である。これまでに本校を巣立っていった4万3千人を超える卒業生は、国内外の各界で活躍しており、その伝統は県内有数の進学校として脈々と受け継がれている。

『百折不撓・自彊不息』を校訓とし、「文武両道」をモットーに、将来有るべき人間像として、「知性と精神性を高い次元で統合した人間」（トータルパーソン）を理想とし、それに向けてあらゆる観点で教育活動を展開している。

本校生徒の特徴として、中学時代に生徒会長を務めた生徒や、常にクラスのリーダーとして仲間を引っ張ってきた生徒などが多数在籍し、学習面、学校行事、委員会活動等でその高いリーダーシップを発揮して各分野で成果をあげている。また、部活動においても文化系・運動系を問わず、高い集中力を生かし、短時間で能率の良い練習を行うことによって、毎年全国大会・東海大会への出場を果たしている。

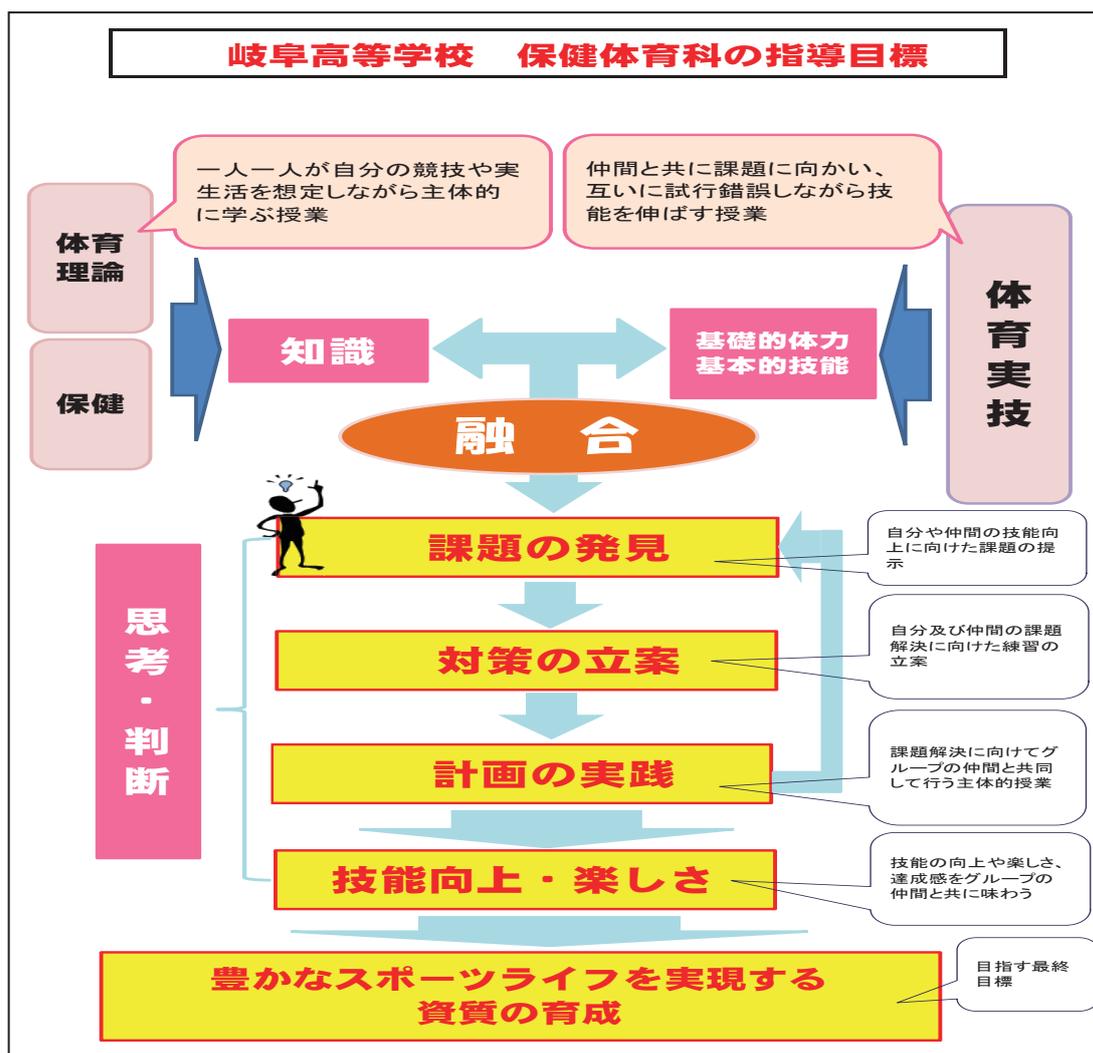
体育授業においても、生徒一人一人が高い向上心を持って毎時間の授業に臨むことができているため、教師が単元目標に沿った授業展開を行う中で、課題に対して自ら考え行動し、自己の記録向上に向けてひた向きに努力する姿や、リーダーを中心として活発なグループ学習を展開する姿がみられ、時には予想以上の効果を生み出すこともあり、授業内容の充実に繋がっている。

一方、全国に目を向けると、「平成25年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」によれば、長期的に見た高校生の運動能力の推移は、平成10年度を底に上昇傾向に転じているが、体力水準が最も高かった昭和60年代に比べると依然低い水準にある。また、一週間の総運動時間が60分を下回る中学生が30%を超える（女子）など、部活動等で運動をよくする生徒と、全く運動しない生徒との運動習慣に関する二極化が指摘されている。

こうした状況を改善するために、本校では、習得した知識を効果的に実技種目で活用することができるよう全体計画の時期を工夫したり、種目や目的に応じた適切なグループ学習の編成を工夫したりするなど、本校生徒の長所である高い思考判断能力を活かした課題解決型授業をさらに研究・推進することで、全ての生徒がより主体的に体育授業に取り組み、体力の向上を図ることができ、さらにこの経験が、将来の豊かなスポーツライフを継続する態度を育成できると考え、本研究主題を設定した。

3 研究の仮説

本校では、体育授業において以前から課題解決学習に取り組んできた。しかし、生徒が自ら考え学習に取り組む姿勢は見られるものの、課題解決の方策は、教師側からのアドバイスが中心になることも多々あり、生徒の主体的な課題解決学習には至っていないのが現状である。そこで、本研究では、体育理論・保健・体づくり・実技種目等を、生徒が体育の授業の中で活用しやすいように効果的・計画的に仕組むことにより、体育理論や保健で学ぶ知識と、体育実技で習得する基本技能や基礎体力を上手く活用することができ、課題設定の段階から生徒自ら考え、主体的に授業に取り組む積極的な課題解決学習が展開され、そこで培った経験が、将来の豊かなスポーツライフを継続する能力の育成に繋がると考えた。



4 研究内容

- (1) 生徒が効果的に知識を活用し、主体的に課題解決学習に取り組むことができるための全体計画の工夫
- (2) 各種目において生徒が主体的に取り組むために段階を考慮した単元計画
- (3) 体育理論（知識）と体育実技（基本技能等）を融合し、生徒が主体的に取り組むことができる課題解決学習の在り方

■ 体育理論と体づくりを各領域に活かし、生徒が主体的に授業に取り組むことができる全体計画

学年	単位	性	4			5				6			7			8		9			10			11		12			1		2			3
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1年生	3	男	体育理論	体づくり運動	バレーボール			陸上競技(走・跳)			体育理論	体づくり運動	バスケットボール			体育理論	体づくり運動	陸上競技(長距離走)			サッカー													
		女			陸上競技(走・跳)			バスケットボール					バレーボール					サッカー			陸上競技(長距離走)													
	男	バレーボール			器械体操			テニス					ダンス					バスケットボール																
	女	テニス			バレーボール			器械体操					バスケットボール					ダンス																
2年生	3	男	体育理論	体づくり運動	球技選択①			体育理論	体づくり運動	陸上競技(跳・投)			体育理論	体づくり運動	球技選択②			陸上競技(長距離走)			球技選択③													
		女			陸上競技(跳・投)					球技選択①					バレーボール			球技選択③			陸上競技(長距離走)													
	男	球技選択①			器械体操					球技選択②					ダンス			球技選択③																
	女	球技選択①			球技選択②					器械体操					球技選択③			ダンス																
3年生	2	男	体育理論	体づくり運動	選択①			選択②			体育理論	体づくり運動	選択③			選択④			選択⑤															
	女	選択①			選択②			選択③					選択④			選択⑤																		

■ 「体育理論」と「体づくり運動」を実技に活かす単元計画の工夫

- 座学で学ぶ「体育理論」を、各領域における実技授業の中に「知識」として合理的に取り入れられるよう、年間を通して領域の入れ替わり期の前に配列をするよう工夫した。
- 同じように、「体づくり運動」においても、それぞれの領域前に行くことで、基礎的な体力が身につく、技能習得に効果を発揮するよう工夫した。
- 入学年次以降について、体育理論で学んだ「知識」と入学年次に学んだ「基本的な技能」、体づくり運動で培った「基礎的な体力」を基に、課題解決学習において自らの力で考え、課題学習を主体的に取り組めるよう配列を工夫した。

■ 入学年次の配列に対する工夫

- 義務教育段階で学んだ技能や知識の更なる定着を図るため、本校は「球技」・「陸上競技(走・跳)」・「器械体操」を学校選択で履修させる。
- 入学時段階から、知識と技能・体力の融合を図るため、4月の段階から、体育理論と体づくりを各領域前に配列し、実技の中で合理的に利用できる習慣を身に付けさせる。
- 入学年次以降の主体的に取り組む課題解決学習に向けて、全ての領域でグループ学習を中心とした授業を行う。

■ 入学年次以降の配列に対する工夫

- 2年時の体育理論について、実技授業と関連を持たせる意味で、教科書内容を上手く入れ替える工夫をした。
- 2年時の体育理論を前期に配列し、そこで作成される「マイスポーツプランシート」を2年時後半から3年時の実技授業において、課題解決学習の「対策の立案」時に利用できるよう工夫した。
- 3年時は、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質を身に付けさせるため、1、2年時に学んだ授業の中から、興味を示す授業を自由に選択させ、課題解決学習を進める中で、「する」・「見る」・「支える」・「調べる」スポーツの実践を行えるよう選択授業を主とした。

●グループの課題に応じて主体的に練習できる陸上競技（長距離走）の単元計画《2年時》

時数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15					
指導のねらい	長距離走への意欲を高め、自己の体力の現状を把握しながら練習に取り組むことができる。				自己や仲間の課題に応じて、適切な目標設定や練習計画の立案をして長距離走に取り組むことができる。				自己や仲間の課題に応じて、適切な目標設定や練習計画の立案をしたり、練習の評価や見直しをしながら主体的に長距離走に取り組むことができる。											
学習の流れ	本時の目標や内容の確認、安静時心拍数測定、主観的体調チェック																			
	学習のねらい ・実態調査 ・学習計画 ・評価基準 ・脈拍測定の仕方 ・ストップウォッチの使い方 ・Walk ・Jog	グループミーティング (グループの課題、練習内容の確認)				グループミーティング (グループの課題、練習内容の確認)				○野外走 (LSD)										
		○全体でのW-up ・体操、ストレッチ ・体ほぐし運動 (モビリティトレーニング) ・動きづくり (腕振り、大股歩行、もも上げ)				○各グループ練習にあったW-up 各グループ独自の練習に見合った効果的なW-upに取り組む。				○各グループ練習にあったW-up 各グループ独自の練習に見合った効果的なW-upに取り組む。				○練習終了時心拍数測定、主観的運動強度チェック ○整理運動(Walk→体操)						
		○Walk ・背筋を伸ばす ・腕の振り ○Jog ・上体の保持 ・足裏全体の接地 ○LSD (ロング・スロー・ペース) ・ゆっくり ・リラックスして ・集団でリズム良く ・姿勢良いフォーム 3km タイム トライアル ① グループミーティング				○グループ練習の実践① タイムトライアル①により走り別のグループを作る。グループの課題に合った独自の練習を計画立案し、各グループごとにその練習に取り組む。 3km タイム トライアル ② グループミーティング				○グループ練習の実践② タイムトライアル②により走り別のグループを作る。グループの課題に合った独自の練習を計画立案し、各グループごとにその練習に取り組む。 3km タイム トライアル ③ グループミーティング				まとめ ・実態調査						
○練習終了時心拍数測定 ○主観的運動強度チェック ○整理運動(Walk→体操)				グループミーティング (本時の反省や感想、課題の記入)				グループミーティング (本時の反省や感想、現状の把握と課題設定、練習計画の立案及び見直し)												
指導する内容	技能	目標タイムを達成する練習をグループの走力の程度に合わせて設定し、様々な練習に応じて一定のペースで走ったり、スピードを上げて走ったりすること。																		
	態度	個人やグループの課題解決に向けて、自己の考えを述べたり相手の話を聞いたりするなど、グループの話し合いに責任をもって関わろうとしたり、共通の目標に向けて仲間と共に切磋琢磨するなどして主体的に学習に取り組もうとすること。																		
	知識・思考判断	卒業後に豊かなスポーツライフを継続できるようにするための視点を重視して、自己や仲間の課題の設定の仕方や課題に応じた練習計画の立て方、練習の見直しなど運動を継続するための取り組み方を工夫すること。																		
関心・意欲・態度			①⑤ 観察				②③ 観察		④ 観察			②③ 観察		④ 観察						
思考・判断				① グループ			② 観察			① グループ			② 観察		③ グループ					
技能			①② 観察					③ タイムトライアル						③ タイムトライアル						
知識・理解				① グループ						② グループ					③ グループ					
評価規準	【関心・意欲・態度】				【思考・判断】				【運動の技能】				【知識・理解】							
	①長距離走の学習に主体的に取り組もうとしている。 ②グループでの役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとしている。 ③合意形成に貢献しようとしている。 ④互いに助け合い高め合おうとして練習に取り組める。 ⑤健康・安全を確保して練習している。				①これまでの学習や課題解決の過程を踏まえて、自己や仲間の挑戦する課題を設定、見直している。 ②グループで活動する場面で、状況に応じた自己や仲間の役割を見付けている。 ③長距離走を生涯にわたって楽しむための自己に合った関わり方を見付けている。				①力みのないフォームや腕振りを身に付けている。 ②自己にあったピッチやストライドで走ることができる。 ③ペースの変化に応じてストライドとピッチを切り替えて走ることができる。				①トレーニング方法の名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。 ②長距離走に関連した体力の高め方について、学習した具体例を挙げている。 ③課題解決の方法について、理解したことを言ったり書き出したりしている。							

《生徒が課題解決を図って、主体的に長距離走に取り組むための工夫》

○長距離走への意欲を高めるための工夫

入学年次においては、長距離走にありがちな「つらい、きつい、苦しい」といったイメージを「楽しい、爽快だ」というものに転換するために、長距離走の授業によくみられるタイムトライアルを最小限とし、全身持久力向上の観点からも効果的である LSD(野外走)を始め多くの持久力トレーニングがあることを理解させ、練習に取り組んだ。また、より意欲的に取り組むことができるよう、クラスを走力別のグループ（5～8人）に分割し、自分達の力に合った無理のない課題や目標、練習内容を設定させた。グループ内の仲間相互の励ましやアドバイス、競走意識を高めることで『長距離走＝個人競技』という概念を『長距離走＝団体競技』という意識に変化させ、仲間と共に楽しく取り組むことができるよう指導した。

○自己の体の状態に応じて練習に取り組むための工夫

毎時間授業の初めに安静時心拍数、自分の主観による5段階の体調チェック、練習終了後には終了時の心拍数や主観的運動強度のチェックを行わせた。比較的簡易に測定・判断できる主観及び客観的な指数を用いることで、体調が悪い場合は練習の内容を軽減させるなど練習前後の体調に気を付けながら無理なく練習に取り組むように指導した。

○効率の良いフォームを身に付けるための工夫

単元の序盤においては理想的な走動作に近づけるため、W-up を兼ねた『体ほぐし運動』や『動きづくり』を取り込んだ。また、Walk や LSD などゆっくりとしたペースによる運動時にはグループ内で『背筋を伸ばす』、『足裏全体で接地する』などフォームに関する簡単な注意点について、お互いにチェックすることでフォームの定着に取り組んだ。

○理論的なトレーニング法に基づいた練習の計画と実践(体育理論との融合)

体育理論の授業においてトレーニングの原理と原則、体力トレーニングの進め方、持久力トレーニングなどについて学習し、これらの内容を長距離走の授業に反映させた。最初の段階でタイムトライアルにより自分たちの走力レベルを確認し、グループの課題を共有した。そのグループの課題を克服するための練習として、長距離走の様々なトレーニング法(インターバルトレーニング、レペティショントレーニング、ペース走)をグループの能力や目標を踏まえながら設定タイムや距離・本数を工夫するなど独自の練習方法を考案し、その計画に従って実践した。

《成果と課題》

様々な持久力トレーニングがあることを理解し、『自分との戦い』である長距離走を『仲間と共に走る』イメージへと転換させたことにより、以前よりも意欲的な授業への取り組みが見られた。また、自己や仲間の課題に応じて様々な持久力トレーニングを組み合わせながら練習計画を立案し練習を行うという課題解決学習は、生徒の主体的な学習活動があっただけでなく、記録や持久力の向上も確認できた。一方で、生徒の技術レベルは様々であるため、必ずしも『個人の課題＝グループの課題』とはならず、個々の練習を細かに見ると一部の生徒によっては課題を補う練習とは言い難い面もあった。

●他領域と関連付け、生徒が自己や仲間と協力して課題解決を図る体育理論の単元計画

教科・科目	保健体育 ・ 体育	履修学年	2年
使用教科書等	教科書：「現代高等保健体育（50 大修館 保体301）」 副教材：「現代高等保健体育ノート」		
学習目標	中学校での学習を踏まえ、生涯にわたって運動やスポーツを継続するためには、技術の特徴に応じた学習の仕方があることや、技能を高めるために何をどのように取り組めばよいのか、健康・安全をどのように確保するのか、などの運動やスポーツの効果的な学習の仕方について理解できるようにする。このため、技術は練習により技能として発揮できるようになること、技術の種類や技能の上達過程及び学習の段階に応じた学習の仕方があること、技能と体力は相互に関連していること、運動やスポーツの活動時の健康・安全の適切な確保の仕方があることなどを理解する。		
学習方法	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書、学習ノートを使用して講義形式及びグループ討議を中心に進める。 ・必要に応じて関連資料を適切に活用し学習効果を高める。 ・個人演習やグループ活動を通じ、場に応じて適切に行動するための知識や態度を養う。 ・課題学習によって単元の内容の理解を深め、実践力を養い、学校活動に生かす。 		

【指導と評価の計画】

関心・意欲・態度	①運動やスポーツの効果的な学習の仕方について、事例などを用いた話し合いを通して、学習に主体的に取り組もうとしている。
思考・判断	①運動やスポーツの効果的な学習の仕方について、比較したり、分類したり、まとめるなどして、判断して説明している。 ②実践しているスポーツにおいて、自らの課題を見つけ効果的な練習方法を立案することができる。
知識・理解	①運動やスポーツの技術と技能について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ②運動やスポーツの技能の上達過程について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ③運動やスポーツの技能と体力の関係について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ④運動やスポーツの活動時の健康・安全の確保の仕方について、理解したことを言ったり書き出したりしている。

【学習計画表】 2単元 運動・スポーツの学び方

時間	学習項目	展開	評価機会・評価方法		
			関・意・態	思・判	知・理
1	ア運動やスポーツの技術と技能 ・技術と技能 ・技術の型に応じた練習 ・戦術・作戦・戦略	発問1 技術、作戦、戦術の意味を書いてみよう 個人活動・発表 解説・板書 発問2 技術と技能の違いを考えてみよう 個人活動・発表 解説・板書 発問3 身近にあるスポーツを分類してみよう グループ活動・発表 解説 発問4 オープンスキル型とクローズドスキル型の具体的な練習方法を書いてみよう グループ活動・発表 解説・板書 発問5 球技を4つに分類してみよう グループ活動・発表 解説・板書 発問5 MSPシートに技術と戦術を記入しよう 個人活動 解説 本時のまとめ	①-1観察		①-1 ワークシート
2	イ運動やスポーツの技能の上達過程 ・技能の上達課程 ・効果的な練習法 ・動きの開始と持続 ・動きのコントロール ・フィードバック ・トレーニングの5原則	発問1 小・中学校のときにできなかったことができるようになった例を挙げてみよう 個人活動・発表 解説・板書 発問2 上達段階毎に名前をつけてみよう 個人活動・発表 解説・板書 発問3 自分の経験をもとに練習曲線を考えてみよう 個人活動・発表 解説・板書 発問4 スポーツの練習方法を挙げてみよう グループ活動・発表 解説・板書 発問5 上達の段階毎の練習方法を考えてみよう グループ活動・発表 解説・板書 発問6 具体的な練習方法をMSPシートに記入しよう 個人活動 本時のまとめ	①-2観察		②-1 ワークシート

3	ウ運動やスポーツの技能 ・と体力の関係 ・運動・スポーツにおける技能と体力の関係 ・練習とトレーニングの原理と原則 ・体力トレーニングを支える基本理論 ・体力トレーニングの進め方・筋力トレーニング ・持久力トレーニング ・調整力・柔軟性のトレーニング	発問1 小・中学校のときにできなかったことができるようになった例をあげてみよう 個人活動・発表 解説・板書 発問2 できるようになった要因は何だろう 個人活動・発表 解説・板書 発問3 スポーツ毎に必要なとされる体力は何だろう グループ活動・発表 解説 発問4 筋力を高めるには、どんな練習方法があるだろう グループ活動・発表 解説・板書 発問5 持久力を高めるには、どんな練習方法があるだろう グループ活動・発表 解説・板書 発問6 調整力や柔軟性を高めるには、どんな練習方法があるだろう グループ活動・発表 解説・板書 発問7 MSPシートに必要な体力とその練習方法を書き出してみよう 個人活動 本時のまとめ	①-2 ワークシート		③-1 ワークシート
4	エ運動やスポーツの活動 ・時の健康 ・安全の確保の仕方 ・運動やスポーツにおける怪我の実態 ・運動やスポーツを行うときに注意すること オ練習計画の立案	発問1 例文を読んで事故の原因を書き出そう 個人活動・発表 解説・板書 発問2 今までに見たり経験したスポーツ中の怪我や事故について書き出してみよう その原因を考えてみよう 個人活動・発表 解説・板書 発問3 熱中症はどうすれば予防できるか考えてみよう 個人活動・発表 解説・板書 発問4 MSPシートに起こりやすい怪我や事故について書いてみよう 解説・板書 発問5 今までに学習したことを踏まえて、自らの課題を見つけて練習計画（練習方法）を立案してみよう 本時のまとめ	②-1 ワークシート		④-1 ワークシート
5	オ課題学習・練習計画の立案	解説 具体例を示しながら、アドバイスの仕方等と本時の説明をする グループ活動 一人ずつ順にMSPを発表し、それに対してアドバイスを行う 個人活動 アドバイスを受け、MSPシートを修正し完成させる 発表 解説 本時のまとめ	①-3観察	②-2 ワークシート	

【指導のねらいと授業の工夫】

学習した内容を最も身近なスポーツに当てはめて考えることにより、知識の重要性を実感するとともに、スポーツの実践の場において効果的な技能の向上を図ることをねらった授業展開を工夫した。具体的には下記の様な工夫展開を行った。

①マイ・スポーツ・プランニング（MSP）シートの活用

単元のはじめに最も身近なスポーツをマイ・スポーツとして選ばせ、学習した内容をマイ・スポーツに当てはめて考えさせた。

②ワークシートの活用

③個人活動の時間の設置

④グループ討議の時間を設置

⑤発表の場の設定

【研究のまとめ】

(1) 成果

多くの生徒が、体育理論の重要性を認識し、ためになったと答えている。運動系部活動に所属していない生徒や体育を苦手としている生徒の多くは、「今まであまり考えたことが無かったが、体育理論の大切さが分かった。」と答えている。また、運動系部活動に加入し専門的に活動している生徒にとっても「練習やトレーニングを系統的に整理して理解することができ、練習やトレーニングを考え工夫することの意義が分かった。」と答えている。

特にマイスポーツを選び、毎時間に学習したことをマイスポーツに当てはめて考えることで、「分かりやすかった。考えやすかった。」という意見がほとんどであった。また、グループ内討議の時間を設けることによって、仲間の意見を聞き自分の考えを修正したり改善したりする姿勢が見られ、より深く考えることができていた。また、自分の考えをまとめ分かりやすく発表する経験の場としても役立っていた。

(2) 課題

運動系部活動等の高度で専門的な計画に対してアドバイスすることは難しい場合が多く、グループをどのように分けるのかを考え工夫する必要がある。1年目はグループ内を異質として、他種目を選択した人からの意見を聞くことでの新たな発見や活発な意見交換を期待した。その結果、他種目の練習やトレーニングを取り入れて計画した生徒もいたが、仲間の意見を聞くだけでアドバイスできない生徒も多く見られた。2年目は、グループ内を等質として高度な話し合いを期待した。期待通りの話し合いが展開されたグループもあるが、活発な話し合いができないグループも見られた。

ワークシートを利用することで授業展開をスムーズにできたが、内容を生徒の実態に応じて工夫や修正を常に行っていくことが大切であると感じた。MSPシートについても同様である。

5 研究の成果と課題

(1) 成果

・全体計画の工夫による成果

各領域前に体育理論・体づくり運動を配置したことにより、体育理論の内容を「知識」としてとらえ、実技の中で「技能」の習得場面や、課題学習の「計画立案」でのアイデアを出す場面に活かしやすくなり、知識と実技との融合（絡み）が良くできていた。

具体的には、体育理論の授業で、教師と生徒とのやりとりの中に頻繁に体育実技で行った練習方法が話題となったり、体育実技の中では、課題練習を作成する段階で、グループ内で会話に体育理論で学習したキーワードが出てきたりしていた。

・段階を踏まえた単元学習による成果

学校段階の接続や発達の段階のまとまりを考慮し、かつ、中学校時の習得レベルのばらつきを整理し、入学年次とその次の年次の単元計画を系統付けて、指導内容の体系化を図ることにより、生徒が主体的に授業に取り組むことができ、「楽しさ」や「喜び」を味わうことに繋がった。

また、入学年次に「基本技能等」の習得を盛り込んだ課題解決学習を踏まえ、その次の年次で体育理論で学んだ「知識」と入学年次の習得した「基本技能等」を融合させた、生徒主体の課題解決学習を行うことで、豊かなスポーツライフの育成に繋がる基礎を作ることができた。

(2) 課題

・評価の難しさ

体育理論と陸上競技についてそれぞれの評価は、評価規準にそって付けることはできるが、体育理論で学んだ知識を実技に活かしたものをどう評価に組み込むかが今後の課題である。

・1年次、3年次の体育理論と実技の結びつき

今回の発表は2年次の体育理論と実技との融合であったが、1年次や3年次の体育理論と実技との融合を今後どのようにして図るかが課題である。

本校は今回の研究を通じて、体育の授業で学ぶ「学力」をいかにして豊かなスポーツライフの継続、育成に繋げるかという課題に取り組んだ。

教師側の指示に従うだけの体育の授業、あるいは放任主義的な体育の授業であるならば、おそらく体育好きな生徒は卒業後も今までどおりスポーツを勤しみ、体育嫌いな生徒はスポーツを全く行わない二極化を生んでいくだろう。

学校で「体育を学ぶ」とはどういうことなのか。我々は、その部分を大きくクローズアップさせ、体育理論で学ぶ「知識」を効果的に実技種目と融合させながら、「自ら考える力」を育むことを体育授業の中で実践した。

またグループでの課題解決学習を通して仲間と協力し合い、コミュニケーションをうまく取りながらそれぞれのグループ課題に対して解決する力を身に付け、その楽しさや喜びを味わうことで、体育的学力に気付き、養うことができた。

生涯スポーツに繋がる学校段階の最終段階として、このような経験をさせることで将来必ず、生徒たちの豊かなスポーツライフの継続に繋がるものと信じている。今後もさらに研究を進め、学校体育の意味を見直していきたい。

<第11分科会>

岐阜県立岐阜工業高等学校

【研究主題】

運動やスポーツの楽しさを味わい、教え合い、助け合い、一人一人が豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を身に付ける体育授業

【日 程】

9:00 9:50 10:40 11:00 11:50 13:00 14:15 14:50 15:00

受 付	公 開 授 業 ①	移 動 等	公 開 授 業 ②	昼 食	研 究 発 表	研 究 協 議	指 導 講 評	閉 会 式
--------	-----------------------	-------------	-----------------------	--------	------------------	------------------	------------------	-------------

【授業案内】

公開授業① 第3学年 ゴール型「サッカー」 グラウンド（雨天時体育館）

公開授業② 第2学年 武 道「柔 道」 多目的ホール（柔道場）

【会場案内】

岐阜県立
岐阜工業高等学校

〒501-6083
羽島郡笠松町常磐町
1700

<アクセス>

○名鉄笠松駅下車 徒歩5分



【学校の概要】

岐阜県立岐阜工業高等学校



所在地 〒501-6083 羽島郡笠松町
常磐町1700

校長 長屋 千秋

生徒数 1078名 (27学級)

連絡先 TEL 058-387-4141 FAX 058-387-4019
E-mail c27319@gifu-net.ed.jp
URL <http://school.gifu-net.ed.jp/gifu-ths/zennichi/>

【学校の教育目標】

社会や地域から期待される「魅力ある工業教育」を推進する。

- 1 確かな学力・健やかな体・豊かな心の調和のとれた人材の育成
- 2 自立力・共生力・自己実現力のある人材の育成
- 3 高い志とグローバルな視野をもって夢に挑戦できる人材の育成
- 4 地域社会の発展に貢献できる人材の育成

【学校紹介】

本校は、大正15年(1926年)に岐阜第一工業学校として開校され、新制度により昭和23年(1948年)に岐阜県立岐阜工業高等学校となり現在に至っている。今年、創立89年を迎える。「部活動」「ものづくり」「資格取得」を三本柱に掲げ、生徒は各自の目標に向かって日々の生活を送っている。サッカー、バレー(男子)、レスリング、ボクシングは県の強化指定を受けている。卒業生は3万人を越え全国各地で活躍している。著名な卒業生には、山本寛斎、Mr.マリックなどがおり、Jリーガーも含めると枚挙にいとまがない。

1 研究主題

運動やスポーツの楽しさを味わい、教え合い、助け合い、
一人一人が豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を
身に付ける体育授業

岐阜県立岐阜工業高等学校

2 研究主題設定の理由

本校は、岐阜県内の工業高校の中心的役割を担っており、過去の3万人におよぶ卒業生たちが県の内外において様々な工業の中核的存在として活躍している。各学年8学科(機械, 電子機械, 設備システム, 建設工学, 化学技術, 電気, 電子, デザイン工学)9クラス(機械科2クラス)の大規模校であり、『礼儀正しく 勤労を尊び 創意工夫に努めよ』の校訓のもと『部活動・ものづくり・資格取得』の3本柱のいずれかでのスペシャリストを目指している。特に『運動系部活動』においては、サッカー部・バレー部(男)・レスリング部・ボクシング部が岐阜県の強化指定部に認定されており、毎年好成績を収めている。また『ものづくり』においても全国大会で上位入賞者を多数輩出し、さらに『資格取得』においては高校生では困難とされる資格にチャレンジして、見事に合格する生徒もいる。

本校は工業高校ということで3年間同じ科に所属するため、年度ごとのクラス編成はない。生徒たちは学年の進行に伴い互いの個性を徐々に把握していくなかで、互いが分かり合えるようになってくる。体育の授業においても、互いの個性を認め合いながら、常に前向きで明るい雰囲気の中で、授業が進められている。しかし、本校の生徒はこのように互いを尊重し実直な姿勢で授業に取り組むことを得意としている一方、自分たちでコミュニケーションを深めて、課題を解決しながらさらに良い状況をつくり出すという資質や能力については力不足に感じるが多々あった。そこで、3年間同じクラスという特徴を最大限に利用し、長期的展望に立ったカリキュラムを作成し、その各々の領域・種目においてコミュニケーションを豊かにするツールを利用しながら、仲間で見事に現状を打破する姿を追求することにした。

生涯にわたって運動に親しみ、豊かなスポーツライフを継続するためには、運動やスポーツの楽しさや喜びを体感させ、将来も運動に親しもうとする態度や意欲を育てることが大切である。そのために、生徒同士がお互いに教え合い、助け合うなどしてコミュニケーションを深めながら主体的に活動する授業を展開することで、課題を解決した時の喜びや作戦が成功した時の感動を経験し、それが結果的に生涯にわたっての運動好きを生むことにつながると考え、本研究主題を設定した。

企業が高校生に求める人間像の第一は『コミュニケーション能力に優れた生徒』である。本校生徒の約3分の2が就職するという現状を踏まえ、体育の授業はコミュニケーション能力を大きく成長させる大切な場であると位置付けて取り組んだ。

3 研究の仮説

ペアやグループで考えながら活動する時間を多く取り入れた体育授業の実践が、生徒の課題解決能力・コミュニケーション能力の育成に必要と考えた。その方法として以下のよう
に研究の具体を取り入れた。

(1) 『授業形態、グループ学習の工夫、活動の分業・専門性』（サッカー）

グループとしてどのような作戦を立てゲームを行うか。M-T-Mメソッドに沿ってグループとしてあるいは個人として成長するための練習方法を考案する。また、課題に対しては、小型のホワイトボードを利用させ、視覚的に意思統一を図る。

(2) 『対人競技におけるコミュニケーション能力の育成』（柔道）

柔道（武道）の対人動作を取得するなかで、互いを認め合い敬意と思いやりの心で互いに成長し合う楽しさを身に付ける。また、タブレットを利用しながら相互で動きを分析するなどして、視覚的に課題解決を図る。

4 研究内容

(1) 個人・グループが成長するための全体計画の工夫

(2) 各種目において生徒主体で授業展開するための段階をふまえた単元計画の作成

(3) 課題解決能力・コミュニケーション能力を育成するためのツール利用方法

月	4			5			6			7			9			10			11			12			1			2			3				
時間数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
行事				新体力テスト			修学旅行						全国総体						国体	運動会										耐寒強歩大会					
学年																																			
1年生	2	体づくり運動 8			理論 4			陸上競技選択 8 ・三段跳び ・ハードル走			柔道 14			理論 2			球技選択 12 ・バスケットボール ・バレーボール			陸上競技 10 ・長距離走			球技選択 12 ・ソフトボール ・サッカー												
2年生	2	理論 3			体づくり運動 7			球技選択 12 ・ソフトボール ・サッカー			理論 3			マット運動 11			柔道 12			陸上競技 10 ・長距離走			球技選択 12 ・バスケットボール ・バレーボール												
3年生	3	理論 2			体づくり運動 10			理論 4			柔道 16			球技選択 19 ・バスケットボール ・バレーボール			球技選択 21 ・ソフトボール ・サッカー			陸上競技 15 ・長距離走			体づくり運動 18 ・なわとび (体力を高める運動)												

◆入学年次の配列の工夫

- 入学当初から9月にかけて「体づくり運動」「陸上競技」「柔道」を配置した。ペアや少人数のグループで活動する領域・種目を通じて、生徒同士のコミュニケーションの時間を多く確保し、互いのことをより深く理解させた。
- 暑い時期ではあるが、柔道を7月～9月に配置した。柔道を嫌がる要素の『痛い』『寒い・冷たい』を減らすために、あえて暑い時期に配置した。

◆入学年次以降の配列の工夫

- 2年次はマット運動を実施した後に柔道を配置した。二つの種目を連続させることで、巧緻性を高めてから柔道を指導することができるように考慮した。
- 3年次は体育理論を5月までに終了させ、6月以降から卒業時まで連続して実技種目を配置した。体育理論で『する』『見る』『支える』『調べる』などの運動やスポーツとの関わりを学んだ後に、卒業後を見据えた豊かなスポーツライフを体感できるような指導内容とした。

サッカーの評価規準 (●：入学年次 ○その次の年次以降)

	運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
単元 の評価 規準	サッカーの特性に関心をもち、チームの一員としての責任や役割を果たそうとしている。また自分や仲間の健康・安全に気を配るとともに、プレーに対して公正な態度を大切にしている。	自チームや他チームの分析を行い、適切な戦術やシステムを選んでいる。また、ゲームで見つけた課題を解決するために練習を工夫し、ゲームで発揮しようと設定している。	選択した戦術やシステムに応じた個人的技能を高めることができる。また、身に付けた技能をゲームで発揮することができる。	サッカーのルールや審判法を理解するとともに、分析や戦術選択の方法、効果的な練習計画の立て方を理解し、知識を言ったり書き出したりしている。
学習 活動に 即した 評価 規準	① サッカーに関心をもつとともに、学習を主体的に取り組もうとしている。 ② プレーやジャッジに対して公正な態度を大切にしようとしている。 ③ 健康・安全を確保している。 ① 役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとしている。 ② 仲間からの助言を素直に受け入れて、取り組もうとしている。 ③ チームの課題解決のために、積極的に意見を出して高め合おうとしている。	① 仲間に対して、技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。 ② 健康や安全を確保・維持するために、自己や仲間の体調に応じた活動の仕方を選んでいる。 ① これまでの学習を踏まえて、チームが目指す目標に応じたチームや自己の課題を設定している。 ② 課題解決の過程を踏まえて、取り組んできたチームや自己の目標と成果を検証し、課題を見直している。 ③ 作戦などの話し合いの場面で、合意を形成するための調整の仕方を見つけている。 ④ サッカーを生涯にわたって楽しむための自己に適した関わり方を見つけている。	① パスやボールコントロールなどの基本的技能を身に付けた動きができる。 ② 相手DFを意識したドリブルをすることができる。 ① 狙ったところに強いシュートを打つことができる。 ② 状況に応じて、声を出して呼んだり指示したりすることができる。 ③ 周りの選手の動きをよく見て、プレーをすることができる。 ④ 選択した戦術・作戦に応じた技能をゲームで発揮することができる。	① サッカーの技術の名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。 ② サッカーに関連した体力の高め方について、学習した具体例を挙げている。 ① 課題解決の方法について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ② ゲームやリーグ戦の仕方について、学習した具体例を挙げている。 ③ ルールや審判の方法について、学習した具体例を挙げている。

指導と評価の計画《1学年》 【サッカー】

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
	ねらい	①個人技能を高めながら攻防を楽しむ ②多くの仲間がかかわり、ボールを失わずにボールを前に運ぶ中盤での攻防を展開する。 ③全員で計画的にゲームができるように協力して運営を行う											
オリエンテーション	○整列・あいさつ ○準備運動や主運動につながる運動 ○用具や場の準備 ★ブラジル体操・ラダー・ストレッチ・体幹												
	10	試しのゲーム ゲームのやり方を再確認しよう	◎個人戦術の理解 ★ドリブル・フェイント・ボールキープ（シザース・マルセイユルーレット・ダブルタッチ） ★パス&コントロール（クッションコントロール・エッジコントロール） ★シュート練習 ★1vs1の攻防										◎チーム戦術の理解 ★チームの課題を克服する練習 ★審判法
20	授業の進め方の確認 ・単元(12時間) ・1時間の流れ ・授業の約束 ・グループ分け	・足の裏を使ってドリブルしよう ・ボールタッチを素早くしよう ・色々な種類のフェイントをマスターしよう ・間接視野でボールを扱おう ・姿勢を意識しよう ・クッションコントロールとエッジコントロールをマスターしよう ・パススピードを上げよう ・色々な形から両足でシュートを打とう ・強いシュートが打てるようになろう ・色々なフェイントを使ってDFをかかわってシュートを打とう										◎グループ戦術の理解 ★2vs1の攻防 ★2vs2+2ワイド ・ふたりで協力してDFを抜き去りシュートを決めよう ・味方と協力してパスを繋ぎゴールを目指そう ・オープンスペースを理解しよう ・DFの背後を取るための動きを工夫しよう ・味方の動きと相手の動きをよく見てプレーしよう	・チームのストロングポイントを伸ばすような練習を工夫しよう ・チームみんなで教えあって褒めあって盛り上げよう
30	○整列・あいさつ ○整理運動 ○用具や場の後片付け ○振り返りや学習ノートの記入 ○次回課題												
40	◎グループ戦術の理解 ★ドリブル・フェイント・ボールキープ（シザース・マルセイユルーレット・ダブルタッチ） ★パス&コントロール（クッションコントロール・エッジコントロール） ★シュート練習 ★1vs1の攻防												◎チーム戦術の理解 ★チームの課題を克服する練習 ★審判法
50	○整列・あいさつ ○整理運動 ○用具や場の後片付け ○振り返りや学習ノートの記入 ○次回課題												
評価の観点	関・意・態	●									●		
	思考・判断		●				●						
	技能					●			●				
	知識・理解	●									●		

指導と評価の計画 《2学年》 【サッカー】

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ねらい	①個人技能を高めながら攻防を楽しむ ②集団技能を身に付け、意図的にスペースを作り、そのスペースを使った攻撃ができるようになる。 ③全員で計画的にゲームができるように協力して運営を行う											
0 オリエン テーション	○整列・あいさつ ○準備運動や主運動につながる運動 ○用具や場の準備 ★ブラジル体操・ラダー・ストレッチ・体幹											
10 DVD視聴 (グループ戦術 I)	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>試しのゲーム ゲームのやり方を再確認しよう</p> </div> <div style="width: 40%;"> <p>◎個人戦術の理解 ★ドリブル・フェイント・ボールキープ ★パス&コントロール ★1vs1の攻防 ★シュート練習</p> </div> <div style="width: 25%;"> <p>◎チーム戦術の理解</p> </div> </div>											
20 ねらいの確認 授業の進め方の確認	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>・足の裏を使ってドリブルしよう ・ボールタッチを素早くしよう ・色々なフェイントをマスターしよう ・間接視野でボールを扱おう ・姿勢を意識しよう</p> </div> <div style="width: 40%;"> <p>◎グループ戦術の理解 ★ヘアでの崩し(スルパス・壁パス・クロスオーバー・スクリーン) ★2vs1の攻防 ・ふたりに協力してDFを抜きシュートを決めよう ★グリットを使ってのボールキープ 4vs2 6vs2 ★2vs2の攻防 ★2vs2+2ワイド ★4vs4の攻防 ・味方と協力してパスを繋ぎゴールを目指そう ・味方の動きと相手の動きをよく見てプレーしよう ・オーブンスペースを理解しよう ・DFの背後を取るための動きを工夫しよう</p> </div> <div style="width: 25%;"> <p>★チームの課題を克服する練習 ★審判法 ・チームのストロングポイントを伸ばすような練習を工夫しよう ・チームみんなで教えあって褒めあって盛り上げよう</p> </div> </div>											
30 単元(12時間) ・1時間の流れ ・授業の約束 ・グループ分け	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>◎個人戦術の理解 ★ドリブル・フェイント ・2年生でやった事を再確認しよう ・大きな動作で素早くボールを扱おう ・相手DFを想定してプレーを心掛けよう</p> </div> <div style="width: 40%;"> <p>◎グループ戦術の理解 ★パス&コントロール ★シュート練習 ・次のプレーを考えたボールコントロールをしよう ・レシーバーとのタイミングを合わせたパスをしよう ・GKをよく見て狙ってシュートを打とう ★1vs1の攻防 ★2vs1の攻防 ★3vs2の攻防 ・意図的にスペースをつくることでできたスペースを有効に使うDFを崩してシュートを打とう</p> </div> <div style="width: 25%;"> <p>★リーグ戦 ★GKトレーニング ①ボールキャッチ ②ローリング ③シュートストップ ④ブレイクアウェイ ⑤ゴールキック ⑥FPとの連携</p> </div> </div>											
40	○整列・あいさつ ○整理運動 ○用具や場の後片付け ○振り返りや学習ノートの記入 ○次回課題											
50	○整列・あいさつ ○整理運動 ○用具や場の後片付け ○振り返りや学習ノートの記入 ○次回課題											
関・意・態		①								②		
思考・判断			①						②			
技能						①			②			
知識・理解	①									②		

指導と評価の計画 《3学年》 【サッカー】

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	
ねらい	①個人技能を高めながら攻防を楽しむ ②集団技能を身に付け、仲間と連携してゴール前の空間をつくり出したりして攻防を展開する ③全員で計画的にゲームができるように協力して運営を行う																					
0 オリエン テーション	○整列・あいさつ ○準備運動や主運動につながる運動 ○用具や場の準備 ★ブラジル体操・ラダー・ストレッチ・体幹																					
10 DVD視聴 (グループ戦術 II)	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>★試しのゲーム ゲームのやり方を再確認しよう</p> </div> <div style="width: 40%;"> <p>◎個人戦術の理解 ★ドリブル・フェイント ・2年生でやった事を再確認しよう ・大きな動作で素早くボールを扱おう ・相手DFを想定してプレーを心掛けよう</p> </div> <div style="width: 25%;"> <p>◎チーム戦術の理解 ★チームの課題を克服する練習 ★審判法 ・チームにあったシステムを考えて攻守にバランスのとれた試合が出来るようになる ・点差や時間帯を考えた試合運びをしよう</p> </div> </div>																					
20 ねらいの確認 授業の進め方の確認	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>◎個人戦術の理解 ★ドリブル・フェイント ・2年生でやった事を再確認しよう ・大きな動作で素早くボールを扱おう ・相手DFを想定してプレーを心掛けよう</p> </div> <div style="width: 40%;"> <p>◎グループ戦術の理解 ★パス&コントロール ★シュート練習 ・次のプレーを考えたボールコントロールをしよう ・レシーバーとのタイミングを合わせたパスをしよう ・GKをよく見て狙ってシュートを打とう ★1vs1の攻防 ★2vs1の攻防 ★3vs2の攻防 ・意図的にスペースをつくることでできたスペースを有効に使うDFを崩してシュートを打とう</p> </div> <div style="width: 25%;"> <p>★リーグ戦 ★GKトレーニング ①ボールキャッチ ②ローリング ③シュートストップ ④ブレイクアウェイ ⑤ゴールキック ⑥FPとの連携</p> </div> </div>																					
30 単元(21時間) ・1時間の流れ ・授業の約束 ・グループ分け	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>◎個人戦術の理解 ★ドリブル・フェイント ・2年生でやった事を再確認しよう ・大きな動作で素早くボールを扱おう ・相手DFを想定してプレーを心掛けよう</p> </div> <div style="width: 40%;"> <p>◎グループ戦術の理解 ★パス&コントロール ★シュート練習 ・次のプレーを考えたボールコントロールをしよう ・レシーバーとのタイミングを合わせたパスをしよう ・GKをよく見て狙ってシュートを打とう ★1vs1の攻防 ★2vs1の攻防 ★3vs2の攻防 ・意図的にスペースをつくることでできたスペースを有効に使うDFを崩してシュートを打とう</p> </div> <div style="width: 25%;"> <p>★リーグ戦 ★GKトレーニング ①ボールキャッチ ②ローリング ③シュートストップ ④ブレイクアウェイ ⑤ゴールキック ⑥FPとの連携</p> </div> </div>																					
40	○整列・あいさつ ○整理運動 ○用具や場の後片付け ○振り返りや学習ノートの記入 ○次回課題																					
50	○整列・あいさつ ○整理運動 ○用具や場の後片付け ○振り返りや学習ノートの記入 ○次回課題																					
関・意・態		①									②						③					
思考・判断				①								②						③		④		
技能					①						②			③							④	
知識・理解	①																②		③			

柔道の評価規準 (●：入学年次 ○：その次の年次)

	関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
単元の評価規準	柔道の特性に関心をもち、楽しさや喜びを味わえるように取り組もうとしている。伝統的な行動の仕方に留意して、互いに相手を尊重し、進んで練習や試合に取り組もうとしている。勝敗に対して公正な態度をとることを大切にしている。また、禁じ技を用いないなど、安全に留意して練習や試合をしようと配慮している。	自分の能力に応じた技を習得するための課題を設定し、その解決を目指して、練習の仕方や試合の仕方を見つけている。	柔道の特性に応じた技能を身に付けるとともに、その技能を高め、相手の動きに対応した攻防を展開して練習や試合ができる。	柔道の特性や学び方、技術の系統性・構造、合理的な練習の仕方を理解するとともに、試合や審判方法を理解し、知識を言ったり書き出したりしている。
具体的評価規準	<p>①柔道の特性に関心をもち、楽しさや喜びを味わえるように取り組もうとしている。</p> <p>②相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとしている。</p> <p>①仲間と協力して助け合ったり教え合ったりしている。</p> <p>②技を身に付けたり、技を用いて攻めたり相手の攻撃をかわしたりする楽しさを味わえるよう取り組もうとする。</p> <p>③禁じ技を用いないなど自他の健康・安全を確保している。</p> <p>④礼儀正しい態度で、練習や試合に進んで取り組もうとしている。</p>	<p>①技を身に付けるための運動の行い方のポイントを見つけている。</p> <p>②柔道を継続して楽しむために自己に適した関わり方を見つけている。</p> <p>①仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を見つけている。</p> <p>②学習した安全上の留意点を他の練習場面に当てはめて指摘している。</p> <p>③自分の活動を振り返り、次回に向けた新たな課題を設定している。</p>	<p>①相手の動きに応じた基本動作を身に付けることができる。</p> <p>②相手の技に対応した受け身をとることができる。</p> <p>③固め技の基本となる技ができる。</p> <p>①取と受が安定して投げ技を行うことができる。</p> <p>②投げ技、固め技の基本となる技を用いて攻防を展開できる。</p>	<p>①柔道の特性や成り立ちについて、学習した具体例を挙げている。</p> <p>②柔道の伝統的な考え方について、理解したことを言ったり書き出したりしている。</p> <p>①柔道に関連して高まる体力について、学習した具体例を挙げている。</p> <p>②技の名称や稽古の仕方について、学習した具体例を挙げている。</p> <p>③試合の行い方について学習した具体例を挙げている。</p>

指導と評価の計画《第1学年》【柔道】

		時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14					
ねらい			①柔道の伝統的な考え方を理解し、礼儀作法ができる。			②柔道の基本動作（受身、固め技）ができる。					③安全に留意し、簡易試合ができる。										
第1学年	学習の流れ	0	オリエンテーション ○整列・あいさつ・健康観察 ○準備運動や主運動に繋がる運動・補強運動（頭部を守る首のトレーニング）																		
		10	1 学習課題の確認 ○柔道について知る ○柔道衣の扱い方																		
		20	②柔道の特性や楽しみ方を理解し、自己の特性等について理解する。	2 基本動作を身に付ける。 ・礼法、姿勢、進退動作、崩し、体さばき 3 受け身 ・後ろ受け身、横受け身、前回り受け身、ペアでの受け身			2 受け身 ・後ろ受け身、横受け身、前回り受け身、引っ張り受け身 対人・動きを入れたの受身練習を行う					2 成果の確認（実技テスト） ＜受身＞ ・後ろ受け身 ・横受け身 ・前回り受け身 ・引っ張り受け身 ＜固め技＞ ・けさ固め ・横四方固め ・上四方固め ・縦四方固め									
		30	③安全な学習方法について理解する。	③安全な学習方法について理解する。			4 対人的技能 ○固め技（抑え技） ・けさ固めの抑え方と逃げ方 ・横四方固めの抑え方と逃げ方 ・上四方固めの抑え方と逃げ方 ・縦四方固めの抑え方と逃げ方					3 対人的技能 ○固め技（抑え技） ・けさ固めの抑え方と逃げ方 ・横四方固めの抑え方と逃げ方 ・上四方固めの抑え方と逃げ方 ・縦四方固めの抑え方と逃げ方					グループ内で相互評価する。				
		40	2 学習の進め方を知る ①同程度の体格・体力、経験者の確認を行う。 ②グループ編成、役割分担を理解する。	①同程度の体格・体力、経験者の確認を行う。 ②グループ編成、役割分担を理解する。			4 対人的技能 ○固め技による簡易的な試合 ・固めた状態から逃げる ・膝付きで正対して始める ・背中合わせから始める お互いに約束事、禁止技を確認し、相手の力量に合わせて安全に行う。					4 対人的技能 ○固め技による簡易的な試合 ・固めた状態から逃げる ・膝付きで正対して始める ・背中合わせから始める お互いに約束事、禁止技を確認し、相手の力量に合わせて安全に行う。					○整理運動 ○整列 ○健康観察 ○本時のまとめ・カード記入 ○次単元の説明 ○あいさつ				
50	③学習カードの使い方について	○整理運動 ○整列 ○健康観察 ○本時のまとめ・カード記入 ○次時の予告・あいさつ																			
評価の観点	意・関・態		●				●						●								
	思考・判断					●								●		●					
	技能					●									●	●					
	知識・理解	●												●							

指導と評価の計画《第2学年》 【柔道】

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ねらい	①1年次の学習の確実な定着を図る。			②柔道の基本動作(受け身,固め技,投げ技)ができる。				③安全に留意し,簡易試合ができる。				
0	○整列・あいさつ・健康観察 ○準備運動や主運動に繋がる運動・補強運動											
10	1 学習課題の確認											
20	2 受け身の確認 ①ウォーミングアップの動きを復習する。 ②柔道の基本動作を確認する。 ③安全な学習方法について理解する。 ④受け身の仕方を確認する。			2 受け身の確認 ・後ろ受け身、横受け身、前回り受け身、引っぱり受け身 頭を打たないように気を付け、高さ、スピード、強度を増していく。 ペアの力量に応じて、力とスピードを加減し、安全に行う。				2 受け身(後ろ受け身、横受け身、前回り受け身、引っぱり受け身) 対人・動きを入れたの受身練習を行う。				3 対人的技能 ○固め技(抑え技)の攻防 ・固めた状態から始める ・膝付き正対から始める ・背中合わせから始める お互いに約束事、禁止技を確認し、相手の力量に合わせて安全に行う。
30	3 学習の進め方を知る ①同程度の体格・体力、経験者の確認を行う。 ②グループ編成、役割分担を理解する。 ③学習カードの使い方について			3 対人的技能 ○固め技(抑え技) ・けさ固めの抑え方と逃げ方 ・横四方固めの抑え方と逃げ方 ・上四方固めの抑え方と逃げ方 ・縦四方固めの抑え方と逃げ方 お互いに約束事、禁止技を確認し、相手の力量に合わせて安全に行う。				4 対人的技能 ○投げ技 ・膝車 ・支え釣り込み足 ・体落とし ・大外刈り ・大腰 ・背負い投げ ・かかり練習、約束練習の中で、「取」と「受」を意識し、「受」(受け身)も技としてとらえる。 ・見ている者が技の巧拙の評価、「一本」や「技あり」のジェスチャー、また激励の掛け合いを行う 慣れてきたら崩しを意識し、動きの中で技をかけるようにする。相手の力量に合わせて、安全に行う。				3 成果の確認(実技テスト) ＜投げ技＞ ・体落とし ・大外刈り ・大腰 ・背負い投げ ・背負い落とし ・支え釣り込み足 ・自分にあった投げ技で、「一本」が取れる投げができる。 ・投げに対する「受」(受け身)が正確にできる。
40	○整理運動 ○整列 ○健康観察 ○本時のまとめ・カード記入 ○次時の予告・あいさつ											
50												
評価の観点	意・関・態			①	②					③		③
思考・判断		①	②									
技能								①	①			①
知識・理解	①					②				②		

指導と評価の計画《第3学年》 【柔道】

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
ねらい	①柔道の基本動作(受け身,固め技,投げ技)ができる。			②投げ技や固め技の得意技や連絡技を身につける。				③安全に留意し,簡易試合ができる。								
0	○整列・あいさつ・健康観察 ○準備運動や主運動に繋がる運動・補強運動															
10	1 学習課題の確認															
20	2 体ほくし運動 ①ウォーミングアップの動きを復習する。 ②柔道の基本動作を確認する。 ③安全な学習方法について理解する。 ④受け身の仕方を確認する。			2 受け身(後ろ受け身、横受け身、前回り受け身、引っぱり受け身)				3 対人的技能 ○固め技(抑え技)の攻防 ・膝付き正対から始める ・背中合わせから始める お互いに約束事、禁止技を確認し、相手の力量に合わせて安全に行う。				3 成果の確認(実技テスト) ＜投げ技＞ ・崩しの動きから投げる。 (投げ技は,学習した投げ技から選択する。) ・自分にあった投げ技で、「一本」が取れる投げができる。 ・投げに対する「受」(受け身)が正確にできる。				
30	5 固め技の確認をする。			4 対人的技能 ○投げ技 ・膝車 ・支え釣り込み足 ・体落とし ・大外刈り ・大腰 ・背負い投げ ・かかり練習、約束練習の中で、「取」と「受」を意識し、「受」(受け身)も技としてとらえる。 ・見ている者が技の巧拙の評価、「一本」や「技あり」のジェスチャー、また激励の掛け合いを行う 慣れてきたら崩しを意識し、動きの中で技をかけるようにする。相手の力量に合わせて、安全に行う。				4 対人的技能 ○投げ技の確認 ・崩しを意識し、動きの中から投げ技をかける確認を行う。				5 対人的技能 ○簡易試合 ・判定基準を確認する。 ・学習した技を使って簡易試合を行う。				
40	3 学習の進め方を知る ①同程度の体格・体力、経験者の確認を行う。 ②グループ編成、役割分担を理解する。 ③学習カードの使い方について			5 対人的技能 ○試合形式の自由練習(乱取り練習) ・崩しを意識し、動きの中から投げ技をかける。 ・無理に我慢することなく、よいタイミングで技がかかった時には、「受」を意識し、うまく受け身が取れるようにする。				5 対人的技能 ・判定基準に従い、お互いに審判ができるようにする。 ・見ている者も具体的な技術面のアドバイスや激励の声をかけるようにする。				○整理運動 ○整列 ○健康観察 ○本時のまとめ・カード記入 ○次時の予告・あいさつ				
50	○整理運動 ○整列 ○健康観察 ○本時のまとめ・カード記入 ○次時の予告・あいさつ															
評価の観点	意・関・態				②				①		③		④			
思考・判断			①					②		②				③		
技能		①		②		①						①				②
知識・理解	①					②										③

5 研究の成果と課題

(1) 成果

【サッカー】

- ・サッカーは、足元にあるボールを扱いながらプレーするため、周囲の視野の確保が非常に困難なスポーツで、視野の広さと技能レベルには極めて強い相関関係が存在する。個人技能を習得する上で、反復練習中に常に周囲の確認（状況判断）ができるよう意識させたことで、周囲を見ながら余裕をもってプレーすることができるようになった。
- ・グループ戦術に関する話し合いの機会をもたせる場合には、各グループにホワイトボードを配付し、仲間と協力して組織的に勝利を目指すような意見交換を働きかけた。結果的に、サッカー部員を中心に一つの輪になって視覚的に練習内容や作戦を考えるようになり、練習中は互いに教え合う機会が大変多く見られるようになった。
- ・ゴールキーパーにはフィールドプレーヤーとは別に練習を行う時間を与え、より専門的な技能の向上を目指させた。各グループから1名ずつ指名（内1名は今年の全国選手権出場者）されたゴールキーパーに時間と課題を与えたことによって自覚が生まれ、互いに教え合うことができるようになったとともに、ゲーム後に互いのプレーについて練習内容をフィードバックさせながら話し合う場面も見られるようになった。

【柔道】

- ・マット運動に続いての配列により、安全面の確保の大切さを確認した状態で授業に入ることができた。安全面に対して互いにアドバイスをする姿が多く見られ、コミュニケーション能力の育成という側面からも有効な単元の配列であった。
- ・マット運動に続いての配列により、ボディコントロールが得意な生徒とそうでない生徒を把握した上で柔道を開講することができ、結果的に、相手の力量を考えての「取」と「受」を行うようになった。
- ・柔道は、活動時間に多くの「痛み」を感じる種目である。柔道を好まない生徒が挙げる理由の一つに、この「痛み」がある。学校体育の領域の中で、頻繁に「痛い」という感覚を味わうのは武道だけである。「取」と「受」が激しく入れ替わる関係の中で、痛みを共有しながら相手のこと（立場）を想い、安全を確保して活動できるようになった。
- ・初めて柔道を行う生徒が多く、一年次は固め技を中心に行った。固め技を行うことで互いの鼓動や息遣い、体の温かみ、重さを感じ合わせる体験ができ、相手を思いやる気持ちを育むことができた。
- ・タブレットを使用したことは様々な効果をもたらした。第一に、自分自身の動きを客観視できるため、ボディコントロールが苦手な生徒が自分自身の様相を確認することができた。第二に、撮影者は被写体の生徒の体のどの部分をフォーカスすべきかを考えて撮影するため、後の練習で自分自身のその部分を意識した体の使い方ができるようになった。そして最後に、互いの映像を視聴することで意見交換の場面が多く見られ、コミュニケーション能力の育成に大いに役立った。
- ・柔道（武道）で重んじる礼儀作法や相手を尊敬する考え方については、入学年次の体育理論の単元にある「スポーツの歴史的発展と変容」の中で取り扱う「嘉納治五郎」の部分で触れていたため、スムーズに学習に入ることができた。

【全体】

- ・互いをよく理解し、コミュニケーション能力を身に付けさせるための体育授業の展開はいかにあるべきかを模索してきたが、サッカーでのホワイトボードや柔道でのタブレットというツールの使用により、教え合ったり助け合ったりする場面が格段に増加し、課題解決や成功の体験を多く得ることができた。

(2) 課題

【サッカー】

- ・ゲームを通してグループから出された課題解決のための練習内容が果たして現状にマッチしているかどうか、あるいはどのタイミングで飛躍的に練習効果が上がるアドバイスを示してやるべきかが難しい問題である。
- ・審判法を確実に理解させ、組合せや試合時間を決定するなどのゲーム運営も自分たちでできるようにさせたい。それがスポーツを『支える』という関わりからみても望ましい。また審判や対戦相手をリスペクトする心やフェアプレイの精神も成就させ、さらに人間性を磨く必要がある。

【柔道】

- ・あえて夏の時期に柔道を開講したのだが、柔道を「嫌い」「やりたくない」とする理由として、「痛い」「暑い」「汗臭い」「人と接触したくない」等別の意見が出てきた。忍耐力のない生徒が増えていることは間違いないが、多様化した生徒への指導の困難さを感じている。
- ・「動作を撮影し、映像を見ながら分析する」ことを柔道の学習ととらえて授業を進めていく中で、評価をどうするべきなのかが検討中である。
- ・技術、体力差が出てきたときのグルーピングが課題として出てきた。「思いっきり」「力一杯」柔道をやりたいという欲求をもつ生徒に対して、安全面を最優先に考えて授業を展開したい指導者の思いがあり、このバランスにも難しさを感じている。

【全体】

- ・豊かなスポーツライフを継続する資質や能力は、高校時代の体育・運動部活動に宿るところが大きい。特に体育の授業において、試合だけを重視した活動や一部の生徒だけしか満足できない内容では、より多くの生徒が本当の意味で生涯にわたって運動に親しむことはできない。活動のプロセスの中でコミュニケーション活動を重視し、コミュニケーションが優れた生徒を全ての領域を通じて育成し、社会に出た時に様々な形で主体的にスポーツに関わることができる子供たちを育てたい。「する」だけのスポーツではなく、ルールや審判法を理解してテレビで「見る」もよし、興味をもった選手をインターネットで「調べる」もよし、応援やボランティアとして「支える」もよし、方法はいくらかでもある。

【MEMO】

A series of horizontal dashed lines for writing.

特別支援学校部会

【研究主題】

「児童生徒の豊かな心と体を育む授業
づくり」

第 12 分科会

岐阜県立岐阜本巣特別支援学校



JR岐阜駅北口駅前広場（岐阜市）

<第12分科会> 岐阜県立岐阜本巣特別支援学校

【研究主題】

児童生徒の豊かな心と体を育む授業づくり

【日 程】

9:00 9:40 10:25 11:00 11:50 13:00 14:15 14:50 15:00

受 付	公開 授業 ①	移 動 等	公開 授業 ②	昼 食	研 究 発 表	研 究 協 議	指 導 講 評	閉 会 式
--------	---------------	-------------	---------------	--------	------------------	------------------	------------------	-------------

【授業案内】

公開授業① 中学部第2学年「球技 サッカー」 東体育館

公開授業② 高等部第2学年, 第3学年 Aグループ
「球技 ゴール型 サッカー」 グラウンド

【会場案内】

岐阜県立 岐阜本巣特別支援学校

〒501-1184
岐阜市西秋沢 2-363-1

<アクセス>

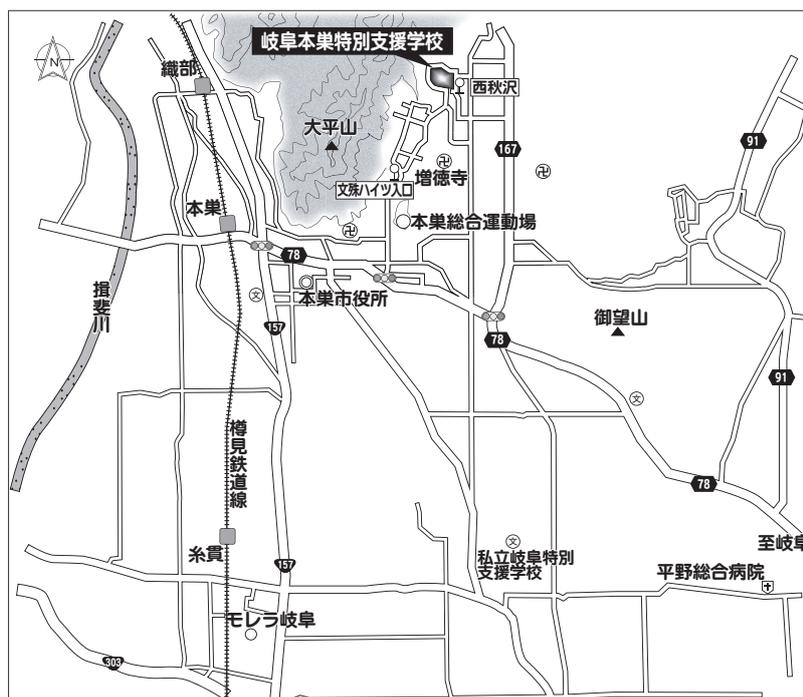
○岐阜バス

(黒野線 系統：C46

JR 岐阜駅 8 番乗り

場)

西秋沢下車(校門前)



【学校の概要】

岐阜県立岐阜本巣特別支援学校



所在地 〒501-1184 岐阜市西秋沢2-363-1
校長 板倉 寿明
児童生徒数 194名（50学級）
連絡先 TEL 058-239-9712
FAX 058-293-9022
E-mail c27398@gifu-net.ed.jp
URL [http://school.gifu-net.ed.jp/
gifumotosu-sns/](http://school.gifu-net.ed.jp/gifumotosu-sns/)

【学校の教育目標】

校訓 「夢を育て、未来を創る」

- 夢の実現に向け自ら学び自ら考え、生き生きと表現できる児童生徒を育てる
- 心のふれ合いを大切に、自他共に尊重できる児童生徒を育てる

【学校紹介】

本校は、岐阜県『子どもかがやきプラン』により、平成20年4月に、知的障がい、肢体不自由、病弱の障がいを対象とした総合特別支援学校として旧岐阜県立本巣松陽高校岐阜校舎を改築して、新設された。岐阜市北部（岐阜市と本巣市の市境）の美しい里山に囲まれ、まさに『自然と共（友）に在る』学校である。児童生徒は、岐阜市、本巣市、山県市、瑞穂市、北方町など広範囲から公共交通機関や自転車を使っての自力通学、5コースで運行されているスクールバスや保護者の方の送迎で通学している。現在小学部57人、中学部51人、高等部86人の合計194人が在籍している。

1 研究主題

児童生徒の豊かな心と体を育む授業づくり

岐阜県立岐阜本巣特別支援学校

2 研究主題設定の理由

このたびの学習指導要領改訂において、小学校・中学校・高等学校では「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する」こと、「発達の段階のまとまりを考慮し、指導内容を整理し体系化を図る」ことが基本方針として打ち出された。また、特別支援学校学習指導要領「知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校」の各教科「体育」及び「保健体育」では、「生徒の主体的な活動を促す」ことが要点としてあげられ、中学部、高等部において、周囲とのコミュニケーション、人間関係の形成等の点が重要視されている。

本校児童生徒の実態に目を向けると、個々には体を動かすことを好むが、仲間との関わりや集団としての活動には苦手な面が見られる。しかし、活動に対する見通しがもてれば、安定して活動に取り組むことができる。

このような本校児童・生徒の実態を踏まえ、学習指導要領の目標達成に向け、本研究では他者と、様々なかたちで関わりをもつための「豊かな心」と、それを支える「体」を育むことに焦点を当てた授業づくりの在り方を探求することとし、研究主題を設定した。

3 研究の仮説

(1) 各学部における研究のねらい

各学部において発達段階に応じたねらいを以下のように設定した。

- 小学部 ○ 様々な活動に親しみ、体を動かす楽しさを味わうことができる。
 - 自ら体を動かそうとする意欲をもつことができる。
 - 教師や友達と一緒に活動することを楽しむことができる。
- 中学部 ○ 見通しをもち、一人一人が主体的に体を動かして活動できる。
 - 仲間とかかわり合いながら、楽しく意欲的に活動できる。
- 高等部 ○ 卒業後の健康で豊かな生活を目指して、自ら進んで体を動かすことができる。
 - 仲間と運動する楽しさを味わうことができる。

(2) 研究実践

平成24、25年度の教育実践の成果と課題を踏まえ、ねらいに迫るための支援の手立てに関する考え方を全職員で共通理解した。

- 児童生徒一人一人の実態に応じ、視覚支援を活用する。
- 授業の流れを一定にし、同じ題材にじっくり繰り返し取り組む。
- 児童生徒一人一人の実態に応じた、自分で操作しやすい教材教具の工夫等を行う。
- 毎時間の健康チェックに基づき、安全に運動量を確保、運動を楽しむための支援、主体的な仲間との関わりでの支援を取り入れる。
- 小・中・高の系統性を考え、支援方法の連携、評価方法を工夫する。

上記から児童生徒の実態に応じて必要な手立てを講じることにより、各学部のねらいに迫り、他者とかかわりをもちながら主体的に活動することができる「豊かな心」と、それを支える「体」を育むことができるのではないかと考える。

4 研究内容

児童生徒一人一人の課題に迫るために、小学部5グループ、中学部5グループ、高等部5グループの合計15グループに分かれて研究を進める。各グループの研究テーマは以下のとおりである。

グループ		研究テーマ
小学部	知1～2年	児童が進んで取り組んだり、楽しんで取り組んだりできるような体づくり(体育)の授業の在り方(②)
	知3～5年	児童が意欲的に活動することができる指導・支援の在り方(②)
	知6年	児童に応じた基礎的運動技能を身に付ける指導・支援の在り方(③)
	ひまわり(肢・病)	ゆっくり歩こう～安全な学校生活を目指して、身体を支える力、静止する力を伸ばす～(③)
	あじさい(重複)	一人一人に応じた自立活動「からだ」の時間を充実させるための支援の在り方(②)
中学部	知1年	主体的に取り組む、仲間と共に楽しむ体育の学習の在り方(②, ④)
	知2年	仲間と共に主体的に取り組む体育の学習の在り方(②, ④)
	知3年	生徒一人一人が仲間と共に生き生きと活動する授業の在り方～次のめあてにつながる評価の在り方～(③, ④, ⑤)
	肢・病	個のもてる力を発揮し、仲間と共に運動を楽しむ「心と身体・運動」の支援の在り方(②, ③, ④)
	重複	見通しをもち主体的に身体を動かす姿を目指した支援の在り方(②)
高等部	知 A(1年) B・C(2・3年)	自ら進んで体を動かし、仲間と運動する楽しさを味わうことができる体育授業の在り方(②, ③)
	重複 D	見通しをもって主体的に行動する姿を目指して～自分の力を信じて、自分から行動する Y.Yくんの事例～(②)
	肢・病 E	自己を見つめ、健康で豊かな生活を目指そうとする力を育む授業の在り方～自立活動の時間の指導を通して～(②)

注) 知：知的障がい学級 肢・病：肢体不自由・病弱学級 重複：重複障がい学級
研究テーマ内の①～⑤は岐阜県の研究実践の研究内容との関連を表している。

5 研究実践

(1) 中学部 第3学年(知的障がい) 「球技 ～サッカーの実践～」

① 研究内容より

「生き生きと活動する姿」に迫るために、前時の目標到達度を視覚的にとらえやすくした「マーク評価表(図1)」と、目標を意識した活動の姿をその場で即座に生徒に分かりやすく評価でき、その時間の達成度を視覚的にとらえやすくする「GOODマーク(図2)」を使用する。これらにより、生徒が目標の動きを考えながら活動し、「できた」「活躍した」ことを実感することができると思う。

「仲間と共に活動する姿」に迫るために「役割活動の評価表(図3)」を使用し、リーダーを中心とする、チーム内の役割に対する評価の時間を設定する。仲間同士で評価することを積み重ねることによって、仲間と関わり合ったり声を掛け合ったりする姿や、仲間認められる喜びを実感する体験につながると考える。

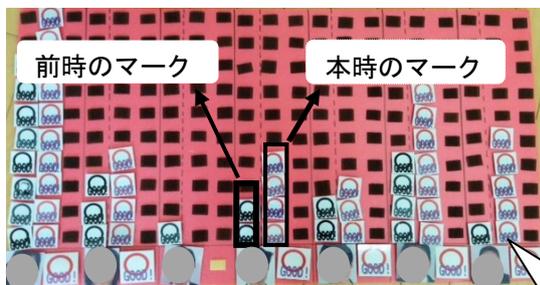


図1 マーク評価表



図2 GOOD マーク

やくわり ぶんたん ひょう 役割分担表			
役名	仕事内容	がんばって いたかな?	ひょうかを する人
リーダー	役割の順番を決め、練習を始める 練習が終わった後、練習場を片付ける	GOOD!	
体操	練習を始める 練習が終わった後、練習場を片付ける	GOOD!	
ファイル GOODマーク	ファイルを持っていく GOODマークを持っていく ファイルを持っていく	GOOD!	
準備	練習場を片付ける 練習場を片付ける	GOOD!	
準備	練習場を片付ける 練習場を片付ける	GOOD!	
片付け	片付けをする 片付けをする	GOOD!	
片付け	片付けをする 片付けをする	GOOD!	

図3 役割活動の評価表

② 支援の経過

本単元は前単元のバスケットボールと関連して、仲間とボールを繋げながらゴールをめざす授業として設定している。そうすることで、単元やチームのメンバーが変わっても主体的に目標に向かって活動する姿が見られるのではないかと考えた。

ア 単元目標

運動	・仲間のいる方向にパスしたり、ゴールがある方向にシュートしたりすることができる。 ・ボールを持っていないときは、パスをもらいやすい場所に動くことができる。
態度	・チームで協力して活動することができる。 ・安全に気をつけて活動することができる。 ・自分の役割を達成できたという経験を積み重ねることができる。 ・中間の話し合いをして作戦を立てることができる。
知識、 思考・判断	・ルールを覚え、ゲームの中で活用することができる。 ・前時での活動を基に本時の目標を決め、それを達成しようと工夫することができる。

観点	単元の評価規準	学習活動に即した評価規準
関心・意欲・態度	サッカーの楽しさや喜びに触れることができるよう、活動に進んで取り組むとともに、ルールを守り助け合って運動しようとする。また、運動する場や用具の安全に気を配ろうとしている。	①チームで協力して活動しようとしている。 ②審判の指示に従い、ルールを守り、勝敗を受け入れようとしている。 ③安全に気をつけて活動しようとしている。 ④自分の役割を果たそうとしている。
思考・判断	ルールを工夫したり、自分のチームに合った作戦を立てたりしている。	⑤話し合いをして、ゲームの作戦を立てている。 ⑥ゲームの作戦を聞いて、そのように活動しようとしている。 ⑦教師とともに作戦通り活動しようとしている。
運動の技能	簡素化されたゲームで攻めたり守ったりするためのボール操作や、ボールをもらおうとする動きができる。	⑧ボール操作やボールをもらうための動きをすることができる。 ⑨ボールをゴールの方向に蹴ることができる。 ⑩練習を通して、技能を高めることができる。 ⑪ボールが来たら蹴ることができる。
知識・理解	ゲームのルールや練習の方法を理解している。	⑫チームに必用な練習が分かる。 ⑬ルールが分かる。 ⑭攻める方向が分かる。

イ 具体的な手立て

a 即時評価につながる視覚的な教材の活用の工夫

- ・目標を意識した活動だけでなく、シュートを決めた際もその生徒のゼッケンにGOODマークを貼って、即時評価する（図4）。

b 前時の評価表を基にした生徒による本時の目標作りの場の設定

- ・チーム全員が目標を達成するために、前半ゲームの終了後に中間の話し合いの時間を設け、評価表のマークの数を基に話し合いをし、誰にボールを回したら良いかを考える機会を設定する。
- ・前時に得たマークの数を超えることができた生徒を、最後の全体会でチームのリーダーが発表する。

c リーダーを中心とする、チーム内の役割に対する評価の時間の設定

- ・役割活動の評価表（図3）を作成する。
- ・生徒同士で評価ができるように、毎回評価する相手を固定し、定着を図る。
- ・話し合いの際は、リーダーを中心として行う。

d 仲間とボールを繋げながらゴールを目指す場の設定

- ・前単元のバスケットボールと関連して、仲間とボールを繋げながらゴールを目指す場を



マジックテープを使用し、素速く簡単に貼れるようにした。

図4 ゼッケンとGOODマーク

設定することで、単元やチームのメンバーが変わっても主体的に目標に向かって活動する姿を目指した。

以上を中心的な手立てとして授業改善を行うことで、次の姿が見られるようになった。

- ・本時の目標だけでなく、球技の醍醐味であるシュート・ゴールに対しても積極的になることができた。
- ・チーム毎にマーク評価表を準備し、それを基に中間の話し合いをすることで、誰にパスをすれば良いかをマグネットの数を基に考えたり、後半に頑張ることを話し合いやすくなったりした。さらに、話し合いを通して、仲間の活動する姿に目を向けることができるようになり、毎時間チーム全員がマークをもらうことができるようになった。
- ・仲間同士で毎時間評価し合うことを繰り返すことで、授業中に仲間に声を掛けたり、役割以外の仕事も協力しようとしたりする姿が見られた。また、見学の生徒も、得点係や応援係としての役割を果たそうと、自分から進んで役割活動をすることができた。

③ 成果

継続的に行った3ヶ月の実践から、少しずつ生徒が目標を意識して、生き生きと活動したり、チーム内で協力したり声を掛け合いながら仲間と共に活動したりすることができるようになった。特にGOODマークを使用した評価表の活用やGOODマークによる即時評価によって、「目標とするマークの数を超えよう」「GOODマークをもらおう」と意欲的にボールに向かっていったりシュートしたりする姿がよく見られるようになった。よって今回実践した

① 前時の目標到達度を視覚的にとらえやすくしたマーク評価表の活用、② 目標とする動きに対する即時評価としてのGOODマークの使用、③ リーダーを中心とする、チーム内の役割に対する評価の時間の設定は、生徒が目標を意識して、生き生きと活動したり、仲間と主体的に関わり合ったりしながら活動する姿を引き出すために有効であると思われる。

④ 課題

授業の中で、前時の姿を基に一人一人が達成できる目標を設定することや、生徒の頑張りを即時に評価することは、生徒自身の活動に対する意欲につながることから、今回の研究だけでなく、他の学習にも取り入れていきたい。また、保健体育の授業として生徒の実態に応じた支援を行うことをはじめ、運動量の確保や高等部で行われている保健体育についても考慮し、活動内容を考えていき、実践していきたい。

(2) 高等部 第2～3学年(知的障がい) 「球技(ゴール型) ～サッカーの実践～」

① 研究内容より

高等部では卒業後に社会的に自立することを目標にしており、1年～3年で将来の進路を見据えてそれぞれの生徒に適した具体的な支援を考え、より効果的に教育を実践していくことが求められている。どの生徒においても将来豊かな職業生活、家庭生活を送るのに「健康」は欠かせないことである。そこで、今回は高等部2、3年生の知的障がいクラスの生徒を研究の対象とし、サッカーの授業を通して生徒一人一人が卒業後も運動に親しみ、健康で豊かな生活を営むことができるように、「分かる」、「できる」、「楽しい」授業を実践し、「自ら進んで体を動かす姿」と「仲間と運動する楽しさを味わえる姿」に迫りたいと考えた。

「自ら進んで体を動かす姿」に迫るために、「授業の流れを決め、活動に見通しをもたせる」ようにする。軽度の知的障がいや発達障がいをもっている生徒たちにとって、活動の見通しや役割を明確にもたせ、ルールをはっきりすることで学習活動に前向きに取り組むことができると考える。次に、「運動能力等に合わせてグルーピングし、コートの大さやゲーム時間をグループ毎に設定する」。これにより接触プレーに対する不安感をなくすとともに、それぞれ

の生徒にあった適切な運動量で活動ができると考える。また、「動きのイメージをもちやすい言葉掛けを工夫する」ことにより、生徒がどう動けばよいか理解しやすくなり、スムーズな動きの獲得につながると考える。

「仲間と運動する楽しさを味わう姿」に迫るために、「言葉のリズムで連係プレーの動きのイメージをもてるようにする」。3～4人が連携して行うプレーについて、ボールをもったプレーヤーに次の動きがイメージできるようにリズムカルな言葉を掛けることで、連携の相手を意識した動きが理解しやすくなると思う。次に、「話し合いや記入のしやすいグループノートの工夫」を行う。自分の意図を伝えたり、相手の意図をくみ取ったりすることの苦手な生徒たちにとって、簡単に記入できる様式を使って視覚的に整理していくことは、互いの意図やプレーの課題のとらえやすさという点で有効であると思う。

② 支援の経過

本単元は、生徒が主体的に活動し、安全に安心して取り組み、ボール操作や連係プレーの向上を目指し、サッカーの楽しさを知ることができるような授業を考えた。

ア 単元目標

運動	<ul style="list-style-type: none"> 基本的なボール操作の向上を目指し、繰り返し練習することができる。 簡易ゲームでパスやスペースを使ったプレーをすることができる。
態度	<ul style="list-style-type: none"> 運動に進んで取り組むことができる。 仲間と協力して準備・片付け、運動ができる。 活動場所や用具の安全を確認することができる。
知識、 思考・判断	<ul style="list-style-type: none"> 自分やチームの課題解決を目指し、互いに教え合うことができる。 グループに合った作戦を話し合うことができる。 サッカーの特性や基本的なルール等を知ることができる。

観点	単元の評価規準	学習活動に即した評価規準
関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ○サッカーの特性に関心を持ち、仲間と楽しみながら進んで取り組もうとしている。 ○仲間と安全を意識して活動しようとしている。 ○チーム内の自分の役割を責任もって果たそうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ①サッカーボールに進んで触れ、チームの仲間と共に喜んだり、励まし合ったりしてゲーム等をしようとしている。 ②けがをしたり、相手にけがをさせたりしないように運動しようとしている。 ③準備、片付け、話し合い等チーム内の役割を協力して行おうとしている。
思考・判断	<ul style="list-style-type: none"> ○自分、チームの良さや課題を知り、課題解決に向けて進んで取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ④自分のできることを仲間に教えようとしている。 ⑤仲間の良い動きを見付け、自分の動きに取り入れようとしている。 ⑥リーダーを中心にチームの仲間と作戦等を話し合おうとしている。
運動の技能	<ul style="list-style-type: none"> ○サッカーの基本的な技能を身に付けようと繰り返し練習できる。 ○ゲームの中でチームの仲間とコミュニケーションをとってプレーすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ⑦個人技能の自分の到達度や課題を知り、できるようになると繰り返し練習できる。 ⑧自分や仲間の位置等を声や身振りで仲間に知らせることができる。 ⑨シュート、パス、ドリブルを判断してプレーできる。
知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> ○サッカーの特性、基本的なルールを理解できる。 ○サッカーの基本的な個人技能のポイントについて理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ⑩サッカーの映像や学習プリントでサッカーの特性や基本的なルールを理解を深めることができる。 ⑪個人技能、集団技能のポイントについて具体的な例を挙げることができる。

イ 具体的な手だて

a 生徒の主体的な活動を促すための手立て

- ・授業の流れを決め、活動に見通しをもたせる。

生徒は、軽度の知的障がいや発達障がいの特徴が強く、見られる生徒が多く在籍するので授業の流れを固定して進めることで生徒



図5 授業の流れ

たちが落ち着いて活動に取り組めた。また、繰り返し取り組むことで自分の役割を理解し、準備から片付けまで主体的に活動できた。

b 生徒が安全に安心して取り組むことができるための手立て

- ・運動能力等に合わせてグルーピングをする。

事前アンケートの結果から生徒たちがサッカーに対するマイナスイメージとして接触プレーに対する不安を強くもっていることが分かったので、それぞれが安全で安心して取り組むことができるように3つのグループに編成して授業を進めた。1グループ8人の生徒に対して指導者1人ずつを配置して指導にあたった。それぞれのグループの実態に合った活動ができ、生徒たちも安心して活動に取り組み、けがもなく安全に授業を進めることができた。

- ・コートの大さきやゲーム時間を各グループに設定する。

グループの運動能力に合わせてゲームのコートの大きさを設定した。授業を進めていく中でコートサイズを調整しながら、それぞれのグループの運動能力や体力に合ったコートサイズを作った。また、ゲームの時間についてもグループの生徒の体力等を考慮して設定したことでそれぞれの生徒に合った適切な運動量の確保ができた。

c 生徒のボール操作や関係プレーの向上を目指し、サッカーの楽しさを知る工夫

- ・運動動作のイメージがもちやすいように言葉掛けをする。

例えばインサイドキックをテーマにした場合には、「タタタッ（助走してボールの横に足をつく）・ギュッ（足の親指に力を入れて足首を固定する）・ポーン（ボールの真ん中を蹴る）」という擬音での言葉のリズムで生徒に言葉を掛けることで、キックの一連の動作のイメージがもちやすくなり、スムーズな運動動作の獲得につながった生徒もいた。

- ・言葉のリズムで関係プレーの動きのイメージをもたせる。

スキルアップタイムでは、「縦の動き（ポストプレー）」4時間と「横の動き（サイド攻撃）」4時間を行った。「ワン・ツウ・スリー」という言葉のリズムで言葉掛けすることで、生徒は、少しずつ自分がどう動いたら良いのかを理解することができるようになり、3～4人での関係プレーがスムーズにできるようになってきた。慣れてくると自分たちで声を出して活動に活気がでてきたグループもあり、楽しそうに取り組む場面が増えてきた。

ゲームにおいては、スキルアップタイムで行ったことをテーマとし、「ワン・ツウ・スリー」のタイミングでシュートが決まった場合は、2点とすることで、生徒たちもテーマを意識して取り組むことができた。普段はあまり自分から仲間と関わらない生徒も、仲間とボールをつないでシュートが決まるとハイタッチをして喜び合う姿も見られた。

- ・話合いや記入のしやすいグループノートの工夫

チームタイムでは、ゲームの成果と課題を学習ノートを用いて振り返るようにした。生徒の実態から話し合ったり、自分の意見を言ったりすることがあまり得意ではないので、○を付けていくだけで話合いが進めていけるように項目を設定した。リーダーを中心に話合いをスムーズに進めることができるようになってきた。また、グループによっては、活発に意見を交換できる場面も見られた。

ウ 授業例 （4／10時）

a ねらい

- 【運動】スキルアップで行ったことをゲームの中で意識してプレーできる。
- 【態度】仲間と協力して準備、片付け、安全点検を行うことができる。
- 【知識、思考・判断】個人技能の動きのポイントが分かる。

b 展開

	学習内容・活動	◎指導のポイント	評価
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○用具等の準備, グラウンド点検 ○準備運動 <ul style="list-style-type: none"> ・準備体操, ラダートレーニング ○整列・あいさつ ○健康観察 ○本時の説明 	<ul style="list-style-type: none"> ◎チームごとに協力して行うことができるか確認する。(T2, T3) ◎リーダーを中心に適切に体操ができていないか確認する。(T1, T2, T3) ◎適切な姿勢で挨拶ができていないか確認する。(T1, T2, T3) ◎生徒の体調などを確認する。(T1) ◎今日の目標や学習内容を簡潔な言葉で確認する。(T1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間と協力して準備する。 【態度】
展開	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">ドリブルやパスを使ってゲームをしよう</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">スキルアップタイム (15分)</p> <p>I ドリブルとラン・ウィズ・ザ・ボール *資料1 指導書No.1参照</p> <p>II パス (インサイドキック) *資料1 指導書No.2参照</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">簡易ゲーム 5分間×2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・センターラインに整列する。 ・教師のボールインで開始する。 ・スローイングで再開する。 ・ゴール後は, ゴール前から再開する。 ・センターサークルに整列し, 相手と握手して終わる。 <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">チームタイム1 (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リーダーを中心によかった点と次頑張る点を出す。 <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">チームタイム2 (3分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次時の目標を簡単に話し合う。 ・学習ノートに記入する。 ・輪になって体操をする。 <ul style="list-style-type: none"> ○片付け 	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">I の指導ポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ひざを柔らかくしよう ・コーンの近くを回ろう ・慣れてきたら顔をあげよう <p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">II の指導ポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タタタッ (助走してボールの横に軸足を置く) ・ギョッ (足首固定) ・ボーン (ボールの真ん中をける) <ul style="list-style-type: none"> ◎ゲーム開始と終了時には必ず自分の前に並んだ相手の生徒と握手をする。 ◎接触プレーに気付けるように話す。 ◎スローイングの仕方をゲームの中でその都度確認する。 ◎リーダーを中心にグループ毎にまとめ, 反省と目標が話し合っているか確認する。 ◎ノートの記入ができていないか確認する。 ◎チーム毎に協力してできているか確認する。(T3) 	<ul style="list-style-type: none"> ・動きのポイントを意識して繰り返し取り組む。 【運動】
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の振り返り ・グループ毎に反省を発表する。 ○健康観察 ○あいさつ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎リーダーの発表の様子を見守り, 必要に応じて補足する。 ◎生徒の体調などを確認する。(T1) ◎適切な姿勢で挨拶ができていないか確認する。(T1, T2, T3) 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間と協力して片付けする。 【態度】

③ 成果

今回は, 高等部2, 3年生の軽度の知的障がいクラスの生徒を対象として研究を進めてきた。事前アンケートでは, 「サッカーは好き」と答えた生徒が, 約40%であったが, 単元終了後のアンケートでは, 「サッカーの授業が楽しかった」と答えた生徒が約80%, 「またサッカーの授業をしたい」と答えた生徒は, 「少ししたい」も含めると約80%に達しており, 今回の授業実践を通して多くの生徒が, サッカーに対するマイナスイメージを払拭し, サッカーの楽しさを感じることができたと考えられる。

また, 「卒業後や休日にも運動をしたい」と思っている生徒がたくさんいることも分かった。サッカーの授業を通して「分かる」, 「できる」, 楽しい授業を実践し, 体を動かすことの心地よさや仲間と運動することの楽しさを味わえるような授業の実践ができたと考えられる。特に, 授業の流れを一定にすることで, 生徒が主体的に取り組んだり, 視覚・聴覚支援を活用することで, 技術の向上に繋がったりしたことが成果となった。

④ 課題

- ・対象生徒のグルーピングにおいて、現在、実施している年度当初のスポーツテストの結果や体育に関するアンケート結果に加え、障がいの特性や個性などをどう客観的に評価するか、その方法について研究を進める必要がある。
- ・個別の指導計画に基づく評価規準の在り方、評価方法についてさらに研究を進める必要がある。
- ・教材準備について、特別な道具を使用するのではなく、生涯スポーツの観点からも手に入りやすく、少しの工夫で使用できる物を選ぶとともにそれを使用する生徒の使いやすさを考慮し、さらに研究を進めていきたい。
- ・より生徒が使いやすい学習ノートにするために、目標がとらえやすいこと、簡単に記入できることなど内容や様式についてさらに検討を進めていきたい。

6 研究の成果と課題

各学部のグループにおける、児童生徒の「豊かな心と体」を育む取組における変容を概観してみると、体育や運動への意欲が見られ、楽しく体を動かす姿が各学部で共通して見られた。また、小中学部では主体的な活動が顕著に見られ、中学部・高等部においては仲間との関わりで多くの変容が見られた。続いて、運動技能、達成感や自信、落ち着いて活動する姿、安全への意識、運動量の確保等の変容が見られた。

以下に、研究内容に伴う支援の手立てを視点に、成果と課題をまとめる。

(1) 成果

① 児童生徒が主体的に活動できる支援

- ・児童生徒が活動の見通しをもち、自ら生き生きと取り組めるための視覚支援については目標のとらえやすさ、自己の課題の理解、分かりやすく達成感の得られる評価などにつながり非常に有効であった。
- ・動きを擬音化して示範とともに提示することで、動きをイメージとしてとらえやすくなり、スムーズな動きの獲得につながられたケースもあり有効であった。
- ・授業の流れを一定にし、繰り返し行う学習形態をとることは各発達段階において大変有効であった。「次にどうすればよいか」が理解しやすいことで落ち着いて活動に取り組むことができ、「何を頑張ればよいか」に目を向けて活動することができた。
- ・ゴールとゼッケンを同色としてどこに向かってボールを運べばよいか視覚的にとらえやすくしたり、運動能力に合わせて転がりやすさを調整したボールを使ったりなど教材教具を児童生徒の実態に応じて工夫することで、活動に対する意欲が喚起でき、自ら動く姿につながられた。

② 仲間と共に運動する楽しさを味わえる支援

- ・動きのイメージがもちやすい言葉や言葉掛のリズムを工夫することで、どう動けばよいか理解しやすくなり、連携プレーを成功させて生き生きとした表情を見せる場面があった。
- ・学習ノートを使って活動の振り返りをするすることで、自分の考えを整理し自信をもってグループの中で発言したり、友達の意見を受け入れたりできる姿が見られた。

(2) 課題

- ・運動量の確保については、特に小中学部でさらに検討が必要である。
- ・単元の評価規準や評価表について、小中高の系統性を視点とした見直しを行う。
- ・他者評価だけでなく、自己評価を重視することや、評価を行うタイミングを工夫することなどを通し、「分かりやすい評価」の方法をさらに検討していく。

【MEMO】

A series of horizontal dashed lines for writing a memo.

分科会指導助言者紹介

■ 第1分科会【岐阜市立加納幼稚園】

氏名	春日 晃 章	(所属・役職) 岐阜大学 准教授
略歴	1991年3月 金沢大学教育学部高等学校教員養成課程(保健体育)卒業 1993年3月 金沢大学大学院教育学研究科(保健体育専攻)修了 1996年8月 聖徳学園女子短期大学専任講師(2002.4～岐阜聖徳学園大学助教授) 2003年8月 インディアナ大学(アメリカ)客員研究員(～2004.9) 2007年4月 岐阜大学教育学部准教授 2007年4月 (学)春日学園はなぞの幼稚園・はなぞの北幼稚園理事長 2008年4月 岐阜大学保育園園長	
論文 著書 等	<ul style="list-style-type: none"> ○『幼児のからだところを育てる運動あそび』, 杏林書院, 2012 ○『新保育ライブラリ 保育内容「健康」』, 北大路書房, 2014 ○『幼児期運動指針実践ガイド』, 杏林書院, 2014 ○K. Kasuga et al. The effects of obstacles and age on walking time within a course and on a balance beam in preschool boys, <i>Advances in Physical Education</i> Vol.2 No.2, 49-53, 2012. ○K. Kasuga et al. Determination of fall risk factor to screen high fall risk elderly among healthy community-dwelling Japanese population, <i>International Journal of Gerontology</i> Vol.7, 13-16, 2013. ○K. Kasuga et al. Changes in healthy childhood lifestyle behaviors in Japanese rural areas, <i>Journal of School Health</i> Vol.83 No.4, 231-238, 2013. ○K. Kasuga et al. Relationship between Untouched-Toes and Heel Load in preschool children, <i>Advances in Physical Education</i> Vol.3 No.4, 165-168, 2013. ○春日晃章他, 棒上ジグザグ歩行テストによる子どもの動的平衡性の性差および加齢変化, <i>体育測定評価研究</i> 第13号, 17-23, 2014. ○春日晃章他, 幼児の投動作における遠投距離と正確性を向上させるための指導プログラムの開発, <i>SSF スポーツ政策研究</i> 第3巻 第1号, 185-192, 2014. ○春日晃章, 子どものGross Motor Skillsの発達, 子どもと発育発達 第12巻 第1号, 38-42, 2014. 	

■ 第2分科会【岐阜大学教育学部附属小学校】

氏名	原 田 憲 一	(所属・役職) 岐阜大学 教授
略歴	1975年3月 東京教育大学体育学部体育学科卒業 1976年8月 筑波大学・技官 1979年3月 岐阜大学教育学部 2001年8月 岐阜大学教育学部・教授 2004年4月 岐阜大学教育学部附属小・中学校校長(2008年3月まで)	
論文 著書 等	<ul style="list-style-type: none"> ○「体育の目標としての「感じ」について」、岐阜大学教育学部研究紀要、2001 ○「感じを強調した体育授業の展開」、岐阜大学教育学部研究紀要、2001 ○「体育科教育の課題」、日本体育・スポーツ哲学会、2007 ○「子どもの運動体験の現状—運動遊びからスポーツへ—」、児童心理、2008 ○「体育の見方、変えてみませんか」(共著)、学習研究社、2009 ○「確かな動きを身につける児童の育成の授業づくり研究」、岐阜大学教育学部研究紀要、2012 	

■ 第3分科会【岐阜市立長良西小学校】

氏名	三 上 肇	(所属・役職) 中京大学 教授
略歴	<p>1977年3月 東京教育大学体育学部体育学科 卒業</p> <p>1981年3月 筑波大学大学院体育研究科修士課程 修了</p> <p>1981年4月 大阪体育大学 助手</p> <p>1987年4月 大阪体育大学 講師</p> <p>1991年10月 福井大学教育学部 助教授</p> <p>2001年4月 福井大学教育地域科学部 教授 2011年3月 福井大学 名誉教授</p> <p>2011年4月 中京大学スポーツ科学部 教授</p>	
論文 著書 等	<p>○新しい体育の授業づくり(共)、大日本図書、2011.</p> <p>○新しい教材としてのビーズロップとび、保健と体育34号、大阪市私立中学校高等学校保健体育教員研究会、2010</p> <p>○最新 スポーツ科学事典(共)、運動構造、平凡社、2006.</p> <p>○The Influence of Gender, Athletic Events, and Athletic Experience on the Subjective Dominant Hand and the Determination of Dominant Hand. (Shinichi Demura, Nobuhiko Tada, Jinzaburo Matsuzawa, Hajime Mikami et al.) Journal of PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY 25、2006.</p> <p>○器械運動の授業づくり(共)、学習指導と評価に関する事項、大修館書店、2006.</p> <p>○異なる運動分析のあいだを問う、伝承5、運動伝承研究会、2005.</p> <p>○コツの自覚に関するモルフォロジー的考察、スポーツ運動学研究16、日本スポーツ運動学会、2003.</p>	

■ 第4分科会【羽島市立竹鼻小学校】

氏名	高 橋 和 子	(所属・役職) 横浜国立大学 教授
略歴	<p>1977年3月 東京教育大学大学院体育学研究科修士課程 修了</p> <p>1977年5月 福島大学 助手</p> <p>1981年4月 横浜国立大学 講師</p> <p>1998年4月 横浜国立大学 教授</p> <p>2005年4月～2009年3月 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校校長兼任</p> <p>2009年4月 横浜国立大学 学長補佐(2012年～教育研究評議員)</p> <p>2013年4月 横浜国立大学教育人間科学部 副学部長</p> <p>2013年4月 公益社団法人日本女子体育連盟 会長</p>	
論文 著書 等	<p>○『表現－風の卵がころがったとき』高橋和子編、不昧堂出版、1995</p> <p>○『体育科教育学入門』高橋健夫他編(共著)大修館書店、2002</p> <p>○『ゆったりイキイキからだ気づき』高橋和子、汐文社、2002</p> <p>○『からだ－気づき学びの人間学－』高橋和子編、晃洋書房、2004</p> <p>○バリアフリーなところとからだのふれあいを求めて、村田芳子・高橋和子 (社)日本女子体育連盟学術研究第22号、2005</p> <p>○即興表現[群像]における自己概念の変容に関する研究、前掲学術研究第24号、2008</p> <p>○大野一雄のダンス教育に関する一考察、前掲学術研究第27巻、2011</p> <p>○『中学校新学習指導要領の展開 保健体育科編』(共著)明治図書、2008</p> <p>○『学校体育実技指導資料/表現運動系及びダンス指導の手引』作成協力者、文科省編、2013</p> <p>○『表現運動の授業づくり』細江文利他編(共著)教育出版、2014</p>	

■ 第5分科会【各務原市立那加第三小学校】

氏名	佐藤善人	(所属・役職) 岐阜聖徳学園大学 准教授
略歴	1995年3月 鹿児島大学教育学部小学校教員養成課程 卒業 1995年4月 岐阜県揖斐郡大野町立大野小学校 教諭 1998年4月 岐阜県郡上郡和良村立和良中学校 教諭 2001年4月 東京学芸大学附属大泉小学校 教諭 2008年3月 東京学芸大学大学院教育学研究科 修了 2008年4月 岐阜聖徳学園大学教育学部 専任講師 2011年4月 岐阜聖徳学園大学教育学部 准教授	
論文 著書 等	○小学校の体育授業におけるタグ・ラグビーに関する研究—スローフォワードルールに焦点をあてて—, スポーツ教育学研究 28(1)1-11. (2008) ○小学校体育における持久走に関する研究—「機能的特性」に依拠した授業における児童の態度と持久力の変容—, ランニング学研究 23(1)1-10. (2011) ○小学校におけるボールゲームの年間指導計画に関する研究—作成過程において体育主任が用いる資料に注目して—, 体育科教育学研究 27(2)19-27. (2011) ○「子どものスポーツ」の無限の可能性, コーチング・クリニック 27(11)24-27. (2013) ○第3版アクティブ・チャイルド・プログラム(分担:47-68.) 日本体育協会(2013) ○第3版小学校の体育授業づくり入門(編著:83-94, 167-180, 191-194.) 学文社(2014) ○社会心理的要因を視点とした運動遊びの分類, 平成25年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅱ66-80. (2014) ○体操の学習としての「鬼遊び」の可能性, 体育科教育 62(5), 62-65. (2014)	

■ 第6分科会【岐阜市立岐阜中央中学校】

氏名	藤田雅文	(所属及び職) 鳴門教育大学 准教授
略歴	1979年3月 筑波大学体育専門学群 卒業 1981年3月 筑波大学大学院体育研究科修士課程 修了 1981年10月 高知大学教育学部 助手 1988年4月 鳴門教育大学学校教育学部 講師 1991年4月 鳴門教育大学学校教育学部 助教授 2008年4月 鳴門教育大学大学院学校教育研究科 准教授	
論文 著書 等	○どの子どもでもできる器械運動(共著), 黎明書房, 1989 ○小学校授業づくりアイデア全書第9巻体育(分担), ぎょうせい, 1992 ○デジタル版新しい小学校体育授業の展開「基本の運動・ゲーム」の指導(分担), ニチブン, 2006 ○新版みんなの体育1-6年(共編), 学研教育みらい, 2010 ○学習カードと補助具を活用した鉄棒運動の学習効果に関する研究—小学校3年生を対象として—(単著), 鳴門教育大学実技教育研究第20号, 2010 ○小学校教員の体育授業における安全管理能力の育成方法に関する研究—跳び箱運動の安全管理支援ソフトの開発と評価—(共著), 体育・スポーツ経営学研究第24巻第1号, 2010 ○鉄棒運動の「け上がり」の指導に関する研究—柔道の帯を使った「後ろ振り上がり」の効果—(共著), 日本スポーツ教育学会第30回記念国際大会プロシーディングス, 2010	

■ 第7分科会【岐阜市立陽南中学校】

氏名	熊谷佳代	(所属・役職) 岐阜大学 准教授
略歴	1988年3月 天理大学体育学部 卒業 1991年3月 筑波大学大学院体育研究科修士課程 修了 1993年4月 岐阜大学教養部 助手 2001年4月 岐阜大学教育学部 助教授 2007年4月 岐阜大学教育学部 准教授	
論文 著書 等	○佐藤臣彦, 前林清和, 熊谷佳代, 他: 「舞踊の思想」『身体教育のアспект』身体運動文化学会編, 全305頁, 130-137, 道和書院, 1998 ○熊谷佳代, 即興表現—解き放たれた身体—, 女子体育45(6)22-27, 2003 ○熊谷佳代, 表現運動・ダンスの指導について—実技研修を通じた学びの展開—, 岐阜大学教育学部教師教育研究, 3, 141-144, 2007 ○熊谷佳代, その気にさせる授業, 女子体育51(4)26-31, 2009 ○伊藤恵子, 熊谷佳代, 小学校における表現運動の実践的研究～技能に関する評価表の作成と規準達成のための指導事例について～, 舞踊教育学研究第11号, 11-22, 2009 ○浅野愛美, 熊谷佳代, 中学校ダンス必修化に対応した「現代的なリズムのダンス」の教材開発, 岐阜大学教育学部研究報告(教育実践研究)13, 55-67, 2011 ○熊谷佳代, 中川裕紀子, 岐阜県の中学校におけるダンス授業の現状と課題, 岐阜大学教育学部研究報告(教育実践研究)16, 21-28, 2014 ○第67回国民体育大会式典前演技「清流の国ぎふ～未来へ贈る宝もの～」(序章・最終章)振付・指導, 岐阜メモリアルセンター, 2012.9	

■ 第8分科会【羽島市立羽島中学校】

氏名	伊藤久仁	(所属・役職) 名古屋市教育センター 所長
略歴	1983年3月 愛知教育大学教育学部 保健体育科 卒業 1983年4月～2006年3月 名古屋市内国公立中学校5校 教諭 2006年4月 名古屋市立八王子中学校 教頭 2009年4月 名古屋市立御田中学校 校長 2011年4月 名古屋市教育センター 研修部長 2014年4月 名古屋市教育センター 所長	
論文 著書 等	○改訂中学校学習指導要領ピンポイント解説 明治図書 123-140頁 2008 ○中学校学習指導要領移行措置の解説 明治図書 65-69頁 2008 ○中学校新学習指導要領の展開 明治図書 57-61 140-144頁 2008 ○体育科・保健体育科の指導と評価 ぎょうせい 82-85 94-97頁 2008 ○保健体育科教育法 大修館 260-263 2009 ○中学校全体計画の作成と運用の手引き 明治図書 28-31頁 2009 ○「教師の評価活動に着目したバレーボールの授業研究」 女子体育 2006 ○「今こそ、学びの順序を考慮した教材づくりへ」 体育科教育 大修館 2007 ○「教科別におさえておきたい改訂のポイント」 総合教育技術 小学館 2008 ○「私が推したい体育実践」 体育科教育 大修館 2008 ○「新学習指導要領と体育-何がどうなぜ変わりどうなるのか-」 体育科教育 大修館 2008 ○新学習指導要領に期待する「『できる』と『分かる』を結びつける思考を重視した授業を」 女子体育 2008	

■ 第9分科会【各務原市立那加中学校】

氏名	杉 森 弘 幸	(所属・役職) 岐阜大学教育学部 教授
略歴	1985年3月 筑波大学体育専門学群 卒業 1987年4月 筑波大学大学院体育研究科 修了 1987年4月 東京工業大学工学部 助手 1989年4月 筑波大学研究協力部 文部技官 1990年6月 筑波大学体育科学系 助手 1992年4月 岐阜大学教養部 講師 1995年8月 岐阜大学教養部 助教授(1996年10月～, 教育学部准教授) 2012年4月 岐阜大学教育学部 教授	
論文 著書 等	○ハンドボール指導教本(分担140-165), 大修館書店, 1992 ○小学校高学年と中学校の好・嫌に関する調査研究(共同), 岐阜大学カリキュラム開発研究センター研究報告16(1), 18-32, 1996 ○運動および教科体育の好・嫌に関する調査研究(共同), 岐阜大学教育学部研究報告自然科学21(2), 143-156, 1997 ○ハンドボールのゲーム観察に関する一考察, 岐阜大学教育学部研究報告自然科学22(2), 23-31, 1998 ○状況に応じた動きに焦点をあてたゲームの実践—中学年におけるハンドボールの実践—(共同), ハンドボール研究10, 58-64, 2008 ○中学校時代の運動部活動体験が及ぼす人間形成について—大学生の回顧調査から—(共同), 岐阜大学教育学部研究報告自然科学35, 117-126, 2011	

■ 第10分科会【岐阜県立岐阜高等学校】

氏名	尾 縣 貢	筑波大学人間総合科学研究科教授
略歴	1982年3月 筑波大学体育専門学群卒業 1984年3月 筑波大学大学院修士課程体育研究科コーチ学専攻修了 1985年4月 大阪府立大阪女子大学助手学芸学部 1990年4月 奈良教育大学助教授教育学部 1994年4月 筑波大学講師体育科学系 2009年12月 国立大学法人筑波大学大学院人間総合科学研究科教授	
論文 著書 等	○尾縣貢：ぐんぐん強くなる陸上競技. ベースボールマガジン社, 2007. ○尾縣貢：これからの陸上運動では, 何をこそ学ばなければならないのか. 体育科教育57(6):14-17, 2009. ○尾縣貢ほか：すべての子どもが必ずできる 体育の基本. 大修館書店, 2010. ○尾縣貢：陸上運動・競技 学校体育と競技の接点を考える. 陸上競技学会誌9:25-28, 2011 ○比留間浩介, 森 健一, 尾縣 貢：体育授業におけるリレーのバトンパス方法の違いが学習成果に及ぼす影響. 体育学研究, 58:699-706, 2013. ○尾縣 貢：「運動の苦手な子」を増やさない取り組み—トップアスリートの指導から学ぶ—. 児童心理, 11:29-35, 2013. ○尾縣貢ほか：基礎から身につく陸上競技. 大修館書店, 2013.	

■ 第11分科会【岐阜県立岐阜工業高等学校】

氏名	野瀬清喜	(所属・役職) 埼玉大学 教授
略歴	1976年3月 東京教育大学体育学部 卒業 1978年3月 筑波大学大学院体育研究科修士課程 修了 1882年4月 埼玉大学教育学部 講師 1984年8月 埼玉大学教育学部 助教授 1999年4月 東京学芸大学大学院連合学校教育研究科併任 (博士課程) 2002年4月 埼玉大学教育学部 教授	
論文 著書 等	○体育と武道、中学校体育・スポーツ指導法講座動画解説書2、ニチブン、2008 ○柔道学のみかた、文化工房、2008 ○中学校保健体育・体育編武道1・2 (柔道：I基礎編・II応用編)、東京書籍、2012 ○中学校保健体育・体育編武道5・6 (柔道の安全な学習I・II)、東京書籍、2013 ○柔道指導の手引 (三訂版)、学校体育実技指導資料集第2集、本村清人、磯村元信他、文部科学省、2013 ○学校における体育活動中の事故防止のための映像資料、本村清人、磯村元信、椿本昇三他、文部科学省、2014 ○柔道指導のための映像参考資料、本村清人、磯村元信、文部科学省、2014 ○柔道指導者の役割と指導法のあり方について、埼玉大学紀要教育学部第60巻第1号、2014 ○学校体育における投げ技の指導順序の再考、庄司泰造、野瀬英豪他、埼玉武道学研究第9号、埼玉武道学会、2014 ○柔道の学習形態が学習者に与える影響について、富田晃吉、野瀬英豪他、埼玉武道学研究第9号、埼玉武道学会、2014	

■ 第12分科会【岐阜県立岐阜本巣特別支援学校】

氏名	内田匡輔	(所属・役職) 東海大学 准教授
略歴	1994年3月 筑波大学体育専門学群 卒業 1996年3月 筑波大学大学院体育学研究科 修士課程 修了 1996年4月 筑波大学附属聾学校 (現 聴覚特別支援学校) 中学部教諭 2000年4月 筑波大学附属中学校 教諭 2005年4月 東海大学体育学部体育学科 講師 2012年4月 東海大学体育学部体育学科 准教授	
論文 著書 等	○高等教育における障害学生の一般体育 (日本体育学会 2006, 2007, 2008) ○子どもの生活リズム向上のための調査研究 (文部科学省委託事業 2008) ○発達障害のある児童・生徒の身体活動に関する一考察 (日本体育学会 2009) ○発達障害児の身体活動に関する実践研究 (日本体育学会 2010) ○バリアフリーを目指す体育授業 (杏林書院) ○「生きる力」を育成する保健体育 (建学社 2002) ○「挑戦者として」交流教育が導く相互理解の深まる学習集団づくりに向けて (2004 上 廣道徳教育賞優秀賞) ○充実した交流教育のあり方 (聴覚障害 2006.11) ○誰もが楽しめるアダプテッド・スポーツ (初等教育資料 2009.2) ○体育科教育学入門 (2010年刊行 大修館) ○体育科の指導における教材のくふう (2012年 聴覚障害 6月号 聾教育研究会) ○学校保健ハンドブック第6次改訂 (2014年刊行 ぎょうせい)	

第53回全国学校体育研究大会

岐阜大会研究紀要

発行 平成26年11月6日
編集 岐阜大会実行委員会編集部
発行者 岐阜大会実行委員会
会長 杉山 英一
連絡先 岐阜大会実行委員会事務局
岐阜県教育委員会内
事務局長 高橋 幸平
〒500-8570
岐阜県岐阜市藪田南2丁目1-1
☎ 058-272-1111 FAX 058-278-2825

印刷 株式会社 愛和印刷
〒501-0111
岐阜県岐阜市鏡島2004-6
☎ 058-253-3065